ISSN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第21集

小出 義治先生追悼記念号

【巻頭言】
小出先生の逝去を悼む …… 寺田 兼方

【小出義治先生の事績】
年譜
著作目録

【小出義治先生再録論文】
土師雑考
神道と大和王権
「第Ⅶ章 まとめ」
再録にあたって 小出先生と土師器研究 …… 駒宮 史朗

【追悼論文】
横浜市中央部における古墳の展開について …… 滝澤 亮・浅賀 貴広
三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について… 中三川 昇
神奈川県の石戈 …… 岡本 孝之

【論文】
「貞観」紀年銘木簡と伴出土器の様相 …… 押木 弘己

平成27年(2015)5月
神奈川県考古学会

考古論叢神奈川第21集

平成27年5月

日　次

【巻頭言】

小出先生の逝去を悼む …… 寺田兼方　1

【小出義治先生の事績】

年譜 …… 3

著作目録 …… 7

【小出義治先生再録論文】

土師雑考 …… 11

神道と大和王権 …… 25

「第Ⅶ章　まとめ」 …… 37

再録にあたって　小出先生と土師器研究 …… 駒宮史朗　47

【追悼論文】

横浜市中央部における古墳の展開について …… 滝澤亮・浅賀貴広　51

三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について …… 中三川昇　73

神奈川県の石戈 …… 岡本孝之　97

【論文】

「貞観」紀年銘木簡と伴出土器の様相 …… 押木弘己　127

神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永3（1266）年5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

小出先生の逝去を悼む

寺田　兼方

「小出義治先生の米寿をお祝いする会」が、平成22（2010）年10月23日の土曜日に、小田急センチュリー相模大野のフェニックスⅢの間に於いて盛大に催されました。それから僅か1年8か月後の平成24（2012）年6月17日（日）に、天寿を全うされました。享年89歳（と10か月）でした。お通夜は、6月21日（木）の18時より、横浜線の古淵駅に近い伊藤典範に於いて、しめやかに執り行われました。小出先生には、お元気でもっと長生きをして戴き、後輩たちを種々ご指導・ご鞭撻賜りたかったと言う思いがしてなりません。本当に残念でした。

小出先生からは、在学中、そして卒業後も、各地での発掘調査や出土品整理の仕事等に参加する機会を賜りました。どこの現場でも親しくご指導を受けて、発掘調査の基本を充分に教えて戴きました。今でも、先生から賜った数々のご指導が、現在の自分の基礎力になっていると痛感し、常に大変篤く感謝しております。当時は、考古学専攻科ではないために、発掘調査や出土品整理等の技術的な指導は、史学科の授業にはありませんでした。従って、課外の機会を捉えて発掘・整理の経験をしないと、技術を磨くことはできませんでした。

昭和31（1956）年4月29日に静岡県伊東市の「伊東市史編纂委員会」が設立されて、大場磐雄先生が顧問として迎えられ、大先輩である長田実先生と小出義治先生が原始・古代の編纂委員を委嘱されました。私の卒業論文のテーマが「敷石住居址」であったことも影響したのでしょうか、発掘調査・出土品整理の作業に参加する機会が訪れました。確かに、伊東市史の編纂事業に伴う発掘調査では、赤坂遺跡・内野町遺跡などで貴重な敷石住居址が発見されています。伊東市に於ける発掘調査や、出土品整理の仕事を通して、私の考古学の技術的な基礎力が、驚くほど培われました。これは、一重に小出先生の長期間にわたるご薫陶によるものと、現在でも深く感謝しております。

伊東市での仕事は、公民館等に合宿して行われたので、作業が終わると先生と一緒に入浴し、お互いに背中を流しあったりして、とても家族的な触れ合いがありました。また、食後の一時には、先生の戦争体験のお話や、授業中に講義をしながら居眠りをしたお話など、今でも忘れることはできません。

最後に、小出義治先生は、生涯を通して土師器を追い続けて来られました。平成2（1990）年に神奈川歯科大学を定年退職されるのを機に、雄山閣出版から先生の旧稿をまとめて編集した『土師器と祭祀』が刊行されました。この書によって、先生の業績を親しく辿ることができます。

戦後、考古学の路を選ばれ、ひたすら地味な土師器研究の基礎を築かれて、その基礎の上に古代祭祀論を展開されました。戦後70年を迎える現在、そこには、「土師器研究と古代祭祀」

の戦後考古学史の一齣を展望することができます。

同時に、小出義治先生は、神奈川県考古学会の草創期に副会長を勤められ、その後顧問となられて、常に本会の発展にご尽力くださいました。

改めて、先生のご冥福を、衷心よりお祈り申し上げます。

小出義治先生年譜

1922年（大正11）10月　小出豊吉・キミの三男として神奈川県橘樹郡大綱村字篠原1112番地（現　横浜市港北区篠原町）に生まれる。

1929年（昭和 4）4月　大綱尋常高等小学校に入学し、菊名分校に通う。同月下旬横浜市神奈川区六角橋町に神橋尋常小学校が竣工し、転籍する。大綱村字篠原より、横浜市神奈川区六角橋184番地の新居に移る。

1935年（昭和10）3月　神橋尋常小学校を卒業する。

4月　二谷尋常高等小学校高等科に入学する。

5月　父を失う。

1937年（昭和12）3月　二谷尋常高等小学校を卒業する。

4月　神奈川県立工業青年学校電気科に入学する。

1939年（昭和14）4月　県立工業青年学校電気科を第2学年で退学し、私立大成第二中学校（東京）第三学年に編入学する。

長兄を失い、戸主を相続する。

1942年（昭和17）3月　大成第二中学校を卒業する。

4月　國學院大學高等師範部に入学する。中学時代折口信夫、武田祐吉両教授の名声を知り、国文学を学び教師の職を得ようとの希望で高師部に入るが、入学後間もなく国史研究室附属考古学資料室（現　國學院大學考古学資料館）の存在を知り、初心を変えて初めて考古学に志す。後藤守一教授の指導をうけ、松戸市本郷貝塚で初めて発掘調査を体験し、また横浜市南堀貝塚の調査（島田暁）に参加する。

1943年（昭和18）12月　学徒出陣により陸軍第四航空教育隊に入営する。（兵役第一乙種）

1944年（昭和19）9月　國學院大學専門部（改称）を繰り上げ卒業する。

陸軍航空予備士官学校加佐登教育隊を卒業し、第十一飛行師団司令部付（大阪）となり、後に第一航空総軍付に転属となる。

1945年（昭和20）8月　任陸軍少尉、埼玉県児玉飛行場で終戦を迎える。

10月　國學院大學に復学、補習講座を受講する。

1946年（昭和21）4月　國學院大學文学部史学科に入学する。

國學院大學史学会考古学部会を興す。（後に國學院大學考古学会として独立）

1947年（昭和22）4月　私立武相中学校（旧制）講師となる（～1948年3月）。

千葉県姉ヶ崎町（現市原市）二子塚古墳の調査を行う。

1948年（昭和23）8月　登呂遺跡の発掘調査に参加する。駒井和愛教授の指導によりNHK静岡

放送「登呂遺跡に参加して」のシナリオを作成し放映する。

10月　清水潤三、曽野寿彦、中川成夫、桜井清彦、大塚初重、村越潔、永峰光一氏らと共に登呂遺跡参加大学学生・OBによる東京学生考古学会（後に青年考古学協議会に発展的解消する）を結成し、委員長に推される。（～1952年3月）

1949年（昭和24）3月　國學院大學文学部史学科を卒業する。卒業論文「土師氏の考古学的考察」

國學院大學文学部助手を命ぜられる。（～1953年3月）

茨城県磯浜町鏡塚古墳の調査に参加する。

大場磐雄教授のアシスタントとして四国、山陽道、愛知各県下の調査、神社史の編纂補助に当る。（～1952年まで）

1950年（昭和25）　初めて文部省科学研究費（各個研究）を交付され、関連して大阪府大草村古窯跡の調査を行い、親しく末永雅雄先生のご指導を得、また森浩一氏と相知る。

1951年（昭和26）10月　日本考古学協会会員に推薦される。

平出遺跡の発掘調査に科研費による分担研究者として参加する。（～1952年）

東京都狛江市亀塚古墳を発掘調査する。

1952年（昭和27）　新潟県佐渡千種遺跡を発掘調査する。

1953年（昭和28）4月　國學院大學嘱託となる。（～1961年3月）

國學院大學久我山高等学校講師（国語）を兼ねる。

1954年（昭和29）4月　國學院高等学校講師（社会）に移る。

都助成研究費及び國學院大學研究助成金をうけて、佐渡の調査を実施する。

1956年（昭和31）5月　松戸市河原塚古墳を発掘調査する。

1960年（昭和35）4月　伊東市史編纂専門委員となる。（～1962年）

1961年（昭和36）3月　國學院高等学校教諭となる。

4月　大場磐雄先生の媒酌により、亀田文子（あやこ）と結婚する。

國學院大學講師となる。（昭和40年3月まで）

日本考古学協会三殿台遺跡調査特別委員会（委員長和島誠一）委員となる。

横浜市より相模原市に転居する。

1964年（昭和39）3月　國學院高等学校教諭を辞し、講師となる。（～1983年3月）

4月　神奈川歯科大学助教授に就任する。

6月　横須賀市文化財専門審議会委員となる。
10月　熱海市史編纂委員会専門委員となる。(～1969年)
1967年（昭和42）12月　神奈川県史編集参与となる。
1970年（昭和45）7月　町田市史編集委員会専門委員となる。
1971年（昭和46）10月　日本考古学協会委員となる。(～1975年)
1974年（昭和49）2月　文部省学術審議会専門委員（一段審査）となる。(～1976年)
4月　北里大学衛生学部講師代講。
1976年（昭和51）　科学研究費の交付をうけ、『歴史時代土器の研究』に従事する。(～1978年)
1978年（昭和53）3月　国立横須賀病院附属看護学校講師（国文学）となる。同校校歌「相洋はるか」を作詞する。
5月　日本考古学協会委員（渉外担当～1982年）
1979年（昭和54）4月　國學院大學講師となる。(～1983年)
滝澤亮氏らと相武考古学研究会を興す。
1980年（昭和55）4月　神奈川県文化財保護審議会委員となる。(～1999年)
科学研究費の交付を受け『古墳時代土器の研究』に従事する。(～1984年)
1981年（昭和56）3月　中国（上海・洛陽・西安・大同・北京）に外遊する。(～4月。國學院大學)
1982年（昭和57）2月　文部省学術審議会専門委員（二段審査）となる。(～1984年3月)
4月　國學院大學北海道短期大学講師を兼任し、考古学を講じる。(～1985年3月)
5月　相模原市博物館資料主任調査員となる。
1984年（昭和59）4月　神奈川歯科大学教授となる。
1985年（昭和60）4月　日本女子衛生短期大学講師を兼ねる。(文学)
12月　韓国へ研修旅行に行く。(神奈川歯科大学第1回研修)
高梨学術奨励基金を受け『土師器の研究』を継続する。(～1986年)
1986年（昭和61）5月　日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員長となる。(～1989年)
12月　香港～広州へ研修旅行に行く。(神奈川歯科大学第2回研修)
1987年（昭和62）11月　韓国文化財管理局の金基雄氏の世話で、韓国（ソウル～晋州）の古墳見学に行く。(同行者：久保哲三氏・岩崎卓也氏)
12月　台湾へ研修旅行に行く。(神奈川歯科大学第3回研修)
1988年（昭和63）4月　日本考古学協会委員となる。(渉外担当～1990年)
1989年（平成元）4月　國學院大學文学部講師となる（～1990年3月）

5月　日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員長を辞す。

1990年（平成2）3月　神奈川歯科大学を定年退職する。併せて看護学校講師・横須賀市文化財専門審議会委員を辞任する。

7月　千葉県柏市市史編纂参与となる。

9月　韓国（釜山からソウル）の祭祀遺物の研究と古墳見学に行く。（同行者：椙山林継氏・滝澤亮氏・林原利明氏）

1992年（平成4）　中国江南の旅を楽しむ。（同行者は小学校時代の友人の荒木敬一氏）

1996年（平成8）5月　茨城大茂木雅博教授に誘われ中国西安近郊の青陵測量調査に同行し、橋陵及び皇子墓発掘現場を見学する。

1999年（平成11）3月　神奈川県文化財審議会委員を辞す。また、十余年続いた朝日カルチャー講師を辞す。

12月　神奈川県教育委員会より表彰を受ける。

2003年（平成15）　韓国に前方後円墳見学の旅をする。（同行者：岩崎卓也氏・松浦宥一郎氏・滝澤亮氏・小池聡氏）釜山大申敬澈教授・金斗喆氏らと旧交を暖める。

2008年（平成20）5月　日本考古学協会総会において表彰される。

2012年（平成24）6月17日　逝去

小出義治先生著作目録

1948年（昭和23）「武相学徒と考古学　神奈川県学徒考古学会の提唱」『武相文化』2　武相文化協会
「猿投発見の蔵骨器」『東京学生考古学会会報』1

1950年（昭和25）「赤城山をめぐる祭祀遺跡」　国史學』52　国史学会
「山梨県日下部中学校校庭集落遺跡」『上代文化』19
「日下部遺跡」『甲斐路』

1951年（昭和26）「大和、河内、和泉の土師氏」『国史學』54　国史学会
「和歌山県日高郡上南部クジ峠発見の銅鐸」『上代文化』20
「長野県東筑摩郡宗賀村平出遺跡第三次報告」『信濃』3-7
『日本史の展望』　芸苑社
「千葉県酒々井新堀横穴第一号調査報告」『上代文化』21

1952年（昭和27）「長野県東筑摩郡宗賀村平出遺跡第四次報告」『信濃』4-3
「銚子市栗島台遺跡調査報告書」『上代文化』22　銚子市教育委員会

1953年（昭和28）「千種」『新潟県文化財報告』第1冊　新潟県教育委員会

1955年（昭和30）「佐渡における後期弥生文化の限界」『國學院雑誌』56-2　國學院大學
『平出』　朝日新聞社

1957年（昭和32）『栃倉のむかし』　栃尾市教育委員会・栃尾市考古学研究会

1958年（昭和33）『考古学の調査法』　形成選書　古今書院
「新潟県古志郡間野窯址調査報告」『越佐研究』13
『伊東市史』本篇　伊東市

1959年（昭和34）「土師雑考」『國學院雑誌』60-11
『松戸河原塚古墳』　松戸市教育委員会

1960年（昭和35）「古式土師器の諸問題」『考古学研究』第7巻第1号　考古学研究会

1961年（昭和36）『栃倉』　吉川弘文館
『弥生式土器集成』（Ⅱ）日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会

1962年（昭和37）『伊東市史』資料篇　伊東市
「北陸の古式土師器と二,三の問題」『國學院高等学校紀要』4　國學院高等学校
「鳥屋遺跡発掘調査報告」『越佐研究』17

1963年（昭和38）『加賀片山津玉造遺跡の研究』　加賀市教育委員会
「1962年の歴史学　一回顧と展望一」『史学雑誌』72-5

「埼玉県どうまん塚古墳調査の概要」『國學院高等学校紀要』5　國學院高等学校
1964年（昭和39）『町田市鶴川遺跡群発掘調査概要報告書』Ⅰ　鶴川遺跡調査団
1965年（昭和40）『町田市鶴川遺跡群発掘調査概要報告書』Ⅱ　鶴川遺跡調査団
1966年（昭和41）「古代における祭祀形態の変化とその要因」『人類科学』18
『土師器集成図』Ⅰ　土師器研究者グループ
「祭祀」『日本の考古学Ⅴ古墳時代（下）』河出書房
1967年（昭和42）『王山長泉寺山古墳群』　鯖江市教育委員会
「満昌寺磨崖仏について」『横須賀市文化財調査報告書』第1集　横須賀市教育委員会
「縄文後期の石造遺構群」『考古学ジャーナル』10　ニュー・サイエンス社
『熱海市史』上巻　熱海市
1968年（昭和43）『土師器集成図』Ⅱ　土師器研究者グループ
『更埴市条里遺構の研究』長野県教育委員会
1970年（昭和45）「鶴川遺跡K・P地点調査報告」『町田市史料集』Ⅰ　町田市史編纂委員会
「住居と集落」『新版考古学講座』第5巻　雄山閣
1971年（昭和46）「子安地区の伝仏堂址発掘調査報告」『横須賀市文化財調査報告書』二　横須賀市教育委員会
「縄文期の祭祀遺跡」『新版考古学講座』第8巻　雄山閣
「五領式土器について」『台地研究』19
『土師式土器集成　本編』Ⅰ　東京堂
「神奈川県三の宮配石遺構　ーシンポジウム縄文時代の配石遺構」『北奥古代文化』3号
1972年（昭和47）『図録　横須賀の文化財』　横須賀市教育委員会
「沢山城址調査報告」『町田市史資料集』6　町田市史編纂委員会
『そとごう』　そとごう遺跡調査団
『鶴川遺跡群』　雄山閣
『熱海市史』資料篇　熱海市
『谷原』　谷原遺跡調査団
『土師式土器集成　本編』Ⅱ　東京堂
1973年（昭和48）「安房口神社神体石調査報告書」『横須賀市文化財調査報告書』4　横須賀市教育委員会
「猿島の遺跡とその重要性」『横須賀市文化財調査報告書』4　横須賀市教育委員会

「平根山--帯踏査報告」『横須賀市文化財調査報告書』4　横須賀市教育委員会
『厚木市林王子遺跡予備調査報告書』（共著）　厚木市林王子遺跡調査団
「古代豪族のシンボル」『日本の歴史』第1巻　研秀出版
「千種遺跡」ほか『日本古代遺跡便覧』　社会思想社
1974年（昭和49）『町田市史』上巻　町田市
『秦野下大槻』　秦野市教育委員会
1975年（昭和50）「山畑（やんばた）遺跡」『新版仏教考古学講座月報』　雄山閣
「大場先生を憶う」『考古学ジャーナル』111　ニュー・サイエンス社
1976年（昭和51）「土師氏の伝承成立とその歴史的背景」『國學院高等学校紀要』
「道路の神様」『セフティ神奈川』（7～10月号）
1978年（昭和53）『日附小栗山不動院裏山経塚遺跡』　目附市教育委員会
『歴史時代土器の研究』　歴史時代土器研究会
「日本神話と祭祀遺跡」『講座日本の神話』12　有精堂
1979年（昭和54）『横須賀市なたぎり遺跡B地点発掘調査報告書』　なたぎり遺跡調査団
『横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書』　桂町遺跡調査団
1980年（昭和55）「原神道の世界」『講座日本の古代信仰』1　学生社
『上総山王山古墳』　市原市教育委員会
『相模原市中村遺跡B地点発掘調査報告書』　中村遺跡B地点発掘調査団
「相洋はるか」作詞　国立横須賀病院付属看護学校々歌
1981年（昭和56）『長井町内原遺跡』　横須賀市文化財調査報告書第9集　横須賀市教育委員会
『シンポジウム盤状坏―奈良時代の様相―』　相武考古学研究所・東洋大学未来考古学研究会
1983年（昭和58）「平安時代の考古学的研究　―竪穴住居の系譜とその復原的考察―」『基礎科学論集』1、神奈川歯科大学
1984年（昭和59）『古墳時代土器の研究』　古墳時代土器研究会
1985年（昭和60）「亀塚古墳」『狛江市史』　狛江市
『海老名本郷』Ⅰ考察篇　富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
1986年（昭和61）「巫女王の系譜」『基礎科学論集』4　神奈川歯科大学
『比々多遺跡群』　比々多第一地区遺跡調査団
『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』　学生社
1987年（昭和62）『中村遺跡』　中村遺跡調査団
1988年（昭和63）「相模大山」『季刊考古学』第63号　特集山の考古学　雄山閣

『大和王権と原始神道』　新人物往来社
『鉈切C・D地点』　横須賀市文化財調査報告書第12集　横須賀市教育委員会
『日下部遺跡』　東山梨市教育委員会
「神道と大和王権」『基礎科学論集』6　神奈川歯科大学
1989年（平成元）「鬼高期の牛頭祭祀」『ドルメン』再刊1号
『沼間三丁目遺跡』　沼間三丁目遺跡調査団
「相模国古代史の断章」『基礎科学論集』7　神奈川歯科大学
「久保哲三先生を偲ぶ」『海老名本郷』Ⅶ　富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
1990年（平成2）『土師器と祭祀』　雄山閣
1991年（平成3）『海老名本郷』Ⅷ　富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
1992年（平成4）「熊野社下遺跡・長沢1号墳」『横須賀市文化財調査報告書』26　横須賀市教育委員会
『岩戸満願寺　一満願寺境内遺構確認調査報告一』　横須賀市文化財調査報告書第25集　横須賀市教育委員会
「縄文時代草創期の市内の遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』第28集　藤沢市教育委員会
「文化財政策の理念」『Think-ing』彩の国さいたま人づくり広域連合事務局政策管理部
「千種遺跡と大場磐雄先生」『北越考古学』第5号　北越考古学研究会
1994年（平成6）「戦中・戦後頃の資料室と考古学会」『上代文化』39　國學院大學考古學會
1996年（平成8）「中国漫歩（一）」『考古かながわ』11　神奈川県考古学会
「大和王権と原始神道」『別冊歴史読本』
1997年（平成9）『柏市史』原始・古代・中世編　柏市教育委員会
1998年（平成10）「日野一郎先生を偲ぶ」『考古かながわ』14　神奈川県考古学会
「小林・鈴木記念日本文化史資料館事初めの記一考古学資料を中心として一」『五十周年誌』　國學院高等学校
1999年（平成11）『長沢一号墳・熊野社下遺跡』　長沢一号墳・熊野社下遺跡調査団
2001年（平成13）『かながわの古代寺院　研究の成果と課題』　神奈川県考古学会

年譜・著者目録については、小出先生の米寿をお祝いする会作成の冊子をもとに作成した。
若木考古・育考協連絡紙、遺跡発表会要旨・レジュメ・辞典類に執筆されたものについては割愛している。

土師雑考

－概念規定とその年代観－

小出義治

はしがき　1
2　あとがき

はしがき

大場磐雄先生が、先年白斑症とかいう眼病を患われたときは、少なからずあわてた筆者であったが、全く健康に立ちもどられ、還暦の佳きお年をつつがなく迎えられたことを心から御慶び申しあげるものである。それ丈に、学生の頃から各地にお伴し、種々御指導頂いたことを思うにつけ、全く不肖の弟子であることを今更の様に感じている。土師氏の考古学的一考察と題して御指導をうけた卒業論文も、その後久しく筐底に駄眠をむさぼり、以後ついぞ発展しないままになっていた。この際、思い出を新たにする意味で塵を払ってみようと考え、本稿の他に生産様式の問題と土師氏の系譜について旧稿を改訂してみる心算であつた。併せてハジ雑考とし、兼ねて恥の上塗りをする腹を固めたのであるが、聊か冗慢に流れ、東日本を中心とした土師器の概念規定と、年代観に対する愚説発表に終ってしまった。従って本題は“土師器の概念規定とその年代観”サブタイトルとして“特に東日本の場合を中心として”とでも改題すべきものである。爾余の残された問題、及び派生した新たな考えについては、何れ稿を改めて発表する予定であるが、先生には更に壮健なる体力と、若々しい精神を保持せられて末ながく御指導下さらん事を文頭に当って祈り且つお願いする次第である。

1．

土師器の概念については、先年青年考古学協議会で取りあげ、検討を行ったことがある(註1)、結局は結論的な結果を見出せず諸案百出のまま暫く見送らざるを得なかった。由来特に土師始源の問題は、各人各様の見解をとり、基礎的研究を怠った空理空論のそしりがないわけではない、然しこと土師器に関する場合、少なくとも土器だけをみていても始まる問題ではないのであって、社会機構の変革のあとづけとして土器変化の様相をとらえなければならない。従って土器と共に実年代を示す有力な何物かが発見されるならば最も希う所であるが、それまででもその一端が合理的に把握し得たらという望みをもって、暗中模索も行われるわけである。この

小稿もその意味で書き綴ったものである。

なお嘗て本誌56巻2号に概念構成の方法についてふれたことがある(註2)。この根本的な考え方は未だに変ってはいない。またこれを実際に照合し、一二の附加すべき点はあるにしても、少なくとも東日本の場合においては、青年考古学協議会でのシンポジウムに於ける発言に違背する点はないと信じている。

下限の問題

古代前期に於ける弥生式の伝統の下に生じた一群の土器に対する名称として、後出的な土師器の名を冠することの当、不当を論ずるむきもあるが、書紀の雄略天皇十七年三月条に

詔土師連等、使進応盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾笥仍進、摂津国来狭狭村、山背国内村、府見村、伊勢国藤形村及丹波、但馬・因幡私民部、名曰贄土師部、

とあり、5世紀の頃、土師部から更に神聖な料器を作製する専掌手工業者の一団が分離した。この部民は土師連の一族と考えられる新しい伴造、贄土師連に統轄され、その後若干の変遷があったが、延喜式巻第二十四、主計上の条文中に土師器一丁・贄土師鋺形五十口等々の記載によって、その遺制は永く存したことが窺われ、

新撰姓氏録、大和国神別、天孫の条に　贄土師連、同神(天孫降臨命)十六世孫、意富曾婆連之後也。

とあって、10世紀に於ける土器製作の事実は兎も角として、この家柄の存生は、土師宿称と共にそのままの氏姓をもつて存続していた事が知られる。また大神宮儀式解巻第十八によれば、土師器作物忌の名を負う者が、神宮儀式用祭器の作製に当っている事実も、この遺制の一端を物語るものといえよう。

このように土師器の名称は、古代前期に使用された具体例はないにしても、一応名辞としては、ハニ土をもって焼いた素焼の土器を土師器と呼ぶことに異論はなく、少なくとも平安時代での該種の土器に対する広義の名称として何等支障はないことと考える。従って土師器の下限を糸切り、高台付土器の出現をもって切る人もあるようではあるが、寧ろ当らない解釈とすべきであろう。

上限の問題

さて然らばその上限を如何に規定すべきかであるが、勿論弥生式土器の伝統の上に立ち乍ら、弥生式土器に非らざる土器をいうのであって、文献中心の解釈に従えば土師部の成立期以後の土器の呼称であらねばならない。このように一応仮に規定して考えてくると、書紀垂仁天皇卅二年七月条にある埴輪起源説話が土師部成立の由来を語るものとして浮んで来る、そしてこれは埴輪の起源を物語ると共に、また土師器出現の始源でもあるということになる。然し更に考えてみると、これは単なる土師氏の祖業顕彰のための家系的伝承であって、この説話の成立はむしろ本来的な埴輪の意義を喪失して以後の時代、極言すれば、書紀(720)成立の8世紀を遡るごと

余り遠くない頃のものかとも考えられ、直ちに史実と考えるには多くの問題がある。それにしてもこの説話の中には、

則遣使者、喚上出雲国之土部壱佰人、自領土部等、取埴、云々

とあって、野見宿称は既成の土部等の棟領として新しく土部職に任ぜられ、此の時から土師連と土師部の新しい隷属関係が生じたのであって、土部は既にこれ以前に存在したことを物語っているわけである。

即ち彼等は国家的統制をうける以前から、弥生式文化以来の技術を伝えて各氏族国家の首長のもとに手工業者として存在したのであって、この国家的統制は、云はば各族長のもつ富の中央への収斂を意味すると考えられる。従って弥生式文化よりの展開を土器相の変化の上で通観するとき、部落国家より更に地域国家へ、そして全国的統一の完成へと、時代相の降るに従って画一的様相が全国的に拡大されてゆくのであって、この間の土器の様相的変化の迹こそ弥生式末期から土師器へ、換言すれば日本国家統一の経緯を物語るものといえよう、即ち、村落国家の所産として成立をみた弥生式文化、中・後期のティピカルな土器が、やがて末期の社会を迎えると、未だ器種器形のバラエティーを保ってはいるが、急速に施文は退化し、無文化の傾向をたどる。そしてその分布は漸次地域的個性を失いつつ普遍化されてゆく、これは一つに地域的封鎖性をもつ国家領域が次第に拡大されていった事実を物語るもので、この傾向は土師器になると更に促進され、全く無文となった小数種の器種・器形は規格的にセット化されたものとなる。かかる事実の背影をなすものは、後漢の光武帝の頃以来幾度か時代と共に度を重ねた彼此交流の結果、摂取された大陸文化の影響によって生じた社会機構変化の反映としてみるべきであって、青史に残された頻繁の度よりすれば3世紀以降に特に此の変化が顕著に生じたものと考えられる。このような漢文化の齎らした影響は、既に鉄器の使用を教え、農工用器具として生産力の拡充が図られ経済機構を一変した。この鉄器の滲透は、弥生式末期の頃には仙台平野から新潟県下に至る当時の弥生式文化北端の地にまで、勿論微々たるものであったではあろうが、一応は行き渡っていたようである。稲作農耕に適応した日本の風土が、更に豊かな稔りを約束され、豊葦原之千秋長五百之水穂国として比較的平穏な発展が行われた。国土平定に当って、大きな動乱干戈のあとも殆んどみられずに進行したらしいことが紀記の記す所より窺われるが、かかる充足した農業中心の社会経済の下に、しかも同じ宗教的観念の上に成立した同一民族の小国家群であってこそ、地方政権の首長等によって平和的連合政権的機構も樹立され得たのであって、極く少数の反抗者以外は、勲爵にも似た姓をうけることによって、それぞれの故地に分封されたと見ることも出来るのである。従ってその後の歴史的発展の過程の中にあっては、夫々の地域に若干の個性的遺馨を残し、幾度か反復して地方権力の反乱が企てられ、皇統史上にその消長を記録している。かかる事実はまた各地方に成長しつつある土師器の在り方の上に反映したものとでも解すべきか、7世紀以降に見出される糸切り、高台付の埦形土器を特徴とする一群の土器の出現に至るまで、なお且つ若干のカラーを長く保っている。しかし、

この差異は弥生式土器以前のそれに比べれば所謂ネグリティヴ・リミットの問題ではある。

さて、大分曲折したが、土師器に至ってみられる画一的統一性とでもいうべき様相は、少なくとも仙台・新潟平野以西の地に普遍的な在り方を示すことは既に周知の事実であるが、この規格化された器種は、甕形・壺形・碗（盌）形・小形丸底坩・高坏・器台・甑などが主体をなし、一・二を増減する程度の差である。この土器群の中で特に重要視さるべきものは小形丸底坩の存在であり、他の大部分が前時代よりの遺制の上に出来あがったものであるに対し、特異にして顕著な出現ともいいうるものであって、これは一方、前期の古墳に見られる石製品中にも模造して納められ、多分に祭器的性格をもつて存在する(註3)。

古墳の発生が古代前期の社会のメルクマールとされていることは今更云うまでもないが、この意味で、当然この小形丸底坩を加えたセットの確立期こそ、弥生式土器と土師器を画分するキーポイントとなるであろう。この意味のことも嘗て青年考古学協会でのシンポジウムに於いてのべたところであるが、この様な文化事象の在り方は、変革する社会経済組織の波にのって大和朝国家の統一過程に先行して各地方に伝播したであろうことは勿論で、奥羽北半の土師器が大和朝廷に服属される以前において、既に長胴の土師器が摂り入れられている点は明かにこのことを物語っているといえよう。従って各地域での土師器の発生が、即畿内権力の下に従属したことを意味するものではなく、周辺社会に至るに従って土師器の発生と、国家権力の伸張との間に若干歳月のずれを考えねばならぬわけである。

かかる観点より、いま一度土師器を振り返えってみると、一応、小形丸底坩の出現をもって土師器とするという一つの観方が考えられたが、更に近年古式古墳調査の累加に伴って、封土発見の土師器の類例が増加し、中でも埴輪と並んで、又はそれ等の代りに主体部を囲んで壺形土器の繞らされた例が西日本に見られ、また封土中に墓前祭を執り行った後、破棄されたものの如き状態で土器群の発見される幾つかの例が東日本に知られるが、これらの土器は、何れも小形丸底坩を伴う前記セットの中に見られる器形であって、共に土師器の最も古い形態での代表的な、所謂五領式乃至は和泉式に該当する古式の一群に限られていることが注目される。このようにみてくると、弥生式と土師器との限界は特殊な壺形乃至、小形丸底坩を含むセット化された土器群をもつて一線を画すべきことが、ほぼ正鵠を得た見解の如く考えられる。とはいえ既に無文的傾向を強くもつ弥生式最末期の時期とは時間的にも接触し、漸移的に移行する土器変化の様相下にあっては、個々の土器を取りあげた場合、現状においては判断に苦しむ近似値的関係を示すものが当然あるわけであり、事実一遺跡の調査が、必ずしも全て標式的な単一無雑の文化様式を示すものとは考えられない。絶えず遺制的な形態、又は漸新的な萌芽の何れかの要素が含まれている場合が多い。遺跡のもつ時間的な生命の長・短によって、それ等は更に複雑な様相を呈してくる可能性を充分にもっている。これについて嘗て筆者は、「その遺跡、遺物が示すキャラクターとボリュームとの相関的関係と、それ等を構成する社会的背景の研究によって決定さるべきものである」ことを述べたが(註4)、その後、筆者及び協力的な諸氏の間

に行われた調査の実例をみるにつけ、その感は愈々深い。

さて、最後に土師器の最も古い類型をみてゆくと、先年行われた埼玉県松山市五領の遺跡に於いて標式的な一群を指摘し得るようであるが、金井塚氏等の行われた調査と、その後行われた杉原・和島氏等の調査の結果からは土器群の組合せに若干の変化が認められるかに聞知している。未だ正式報告が在されていない現在にあっては、それを具体的に知るよすがもないが、東松山市教育委員会によって公にされた前期調査の略報を基とし(註5)、以後伊東市内野町における類似土器を出土した遺跡について聞知した結果によれば(註6)、明らかに五領式と仮称され、同一セットとして報告されている一群の土器は、必ずしも全てがティピカルなものとして肯定するわけにゆかぬものであるかに感ぜられる。その一つは、第2図に掲げた2の土器であるが、中山氏は考古学講座にこの土器を引用し、丸底の土器として報じ、五領式の標式的な土器としている。実際には此の土器は下胴部を欠き、丸底か否か不明のもので、関東に於いては他の事例より扁円状の球形胴に若干突出した平底をもつものと考えた方が妥当のように思える。然しそれはさておき、更に重要なことは、これと全く同一の形態と文様をもつ壺形土器が、この内野町遺跡から発見されたのであるが、この遺跡は住居址プランが楕円形状であり、炉は中央より西へ偏している。また伊豆半島より駿河東部沿岸地帯にかけて弥生式遺跡に特有の大形石錘が出土している。小形丸底坩は伴っていない。等々の諸点から考えて、弥生式の住居址としか考えらぬものである。しかし、たった一つの例証にしかすぎず、また前者も以後に類例の追加すべきものを聞いていない。従って、共に一例というあまりにも寡少例であるところに、断言することの危倶を感ずるのであるが、敢えて此の事実をまげるわけにもゆかない。伊東市史においては五領式より更に一段階遡る型式として弥生式最末期のものとし、内野町式と仮称することとしたのであるが、此の土器のもつ文様的遺制の残存ということにも直ちにこれを土師器と断定することに同調し兼ねるものがある。施文とは云ってもササラ状のヘラ先で附した羽状の擬縄文があるだけで、取り立てるべき施文工具を使用した、乃至はアクセサリーを附した態のものではないが、然し実際の作製に当っては結構手数を要するものであろう。弥生式末期の一群の土器に於いてさえ、既に無文化が促進され、部分的な便化された施文的遺制を僅かに留める程度になっている。そして従来明らかにされて来た五領式併行期と考えられる土師器の一群には、文様を留めるものは、皆無である現状からみても、この土器の持つ性格は特異な存在であって、五領式を土師器とする限りティピカルなタイプとするには寡少な点と共に聊か首肯し兼ねるのである。更に附言すべきは、東日本においては、このタイプの祖形は既に後期の弥生式土器の中に明らかに認められており(註7)、24の器台も亦他の多くの例証と対比するとき、この期のものとしては異質的タイプであり、前者と同類として五領式以前の形態とすべきではなかろうか。さて次に、然らばこれ等の土器が前野町式土器とイコールであるか否かの問題であるが、かねて前野町式土器の再検討を行ってみる必要性を感じながら、未だその機会を得ないので明瞭な判別を下すわけにゆかぬが、地点を異にして出土しているこの遺跡の性質から、

或る種のものは五領式と前野町式の中間に分離されて前記の土器群と共に、一型式を構成することが出来るかも知れないという漠然とした感がないでもない。このことについては、杉原荘介氏も嘗て何かの折、前野町と五領の間に一乃至は二つの型式を設定し得るかも知れない、というようなことを洩らしていられたのを記憶しているが、今後若しかかる事実が具体的に立証されるようなことになれば、この内野町式なる仮称も弥生式最末期の一グループとして承認されることになるであらう。

2.

従来、東日本での和泉式土器が漠然として5世紀頃の所産と考えられて来た。しかし、近年新しい事例の累加と共に、更にやや時代をしぼって見ることが出来るかのように考えられるので、特に東日本における土師器の上限的年代について若干考察し、更に前章と併せて最後にその概念を明らかにしたい。

A. 祭祀遺跡と珠文鏡及び土師器

古来、祭祀に於いて鏡の占める地位は重く、持つ意義の大きいことは、事改めて文献・資料をあげるまでもないことである。

勿論祭祀の意味も広く、時間的経過も長い。ここで述べんとするのは古代前期の頃に於いて、神に敬虔な祈りをこめたであろう狭義の意味での祭祀遺跡を対照としている。このような遺跡は、一見何等遺跡としての徴象をもたない個所から発見されるのを常とし、従って偶然の入鍬等による発見にかかるものが多いため、意図的な調査の行われた例は極少ないものであるが、その中に近年頻に儀鏡のみならず或は実用に供されたかと思われる鏡の出土が伝えられる遺跡か多くなった。その明らかなものを挙げると

福岡県宗像郡沖ノ島[註8]〔珠文鏡（1）　その他多数ある　省略〕

静岡県熱海市上多賀　上多賀神社境内[註9]〔変形神獣鏡（1）・素文儀鏡（5）〕

山梨県甲府市伊勢町[註10]〔珠文鏡（1）〕

東京都足立区伊興[註11]〔彷製神獣鏡（1）・珠文鏡（1）〕

福島県西白河郡表郷村三森[註12]〔珠文鏡（1）〕

の5例が知られ、従前の調査乃至採集品として

奈良県磯城郡三輪山の神[註13]〔珠文鏡・素文儀鏡〕

静岡県南伊豆町洗田[註14]〔珠文鏡（1）・素文儀鏡（1）〕

福島県国村郡田村町正直[註15]〔珠文鏡1〕

が知られており、寡聞乍ら都合8例を累算する。

さて、これ等の遺跡を通観すると、符合したように珠文鏡乃至は素文鏡の出土が伝えられて

いることに注目される。更に伴出の土器を一瞥すると、沖ノ島（但し珠文鏡に伴う土器が何れであるか不明）、山の神（手捏土器）、洗田（C地点で坩の中から出土、型式不明）。上多賀神社境内（国分式）。伊勢町（五領式）。伊興町（彷製神獣鏡は採集品・珠文鏡は祭祀遺物出土地点よりやや離れ、付近一帯は五領・和泉の両型式を主体とする広範な遺跡である。）三森（五領式）。正直（和泉式）であり、このうち、確実な土器形式の知れるものは、五領式（伊勢町・三森）・和泉式（正直）・国府式（上多賀神社境内）等である。洗田では坩の中に珠文鏡が納められていたというのみで型式を明かにしないが、坩であれば少なくとも和泉式、乃至は五領式と見られ、事実洗田出土の土師器には該当時期のものが多い(註16)、何れにせよ古式の土師器を伴う遺跡とみることが出来る。

さて、国府式土器を伴った上多賀は特例として、これ等の祭祀遺跡は全8例中、4例迄が、五領式・和泉式に該当し、伊興町の珠文鏡も恐らく此の一群に入れて支障のないものである。このように整理してくると、祭祀遺跡そのものに対する年代観にも若干訂正を要し、また一、二の特殊な事例と、それ自体祭祀に使用することを目的として作製したであろう素文倣鏡を除いて、珠文鏡のみを祭祀の用に供した事実について注意が向けられるのであるが、本論の外に遠く逸脱するので、何れ稿を改めて述べたいと思っている。

要するに本項でいいたいことは、これ等の事例中の一部、最も確実に知ることの出来る珠文鏡伴出土器が、五領式併行のものにあるという事実である。

B. 古墳封土出土の土師器

この例も近年累加され、寡聞なる筆者にも特に古墳の封土中に伴った例証として、その土器型式の明らかなものは、

佐賀県佐賀市金立町・銚子塚(註17)

岡山県岡山市沢田・金蔵山古墳(註18)

香川県高松市石清尾山・猫塚(註19)

奈良県桜井市外山・茶臼山古墳(註20)

千葉県東葛飾沼南村片山・北作第1号墳(註21)

千葉県長生郡東村・能満寺古墳(註22)

などが数えられる。このうち銚子塚・茶臼山例は土器の底部に穿孔し、金蔵山は丸底の、何れも広口口縁の外側に顕著な段を有する同一系類に属する壺形土器で、しかも主体部をめぐって樹てられた埴輪の間におかれ、乃至は埴輪と同様意義をもつて土器のみが繞らされていた特異な例であり、また猫塚・北作第1号墳・能満寺古墳の3者は墓前祭祀を行って後、埋没したが如くにも感ぜられる状態をもって封土中より出土した土器群である。

ところで、これ等の土器をみると、最もバラエティーに富んだセットをもつ北作第1号墳の場合、壺形・坩形・盌形・器台・高坏等16個体分が数えられ、報文によれば、これ等の土器は「土

師器16個は明かに埋葬と同時に埋められたことが認められる」と記されている。このうち脚部の大きく広がり上下二段に6孔を有する高坏・坩形土器底部に小さな穿孔のあるもの、及び2個の大型の壺を除いた全てに朱が施され、しかも盌形・高坏・坩形土器には何れも焼成以前の穿孔が認められ、殯の場、乃至は墓前に於いて行われた祭の場の器として考えられる。しかもこれ等が示す器形は五領式併行の一群であり、しかも何れもティピカルな形態である。これは集落の場合と異って、一時の用に供するため、特別の意味をもつて同時に作られたものであるが故に、純粋な形態をとり得たものと解せられる。

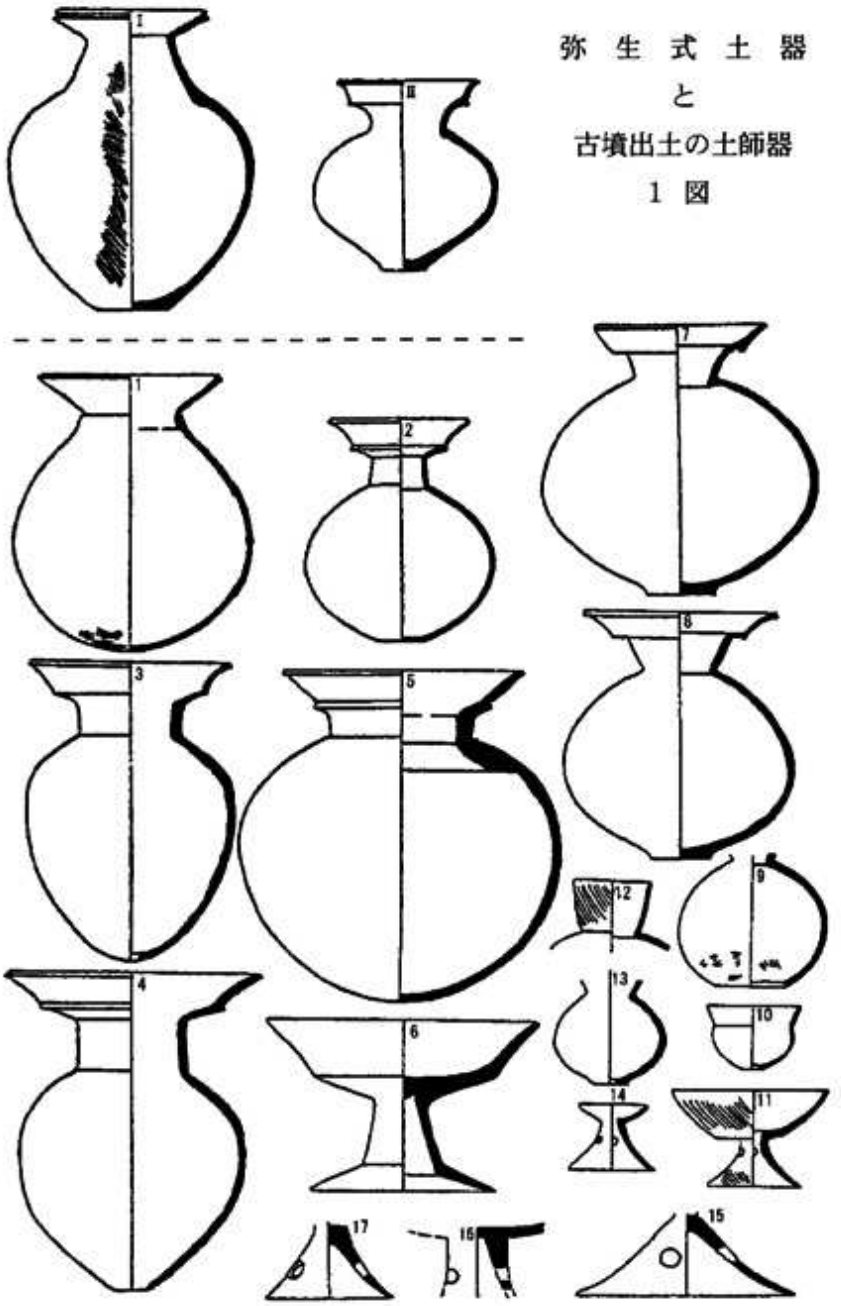
能満寺古墳の場合、主体部上を覆う如くにして介在した幅20㎝・長さ5.5ｍの黒色土層から出土したもので、「完形品はなく、僅かに高坏脚部が数個特徴を示しているにすぎず、他は全くの細片で、出土状態から見て故意に打砕いて埋めたとしか思えないものがある。」と報ぜられ、厚さ40㎝ほどの黒色土層中特に20～30㎝の付近に最も多くまとまって発見されたようである。この一群の高坏の脚は、何れも3孔を有している点に注目され、大塚氏はこれを和泉式と不明の2群に分けていられるが、確かに一部の脚には和泉式に類似する様相を示すものもないではないが、細片であるこれらより和泉式と断定するのは少しく危険であり、寧ろ3孔を有する点に重点をおけば、この種の脚は少なくとも関東にあっては和泉式のティピカルなタイプではないことが知られる。また氏が不明とされた脚の形態は、明らかに五領式併行期のものであり、今日に於いては若干の訂正を要するものであろう。従って「しからば本古墳の年代を土器をもって論ずる時、古墳文化時代前期とする事が出来る」とし、「上総付近に於ける前期古墳築造年代は3世紀から4世紀とみられるべく」と述べ、逆に考えるならば和泉式土器の実年代を暗々裡に3～4世紀の所産とされていることは聊か当を得ないかに思われる。

猫塚の場合は、当時としては弥生式土器かと疑われたことは許容さるべきもので、此の地方での土師器の系列が不明瞭な現状から決定的な位置づけを行うことは至難であるが、岡山県酒津[註23]の土器などの系統をうけて変化したこの地方における五領式併行期の土師器と解せられる。

茶臼山、後円部の主体部を繞って方形状に、底に穿孔をもつ球形体丸底の壺形土師器が数十個整然と据え並べてあった。

金蔵山　Ⅰ、中央石室の長軸線の西、埴輪方形区画の西列から4.5ｍの外に、1.5㎡の範囲内から、表土下10㎝前後にして方格八乳鏡と共に、高坏の破片25個体以上が発見され、埋葬当時のままであると考えられた。Ⅱ、南石室を方形にとりまく埴輪列のうち・西列更に外側に平行して並べられた5個の円筒埴輪のうち1個は壺形の土師器である。この外Ⅰからは所謂籠目土器と称する皿形土器3個と、Ⅰ・Ⅱ両者の周辺から土師器壺と、籠目土器の小片をそれぞれ発見していると記されているが、所謂籠目土器は特殊なものであり、壺形土器片は何個体分か不明であり、且つ形態はⅡの円筒列中発見のものと同類であるようであるから共に省略する。

さて、この両者、即ち25個体以上にものぼる高坏と、円筒列中の壺形土師器が問題である



Ⅰ・Ⅱ(参考) 弥生式土器　　1．香川・猫塚　2．大和・茶臼山　3・4．佐賀・銚子塚　5・6．岡山
Ⅰ．岡山・酒津　Ⅱ．大和・唐古　・金蔵山　7～14．千葉・北作1号墳　15～17．千葉・能満寺古墳

第1図　弥生式土器と古墳出土の土師器

わけだが、前者はどうみても標式的な和泉式であり、後者は茶臼山のそれに比して頸部は短く、丸底で穿孔はない。即ち実用にも供せられる土器であり、一応型式的には五領式と併行のもの

と考えられる。

銚子塚　後円部のくびれ部寄り地点から発見された壺形土師器で、報告されたものは、やや上胴部の張って長め器体で、茶臼山・金蔵山と若干器形を異にするが、同類に加えて差し支えないであろう。朱塗りで底部に穿孔がある。現在6個体分くらい採集されているようであるが、恐らく茶臼山例の如く埴輪的意義をもって繞たされたものであろう。

この外松尾氏の報告によれば、阿蘇の長目塚や大分にもある旨を記載されているが、長目塚のものは、より埴輪としての性格をもつもののようであり、大分のものは詳かでない。筆者は別に昨年静岡県三島市千枚原出土の銚子塚出土のものに似た底部穿孔の小形の壺形土器を長田実氏から見せて頂いたことがあり、金谷克己氏より和歌山県出土の同類のものを示されているが、しかしそれらは古墳以外の場所から発見されたと聞いている。従って何れも近親的関係を思わしめるものではあるが、本論には直接関係がないので割愛する。次いで、これ等の古墳の年代観についてみると、報告者によれば銚子塚（？）・猫塚（前期）・茶臼山古墳（前期前半）・金蔵山古墳（5世紀前半）、北作第1号墳（4世紀末・5世記初頭）・能満寺古墳（前期・3～4世記）と推定されている。

以上それぞれの古墳封土出土の土器群をみると、茶臼山・金蔵山・銚子塚の三者は埴輪的意義（本来は埴輪が献供の壺形土器を模して類型化されたものであろうが）をもって使用されている点、直ちに五領併行の時期をあてはめて考えることは危険であり、多分に形態のみが特別に伝承されることが考えられ、金蔵山出土の土器に和泉式併行の高坏が見られることは勿論、長野県田麦の林畦第1号墳[注24]石室内出土の朱塗壺形土器に五領併行的器形を呈するものが見られる等の事実は、端的に伝承的な献具の品であることを物語っているといえよう。

事実これ等の中で最も古い一群の茶臼山出土の土器は質の上より、また技術的な手法からみた寧ろ壺形埴輪と呼称する方が妥当で、実用の土器をただ単に穿孔したものとは考えられない。従って、この種の土器が畿内地域にあっては、更により遡る時代において実用に供されていたと見ることが出来るわけであって、それは少なくとも此の地方に於ける古墳発生頭初の頃にのぼるものであろう。

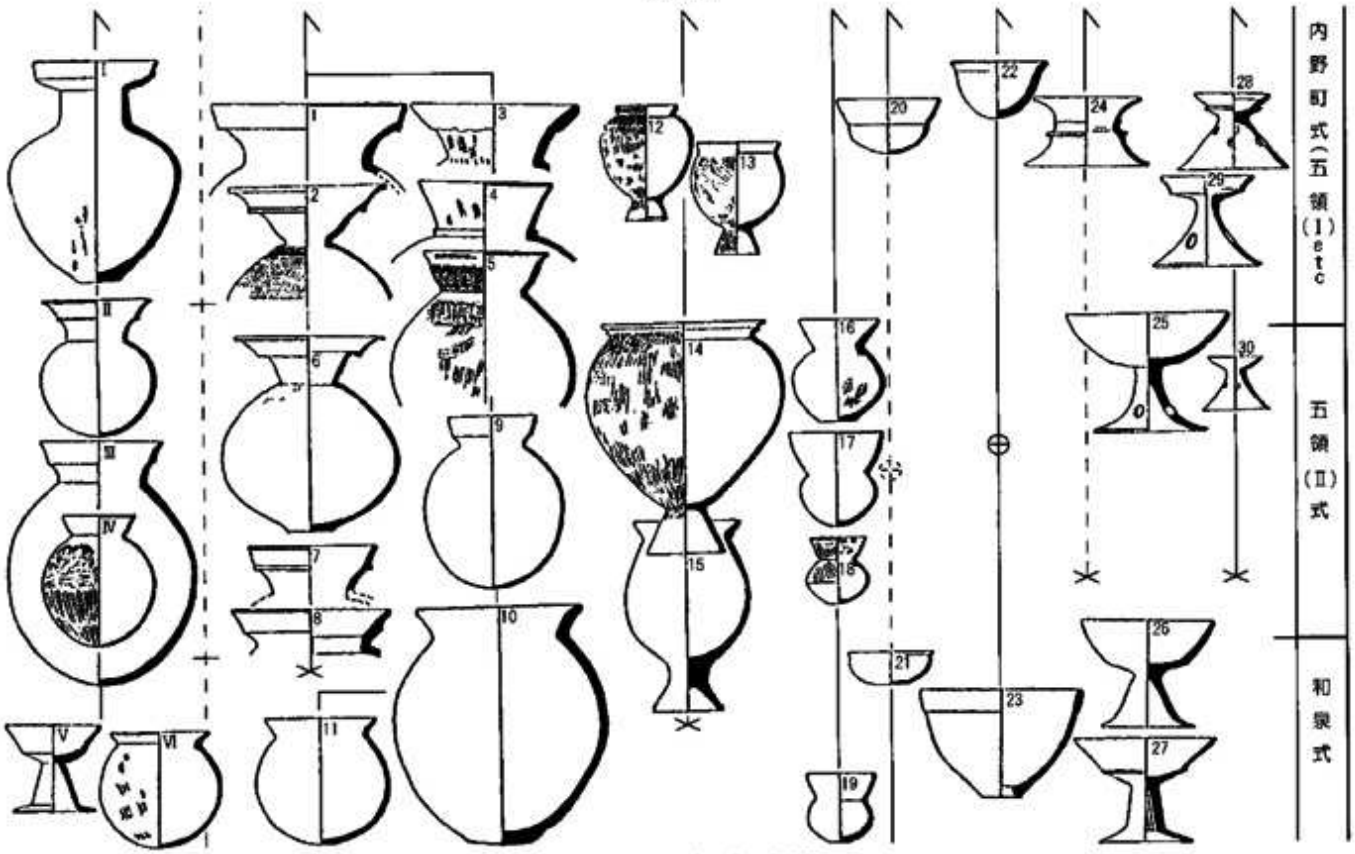
然し関東における能満寺や北作1号墳の如きはそのまま実用の土器となし得る如く思われ、他の朱塗り穿孔の土器も孔さえなければ充分実用の便に耐えうる。かかる点より、この二者のみは少なくとも五領式土器使用時期と時を等しくして作られたものと考えられ、従って、これ等の古墳築造の年代も同時期と見做すべきであろう。とすれば従来の古墳の年代観より推して関東に於ける五領式土器の示す実年代が少なくとも4世紀であることとなるわけである。

さてここで問題は、A・B両項を通じて更に次のように整理される。

A項・珠文鏡を伴う土師器は五領式－和泉式である。

B項・五領式土器を伴う古墳は、少なくとも5世紀前半以前の古墳であり、その8例中4例迄（不明1例）が前期古墳に属する。

2 図



Ⅰ～Ⅵは西日本の土師器
1．岡山・酒津　Ⅱ．大和・唐古　Ⅲ．奈良・下明寺
Ⅳ．奈良・唐古　Ⅴ．大阪・石津　Ⅵ．奈良・布留

1～30は東日本の土師器
1～5．埼玉・松山　6．千葉・北作1号墳　7．山梨・伊勢町　8．東京・荒川　9．群馬・中野　10．東京・和泉
11．長野・平出　12．愛知・欠山　13．東京・前野町　14．長野・下蟹河原　15．荒川　16．伊勢町　17．松山　18．静岡・伊東　19．平出　20．静岡・内野町　21．平出　22．下蟹河原　23．和泉　24．松山　25．下蟹河原　30．北作1号墳

第2図　土師器の編年

結論・珠文鏡は、前期古墳に伴出すべき性格の古式の仿製鏡である。

この三段論法には間違いはないと思う。然し結果的には大いな誤謬のあることを誰れしも感ずるであろう。少なくとも従来古墳に伴って出土した珠文鏡は古くとも中期古墳の年代以前には遡らず、寧ろ後期古墳に多い、従ってこの事実を正鵠たるものとして成立せしめるためには、少なくとも祭祀遺跡に伴出した珠文鏡が五領式土器を伴っていると認められた遺跡の年代を降さなければならない。伊勢町・三森がそれであり、洗田もこの可能性が多い。所でこれ等の遺跡は現在までの所では山梨－伊豆の線以北に限られていることが注目される。結論的には関東においてタイプステーションが見出された五領式なる土師器最古の実年代は、少なくとも中期古墳の年代迄降るべきであるということが言えるようである。中期古墳が応神・仁徳陵を中心とするものである限り、そして仁徳天皇が宋書に見える倭王讃であるという前提において考えるならば、この年代は西暦400年前後の頃に該当することになる。

しかし、この事象は、現在の場合、一応関東周辺以北の避地的現象として把えられるのであって、畿内周辺の同期併行の土器にまで及ぼそうとするのではない。とは云え関東周辺の前期的様相を示す古墳の実年代に大きく関係してくるので、このまま直ちに受け容れるわけにはいかぬであろう。従って今少し筆を継がねばならない。この為に用意された事例は、千葉県松戸市所在の河原塚古墳である。この古墳は、貝塚の上に営まれたもので、封土中に多くの貝が混入しているために、骨角類が珍しくよく保存されていた。この古墳出土遺物中、ここで特筆するのは二口の鹿角装刀子であるが、刀子は若鹿の角か、支角を利用して作られた長柄のもので、断面は卵形に近い楕円状を呈し、柄端が弧状にそりあがっている。この形態をとる刀子は、前期の特色もあるが、中期のやや早い時期におく方がよいと考えられている奈良県新山古墳発見の石製刀子と軌を一にしている。そして今春行われた静岡県南伊豆町広畑遺跡からは、同類の刀子が和泉式土器に伴って発見[註26]されている。一方本稿の論旨に従えば、和泉式土器は少なくとも5世紀後半頃の所産であろうが、河原塚も伴出遺物の点から5世紀後半も末に近い時期のものと推定しており、この点符合するのである。このように考えると新山古墳とは約1世紀に近い時間差が生じてくる。由来畿内と東日本の場合、交化伝播の時間的差を半世紀ぐらいと考えられていたが、再考すべき問題であらう

斯く見てゆくと、畿内に於いて3世紀末乃至4世紀初頭頃には古墳文化に移行したであらうとすれば、関東にこの文化が波及したものは4世紀末乃至は5世紀初頭前後の頃となろう。これはまた、北作第1号墳や能満寺古墳出土の土師器の年代とほぼ期を一にしている。

さてこのように考えてくると、古代史上特筆すべき事件の一つとして・西暦391年を中心として行われた朝鮮出兵と、その偉大なる戦果は、或はこの東日本平定直後における、統一拡大の余勢が然らしめた結果であろうかとも推測されるのである[註27]。

最後にこれ等の所論を傍証するものとして梅原博士の最近の論説である福岡県須玖遺跡出土の獣風鏡の問題にふれなければならない。

北九州の弥生式中期の遺跡と本稿が勿論直接的問題を有っているわけはないが、博士の論考によれば、従来等閑に附されていた一片のこの鏡は、2世紀後半を遡り得ず、寧ろ3世紀初頭頃とする方が妥当であらうと結ばれている。従来この遺跡は西暦1世紀初頭頃と考えられ弥生式文化の年代を考えるメルクマールとされていた。この新しい年代観を採り入れるとなると、実に影響する所が大きいが、本論旨に対しては幸いにして傍証とすることが出来る。

即ち九州に於ける弥生式土器編年は、杉原氏に従えば、須玖式の後に、伊佐座式・水巻町式・雑餉隈式の3型式が編年されている。

例えばこの期の年代幅を機械的に計算して半世紀1型式としたとしても、土師器の展開は4世紀後半乃至は5世紀初頭頃となるわけである。これが周辺地域であるが故の現象として考えれば、一方東国に於ける弥生終末の期を考えるならば、同じ周辺地域として、早くとも九州地方とほぼ同時期に土師器の世界が展開したと見るべきが妥当であり、本稿での論旨と符合する結果が生じてくる。

以上よりみて、土師器の生産はそれぞれの地域社会に於ける古墳文化の展開に相応じて生じたものの如くに考えられ、且つ東日本に於けるその開始期は西暦400年前後の頃と推定し得るのである。従って土師器の概念もこれでほぼ了解し得ること思われる。

あとがき

充分なる準備をする暇もないうちに、督促を受ける結果となり、また紙数の関係上省略した部分が少なくない。従って論証未しの感があり、或は誤解を生ずる危惧もなしとしたいが、何れ稿を追って更に問題の検討を行っていきたいと考えている。

註

(1)『青年考古学協議会"連絡紙"No.3・No.4

(2) 拙稿「佐渡に於ける後期弥生式文化の限界」『國學院雑誌』第56巻第2号

(3) 藤森栄一氏「石製垂に就いて」『考古学』第11巻第8号　小林行雄氏「小形丸底土器小考」『考古学』第6巻：第1号

(4) (2) 参照

(5) 金井塚良一氏他「東松山市の土師器」東松山市教育委員会

(6)『伊東市史』原始古代篇

(7)『信濃考古綜覧』「松本市出川出土土器」、関東でも弥生町式土器にみられる。

(8)『沖ノ島』宗像神社復興期成会

(9) 高本康生氏「熱海市上多賀祭祀遺跡調査概報」『駿豆考古』第2号

(10) 上野晴朗氏「甲府市伊勢町出土の土師器」『甲斐史学』

(11) 大場磐雄博士調査

(12) 亀井正道氏教示

(13) 樋口清之博士「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」『考古学雑誌』18の12その他

(14) 大場磐雄博士『神道考古学論攷』

(15) 亀井正道氏「祭祀遺跡の年代に関する試論」『上代文化』第27輯

(16) 下田町中央公民館・同県立下田南高校所蔵

(17) 松尾禎作氏他「佐賀県佐賀市銚子塚」『日本考古学年報』4

(18) 鎌木義昌氏他「金蔵山古墳」倉敷考古館

(19) 梅原末治博士「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京大文学部考古学研究報告』第12冊

(20)『考古学講座』5　古墳文化他

(21) 金子浩昌氏他「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第33号

(22) 大塚初重氏「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第3冊

(23)『弥生式土器集成』1　Pl.9　5～6などが考えられる。

(24)『下高井』長野県埋蔵文化財発掘調査報告

(25) 大場磐雄博士他『松戸河原塚古墳』松戸市教育委員会（昭和34年12月刊行予定）

(26) 桜井清彦氏教示

(27) 梅原末治博士「福岡須玖遺跡出土の菱鳳鏡に就いて」『古代学』第8巻

神道と大和王権

小出義治

まえがき　　神道の成立
神々の誕生　　まとめ

まえがき

日本古代国家の成立はいまだに深いナゾに包まれたまま21世紀を迎えようとしている。考古学がいくら長足の進歩をとげようと、問題解明への鍵は簡単に手のとどかぬ所にあるらしい。

しかし、かと云って模索がなければ進歩もない。本誌第4号には「巫女王の系譜」として視点を弥生時代後期に出現する巫女王におき、卑弥呼から壹与そして倭迹々日百襲姫が日本古代王権の形成に果たした役割を考え、さらに御肇国天皇（御間城入彦＝崇神）出現に至る道程を模索した。

今回はこの問題と関連して、大和王権のバックボーンとして、そしてまた現在にも国民の日常の生活の中に深くとけ合っている神道に焦点をあて、その思想の淵源と初期発展の過程を考えてみることにした。

神道の成立

私は日本固有の宗教として、村々の鎮守から京の祇園祭りに至るまで、国民一般の生活感情の中にとけ込んでいる神社神道というものの一般的認識として「神道とは日本民族固有の宗教であり、それは日本の列島がもつ風土環境と、そこに住みなした弥生時代以降の人たちの生活習慣とによってはぐくまれた素朴な宗教的情操や霊的価値観を基盤とし、不断に渡来する外来精神文化も摂取融合して次第に成長をとげたものである。」と考えている。その最も初期的次元の神道の姿を原神道とよぼう。

従来、神道考古学研究の定本とされている『神道考古学講座』（雄山閣刊）によれば、神道前期－原始神道期－歴史神道期の3期に大別されており、古墳時代、それも滑石製模造品を出土する5世紀前半頃からを原始神道期とし、それ以前を神道前期としている。

この神道前期と称する前期の意味が前・中・後期の前期というのか、神道以前の意味での前期なのか、その辺曖昧であるが、論理的には原始神道以前つまり「神道発生以前」と理解すべきであろう。だが、そうなると「巫女の系譜」の中で考えられた滑石製模造品出現以前にあると理解される神道的世界観（天的宗儀）の時代をいかに取り扱うべきかが問題となる。それこ

そ原始神道期と呼ぶべきであったと考えるが、同じ語彙で取り扱うことは誤解のもとであるのでややまぎらわしいいがこれを「原神道」期と呼称した。従って神道前期も明確に「神道以前」とし、また所謂歴史神道期の中にも時と共に発展変遷があるので神道Ⅰ期・神道Ⅱ期・・・と細分すべきであろうかと考えている。しかし、いまここでⅠ期以降何期まで細分することが妥当であるのか論ずる余裕も用意もない。取りあえずは、神道以前から引続く原神道期の内容と、これに続く神道Ⅰ期の概要についてこの小論をすすめていくこととする。

さて、神道学者の唱える神道というものの基調的な背景を構成する要素は、太陽神信仰や高天原神話であり、明・浄・直の精神的構造に根ざしているといわれる。これらの諸要素は三品彰英博士のいう天的宗儀の世界、つまり「鏡の信仰」に淵源を求めうるものと考える(註1)。従って博士がこれに対応するものとして地的宗儀の世界と称した「銅鐸の信仰」が最も盛んであったと思われる弥生後期初頭頃までの世界は「神道以前」の区分に該当する。銅鐸を地中に埋納保管することに重要な意義のあったこの時代は、地霊信仰中心の社会であり、それに対して3世紀代には鏡を地上で保有することに重要な意義を感ずる太陽霊信仰の世代が新しく、大きく展開してくる。この天的宗儀の推進者が魏志倭人伝に載せる親魏倭王（卑弥呼）とその補佐役の男弟であった、と考える。鏡は地上での太陽であり、その照破する光や映し出す新鮮な霊力が、既に遠い過去のものとなりつつあった不可思議な金属音の魔力から人々の心を開放をしたのであろうか。同じ霊（たま）の信仰の中の争剋ではあっても地霊から太陽霊へ価値観の転換が簡単に行える筈はなく、旧勢力と巫女王を中心とする新しい勢力との反覆する動乱を幾度も克服しなければならなかったと思われる。倭国大乱の倭人伝の記事や、考古学的に立証される高地性集落の存在はそうした紛争を物語るものであるのかも知れない。幸い巫女王卑弥呼は太陽神信仰の盟主である魏の支援を得て軍事顧問張政の派遣をうけ、また新しい時代のシンボルである多くの鏡を下賜され、その特定の鏡（太陽霊の依り代）を分与することによって盟主としての権域を逐次拡大したと考えるが、一方において銅鐸の集中埋納が示す村落国家群間の均衡勢力の崩壊は、天的宗儀の促進に拍車をかける結果に連なったと思われる。こうした後退現象をたどる地的宗儀小国家群の中には、滋賀県小篠原や神戸市桜ヶ丘の如く非常に多くの銅鐸を保有し、また莫大な銅剣や銅矛をも併せて集中管理することの出来た島根県荒神谷等々実力を有した勢力も存在したわけであるが、遂にはその勢力でさえも多くの呪力をもつ地霊の「依り代」を地中に埋納したまま衰滅してしまったのである。

かくして新しく天的宗儀への改宗－巫女王（親魏倭王）の保有する鏡の分与をうけることは魏の皇帝からの信任の証しであり、巫女王は授与の代行者であるという論理－によって配分された鏡は、古代封建制への再編成という大きな政治的革命の中での新首長家のシンボルであり、村落国家のシンボル（銅鐸）とは自ら異なる意義をもつものであった。こうした価値観の一大変革が生じたことは、次の遺跡が示す事例からも類推することができよう。

昭和60年に奈良県桜井市大福にある大福小学校々地の一隅から一辺11.3mの方形周溝墓が

発掘されたが、幅２mほどの周溝の端にかかって１個の銅鐸が発見された。その銅鐸は溝底に掘りくぼめた穴の中に鰭を上下にして横たえられた正常な埋納状態で検出されたが、上方部の鰭は僅かに掘り形の上に出るような状態で埋められていたという。

この調査に当った桜井市教育委員会では方形周溝墓が先に作られたか、銅鐸が先に埋納されたかで頭を悩ましていたが、従来の考え方からすれば個人墓である方形周溝墓の墓域内に共同体社会のシンボルを埋めることはあり得ないことであるので、銅鐸の埋納が先であったと解釈すべきであろう。その神聖な領域内に方形周溝墓が作られたということは、既に銅鐸が埋納されている事実が忘れられてしまっていることであり、また、溝を掘る過程で鰭の一部が当然発見された筈である。とすれば、それは価値のない単なる遺物として捨ておかれたものとしか考えられない。この方形周溝墓から発見された土器は小片であって十分資料とは云い難いが纒向Ⅰ式に最も近い弥生末期の土器片であったという。これがこの墓の築造年代を示すものであるとすれば、銅鐸はおそらく後期の初め頃、つまり卑弥呼が女王であった頃には既に放棄された状態にあったと解されるのである。

さて、以上のことは重要な事象であるので既に「巫女王の系譜」の中でも触れたことであるが、このような経過をたどって弥生時代後期つまり巫女王の時代に倭国の歴史は、イデオロギーの大きな転機を迎えたものと推察する。

この価値観の革命的現象は銅鐸のみではなく、銅剣・銅矛・銅戈をシンボルとした地域においても勿論のこと同様に進行し、地霊信仰から太陽霊信仰へ移り変わったものと考える。

前にもふれた如く同じく、霊的信仰の世界ではあるが、地霊中心の地的宗儀と太陽霊中心の天的宗儀とは陰と陽との両極端の考え方であり、シントウイズムは当然陽を重んずる精神活動である。

少々長い前文となってしまったが、この大きな思想の転換を経て始めて「神道以前」から「原神道」の世界が開けるのである。と同時にこのことは弥生国家群の衰滅を物語るものであり、また大和王権の成立に連なる問題でもある。巫女王の座は大王の座に改まり、小林行雄博士の卓越した理論である「同笵鏡の分有」という、より確かな鏡の下賜配分を新たに行い、王権秩序の確立のために前方後円墳を中心とする墓制が施行される契機ともなったと思われる。その王墓的といわれる古墳前期の埋葬儀礼には、竪穴式石室や粘土槨に木棺を納める方式を一般とし、朱を多く用い、鏡・玉・剣を中心に石製品、鉄製工具類、銅鏃、また時に玉杖・筒形銅器・巴形銅器などを副葬する。そして墳頂表層部には主体部を囲むように方形に底部穿孔の壺形土器や特殊器台＝弥生時代には墓前祭に供献された壺の底を割って孔をあけるか、破砕し、二度と使えないようにして投棄する風があった。古墳時代に入ると初めから底部に孔をあけて焼きあげ、墓前に供えるようになる。また、さらにこののち埴輪化して壺形土器は朝顔形埴輪に、特殊器台は円筒埴輪となる－をめぐらす。これらの中には弥生時代以来の巴形銅器や銅鏃が存続し、底部穿孔の風習が継承され、その多くは呪力のある宝器として、あるいは悪霊に対

する除魔のために副えられたと考えられるものが多い。古墳時代の初期はこのように呪力を重んじ、霊力を評価する時代であり、まだ弥生時代の考え方や因習から完全には抜け切れない世代であった。

この4世紀の末に倭軍が朝鮮半島に大侵略を行ったことを中国吉林省輯安にある高句麗広開土王の碑が書き留めていることは周知のことである。恐らくはその事に関連して、渡海の安全や武運の長久を祈った祭祀の跡であろうと考えられる遺跡に福岡県宗像郡沖の島祭祀遺跡がある。玄海灘のただ中に浮かぶこの島は全島が祭祀実修の跡で古来禁足地とされ、神ノ島とも呼ばれて宗像神社の沖ッ宮が祀られていた。昭和29年以来数次にわたる調査によって累々として重なる巨岩の上や岩陰、あるいは露天のいたるところに祭祀の跡が発見され、古くは4世紀末頃から大凡そ9世紀頃まで神社創立以前の古式の祭りの行われていたことが明らかにされた。その最も古い遺構が、1岩と仮称する巨巌をとりまいて行われた17・18・19号祭祀遺跡と考えられている。

17号遺跡は、南東に傾斜する岩上に東西1.5m、南北2mの石積み祭壇をつくり、鏡・剣・大刀・刀子・鍬形石・車輪石・石釧・鉄釧・玉類がおかれ、さらにその上に大きな石を数個置いて覆ったような状態で発見された。

19号遺跡は、1岩の下方にあるK岩上の窪みの部分に長さ4m、幅2mほどの山土と礫を版築状に埋め、傾斜する西側には石を積んで平坦な壇とし、壇上を比較的大形の平らな石と土・礫で固め、さらにその上に礫石を敷きならべ、鏡・鉄剣・大刀・矛・蕨手刀子・鏃・鉄針・硬玉製勾玉・管玉・棗玉・滑石製臼玉・石釧・鉄釧などを壇上に置いて祭りが行われている。

さて、以上の祭壇出土品を検討すると、これらの出土遺物は4世紀代後期（17号遺跡）から5世紀代初頭期以前（19号遺跡）の優秀な古墳に埋納された副葬品と全く変わるところがない。

つまり、この時点での祭祀は神霊の祀りと死者の霊魂の祭りとが全く等質であるということで、まだ両者の霊魂観が未分化の状態にあることを物語っているといえよう。すべてが依然として「たま」の領域の中で混然としていて沖の島17号遺跡や19号遺跡にはまだ神の姿を認めることができない。巨岩の上に置かれている鏡を中心とした多くの「ものざね」のそれぞれがもつ呪力＝霊力に加護を期待した祭りであったと考えられる。

大和の古社の一つに石上（いそのかみ）神宮がある。天理市（かつては布留町と呼ばれた石上神宮の門前町が天理市の母体である）に鎮座し布留社（ふるのやしろ）或いは布都魂社（ふつのみたましゃ）とも称された記紀所載の名大社である。この神社の御神体は別称の如く「ふつのみたま」即ち「剣の霊力」を祀ったものである。古くから本殿のかわりに禁足地をもち、地中に御神体である神剣が埋納されていると伝えていた。明治7年（1874）に菅大宮司が社伝の実証を企図し、官許を得てこの禁足地を発掘した。当時の記録によると地表下約90cmの個所から素環頭大刀（現在、布都御魂として奉斎）を始め大刀類・銅鉄・硬玉製勾玉・棗玉・碧玉製管玉・琴柱形石製品などが出土したとしている。何れも4世紀代に遡る遺物である。この禁足地は恐らく神社造営以前の古い時点から沖の島の古い

沖ノ島の遠景

17号祭祀遺構

祭祀遺構の復元状態

第1図　沖ノ島祭祀遺跡

祭祀と同じく「霊魂」を祀った数少ない祭祀の遺跡と考えられる。

「原神道」とはこのような特定の「ものざね」の霊力を祀った最も初源的な神道的祭祀を指していう。この限りでは勿論弥生時代以来の呪力信仰の範疇に属する祭祀であり、銅鐸祭祀と何ら変わることのないもののようにも取れるが、沖の島の巨岩祭祀の場では16号遺跡に4面、17号遺跡に21面、18号遺跡4面以上、19号遺跡2面と鏡が祭りの主体であり、これに剣や

玉の呪力、その他の遺物による除魔など、霊力を綜合しての祭りと理解され、当然のようにそれは天的宗儀の祭祀と考えられる。また石上神宮禁足地の場合は地中保管却ち地霊信仰に該当するのでは、とも思えるが、発掘時の記録には「地表下30cm前後に瓦を敷きつめ、その下に石を積んで2.7mあまりの方形の境界をつくったと思われる施設があった」と詳細を記している。4世紀代にこの様な地下設備を作ることは有り得ないことであり、また日本書紀垂仁天皇三十九年条に

「五十瓊敷命、茅渟の菟砥の川上の宮に居まして、剣一千口を作りき。・・・石上の神宮に蔵めき、この後五十瓊敷命におほせて、石上神宮の神宝を司らしめたまひき」

とある。元来多くの剣を神宝類と共に神庫に納めて地上に管理していたことが明らかであって、地中に埋納したのは後世のことであろう。

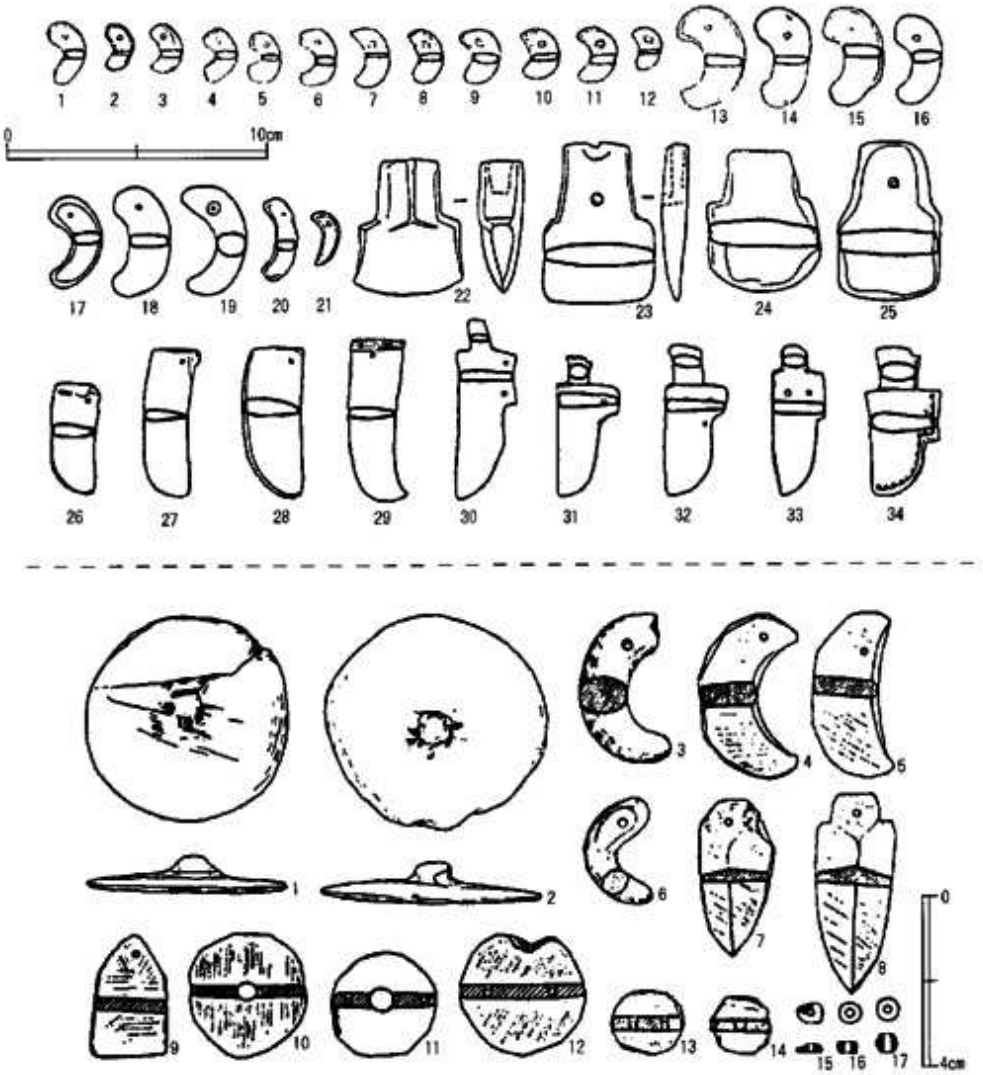
さて、これらの祭祀は鏡の霊力＝太陽霊が中心である。加えて剣や刀、そして玉類が非常に多い。その他に武具・工具・装身具・馬具類も伴出することはあるが何れも少量である。

4世紀代のこうした遺跡はきわめて少ないが、天的宗儀の祭祀であることと、それぞれの司祭者は大王或いは大王が命ずるその代行者達であり、こうした司祭権の掌握こそ大王家のゆるぎない統治権力を築きあげる基となったと考えられている。

神々の誕生

以上のように5世紀初頭頃までは太陽霊を中心とする霊魂信仰の世界であり、「ものざね」としては鏡に次いで剣や玉のもつ呪力も有力な霊力とされ、大王家を始め各首長家のシンボル（神宝）として伝える風が続いており、また代々首長はその首長家に伝えられる霊（たま）を継承することによって就任した。その首長霊継承の儀礼としての大嘗祭[註2]の原形は既にこの呪力信仰の中に存在したものと考えられ、前方後円墳の前方部こそまさにその儀礼継承の場として起こったものであろうと説く人も居る。

しかし、この時点ではまだ日本の神々は誕生していなかった。沖の島の21号遺跡では巨岩上に磐座と考えられる大きな石塊をおき、そのまわりに礫石で2.8m×2.5mのやや長方形の石囲いをつくり、その内部には小礫岩層を敷き詰めて祭壇とし、中央の磐座を中心に獣帯鏡その他の鏡片・大刀・剣・刀子・鉄鏃・斧・鎌・鉇の類、および滑石製の勾玉・子持勾玉・管玉・棗玉・臼玉・有孔円板・剣形品・ガラス製の小玉などの玉や滑石製模造品類、また甑・坩・高坏などのミニチェア土器を供献して祭りがとり行われている。これらの遺物はすべて原位置をとどめていないが、当初は鉄器類と玉類を別々に区別して奉献したものと考えられ、また鉄器類には実用品と雛形との両方が供献され、さらに玉類の出土状態から、祭壇の中心にある磐座と考える大石に玉類をつけた木の枝を立てかけたものと推測されている。こうした状況は、天上界から降臨する神の座としての磐座と、神の依代としての「ひもろぎ」が共にしつら



（上）古墳出土の石製模造品
1～21 勾玉、22～25 斧頭、26～29 鎌、30～34 刀子（大阪・『カトンボ山古墳の研究』による）

（下）祭祀遺構出土の石製模造品
1・2 鏡、3～6 勾玉、7・8 剣形品、9 鋸形品、10～14 有孔円板、15～17 臼玉（奈良・布留三輪、香川・荒神島、山口・美濃ヶ浜、東京・伊興遺跡出土品より）

第２図　古墳出土・祭祀遺構出土石製模造品

えられた祭場として、その初期の状態を伝える重要な遺跡の一つであると考えられる。また、天理市の天理教会本庁親里館西館建設時に発見された祭祀遺跡は石上神宮禁足地と布留川を挟んで相対する位置にあるが、伝聞するところによると方形の石敷遺構があって、その隅々に聖域を標め立てるかのように円筒埴輪が樹てられて、その内部には布留Ⅱ式の土器が並べられ、それにふりかけた様な状態で滑石製模造品が多量に発見されたという。出土した土器や滑石製

模造品は現在天理参考館に保管されているが、その数量は勾玉215個、管玉65個、臼玉3284個、有孔円板146個、タガネ形の模造品1個を数える。

以上のように、沖の島21号遺跡の場合は巨岩上の祭りで、鏡・直刀・剣・刀子・工具類と古い様相を基調としながら、滑石製模造品やミニチュア土器（仮器）を加えている点や、磐座と思われる大石を置いている点、玉の出土状況から「依り代」が樹てられたと思えることなど何れも新しい祭祀の形式が加わっている。親里館の場合は全く新しい祭祀の形式に統一されて石敷の祭場が設定されている。古墳でもないのに埴輪が樹てられているのは奇異のようであるが、奈良県寺川流域でも古墳と全く縁のない地域に埴輪がまとまって発見されている。それは埴輪には除魔の霊力があり、その力によって聖域を標め立てることが行われたものと理解される。沖の島21号遺跡や天理市布留の祭祀遺跡は何れも5世紀前半代の遺跡で、沖の島19号遺跡に続く年代のものである。

最も代表的な祭祀遺跡として沖の島、石上神宮及びその周辺の関連遺跡を挙げたが、この祭祀遺跡の中で滑石製模造品が献供されるようになる5世紀前半代頃から、全国各地に同類の遺跡が急激に増加する。

私はこの段階で原神道の世界は終わりを告げて神道第I期の発展期に入ったものと理解している。

しかし、それを理解するためにはこの滑石製模造品について知っておかなければならない。4世紀末頃から以後の古墳に滑石で盒子や坩形土器など比較的大型で精巧な模造品を作って副葬されることがあるようになる。初期の段階ではきわめてリアルに作りあげられ、おそらくは喪葬祭祀の折に、それ以前の石製品に替えて一族から献供されたものであろう。遠い南海産の貝類を原形として作り出されたマジカルな霊力をもつ石製品とは違って実在する身近な器財を模していることは、それだけ当時の人々の意識が、弥生以来の霊的世界観から脱皮しつつあることを物語るもので注目すべき重要な変化の一つであろう。そして5世紀前半代には模造品の種類は大凡そ刀子・鎌・斧などの農工具類と勾玉・臼玉の玉類とに限定されるようになる。大きさも小型化し、粗製となる。その代表的な幾つかの古墳についての事例を挙げてみよう。

奈良県北葛城郡広陵町巣山古墳　滑石製勾玉35個、刀子11個、斧頭1個

京都府久世郡城陽町久津川古墳　滑石製勾玉約5,000個、臼玉数十個、刀子40余個

大阪府堺市百舌赤畑町カトンボ山古墳　滑石製勾玉725個、臼玉約20,000個、刀子360個、斧頭6個、鎌13個、鎌形1個、有孔円板1個

茨城県大洗町鏡塚古墳　滑石製刀子10個、斧頭16個、鑿2個、鑿1個、鉇1個、鎌2個、鋤1個、紡錘車11個、

このうち巣山古墳、久津川古墳は5世紀初頭、鏡塚は1世代おくれた前半期に、カトンボ山はさらに1世代後の中期頃に造営された古墳であろうと考えられているものであるが、地域と時代を異にしながらも前言の如くその品目内容はほぼ一致していることが首肯される。さらに

滑石製模造品の激増する5世紀中頃のカトンボ山古墳出土例をみると、莫大な出土量の中で僅かに鏃形1個と有孔円板1個が異質的存在として目立っている。

次いで、前にふれた沖の島21号遺跡以降の祭祀遺跡や布留祭祀遺跡の如く、古墳と時代を一にして古墳とは全く関係のない祭祀の跡が発見され始めるのである。ここにも古墳の墓前祭祀に供献されたと同様の滑石製模造品が出土する。奈良県桜井市大神神社は三輪山を神体山（神奈備山）とする記紀所載の古社で、古来本殿をもたない。この三輪山の山麓には古墳時代に里人たちによって執り行われた祭りの跡が数カ所にあって磐座が存在する。その一つである「山の神祭祀遺跡」は大正7年（1918）に磐座を掘り起こしたところ、莫大な量の滑石製模造品類と儀鏡を始めとする金属製雛形品、土器・土製品類が発見された。余談ではあるが、当時開墾に当たった近郷の地主たちは数万点にのぼる模造品類を一升桝で量って分配したり、骨董屋に売り払ったりしたほどであったが、その後、それらの家に災いがあって磐座部分の開墾は遂に中止されたという。現在なお杉林の中に鎮座している。

このような話は祟り石の民俗譚として他にもよく聞くことで、畠や山林の中に大きな磐座の残る例や磐座神社として祀られているものもある。さて、そういう所から発見された模造品を採集している好事家が地方にはよくおられる。そうした各地の例証をみても不思議とその中には古墳から出土する刀子や鎌、斧頭の類は殆んどみない。たまたま在ったとしてもそれは多くの数の中の1,2点にすぎない。例えば福島県いわき市中塩遺跡では滑石製勾玉3個、臼玉1個、有孔円板58個、剣形品1個、紡錘車1個、模造鏡1個の他に刀子1個がみられる。前に掲げた布留遺跡にもタガネ様模造品1個が目立ったが、それはごく稀にみる状況なのである。

さて、ここで考えなければならぬことは、古墳から出土する滑石製模造品と、祭祀遺跡から検出される滑石製模造品は基本的に品目が異なるということである。そしてこの違いこそ死者の霊魂を慰め祭ることと、神としての霊を祀ることとの明確な違いを示す証しなのである。と共に沖の島21号遺跡や三輪町の山の神遺跡その他にみられる磐座が、神の降臨する座であるとすれば、そこには既に曖昧模糊とした霊魂（たま）ではなく、「何某の神」と威津の名を負った神の存在が当時の里人には明瞭に意識されていたことを意味するものと思われる。沖の島21号遺跡や布留遺跡、神奈川県相模原市勝坂の有鹿神社元社地遺跡など、何れも5世紀前半の土器その他の遺物を伴う最も古い祭祀遺跡の一つで、この時期こそ日本の神々の初期誕生期であったと考えられるのである。

その神力は磐座や神籬（ひもろぎ）に降臨して里人の祭りを受け、祭りが終わると、神が隠れ住む山という意味をもつ神奈備山や高天原に戻っていく。従って当初は神の常住する社殿は必要でなかったのである。滑石製模造品を出土する古墳時代の祭祀遺跡は何れも露天である。神は都合よく人々の要請によって出現したり、消え去ったりする。そして祭る者に幸を与える。この神出自在の個有の名をもつ神々への幣物（みてぐら）として、死者の霊を祭る際の供献の仮器とは明らかに区別する必要から滑石製模造品の品目内容が玉類を共通としながらも次の如く峻別されるに至ったも

のであろう。

墓前祭には玉類の他に副葬品にみられた刀子・斧頭・鎌などの農工具が、神祭にはかつて天的宗儀の根元的なシンボルであった鏡に加えて剣、玉がそれぞれの原形となったものであるが、このまぎれもない明確な事例の存在こそ神の実在を物語るものであろう。

まとめ

以上の考古学的事象の分析から日本の神々の初期出現期を5世紀前半頃と推定した。そしてこうした事例は個有の名のもとに大人佩(うしはく)領域・徳分を定めて顕現した神々が、神威発揚の第1の段階に入ったものと考え、以後神社祭祀の初頭期とみられる6世紀後半頃までを「神道Ⅰ期」として把握すべきものと考える。

この間は神々の初期顕現期であり、記紀には三輪の大物主神や大和の大国魂神などの出現の説話を始め、諸神を祀る記事が相次ぐ、石上神宮（垂仁紀）、宗像三神（神代巻）も当然この創生期の神の一柱であろう。そして注目しなければならぬことは、これらの神々は全て大王とのかかわりの上で現われるのを原則としていることである。とは云え但馬国の神や出雲の神は大王とは関係なく既に出石氏や出雲氏によってそれぞれ奉斎されていたようである。地方の有力氏族の中には独自に祖霊を祀ることが行われ始めていたとみてよいであろう。しかしそうした神々に対しては大王家はかなり強い姿勢をもって「神宝」の提出を命じている。これに応ずるか否かは各氏族の自主選択によるものであるが、出石氏の場合は七種の神宝のうち「出石の小刀」の提出を拒んで命乞いをする羽目に陥り、出雲氏の場合は応じた弟を殺した兄は誅戮されるなど、それぞれ大王権に屈服している。大王は各氏の祀る神宝を収奪することによって、あるいはまた新たに神懸りや霊夢などによって顕現する神々を認知し、その全ての神々を中央で祭り、統御することが重要な政治(まつりごと)であったのである。つまり大王は全国の神の司祭権を握ることで連合政権を基軸としていながら、なおその上に君臨し得たのである。そしてこの神々との交渉の都度大いなる呪性を発揮し大王政権を支えた人こそ、かつての巫女王の系譜に連なる巫女斎王であったのである。神々は大王とその一族の中から選ばれた巫女斎王の祭りを受けては大王の欲する託宣を下し、統治権を神の名によって擁護する。神道と大王権は表裏一体をなすものであったと理解されるのである。

註

(1)「巫女王の系譜」『基礎科学論集4　神奈川歯科大学教養課程紀要』 1986 参照

(2) 大嘗祭については『国史辞典』（吉川弘文館）によると次のように解説している

（一部抜粋）

だいじょうさい　大嘗祭　天皇が即位したのち、最初に挙行する大規模な新嘗（にいなめ）祭のこと。

「おおにえのまつり」、また単に大嘗（おおにえ）ともいい、即位の儀とともに即位儀礼を構成する。近世以前には大嘗会（だいじょうえ）ともよばれたが、これは節会（せちえ）に重きをおいた呼称である。律令時代における毎年秋の新嘗祭との相違は、新嘗祭が11月下（しも、または中）の卯・辰の日の2日間の行事で、常設の神嘉殿（しんかでん）を祭場とするのに対し、大嘗祭は卯の日から午の日まで4日間の行事であり、大嘗宮を臨時に造営して祭場とする。また、神饌用の米・粟は新嘗祭が宮内省官田から収穫したものをあてるのに対して、大嘗祭では悠紀（ゆき）・主基（すき）の斎田から収穫したものをあてることも相違点である。神祇令（じんぎりょう）には「凡大嘗者、毎世一年、国司行レ事、以外毎年所司行レ事」と規定されているように、大嘗祭は悠紀・主基の国司が中心になって準備を進めるのに対し、新嘗祭は宮内省など中央官司が準備にあたった。

ま と め

小出義治

千代南原遺跡第Ⅶ地点の調査では、これまでに記した如く、C地点に最も集中した遺物の発見が見られた。それらの遺物は包含層の上面を覆って検出された火山灰の推定年代と出土土器の年代観から推して8世紀初頭期から中頃までに最も集中していると考えられた。おそらくその時期千代台地からの廃棄物の投棄場所であったものと推測される。特にC地区の西側部分にはたまたま生じた断層面に湧水が伴い多くの板材や木製品、種子類が良く保存される自然条件となったが、その中に2点の木簡が検出されたのである。この他多量の鉄滓と羽口なども出土し、この台地の縁りには造寺時に釘、鎹を作ったと思われる工房址のあったことも知られた。

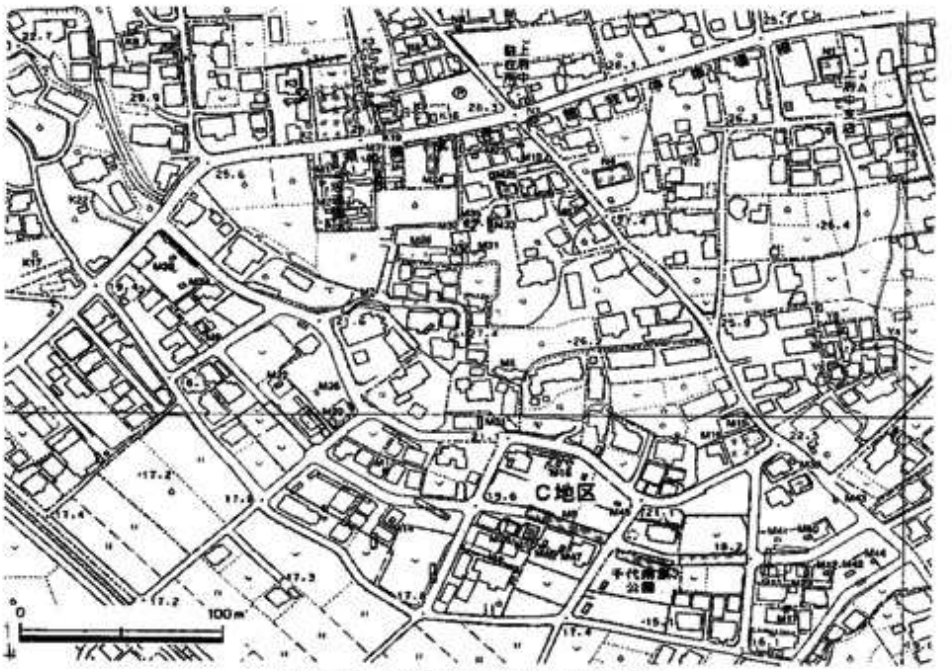
なお、最も多い木製品には大足、えぶり、田舟、鋤などの農器具、曲物や刳物などの厨房用品や紡織機具、下駄などと共に刀子形、鍬形などの形代と斎串、ささら棒、琴柱などの祭祀関係用具と考えられるものの出土は、古瓦片の混在する状況と併せて台地上に存在した遺構群の性格とも関わっているものと思われる。

この千代台地上の遺跡については1920年代から識者の間に知られるようになり、古瓦の採集踏査が繰返えされて礎石の残存することも明らかになってきたが、発掘調査は戦後の昭和33年（1958）までに行われたことはなかった。こうした千代廃寺の研究史については岡本孝之「千代寺院跡の研究史的復元」（神奈川考古第34号・1998）に詳しいが、その第2表によると、この廃寺の伽藍については大安寺式、東大寺式、法隆寺式など、多くの人によって多様な想定が行われ、またそれに伴って初期国分寺、郡寺、私寺との様々な性格付けがされてきたようであるが、寺の廃棄後は早く耕地化が進んだものと思われ、長い歳月の間に殆んどの礎石は動かされ、炎上した伽藍の跡はもとより寺域の推定すらできないほどに徹底した畑地化が行われてきたようである。

昭和44年（1969）東名高速道路の開設によって発見された松田町からさわ窯址の一部を赤星直忠、三上次男の両氏が発掘調査し、更らに昭和60～61年（1985～1986）に青山学院大学によって全窯址3基を完掘し、此の瓦窯は8世紀初頭期に8kmほど離れた千代廃寺に供給するために設けられたものであることが明らかとなり、大安寺や東大寺式伽藍との想定は消え去ったが、さりとて法隆寺式と決まったわけではない。

しかし、こうした戦後の発掘調査が寺域の内外でも行われるようになり、千代廃寺に関連する貴重な遺物の発見も見られるに至った。特にこれ迄に千代廃寺の究明に力を注がれた一人である赤星直忠氏調査によるものは、赤星メモとして貴重な記録がコレクションと共に現在県埋文センターに保管されており、幸いにして拝見する機会を得ることができた。

その主要な遺物に①螺髪と考えられる「土塔形土製品」14個体、②佛像の装飾品と思われ



第1図　千代遺跡調査地点位置図

表1　千代寺院跡伽藍推定と調査略史
（岡本　1998「千代寺院跡の研究史的復元」第1・2表引用）

	時期	伽藍配置	寺名	下部構造等の特徴
百済		中門跡		
中山寺	奈良前期	中門跡		
高句麗	飛鳥前期	中門跡		
弘福寺	奈良時代（天平期）	東大寺式	講中寺	
川原寺	奈良前期（創建中金堂期） （創建中金堂と再建）	法隆寺式	西寺	
新羅				
百済	奈良時代	東大寺式・大安寺式	伽藍法中（可能性）	
石神	奈良時代	四天寺式	伽藍跡寺	
大下	奈良時代	四天寺式	伽藍跡寺	（伽藍跡寺跡遺）
向原	奈良時代	四天寺式	伽藍跡寺	（伽藍跡寺跡遺）
新城	天平8年（736）～	四天・中式	伽藍跡寺	
春日	奈良～平安	四天・中式	伽藍跡寺跡あり	
観音	8世紀後半（奈良時代中期～後半前半期）			
中尊	奈良～平安	四天・中式・大安寺式遺あり	伽藍跡寺	
千代	7世紀前半～8世紀前半	四天寺式・大安寺式遺あり	伽藍跡寺	
千代	8世紀後半～9世紀前半（奈良時代後半～平安時代）	四天寺式（変形）		
千代	7世紀後半～8世紀前半		講中	講堂
千代	7世紀後半～8世紀前半			
千代	7世紀後半～8世紀前期	東大寺式・大安寺式遺あり	伽藍跡寺跡あり	（伽藍跡寺跡遺）

1958（昭和33）5月20日　寺域等、確認下、千代1次～1　講堂等確にて甲入及埋土（No.1）（百学 1959・1962）
1970（昭和45）3月　石造物調査、学園金剛寺人会主催中村学会
1959（昭和34）夏　神奈川県、調査（昭和：1972・1985、寺地確保調）
1960（昭和35）6月　石野瑞、寺跡調査（昭和 1962）
1962（昭和37）　石野、調査（百学 1965・1963・1965、調査 1965へ石室確認）
1963（昭和38）7月　石野、調査（百学 1965）
1973（昭和48）春　石野一郎、調査学（1973）
　5月26日　調査概報、昭和で千代調査（城郭の石調査先）との学術度を含めて6（調査 1963）
　12月17日　調査、千代へ（新聞メール）
このころ　調査研究会、開催（昭和 1973）
1976（昭和51）5月20日　財団法人、千代4次で学術先行調査、会の研究者と学る（報告 1982（百学 1977・1982p1982）
　6月12日　会の調査報告を受ける、確認4を発表の先生学校（No.0・10）、県内学術ネット（石野 1982）
　8月15日　石野一郎、調査概報（報告 1976へ石室調査、百学 1965・1977・1982）
　8月　県内、県立埋蔵調査に2名の学芸員入学（調査ノート5名(調査No.1)）
　このころ　石野一郎、中学で調査学生参加（1月 1982）
1977（昭和52）2月15日　日立大学にて「古墳時代研究会共同調査会」発足確認、学内員2（非工大学学生参加 1978、静岡 1979）
1978（昭和53）5月20日　調査概況、千代4次で学術先行調査、会の研究者と学る（報告 1982（百学 1977・1982p1982）
1979（昭和54）7月12日　県立図書館にて千代調査（調査 1982、静岡 1982）、調査報告（No.20）、石室確認1を4（百学 1979）
　12月22日　調査学院都市計画（報告 1982）
このころ（昭和57・58）　調査中、調査思想の確認へく（百学 1982）p722
1983（昭和58）2月28日　調査概要、会員（市民中、調査学生5、千代調査 1次発見1982・調査ノート千代1次No.4）
　3月14日　参加者募集、場合調査会、1次一般、県内の関係4千代調査（参加 1982）、報告 1983（1984）
　12月1日　「海外研究員会議」「県立博物館」（一社 1983）
　〃　調査下、発掘調査（報告 1983）（百 1982）
　〃　調査概況、現地説明（報告 1983）（百 1982）
1985（昭和60）　県内学術へ立案人、調査調査報告（石室 1985、百学 1977）
1986（昭和61）2月　千代1次にて調査主任、土岐雅、調査員、甲斐美和主任（No.2）（石室 1986）
　5月　千代1次にて小森紘次、小野美代枝、県立民俗館（No.1）（石室 1986）
1988（昭和63）5月20日　石野、海部陽介、千代（No.1、3、5、6）、県内学術調査（石室 1987）
　10月30日　千代3次にて小森紘人調査、中澤雅中、県立人（No.4）、発掘調査（石室 1988）
　～29年　県立埋蔵センター、小森紘調査（石室 1990）
1992（平成4）5月20日　千代1次学術会より千代入（No.10）埋土（石室 1992）
　6月下旬　千代1次にて千代入（No.11）発土（石室 1992）
　7月20日　千代1次にて千代入埋土土（No.14～16）（石室 1992）
　8月　千代1次にて千代入埋土（No.17～20）（石室 1992）
　9月5日　千代1次にて発見（No.21）調中（石室 1992）、報告 1993）
　15日　千代1次にて発掘調査開始（石室 1992）
　16日　千代1次北部にて千代入（No.23）調中、1次北部にて（No.22）八王（石室 1992）
　25　千代1次にて立面実測図、千代入（No.25）調査（埋土含む一発発掘）と調査区発見（石室 1992）
　9月4日　千代1次からの土中より生土発（No.27）を発口子会発掘（石室 1992）
　発掘調査入り調査（石室 1992）
　7日　千代1次にて発掘学会、参加者（No.28）調査（石室 1992）、報告 1993）発掘調査と参加者
　13日　千代1次北部と周辺にて発掘（No.31）発土（石室 1992）
　26日　千代1次北部調査（参加11名＋千代1次にて千代入（No.32）発土（石室 1992）
　27日　千代1次発掘3日、最終（1月3日）にて千代入（No.33）、34）にて千代入（No.35）（石室 1992）
　28日　千代1次にて立面学会、参加者（No.36）調査、埋土（No.37）（石室 1992）
　4月27日　千代1次北部地下より、千代入（No.38）発土、埋土No.39（1月3日）にて千代入（No.40）
　千代1次北部にて千代入（No.41）発土、立面学会、参加者（No.42）調査（埋土含む一発発掘）
　（No.43）発土（石室 1993）
　29日　千代1次にて調査11名（小川調査、参加者調査7名（No.44～47）（石室 1992）
　4月　8月4日発土（No.48～49）、調査概報7部と（石室 1993）
　5月4日　千代1次にて北東部にて千代入（No.50）発土（石室 1993）
　10月　千代1次にて（一時停止）、1993第二期、発掘調査、立面学会参加者（No.51）調査（石室 1994）
1993（平成5）5月10日　千代1次の下の学会、発掘調査（石室 1993）
　5月20日　調査文化財（石室 1993）調査報告（石室 1993）
　8月10日　石野、発掘調査者、参加者調査と千代の調査（石室 1993）
　20日　石野、千代へ（石室 1993）

第２図　千代寺院跡出土 1957・1958 年度調査出土品

る「蓮華文土製品」2 個体、③連続珠文のある「土製品断欠」、④瓦塔基壇の断片と推定される「框のある三面を有する土製品断片」、⑤塼仏の完形品 1 体などがある。

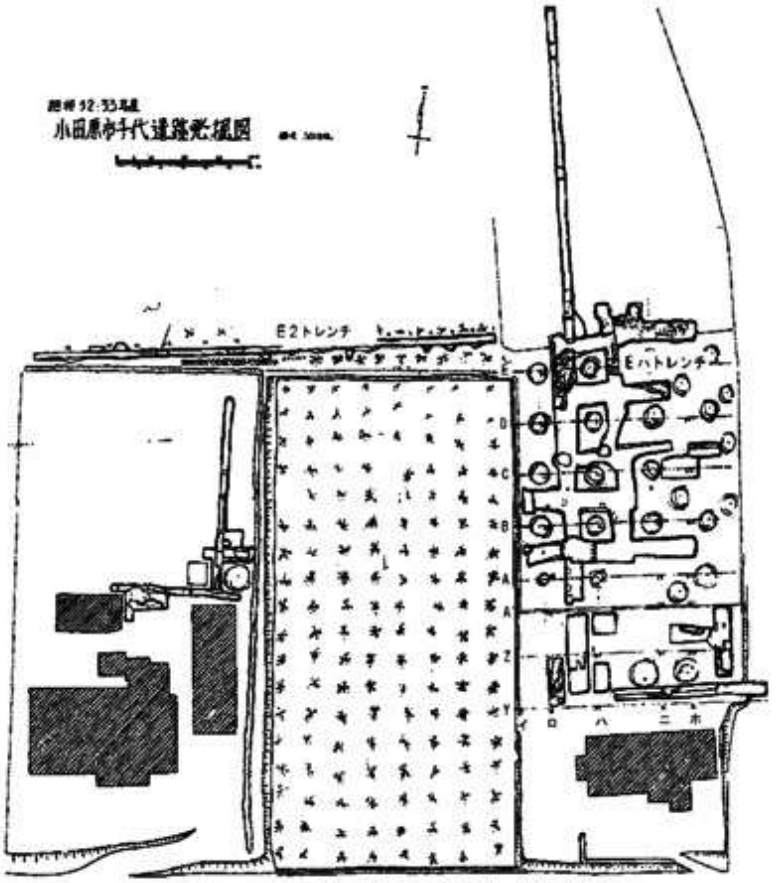
このうち①～④には「瓦片、焼灰、土器片などとともに Eハトレンチ内の遺物包含層から検出された」ものと記されており、別に 1960 年度（昭和 35 年）千代台遺跡発掘略図として忠魂碑の建っている土壇状の略図が付いていて、トレンチの位置とトレンチ断面図などが記入されているが、トレンチの名称が記されていないので残念ながら遺物の出土位置が不明である。しかしこれらは何れも千代廃寺の内容、性格を知る上に重要であるので要点を転写させて頂くこととしよう。①螺髪はいずれも E_2 トレンチ 15 区付近で出土したと云う。多くは右巻四層螺塔

形で10個、三層2個。左巻は2個体で三層、四層各1となっている。大きさは底部の径1.5cmから2.25cmで高さは1.9cmから2.9cm螺旋状に巻きあげられている。底の中央に小穴のあるものが多い。これらは上方と側面から強い熱を受けて灰色乃至暗いスレート色に変色し、内部が溶けて多孔質になったものが少なくない。

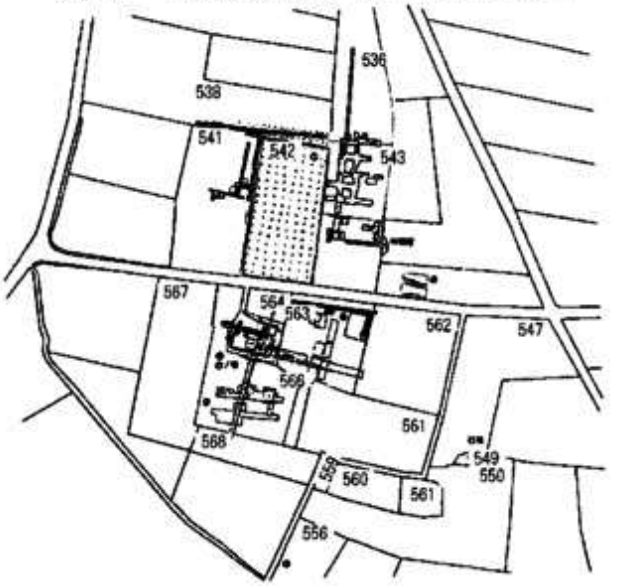
②の「蓮華文土製品」はいずれもE2トレンチ15区灰炭層中の出土品で、1個は径4.2cm、厚さ1.3cmの不整円形を呈し、やや低い半球形の子房のまわりに円座状に表現された雄芯をめぐらし、その外側に10枚の単弁を配している。花弁は周囲を高く表現され、裏面は平らで中央に径2mmの小孔がある。他の1個は径6cm、厚さ2.5cm、径3mmの窪みを中心にかまぼこ状の太い隆起線による二重圏を作る。おそらく内側は子房と蓮子を表現し、外圏は雄芯の抽象化とみられる。この外側には12の単弁が配され、花弁の表現は前者と同様で、仏像の胸飾で脇侍の付属品であろうと推定されている。③もE2トレンチ15区灰炭層中出土、長さ6cm、幅3cm大の土製品の小片で、厚さ1.3cmのやや湾曲する突面上に径1.4～2.0cm大、高さ4mm程の3個の珠文が縦に配されている。この小片で特に注意されることは、第一珠文の脇に2個所(1.5×2mm・1×1mm)に微小ながら金箔の残存が確認されたことである。④はEハトレンチの瓦層中の出土で、胎土に砂を多く含み、小石粒も混在する瓦質の製品で、仏像の一部と考えられる①～③の土製品の精選された胎土とは異なる。また、強く火を受けてもろくなっている。瓦塔の基壇部分と推定しているが、岡本孝之氏の調査年表「第1表」によれば昭和25年(1950)11月20日に「千代567にて小泉延太郎、牛蒡掘中、軒丸瓦、瓦塔採集(石野1953)」とある。この瓦塔片と赤星氏Eハトレンチ出土の瓦塔基壇片との位置関係が不明であるのが残念だが、赤星メモの最後に記した考察の項に「瓦塔断欠が別地点から出土している」と書かれているものに該当するのであろうか。

この1960年度の発掘調査では以上のようにEハ、E2トレンチから多くの重要な遺物片が焼けただれ、細片化して発見されているが、赤星氏も「これらの土製品が塑像断欠であることを認める」としており、また「Eハトレンチ、E2トレンチなどに於いて部分的に小溝が掘られて焼灰や瓦片が埋められていることがわかる」とあって、両トレンチは前述の付図にある忠魂碑の周辺に記入されたトレンチのどれかであることに違いなさそうである。そこで、今迄に千代廃寺の伽藍を考える人の多くは、この忠魂碑のある土壇状の高まり部分を堂塔址として配置基準の一つにしているが、赤星メモの付図にみる限りでは、トレンチ断面に記された版築状態は非常にラフであって堂塔基壇の版築としては十分なものとは云い難い。加えて表土層下に中世五輪塔群、人骨、土壙のようなものが多く発見されているようで、元来は寺の炎上廃絶後集められた瓦片焼土廃材の山の上に時を経て中世に塚が築かれたものではないかとの疑いも生ずる。また此の場所にのみ堂塔基壇が完存し、他に基壇の片鱗だに見当たらぬということも不可思議な現象である。

最後に⑤とした塼仏がある。出土の地点も状況も一切不明のものである。長さ4.1cm、幅2.75

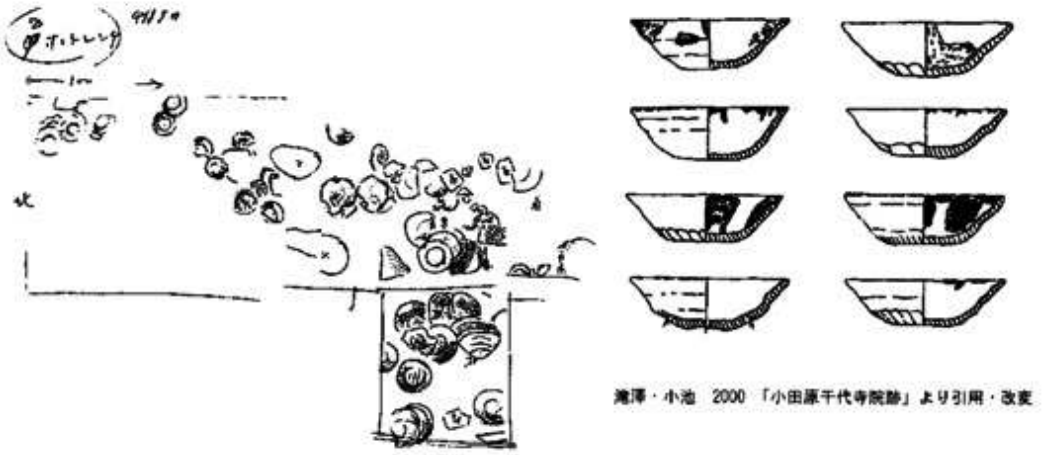


第３図　千代寺院跡 1957・1958 年度調査範囲



岡本　1999 「千代寺院跡の復元と木簡の出土位置」より引用・改変

第４図　千代公図と調査位置図



滝澤・小池　2000「小田原千代寺院跡」より引用・改変

岡本　1999「千代寺院跡の復元と木簡の出土位置」より引用・改変

第5図　Zホトレンチ遺物出土状況推定復元図と出土土器

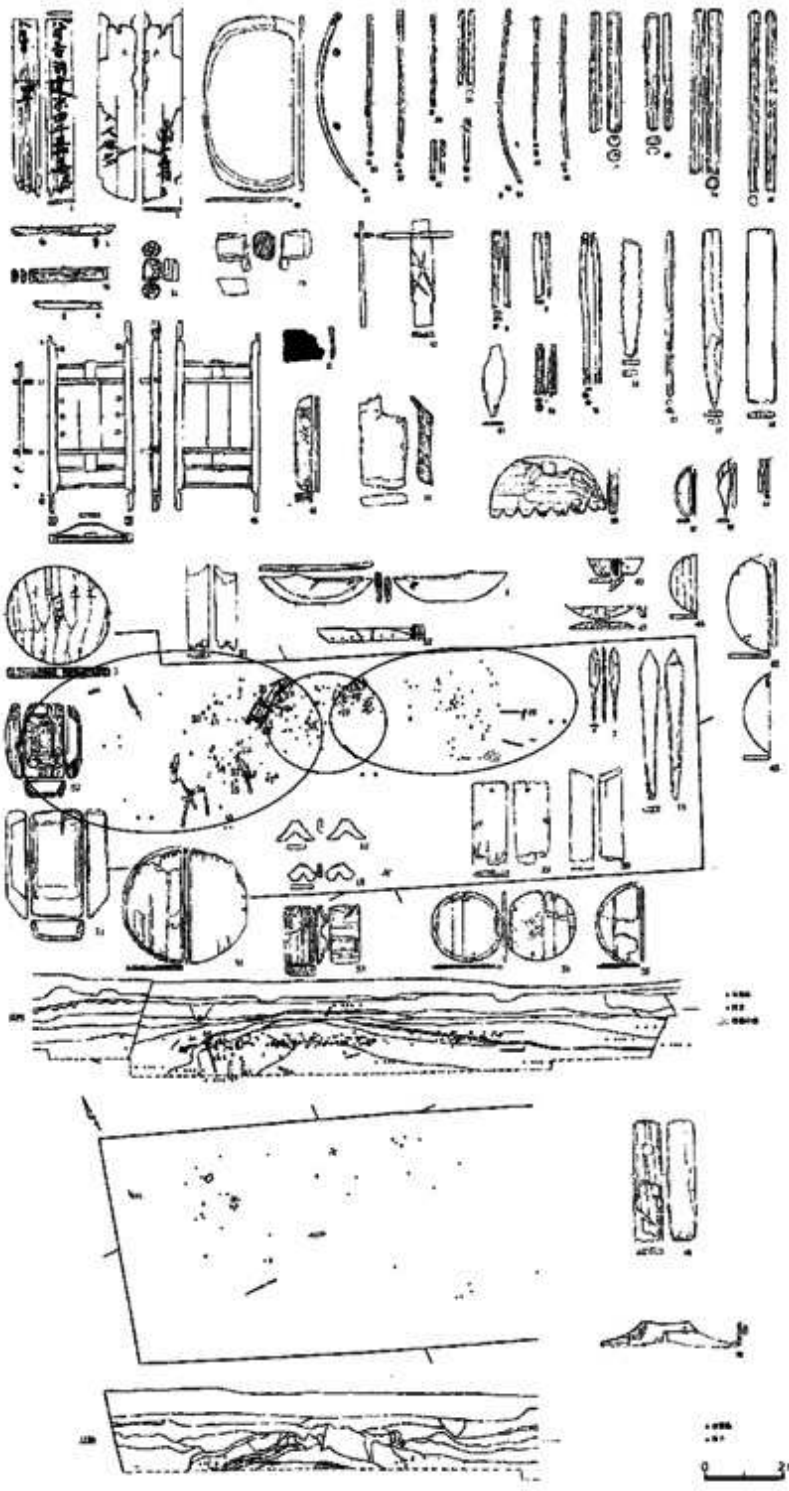
cm、厚さ1.05cmの長方形小型の型押し仏で、蓮座の上に安坐している。千体仏の一体と思われるがそれにしても発見数が余りにも少ない、瓦塔中に安置されていた可能性もあろう。

このように寺院の枢要な部分を構成する諸仏や構造物が近接した位置に在ったと云う事実は留意しておく必要があろう。

いま一つ、赤星メモの断片的な走り書きに「焼瓦と伴出の土器は、平安初期の灯明皿で、その数は多い」「竪穴内多数伏せ重ねられたものも同形、同用途品、竪穴様式の伏屋＝雑舎、物置」などの文字がみえる。幸いこの1960年の調査に参加していた小川裕久氏から教示頂いたこの出土土師器は、底部外面の中央に凹んだ指頭痕をもつ9世紀末から10世紀初頭期の相模型坏で、油煙付着の顕著なものが目立ったと云う。赤星氏が平安初期とみたことは、当時の編年観で訂正を要するが、この寺の存立最終末の時を示す遺物と考えられる。

さて、以上のように千代廃寺については、8世紀の初頭期前後に創建され、おそらくは9世紀末前後の時期に火災により壊滅したものであろう。赤星メモは「火災にあった際、燃えさかる火に近い方向にあったもの（螺髪）が・・・熔けたものであり、・・・これら熔けた部分をみると表面が熔けて堅く変質し、その内部は多孔質になって沸々と泡立ったことを物語っており、如何に強い火の中に（ご本尊が）立ちつくしていたかが想像される。恐らく天井が焼け落ちると共にその像は微塵にくだけ散ったに違いない」と千代寺最後の情景を描いて結んでいる。

少し脇道に外れたが話しを千代南原遺跡第Ⅶ地点C地区に戻して此の千代廃寺と関わりを考えると、出土した遺物の中に祭祀関係の遺物が目につく、ササラ棒、形代（刀子形、鍬形）、斎串、琴柱といった木製品である。この様な祭具を用いた祭祀は中央祭祀の儀礼であって地方民衆の日常の祭りとは異なるものであったと考える。また、寺域の中で時にこうした祭礼行事が矛盾なく執り行われる体質が、のちの神仏習合への道を開いたものと思われるが、それはさておき、



第６図　千代南原遺跡第Ⅶ地点Ｃ地区の木製品出土状況

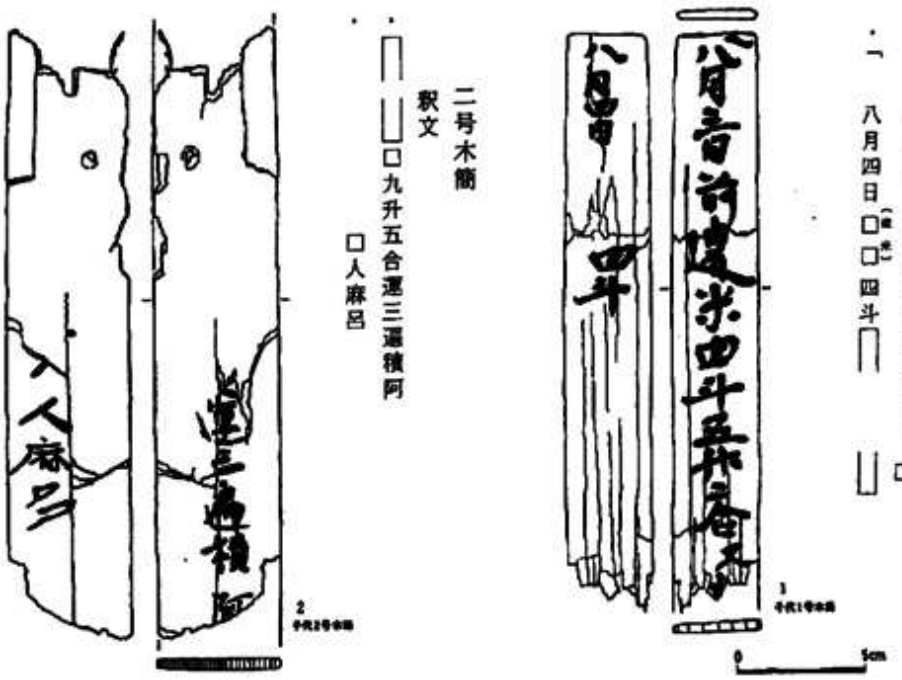
その時々に応じて行われた中央の祭祀儀礼が此の近くでいま一ヶ所執行された場所のあることが確認されている。この地点から北に約800m、下曽我遺跡と呼ばれる遺跡である。昭和35～36年（1960～1961）に発掘調査が行われ（樋口清之、赤星直忠）、1号～3号井戸とその自然湧水の流路を中心に調査が進められ、多くの木製品や種子、木簡、付け札、緑釉陶器片などと共に祭祀遺物を発見している。ついぞ建物群等は調査されなかったが、出土遺物の検討から相模國足下郡の郡衙に所属した井戸であろうと考えられている。その出土遺物は國學院大學と、赤星コレクションの中に保管されているが、この両者の中にはササラ棒、斎串、儀礼用丸木弓、馬形木製品などが見られる。おそらく湧水井からの細流に祭りの後に払い流されたもので、同じく神祇官や陰陽寮流の祭祀が執り行われたものであろう。

また、下曽我遺跡からも前述の如く多くの木簡や付け札が発見されている。その中に墨痕の見られるものも若干存在するが残念ながら読めるものはない。しかしそれよりも全く未記入の付け札、差し札の類が異様に多く目立っている。どう見ても必要を見越しての予備品としか思えぬものである。所管下の郷里からの税物を受付け、整理する際の書き替え用のものであったろうか。

さて、木簡の話しはさておき、上述のように足下郡（評）衙と推定される下曽我遺跡と、この千代南原遺跡第Ⅶ地点C地区からは同類の祭祀用木器が出土している。つまり、千代廃寺の盛時にあっては官（郡衙）と同様四時折々の祭礼行事が執り行われていたことを物語り、それは此の寺が官寺（郡寺）的性格が強かったことを証言するものではないだろうか。

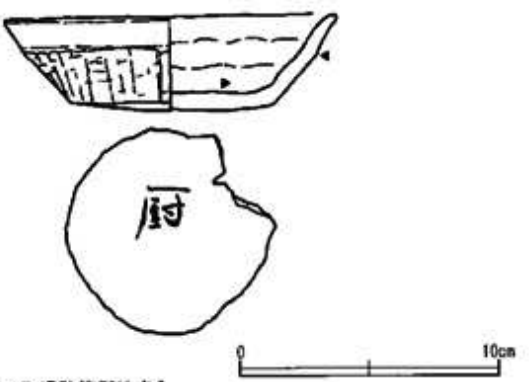
また、この時期天武朝頃から中央で一段と高まった薬師信仰が、現世利益の潮流にのって東国に波及し、寺院の建立が目立つようになった。

しかし寺と云っても村落内寺院と称される小草堂一棟のものから方一町以上の寺域に七堂伽藍完備の寺院までその内容には千差があり、完備した寺院を建立するための資財は莫大なものを必要としたと思われる。相模国を含めて国分寺の建立は各国司の監督のもとで勅令をもって推し進められたにもかかわらず、最も早く完成したと思われる伊予、尾張、上野の三ヵ国でも8年を要し、武蔵国を始めとする多くの国は倍の16ヶ年を費やしたと推定されている。国司の怠慢もあるかも知れぬが造寺事業は財貨と多くの時間のかかるものであったと思われる。しかも武蔵国分寺の場合、七重塔は後年承和2年（835）落雷のため焼失してしまい、10年後の承和12年（845）に男衾郡前大領壬生吉志福正が塔の再建を願い出ているが、この男はその4年前に2人の子供の生涯の調庸をまとめて納めたという内福者である。それにしても焼失以来10年の間、管理責任者の国守と雖もたやすく手がつけられなかったのである。また、その創建期に堂塔を葺いた瓦に郡、郷および人名を押印、箆書きしたものの多いことで知られているが、夫等は各郡の経費分担と郷および富有層の勧進合力によって完成したことを物語るものと考えられている。以上の如き状況からみて福正の場合も、一段と基礎を大きくとった塔の再建は独力でなし得たのではなく、少なくとも一族縁者の協力があってのことであったと考えられ



千代木簡は2008年に神奈川県立博物館が実施したレプリカ製作時に報告書作成時には確認できなかった文字が確認され実測図・釈文が訂正（小池　2013）されたが、報告当時のまま掲載する。

第７図　千代１・２号木簡



小田原市教育委員会　1999『千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点』

第８図　「厨」墨書土器

る。振り返って相模国足下郡（評）の場合、若し福正の如き仏に帰依した分限者が居たとしても、独力で千代の伽藍を完備させ、運営することは至難であったと思われる。こうした地方に散見する七堂を完備した伽藍の存在は、大領級富有層の唱導勧進による郡立の寺として完成したものが多かったのではないだろうか。千代廃寺の場合、当然寺務給与を扱う厨があり、「厨」の墨書土器が検出されているが、米の出納を記した１号木簡や僧侶の精進研鑽を記録した２号木簡も共に郡司の管理下にある厨の寺務に属するもので、２号木簡裏面の□人麻呂は郡衙から

寺の厨に出向の下級の事務官ではなかったか、と密かに想像を逞しくしている。この人名の肩書きが不明であるのが惜しまれてならない。

再録にあたって

小出義治先生と土師器研究

駒宮　史朗

先生は、「土師器といえば小出」と言われるほど戦後の土師器研究をリードして来た研究者であった。さらに土師器研究を通して古代祭祀論、及び広く宗教考古学の領域にまで研究を深め、考古学と古典史料の研究成果を援用し、それらを手がかりに古代国家の成立及び古代の社会構造探求に道を開いた古代土器研究のパイオニアでもあった。

この3篇の論文は先生の長年にわたる研究の節目となる論文であり、土師器研究、神道考古学、宗教考古学研究を代表する学史的な論文と言えるであろう。

先生は幼少の頃より古典文学に関心をもたれ、昭和17年に國學院大學高等師範部入学。入学後に国史学研究室付属考古学資料室の存在を知り、それから考古学研究への道を歩まれることになったのである。風雲急を告げる昭和18年12月に学徒出陣。陸軍飛行少尉として埼玉県児玉飛行場で終戦をむかえ10月復学、21年國學院大學文学部史学科入学。入学後は國學院大學考古学会の母体となる國學院史学会考古学部会を創設し、会のリーダーとなって活躍した。同期には野口義麿がいた。

昭和24年卒業。卒業論文は「土師氏の考古学的一考察」でした。卒業後は28年まで考古学資料室助手として勤務、恩師大場磐雄教授の門下生として大場先生の研究を手伝いながら、各地の遺跡発掘調査に従事して、新潟県千種遺跡、長野県平出遺跡、伊東市内野町遺跡の発掘にかかわったことで、当時桜井清彦、玉口時雄らと共に研究を進めていた弥生式土器と、土師器(古墳時代の土器)の形式区分について、土師器生産の開始とその編年的位置づけを明らかにしようとした。

「土師雑考」は昭和34年に『國學院雑誌』第60巻11号に発表されたもので、青年考古学協議会のシンポジウムのテーマ「弥生土器と土師器の境界線」の討議をふまえてまとめられ、小型丸底土器の出現、全国的画一的統一性、古墳副葬品と土師器の組み合わせに言及し、当時の土師器研究の問題点が整理されているとともに、多くの課題が提議されており、さらなる土師器研究の出発点となった論考である。先生は「私にとって昭和30年代とは古式土師器について試行錯誤の時代であった」と語っている。

また小出先生は大場先生のお供で神社調査や、社史の編纂に携わっており、これらの調査で古社の宝物などを実見する機会に恵まれ、大場博士の学風を受け継ぎ神道考古学、祭祀考古学研究の分野にも功績を残されている。

先生は『魏志倭人伝』の記事から弥生時代後期から古墳時代初期の祭祀の性格を分析し、この時代を「巫女王の時代」と定義している。カリスマ的女王の霊力や呪力が持つ宗教的エネルギーが国家統一の原動力となったとされ、さらに思考を発展させ神道の淵源に焦点を当てたのが1988年『神奈川歯科大学基礎科学論集第6号』に発表された「神道と大和王権」である。

本論は2年前に同誌第4号に発表された論考「巫女王の系譜」の延長線上にあり、大和王権の誕生に精神的な支えとなった初現期の神道の実態を、沖ノ島祭祀遺跡などの祭祀遺物から検証した。儀礼構造の変革によって、「神」というものの出現を5世紀前半頃とし、この時期を「神道Ⅰ期」としている。

王権の大王は連合政権を基軸にしながらも各地氏族の神宝収奪や、全国の神の司祭権を掌握するという統治システムを確立させるのだが、これには神々との交渉に大いなる呪性を発揮して王権を支えた巫女斎王の存在が大きく、王権と神道は表裏一体をなすものと理解されている。神祭りが葬祭未分化の状態から、神々の誕生によって神社の発生と宗教的祭儀が再生されるのである。

最後の「まとめ」は『神奈川県小田原市南原第Ⅶ地点』2000年の報告書に掲載されたもので、本論を理解するためには遺跡の概要を説明する必要があろう。

この遺跡はＪＲ御殿場線の下曽我駅西南一帯に分布する千代遺跡の一部で、古く『新編相模国風土記』にも古瓦の散布地として記述され「千代廃寺」の存在が推定されていた。1958年以来数次にわたる確認調査が行われてきたが、特に下曽我遺跡からは木簡、豊富な木製品、緑釉陶器、墨書土器などが出土しており千代廃寺との関連が指摘されていた。

第Ⅶ地点の調査では、8世紀初頭～中頃の土器が集中しており、多くの木製品に混じり、刀子形・鍬形の形代、斎串、ささら棒、琴柱などの祭祀関係用具が出土しているのが注目された。このような祭具を用いるのは中央祭祀の儀礼であるという見解から、寺域内で中央祭祀同様な祭礼行事が矛盾無く執り行われる体質が、後の神仏習合へ向かったと推論し、さらに同じような共通の遺物が下曽我遺跡にも見られる事により神祇官や陰陽寮流の祭祀が執り行われたものと、積極的な見解を示している。すなわち千代廃寺の盛時には官（郡衙）と同様の祭祀が行われていたことになり、寺が官寺（郡寺）的性格を有していたことを物語るものであるとして、祭祀の形態や性格から千代廃寺の位置づけを行っている。

以上、本論は古代地方寺院における祭祀の一端から国司の派遣や、仏教の東国への普及とともに、中央祭祀の地方伝播の実態を証する一例と言える。

先生がお亡くなりになって早くも3年目を迎えようとしている。滝沢亮氏とともに相模大野の先生のご自宅に伺い、残された蔵書の整理を行っているが、書架には専門の考古学はもとより、古典文学、歴史書、哲学書、美術書など様々な分野の本が並んでいる。先生の奥深く幅広い学問の淵源にふれ、その学恩にいまさらながら感謝の念を禁じえない。

整理をしながらあんな本がある、こんな本があると、珍しい本が有るとついページをめくっ

てしまう。手垢がついて表紙も破れそうなほど繰り返し開いたのであろう『日本書紀』や『続日本紀』には、いたるところに付箋が貼られ朱やマーカーで線が引かれている。その注意箇所に対して、細かで端整な文字でご自分の疑問点やお考えを余白にびっしりと書き込まれ、間には広告の裏白を使ったメモ書きが挟み込まれている。その他にも学生時代から書き溜めた様々な原稿の下書きや、書簡類もダンボール箱にきちんと詰められて全て残されており、戦後の貴重な考古学史が編纂できそうである。先生の几帳面なお人柄が偲ばれ、そのお姿が今でも目に浮かんできます。最後に改めて先生のご冥福をお祈りするしだいです。

横浜市中央部における古墳の展開について

－帷子川流域における古墳を中心に－

滝澤　亮・浅賀貴広

1．はじめに
2．星川桜ヶ丘遺跡の概要
3．方形周溝墓から古墳の展開
4．まとめ

1．はじめに

筆者らは小出先生が亡くなられた直後の 2012（平成 24）年 7 月から 12 月にかけて横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘において星川桜ヶ丘遺跡の発掘調査を行い、弥生時代後期の方形周溝墓を調査し、それに続く古墳時代前期の古墳は検出されなかったが、古墳時代中期の円墳の周溝を調査した。

本遺跡は 2012 年 2 月から筆者らで試掘調査を行い、相応の成果が期待されていたため、本格調査中にぜひ小出先生にご来跡いただこうと考え、先生にお話もしていたが、調査直前に亡くなられためかなわなかった。

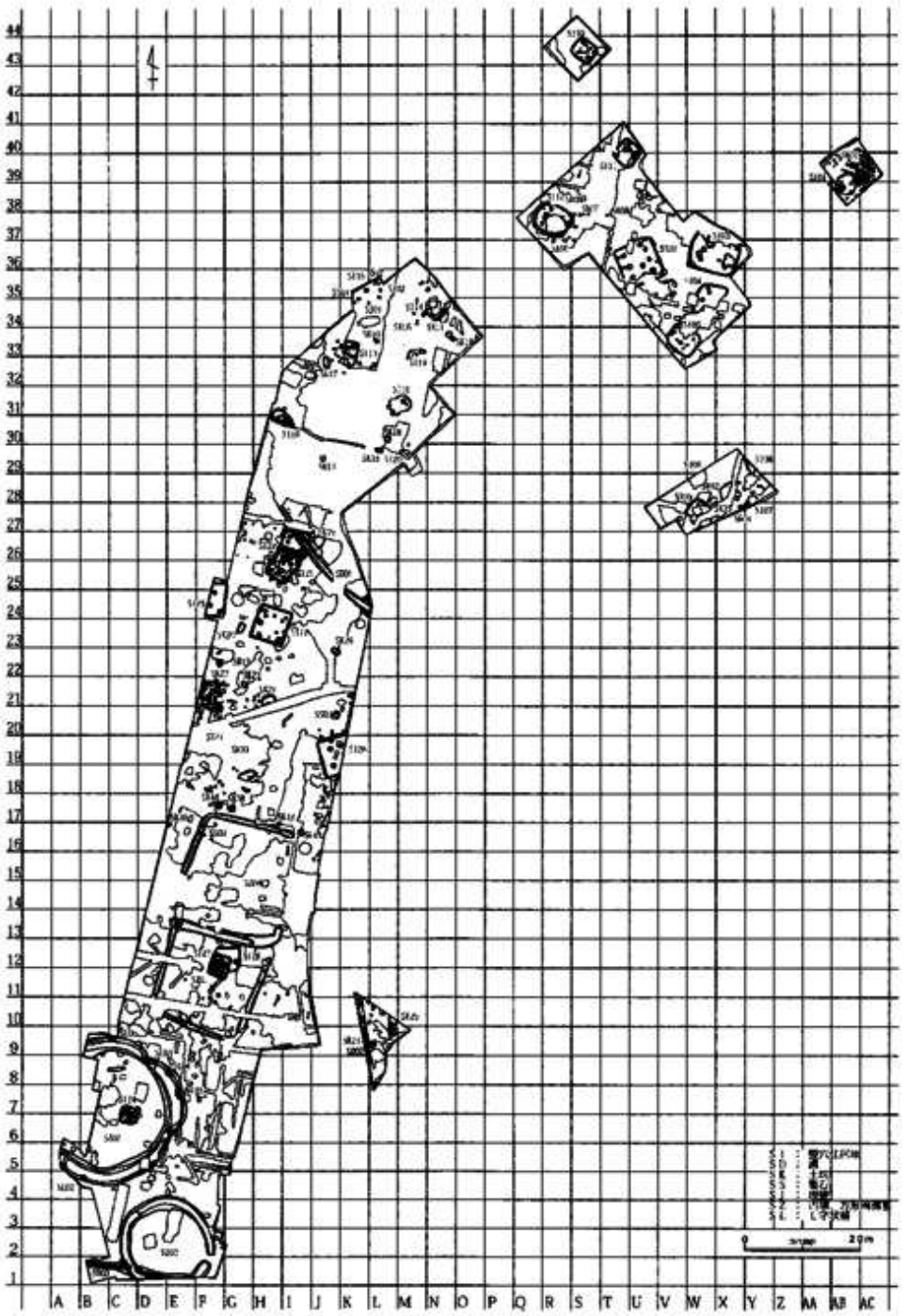
筆者の一人である滝澤は長年小出先生の元で古墳時代の土器について学んできたので、上記の経緯もあり土器を中心に考えた帷子川流域の古墳をまとめ、また広く横浜市中部地域の古墳時代直前の方形周溝墓と古墳時代の古墳についてまとめ、先生の御霊前にささげたいと思う。

2．星川桜ヶ丘遺跡の概要

本遺跡は横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘二丁目に所在する。本遺跡は歴史は浅いが大正時代に地元の名士である岡野欣之助により桜が植えられ、通称となり、現在の町名でもある桜ヶ丘に、古代の遺構は検出していないが平安時代の『倭名類聚抄』に記載のある武蔵国久良郡星川郷に所在していることから星川桜ヶ丘遺跡と命名した。

本遺跡は多摩丘陵の最南東端に立地し、丘陵の北に帷子川、南に今井川がそれぞれ東流している。本遺跡はこの台地から派生する南から北へ延びる舌状の台地上に立地する。西でつながっているが、仏向貝塚・仏向町遺跡・仏向遺跡の所在する台地と明神台遺跡・明神台北遺跡の所在する台地とは上谷戸、下谷戸と呼称される谷により分断されているが、各遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期において集落、墓域が調査されており密接な関係があったと考えられる。

本遺跡は神奈川県立栄養短期大学（栄養短大）の跡地にあたり、マンション建設の事前調査



第1図 星川桜ヶ丘遺跡全体図

として調査を行った。前述したが2012年2月から3月にかけて試掘調査を行い、同年7月から12月まで本格調査を行った。調査面積は試掘調査で約1135.30㎡、本格調査で約5721.15㎡を調査した。本遺跡は最近確認された遺跡で、2006（平成16）年に栄養短大が4年制の県立保健福祉大学となり校地が横須賀市へ移転し、その跡地を2007（平成19）年に神奈川県教育委員会により約82㎡の試掘調査が行われ、遺跡の存在が確認され、保土ヶ谷区Ｎｏ.89遺跡[註1]として遺跡台帳に登録され周知化された。

本調査では、建築計画から地下の埋蔵文化財に影響のない部分および試掘調査により遺構の残存が望めない分は調査していないため、5区に分断されており、Ａ～Ｆ区と呼称している。検出遺構は縄文時代前期の竪穴住居址、後期の敷石住居址、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居址、方形周溝墓、古墳時代中期から後期の竪穴住居址、円の他に縄文時代の陥穴、集石土坑などを調査した。（第1図）

本論の主題に関係するのは、古墳時代中期から後期の円墳の周溝である。同時期の古墳時代中期、後期の竪穴住居址も存在しており[註2]、古墳と竪穴住居址の関係も気になるが整理作業途中であるためここでは触れない。

Ａ，方形周溝墓（第2図）

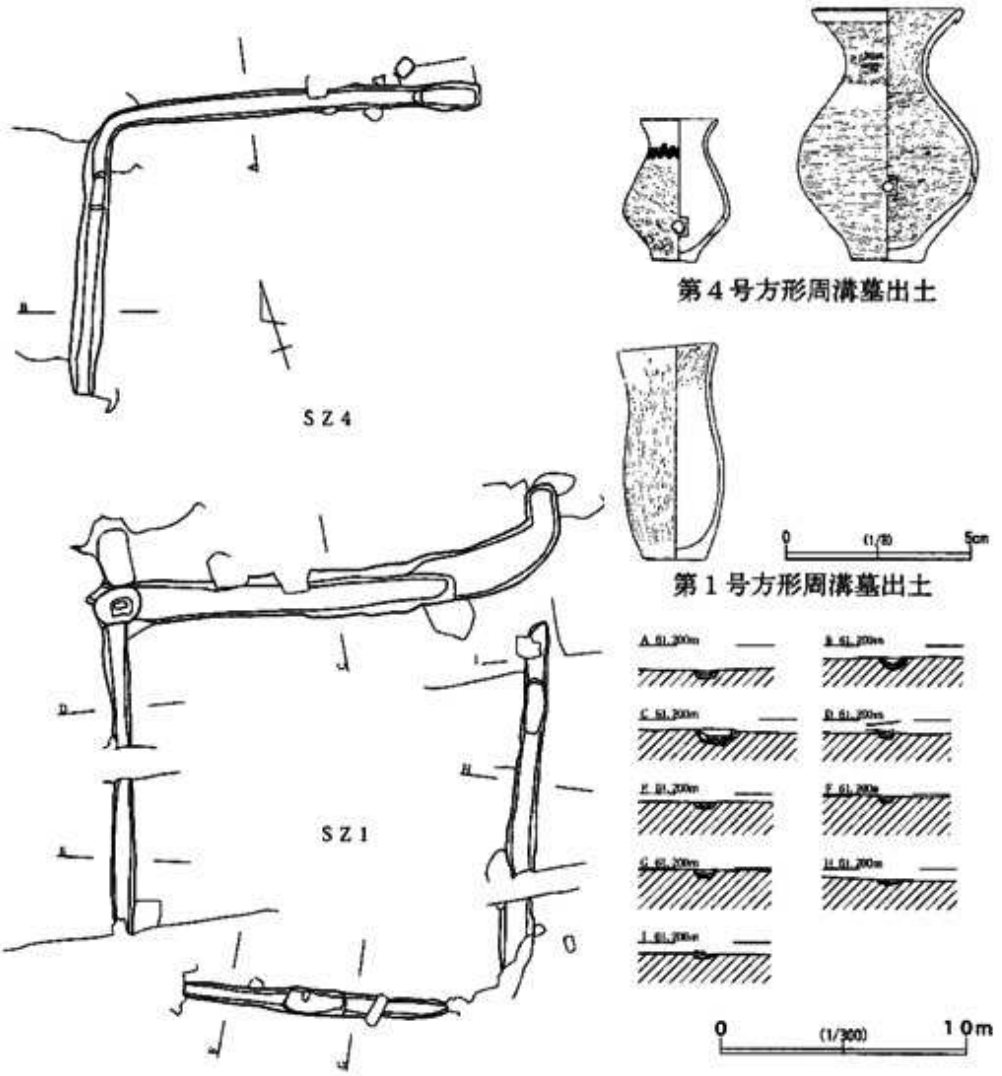
方形周溝墓は2基検出した。両者とも周辺の攪乱が激しく、残存状況は悪い。ともに方台部から埋葬施設は検出されなかった。第1号方形周溝墓の南溝と第4号方形周溝墓の北溝は隣接しており、同じ計画により構築されたと考えられる。年代はともに弥生時代後期後半の所産である。

第1号方形周溝墓

第1号方形周溝墓は隅の途切れる形態で、規模は周溝底内辺間で南北約15.5ｍ、東西約15.8ｍを測る。東溝中に周溝内埋葬と考えられる落ち込みが構築されている。図示した遺物は西溝から出土した土器である。口縁部および胴部の一部が欠損している。溝内で横倒しになっており、土圧でつぶれた状態で出土した。外面が磨かれており、壺か甕かは判断の分かれる土器である。いわゆる壺棺として用いられたものであると考えている。

第4号方形周溝墓

第4号方形周溝墓は周溝が全周する形態のものであると考えている。規模は周溝底内辺間で南北約19.3ｍ、東西約18.5ｍを測る。出土した土器は壺で南溝から近接して出土した。右の土器は口縁部は折返口縁で、頸部に中部高地系の波状文が施される。左の土器は頸部に波状文施される。両者ともに胴部中位に焼成後に外側から穿孔されている。

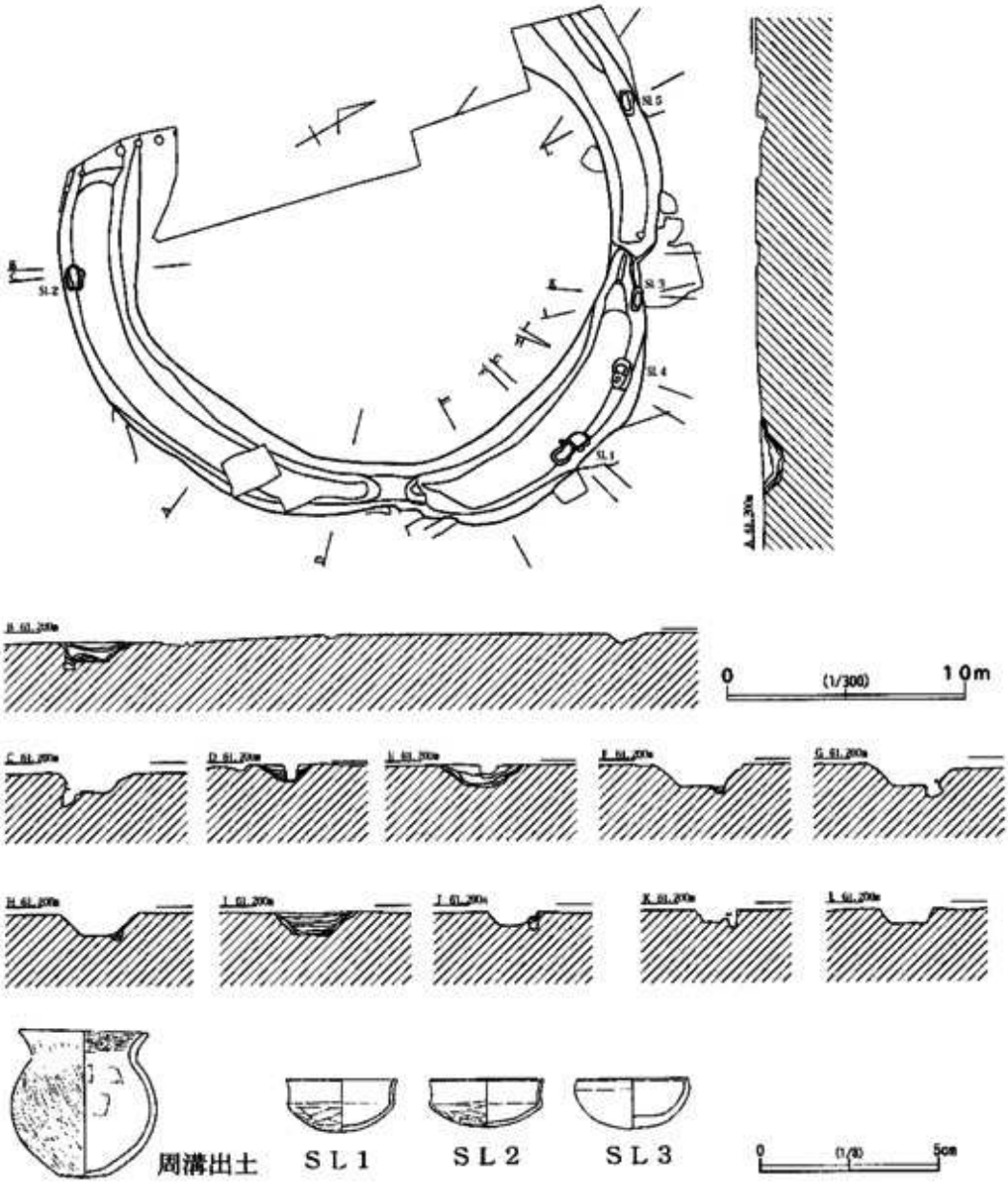


第２図 星川桜ヶ丘遺跡 第１号・第４号方形周溝墓

B，古墳

古墳は２基検出した。第２号墳（ＳＺ２）と第３号墳（ＳＺ３）である。ともに一部が調査区外へ延びるが円墳と判断した。周溝の一部が途切れるブリッジ付円墳である。

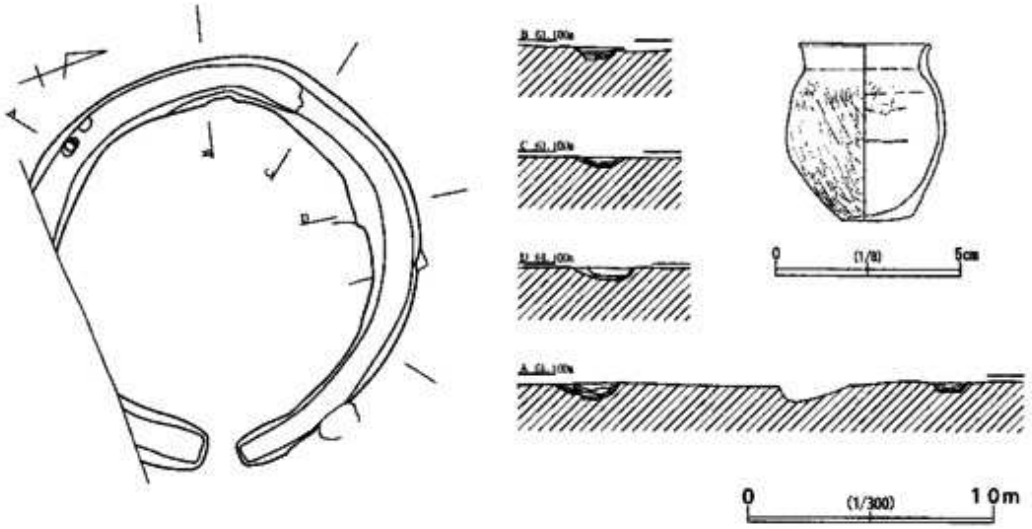
なお本調査では、方形周溝墓も２基調査しており、１号方形周溝墓、４号方形周溝墓と命名したため、古墳としての桜ヶ丘第１号墳、第４号墳は存在していない[註3]。また、第２号墳と第１号方形周溝墓に重複関係がないことから、弥生時代後期の方形周溝墓が古墳時代中期になってもまだ墓域として認識されていた可能性が考えられる。そのため、南から北へ張り出す台地上の基部である南側に墓域、北側に居住域という景観が維持されたと考えられる。



第３図 星川桜ヶ丘遺跡 第２号墳

第２号墳（第３図）

第２号墳は円墳で約３／４を調査した。上端外径約25.6ｍ、底外径約24.5ｍ、底内径約21ｍを測る。周溝は不整形で、狭くなっている部分は、掘り込みも浅くなっている。特に南東の部分は平坦面があり、陸橋のような意識があったと推定され、方位はＮ－113°Ｅである。墳丘・埋葬施設は削平により検出されていない。周溝中からは次章で詳述する「Ｌ字状墓」[注4]を５



第4図 星川桜ヶ丘遺跡 第3号墳

基検出した。本墳の築造年代は「L字状墓」の構築された年代と、周溝上層から出土した土師器甕から古墳時代中期の5世紀前半であると考えている。

第3号墳（第4図）

第3号墳は円墳で約5/6を調査した。上端外径約16.6m、底外径約15.6m、底内径13.8mを測る。周溝底面は2号墳とは異なっており平坦である。墳丘・埋葬施設は削平により検出されていない。本墳の築造年代は、古墳時代後期の5世紀末～6世紀前半であると考えている。

C,「L字状墓」（第3図・第5図）

「L字状墓」は古墳の周溝に構築された土坑である。南武蔵では多摩川流域北岸の日野および府中から世田谷にかけての古墳に構築されることが多く（寺田2003、有村2003・2006）、まれに底面に礫を敷いたものもあり、南九州の地下式横穴墓との関連が取りざたされ、古墳に従属する墓として認識されている遺構である。

南武蔵では、日野市の神明上横穴墓群中での検出が初めてであるが、盤状坏が出土しているため、古代に入ってからの墓制であると捉えられてきた。その後は府中市から世田谷区などでの調査例が続くが、南九州の地下式横穴墓との関連を指摘するのみであった。世田谷区の宮之原1号墳で調査範囲のみで26基の「L字状墓」が調査され、その内の1基が礫敷きで羨道付きであることなどから、地下式横穴墓とのつながりが強く取りざたされることとなった。しかし、副葬品の無いものが大多数であることと、律令制時代の土器を副葬する例があることや、

古墳の周溝に伴わず、単独で検出されるものが府中から調布にかけてあることから、なかなか古墳時代から続く墓制であるとは認識されてこなかったのが現状であると言える。

本調査で検出した「L字状墓」は第2号墳の周溝に伴って5基検出した。全て周溝の外縁に掘削されており、長軸が周溝の壁に平行している。周溝と同時に断面観察が行えた第2号L字状墓は、周溝底面に薄く土が堆積したのちに掘削を始め、掘削土は脇の周溝中央部に置いていた。なお、遺物が出土した遺構は第1号、2号、3号L字状墓で、すべて口縁部の一部が欠損するのみの「完形品」で、供献用の土器と考えている。

第1号L字墓（SL1）

本遺構は周溝の東側に構築されている。平面形は不整長方形で、規模は長軸約173cm、短軸約55cmを測る。周溝底面から底面までの深さは約50cmを測る。底面から約62cm上から完形の坏が1点出土している。坏の高さからは第2号古墳の周溝内に位置するが、周溝壁際であることや、平面的に本遺構の範囲内に位置していること、土器がほぼ完形であることなどから本遺構に伴うものであると判断した。

出土した坏は鬼高系のもので、6世紀前葉の所産である。

第2号L字墓（SL2）

本遺構はE区　グリッド、第2号古墳の周溝の南側に構築されている。平面形は長方形で、規模は長軸約100cm、短軸約38cmを測る。周溝底面から底面までの深さは約34cmを測る。第2号墳壁面に構築されており、天井部が残存しており、内部の高さは最大約37cmを測る。出土遺物は底面から約70cm上で第2号古墳周溝の底面とほぼ同レベルから完形の坏1点が出土している。

出土した坏は鬼高系のもので、6世紀中葉の所産である。

第3号L字墓（SL3）

本遺構はE区D－8グリッド、第2号古墳の周溝北側に構築されている。平面形は長方形で、規模は長軸約100cm、短軸約42cmを測る。周溝底面から底面までの深さは約37cmを測る。底面から約53cmの高さから土師器坏が出土している。

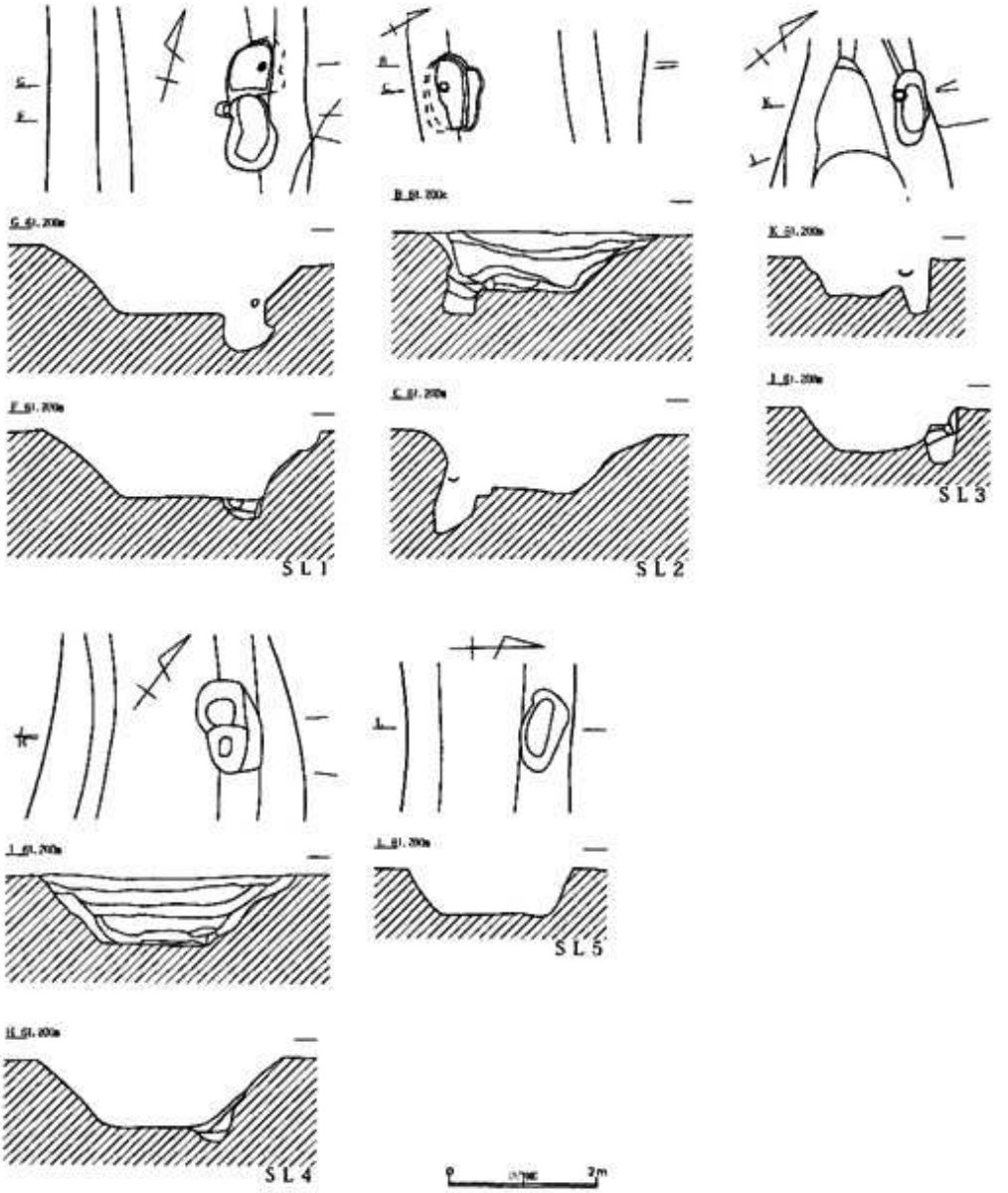
出土した坏は和泉系のもので、5世紀後半の所産である。

第4号L字墓（SL4）

本遺構はE区E－8グリッド、第2号古墳の周溝北側に構築されている。平面形は長方形で、規模は長軸約125cm、短軸約76cmを測る。周溝底面から底面までの深さは約20cmを測る。

第5号L字墓（SL5）

本遺構はE区C－5グリッド、第2号古墳の周溝北側に構築されている。平面形は長方形で、規模は長軸約105cm、短軸約55cmを測る。周溝底面から底面までの深さは約5cmを測る。本遺構は、試掘調査時にサブトレンチを入れた場所にあたり、平面形態が正確に掘削できなかった可能性がある。

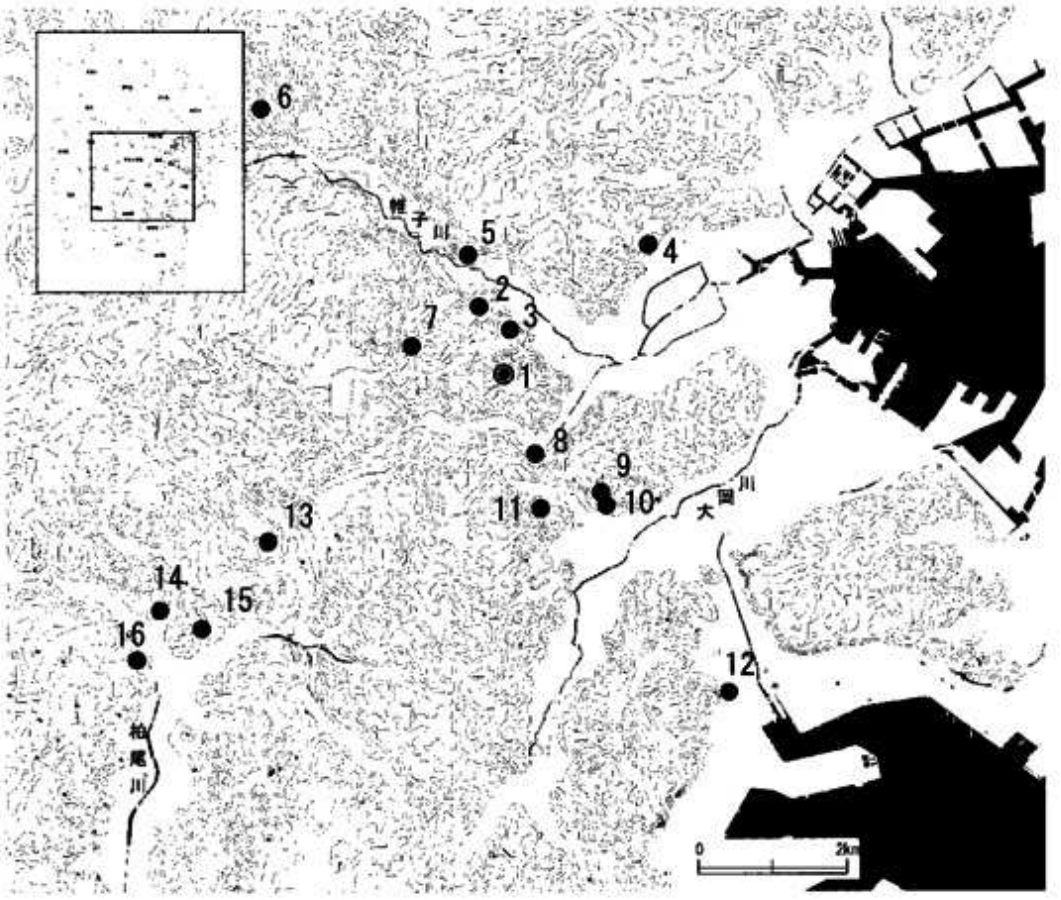


第5図 星川桜ヶ丘遺跡L字状墓

3．方形周溝墓から古墳の展開

以上述べてきたように星川桜ヶ丘第２・３号墳の発見により帷子川流域の古墳の変遷の空白時期が徐々に埋まっていくものと考えられる。

帷子川流域で知られている古墳は、古墳時代中期前半の仏向町古墳（地神塚古墳）、後期の王塚古墳、軽井沢古墳、釜台古墳群などであるが、古い時代の調査であることもあり調査報告書が刊行されておらず、内容的に不十分なものであるが、各古墳の情報を整理して星川桜ヶ丘古墳群を歴史的に位置づけしたい。（第６図）



第６図 横浜市中央部における古墳分布図（番号は本文中と同じ）

③明神台遺跡　Y１号方形周溝墓（近野・畠中 2006）（第７図）

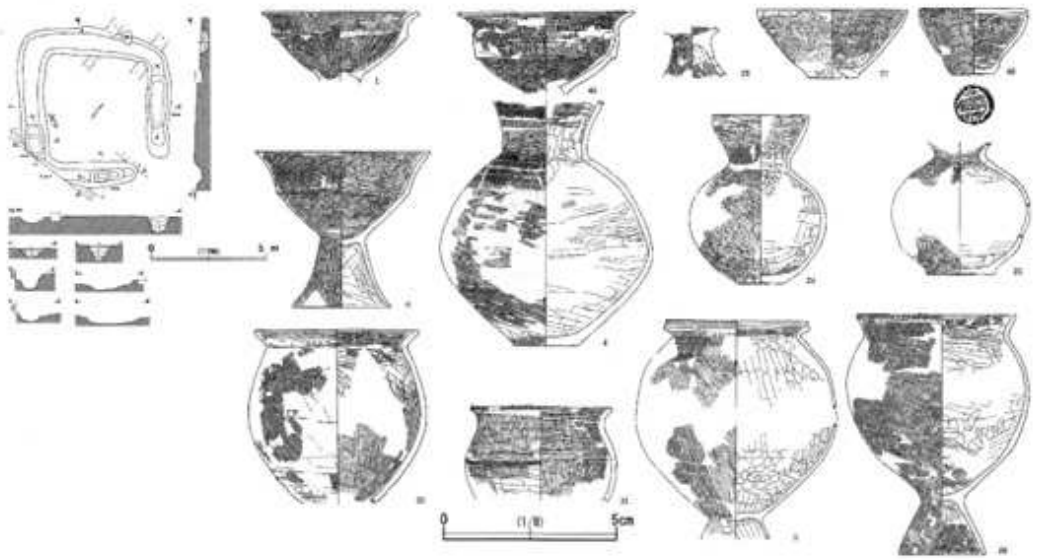
南から北へ延びる台地の基部に位置する。一角が途切れる形態の方形周溝墓である。方台部は4.6×4.5m、周溝内辺間約5.2×5mを測る方形周溝墓である。埋葬施設は検出されていない。周溝内から多数の土器が出土した。弥生時代後期後葉の所産である。なお、方形周溝墓は同時期の環濠集落内に位置している。

②仏向遺跡第Ⅰ地区西地点（林原 1991）

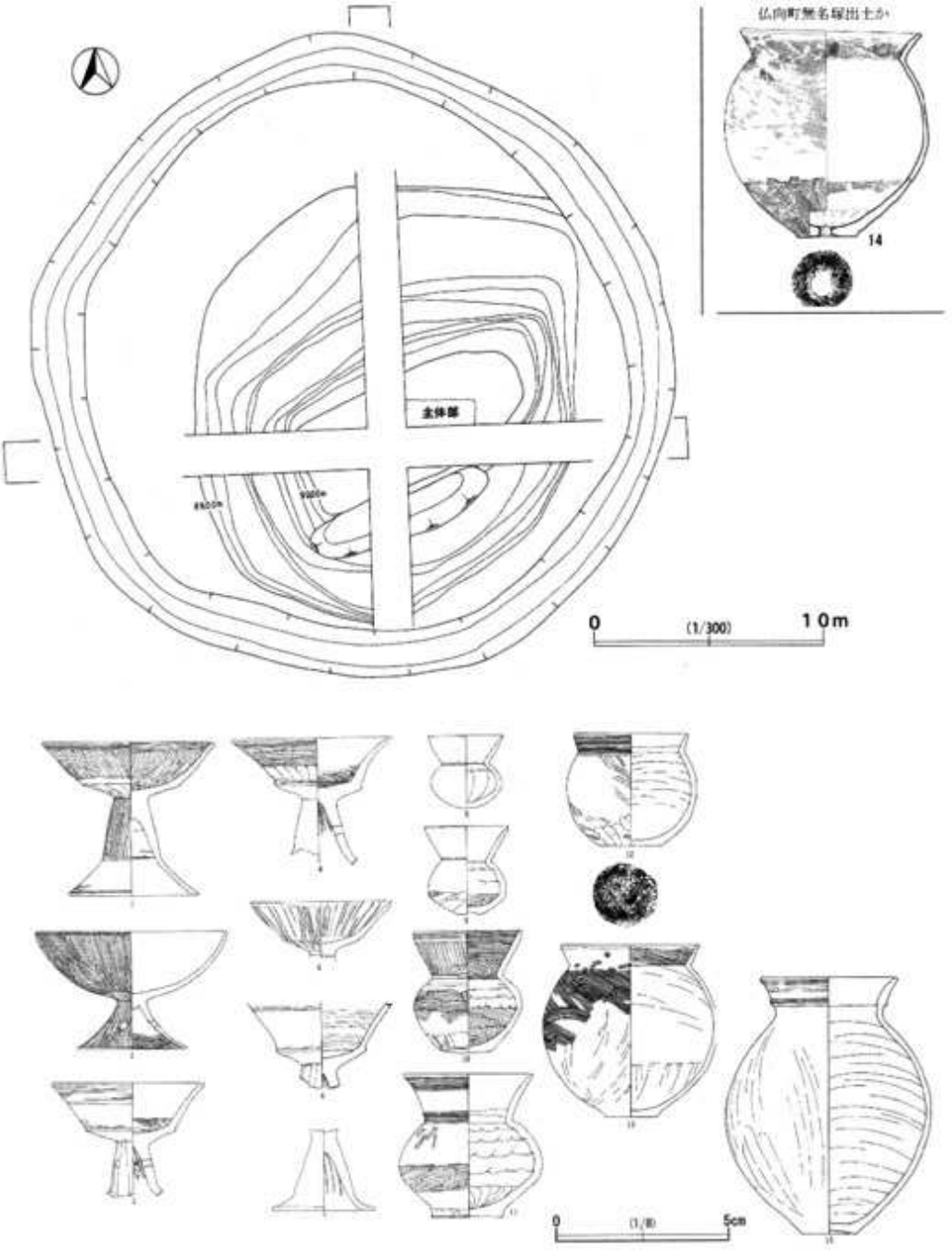
仏向遺跡の北側に位置する。四隅の途切れる弥生時代中期の方形周溝墓４基と重複関係にあり、方位を異にしている全周する方形周溝墓が調査されており、弥生時代後期から古墳時代前期の所産と推定されている。周溝内辺間の規模は南北約9.2mを測り、出土遺物はないため、細かい年代は確定できない。

⑦仏向町古墳（地神塚古墳）（江藤ほか 1985）（第８図）

仏向町遺跡の西側に位置しており、橘中学校の西側に位置していた円墳である。調査は1977年に行われた。調査時には南北約15m、東西約19m、高さ約1.5mの墳丘が残存しており、調査によりで周溝底内径約23mの円墳であることが確認された。埋葬施設は木棺直葬であったと考えられる。埋葬施設からは水晶玉、ガラス小玉、鉄鏃などが検出されている。なお、調査前の墳丘上には標高91mの石柱があったことから付近でも眺望のよい位置に構築されていたと考えられる。周溝から多数の土器が出土しており、古墳時代中期初頭の所産である。なお、



第７図 明神台遺跡Ｙ１号方形周溝墓



第8図 仏向町古墳

古墳の東側に位置する仏向遺跡・仏向町遺跡の西側には同時期の集落が展開している（阿部・小川2012、滝澤ほか2012）。

また、本墳の東側約150mの橘中学校西に現在も墳丘を残す塚状の物が残存しており、筆者らは古墳と推定している。また滝澤は、仏向町古墳の調査者江藤　昭氏からの依頼された小出義治先生の命により仏向町古墳の出土土器を実測するように言われ、その土器をお預かりした時に近隣の地主から預かった資料（14の甕）も1点同時に実測をしている。そしてその資料がこの塚状の地点の出土ではないかと私考している。本稿では、仏向町無明塚と仮称している[注5]。時期は、14の資料から古墳時代前期後葉と考えている。

⑤釜台古墳群（横浜市教育委員会1984）

釜台古墳として報告されているが、同時に6基の円墳が確認されている。報文では径9m、高さ6mの円墳とされている。埋葬施設は検出されていない。坩型土器が出土しているようであるが、未確認である。

⑥王塚古墳（旭区郷土史刊行委員会1980、須藤智夫ほか2005）

白根古墳とも称される。現横浜商科大学付属高等学校の建設時に横穴式石室が調査され、図面及び出土した鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉の写真が公開されている。須藤智夫氏による追跡調査では、付近の最高点の眺望のよい位置に構築されていたとされる。土器が出土していないが横穴式石室の形態などから古墳時代後期の6世紀末の所産とされる。

また、位置は特定できないが、本墳の周辺で数基の古墳が所在していたという石野　瑛氏の記述がある（石野1963）。

⑧瀬戸ヶ谷古墳（横浜市教育委員会1984）

本墳は1950年に発掘調査が行われた。全長約41mの前方後円墳である。後円部を囲むように多数の埴輪が出土したことで著名である。調査前は高さ約3.5mの墳丘が残存していた。埋葬施設は検出されていない。古墳時代後期の6世紀中葉前半の所産である。

④軽井沢古墳（甘粕ほか1965）

本墳は全長約26.8mの前方後円墳である。埋葬施設は後円部に横穴式石室、前方部に竪穴式石室が構築されている。後円部の周溝は横穴式石室の主軸奥壁の延長上で一部が途切れ、ブリッジをなしている。出土遺物は後円部埋葬施設から耳環・水晶製切子玉が出土し、石室上の墳丘頂部で須恵器大甕、提瓶、長頸壺が出土し、前方部埋葬施設から直刀・須恵器提瓶・ガラス小玉・刀子が出土した。資料化されている遺物はないが、公開されている前方部竪穴式石室出土提瓶の写真から6世紀後葉の所産である。報文によればこの竪穴式石室のほうが後円部の

横穴式石室より新しいと観察されている。

⑨横浜市道高速２号線 No. ６遺跡（岡田ほか 1981・1983・1984）

本遺跡では５基の方形周溝墓が調査されている。その内第３号から第５号方形周溝墓は出土遺物等から古墳時代前期の方形周溝墓である。

第３号方形周溝墓は全周する形態の方形周溝墓である。埋葬施設・盛土は削平により検出されていない。周溝底内辺間の距離は 11.3 m、12.1 mを測る。周溝内から底部穿孔された二重口縁壺、甕形壺、高坏などが出土している。古墳時前期初頭の所産であると考えている。

第４号方形周溝墓は全周する形態の方形周溝墓である。埋葬施設・盛土は削平により検出されていない。北東側で第５号方形周溝墓と重複する。周溝底内辺間の距離は 11.7 m、12.5 m を測る、周溝内から壺、甕が出土している。古墳時代前期前葉の所産である。

第５号方形周溝は全周する形態の方形周溝墓である。第４号方形周溝墓と重複関係があり、本遺構の方が新しいとされる。出土遺物は周溝から出土しているのみである。古い時代の弥生時代後期のものも多いが壺などが出土している。第４号方形周溝墓との重複関係から古墳時代前期の所産である。

⑩清水ヶ丘１号墳（岡田ほか 1980）

横浜市道高速２号線Ｎｏ．４遺跡で検出された。大岡川に井土ヶ谷で北西に派生する谷の東側の尾根上に位置している。西側が調査区外へ延びているが周溝底内径約２１．３ｍを測る円墳である。南東にブリッジをもつ。須恵器ハソウ、比企型坏が出土しており、ＴＫ 47 式併行期、５世紀後葉の所産と考えられる。なお、須恵器ハソウは胎土分析により東海西部地方産であると推定されている。周溝北側の外縁に長方形の土坑があり、削平されたＬ字状墓のようなものである可能性もある。周辺の清水ヶ丘遺跡Ａ地区でも円墳の周溝が調査されているが、正式報告が出ていないため詳細は不明である（石井 1979）。報告者は重複する多くの土坑が本墳に関連があると考えている。また、大岡川と井土ヶ谷の谷の合流地点でも２基の古墳が調査されているが、こちらも詳細は不明である。

⑪殿ヶ谷古墳群（榊原 1977、横浜市教育委員会 1984）

本墳群は前方後円墳３基の古墳群である。大岡川から井土ヶ谷から北西へ派生する谷の最奥部の丘陵上に位置する。１号墳は全長約 40 m、後円部径約 23 mの前方後円墳である。１～２mの盛土が残存していたが埋葬施設や出土遺物は検出されていない。石川和明氏によれば、墳丘下から方形周溝墓が検出され、合口甕棺が出土している（石川 1992）[注6]。２号墳は全長 37 m、後円部径 16 mの前方後円墳である。約 50 cmの盛土が残存しており、埋葬施設も調査しているが、出土遺物はない。第３号墳は全長約 36 m、後円部径約 15 mの前方後円墳である。盛土の

有無は不明であるが、埋葬施設は主軸と併行して構築されている。副葬品は刀子が出土し、後円部周溝内から土師器高坏が出土している。古墳時代前期後葉の所産である。なお周辺の「丘陵基部に五領から鬼高期の集落が存在」している（石川 1992）。

⑬上品濃遺跡群（戸田(編)1992）

本遺跡群は柏尾川の支流の品濃川と川上川に挟まれる北西から南東へ伸びる丘陵上に位置する。方形周溝墓は東側の丘陵上に位置している。第1号方形周溝墓の周辺には同時期の他の遺構は構築されていない。第2号方形周溝墓は丘陵の先端に構築され、周辺に同時期の竪穴住居址が構築されている。

第1号方形周溝墓は遺跡群内の最高所に位置している。南東隅が途切れる形態の方形周溝墓である。途切れている南東は台地の斜面下に向っている。埋葬施設・盛土は削平されており、周溝のみが調査された。周溝底内辺間の規模は南北10.6ｍ東西9.3ｍを測る。周溝内から土師器台付甕が出土している。脚部を故意に打壊している、古墳時代前期中葉の所産である。

第2号方形周溝墓は削平と調査区の関係から一隅のみ検出された。周溝内から古墳時代前期中葉の土器が出土している。第1号と第2号の時期差については遺構の切りあい関係などがなく不明である。

⑭東野台古墳群（石川 1992）

本古墳群は柏尾川の支流である阿久和川と名瀬川の合流地点の台地上に位置する。台地基部の最高所に前方後方墳である2号墳が構築され、先端部に3号墳、両者の中間に1号墳が構築されている。古墳群内には同時期の竪穴住居址は確認されず、南側の斜面したで古墳時代前期の竪穴住居址が調査されている。

方墳の1号墳は南北11ｍ、東西13.5ｍの墳丘が残存していた。周溝は北・東・西の三方が検出された。周溝底内辺間は東西13.6ｍを測る。埋葬施設は調査時には盗掘坑されており破壊されていたが、鉄剣が出土している。出土遺物からは古墳時代前期中葉の所産である。

2号墳は全長54ｍの前方後方墳である。周溝底内辺長55ｍを測る。埋葬施設は前方部から木棺直葬の墓壙が検出された。内部から鉄剣、玉などが出土している。東側のくびれ部から小型丸底坩が出土しており、古墳時代前期後葉の所産である。

3号墳は確定できる要素はないが、近世に墳丘脇で掘られた溝や盛土の堆積状況などから方墳と推定されている。なお調査時は径約11ｍの円墳状であった。埋葬施設は墳長部で木棺直葬の墓壙が検出されたが、盗掘されていた。出土遺物はなく年代は不明である。

⑮長蔵寺裏古墳（今井(編)1985）

本古墳は永谷川と阿久和川が合流して柏尾川となる合流部の台地上に位置する周溝底内径約

18.7ｍの円墳である。墳丘は削平されていたが、東よりの部分で埋葬施設と考えられる土壙が検出されたが、出土遺物はなく表土から須恵器甕の胴部片が出土したのみであるが、古墳時代後期の６世紀代後半の所産と考えられる。

周溝底面は平坦ではなく、東側中央から南側中央が深くしっかりと掘削され、浅い部分と深い部分では約80㎝の差がある。周溝南側では他より約10㎝高い陸橋部のような部分がある。

⑯上矢部町富士山古墳（佐藤・伊藤 1991）

柏尾川流域の阿久和川の合流地点の丘陵上に位置する。阿久和川を挟んで長蔵寺裏古墳と相対する位置に構築されている。調査前は高さ約2.1ｍを測る墳丘が残存していた。規模は周溝底内径は約26.5ｍを測る円墳である。埋葬施設は削平により検出されなかった。周溝から多数の埴輪が出土している。本墳は古墳時代後期の６世紀中葉の所産である。

⑫室の木古墳（石野 1935）

本墳は古い時代の調査であり、墳形・規模は不明である。埋葬施設はほぼ南に開口する横穴式石室で、同形の双室である。出土遺物は石室の奥壁に区画が設けられており、須恵器高坏、瓶破片、土師器坏、高坏、人物埴輪頭部、直刀片、鞘金具、鉄鏃、馬具一式（轡、ハミ、引手、鏡板、杏葉、雲珠、辻金具、絞具、装飾金具、壺鐙）が出土した。遺物の写真から６世紀末から７世紀初頭の所産であると考えている。

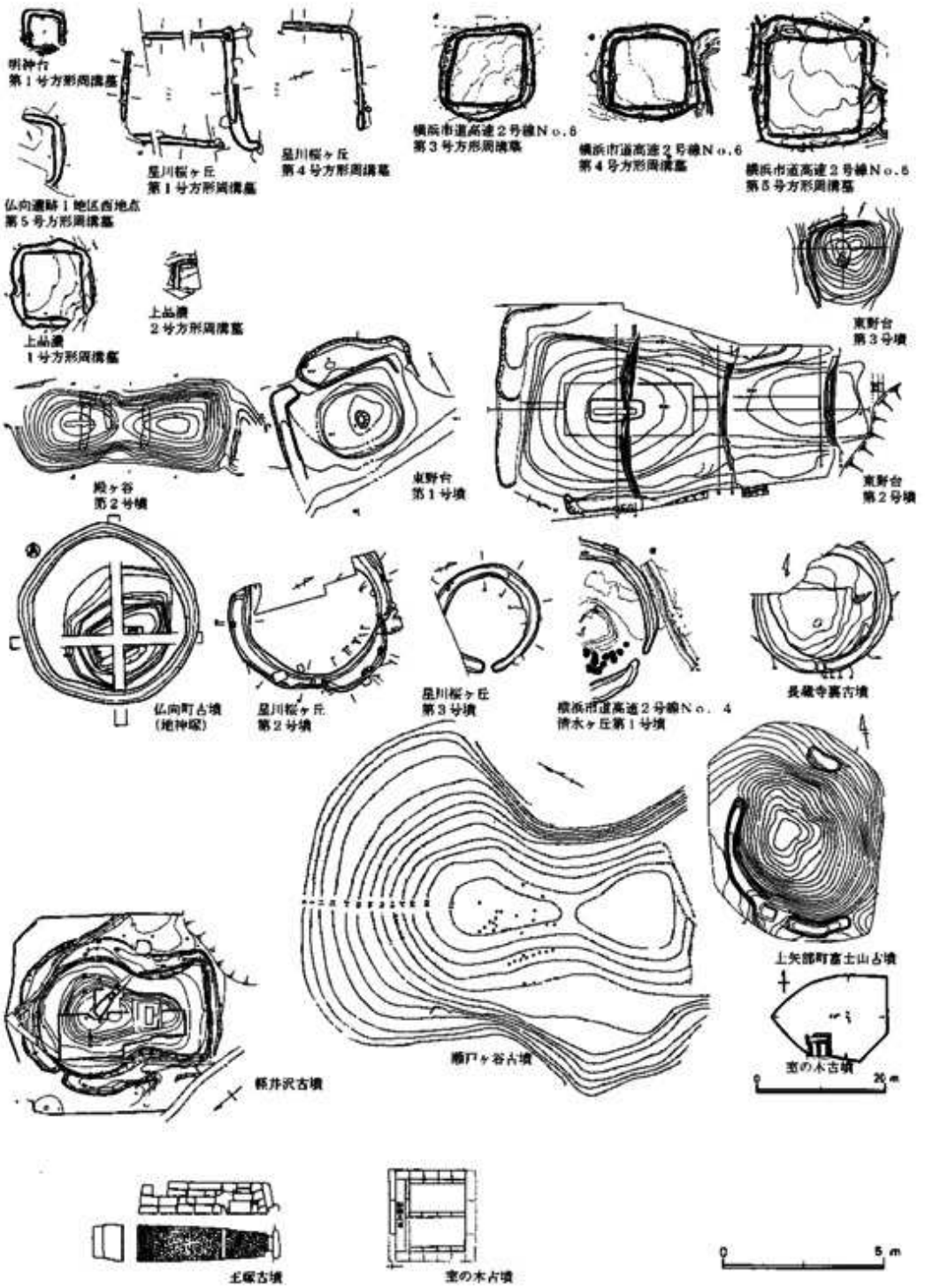
その他、石野氏が設立した横浜市港北区の武相学園に所蔵されている円筒埴輪６点に「今井」と注記があり、保土ヶ谷区今井町の可能性があると柳沼千絵氏は指摘している（柳沼 2013）。もし今井町であるとするならば、今井川上流域にあった古墳のものとなる。

４．まとめ

本論では、星川桜ヶ丘遺跡の発掘成果と帷子川流域および星川桜ヶ丘遺跡周辺の明らかとなっている弥生時代後期後半から古墳時代前期の方形周溝墓と古墳時代の墳墓について述べてきた。まとめとして弥生時代後期の方形周溝墓から出土している土器の編年的位置づけと古墳の状況についてまとめとしてみたい。

A，弥生時代後期の土器

本地域で特徴的なことは、弥生時代後期後葉まで前述してきたような中部高地系統の土器が共伴する点であろう、さらに注目すべきは星川桜ヶ丘遺跡の第１・４号方形周溝墓では、共に中部高地系統の甕型土器が出土しており、明神台Ｙ１号方形周溝墓でも中部高地系の高坏が出



第9図 横浜市中央部の古墳集成図

		帷子川流域	大岡川流域	柏尾川流域
前期	350	明神台Ｙ１号方形周溝墓 桜ヶ丘第１号方形周溝墓 桜ヶ丘第４号方形周溝墓	横浜市道高速２号線 第３号方形周溝墓 横浜市道高速２号線 第５号方形周溝墓	東野台第３号墳？ 上品濃第１号方形周溝墓 東野台第１号墳 東野台第２号墳
		仏向町無名塚古墳？	殿ヶ谷第１号墳？ 殿ヶ谷第２号墳？ 横浜市道高速２号線 第４号方形周溝墓 殿ヶ谷第３号墳	上品濃第２号方形周溝墓
	400	仏向町古墳（地神塚）		
中期	450	桜ヶ丘第２号墳		
		桜ヶ丘第３号墳	清水ヶ丘第１号墳	
	500			長蔵寺裏古墳？
後期	550	瀬戸ヶ谷古墳		上矢部長富士山古墳
			室の木古墳	
		軽井沢古墳		
	600	王塚古墳		
終末期				

表１ 各水系の方形周溝墓・古墳編年表

土している点であろう。特に注目するのは、星川桜ヶ丘遺跡の第4号方形周溝墓では櫛描波状文を描いている点であろう。出土した2点の壺型土器共にである。

滝澤は、前に釜台町上星川遺跡（滝澤1985）を調査し弥生時代後期後半竪穴住居氏のプランが正方形に近くなる段階においては、櫛描波状文を描ける土器製作者はいなくなり器形のみ踏襲すると考えたが、星川桜ヶ丘の例を考えると稚拙ながらも櫛描波状文を描ける伝統的な集団が残存していたことが新たに知れることになったのである。

以上の2例の時期的な位置づけは、弥生時代後期後葉に星川桜ヶ丘遺跡第1号方形周溝墓・第4号方形周溝墓順に並べこれに続くか平行するのが明神台遺跡Y1号方形周溝墓であると本稿では、位置づけておきたい。

B，古墳（第9図、表1）

古墳時代前期中葉からは確実に古墳が構築されるようになるが、一部では方形周溝墓も構築され続けている。古墳としては、大岡川流域の殿ヶ谷古墳群の第1・2・3号墳のような前方後円墳や、柏尾川流域での東野台古墳群の第2号墳のような前方後方墳である。帷子川流域での古墳の出現は、現在のところ径23mばかりの円墳である仏向町古墳の段階まで待たなくてはならない。本稿で述べた仏向町の無明塚が古手の古墳であると仮定しても小円墳であるには変わりがないであろう。

隣接地域の柏尾川流域の東野台2号墳のように直径54mの前方後方墳が構築されているにも関わらず、本流域で構築されるのは周溝底内径30m未の満の円墳のみで、ブリッジ付の形態である。その影響であるかは断言できないが可能性としては、前方後円墳である軽井沢古墳の後円部周溝の一部にもブリッジが構築されている点に注目しておきたい。

今回の星川桜ヶ丘第2・3号墳の発見により注目されるのは、帷子川流域での5世紀第中葉以降後葉にかけての状況が垣間見えたことであろう。また今回は触れていないが、古墳ばかりでなくそれを営んだ人々の生活の一部を含めてである。

また隣接する大岡川水系ではあるが、時間的に星川桜ヶ丘第3号墳に後続するものとしては清水ヶ丘第1号墳が、須恵器を持っており5世紀後葉、筆者らの調査した青砥山ノ下第1号墳（滝澤2002）らと同時系列の古墳であろう。

古墳時代後期、帷子川水系ではこの地域の首長墓としてふさわしい、瀬戸ヶ谷古墳が41mの前方後円墳で埴輪を廻らせる立派なものである。時期的には、半世紀ほど時期が空くが古墳時代後期の6世紀中葉の所産であると考えている。瀬戸ヶ谷古墳の直後というわけではないが続くのが6世紀後葉と考えられる軽井沢古墳であろう。直径26.8mの小型な前方後円墳ではあるが前方後円墳であることには違いがなく、この地域の首長墓であろう。また大岡川水系ではあるが、室の木古墳も石室の特異さから注目しておきたい。副葬品も馬具を持ち、時系列的には軽井沢古墳には弱干先行するものと考えておきたい。

帷子川水系においては、いま述べた瀬戸ヶ谷古墳と軽井沢古墳が前方後円墳の形をとりこの地域の首長墓としては申し分ないものであろう。6世紀中葉を過ぎるまでこの帷子川水系には前方後円墳は出現しておらず、それも帷子川水系下流域の地域に、瀬戸ヶ谷古墳が出現する点も興味深い。また更に時期が下降する軽井沢古墳に至っては、さらに河口付近の立地を占める。そして軽井沢古墳に後続する世代は、その崖下の横穴墓にと葬られていく。決して土地がないわけでもないのだが古墳は構築しない点は興味深い。このことは、同じ横浜市内の鶴見川の上流、恩田川のさらに支流の梅田川沿いに前方後円墳を構築する三保杉沢古墳（四本ほか 1979）とその斜面に構築された三保の横穴墓（石川ほか 2009）の関係にも同じ点が見られ興味深い。最後に、帷子川水系では仏向町古墳を遡る古墳は現在のところ見つかっていないが、大岡川、柏尾川水系の殿ヶ谷第１・２・３号墳、東野台第２号墳のような前方後円墳、前方後方墳が出現する可能性はまだあり、今後も注意を払っていかなくてはならないであろう。

また、星川桜ヶ丘遺跡の古墳時代の墓制研究の中で、確実に５世紀末には「Ｌ字状墓」が構築されていたことが判明した。多摩川流域ではなかなか遺物が伴わず、数少ない出土例からも律令制以後の所産と考えられてきた「Ｌ字状墓」が古墳築造と近い年代から構築されていたことは当地域での同墓制の在り方を検討する上での好資料と考える。

帷子川流域でも古墳時代前期から古墳時代中期、古墳時代後期まで当然空白となる時期はあるが連綿と古墳が構築されてきたことが判明した。惜しむらくは大正時代以前に古墳と認識されていたにも関わらず、発掘調査がなされずに湮滅した古墳が多いことである。しかし星川桜ヶ丘遺跡の調査例を引くまでもなく、今後調査例が増えれば、調査される古墳も増えるものと想定され、今後の調査に期待し、今回の原稿に空白であった古墳が見つかることを願い、筆をおきたい。

星川桜ヶ丘遺跡の現地調査・本稿をなすにあたり下記の方々にお世話になった。記して感謝の意としたい。（順不同・敬称略）
澤田大多郎　岡本孝之　伊藤　郭　須山幸雄　広瀬有紀雄　西川修一
柴田久美子　福田民子　水野敦子　黒瀬弓子　大野絵里佳

註

(1) 神奈川県での遺跡番号。横浜市では保土ヶ谷Ｎｏ．85 として周知化している。

(2) 古墳時代中期の竪穴住居址は第 17 号竪穴住居址、第 25 号竪穴住居址、第 26 号竪穴住居址、古墳時代後期の竪穴住居址は第２号竪穴住居址である。

(3) 方形周溝墓である第１号、４号墓と古墳である第２号墳、第３号墳は近接しているが重複していないため、時期差はあるが墓としての観念は残っていたと考えられ、台地の基部である南側に墓域、北側の台地先端部に居住域という本遺跡の土地利用を規制していたと考えられる。

(4) 詳述はしないが、本遺構は南九州の地下式横穴墓の一類型である「横口式土坑墓」(津曲 2011) との関わりが強いと考えているため、上記の名称を使いたいが、南関東では「L字状墓」と呼称されてきた研究史があり、今回はこれを用いたい。

(5) 仏向町古墳の土器については、1984 年「古墳時代土器の研究」作成時までに報告書が刊行されておらず、前述したように小出義治先生から江藤昭氏から土器を借りて実測するように言われ、当時西川修一氏に手伝ってもらい実測を行った。この付近の塚出土と考えられる土器も西川氏の手に渡り、氏の観察により甕の焼成後の底部穿孔の土器であることが判明したものである。当時は、修復がなされており穿孔が塞がれていることが後になって判明したためである。時期的にも古墳時代前期に遡る資料でもあり注目していたが、「古墳時代時の研究」では、仏向町古墳の土器については古墳時代中期初頭の土器の一括資料として使用したが、この 1 点については、出所が怪しいというために使用されていない。

のちに報告書刊行時に仏向町古墳の土器と混同して報告がなされているのに気付いた。筆者がお聞きした、江藤昭氏の言うことが本当であるのならば過ちは正しておかなければならないであろう。時期的にも共伴は難しい資料であると考えるので、今回本稿で取り上げるため再度西川氏にお願いし、古い資料であるが探し出していただいた。西川氏に感謝の意を表したい。

また、小出義治先生の追悼号にこれを載せるのも意義深いことと考えあえて掲載した。

故江藤昭氏にもこの機会をいただいたことに感謝の念を表しておきたい。

(6) ただし石川氏は 3 号墳としており、番号の取り違いが起きている可能性がある。

参考文献

旭区郷土史刊行委員会　1980『旭区郷土史』

阿部友寿・小川岳人　2012『仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡』 かながわ考古学財団調査報告 279

有村由美　2003「(4) 周溝内土坑・L字状墓」『東京都調布市下布田遺跡　－第 54 地点（布田六丁目土地区画整理事業）の調査－』古代編　調布市埋蔵文化財調査報告 69　調布市遺跡調査会

有村由美　2006「(2) 古墳周溝部に形成された墓坑群」『東京都調布市下布田遺跡　－第 70 地点（宅地造成工事の調査－』 調布市遺跡調査会

石井　寛　1979「5．横浜市清水ヶ丘遺跡(仮称)の調査」『第 3 回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』第三回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

石川和明　1992「東野台古墳群調査報告」『調査研究集録』第 9 冊　財団法人横浜市ふるさと歴史財団

石川真紀ほか　2009『横浜市緑区三保杉沢横穴墓群』 玉川文化財研究所

石野　瑛　1955「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳」『日本考古学年報』 3　日本考古学協会

石野　瑛　1963『考古学集録』第 1　名著出版

今井康博（編）　1985『長蔵寺裏遺跡調査報告』 横浜市埋蔵文化財調査委員会

植山英史ほか　2007 ～ 2011「考古学の先駆者　赤星直忠博士の軌跡（4）～（8）　－通称「赤星」ノートの古墳時代資料の紹介－」『研究紀要 12 ～ 16　かながわの考古学』 財団法人かながわ考古学財団

宇佐美哲也　2003「狛江古墳群」『多摩川流域の古墳』　多摩地域史研究会第13回大会発表要旨

江藤　昭　1983「6　横浜市仏向町遺跡の調査」『第2回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
第二回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

江藤　昭ほか　1985『神奈川県横浜市仏向町遺跡第2次調査』　横浜市仏向町遺跡調査団

岡田威夫ほか　1980『横浜市道高速2号線埋蔵文化財試掘報告書』
横浜市道高速2号線埋蔵文化財試掘調査団

岡田威夫ほか　1981『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書（No．6遺跡－Ⅰ）』
横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団

岡田威夫ほか　1983『横浜市高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書（No．6遺跡－Ⅲ
No．9遺跡－Ⅱ）』　横浜市高速2号線埋蔵文化財発掘調査団

岡田威夫ほか　1984『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書（No．6遺跡―Ⅳ）』
横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団

清野利明ほか　1986「神明上遺跡第62次調査」『埋蔵文化財発掘調査報報Ⅱ』
日野市埋蔵文化財発掘調査報告3

坂口滋皓　1990「古墳時代前期の方形周溝墓－神奈川県内検出例の検討－」『相武考古学研究所紀要』
第1集　相武考古学研究所

榊原松司　1977「4横浜市殿ヶ谷遺跡の調査」『第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

坂本　彰　2005『鶴見川流域の考古学』　百水社

佐藤安平・伊藤　郭　1991『横浜市戸塚区上矢部町富士山古墳調査概要』　上矢部町富士山古墳調査団『昭
和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（2）』　横浜市埋蔵文化財調査委員会

四本和行ほか　1979『神奈川県横浜市三保杉沢遺跡群』　日本窯業史研究所

鈴木敏則　2004『有玉古窯』　浜松市教育委員会

須藤智夫　2007「古墳時代後期における南武蔵の一様相　－古墳・横穴墓と氏族の動向－」
『神奈川考古』第43号　神奈川考古同人会

須藤智夫ほか　2005「考古学の先駆者　赤星直忠博士の軌跡（2）　－通称「赤星」ノートの古墳時代
資料の紹介－」『研究紀要10　かながわの考古学』　財団法人かながわ考古学財団

滝澤　亮ほか　1985『釜台町上星川遺跡』相武考古学研究所調査報告第1集　相武考古学研究所

滝澤　亮ほか　2002『横浜市緑区青砥山ノ下遺跡』　山ノ下遺跡発掘調査団

滝澤　亮ほか　2012『神奈川県横浜市保土ヶ谷区仏向遺跡』　株式会社盤古堂

田村良照　2010「東国最古の横穴墓を追って　－上谷本第二遺跡A・B地区横穴墓群の再評価－」
『神奈川考古』第46号　神奈川考古同人会

近野正幸・畠中俊明　2006『明神台遺跡・明神台北遺跡』　かながわ考古学財団調査報告192

津曲大祐・石村友規　2011「日向・大隅における古墳埋葬施設の多様性」『九州島における古墳埋葬施

設の多様性　～地域性と階層性はどう理解できるか～』第14回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨　九州前方後円墳研究会

寺田良喜（編）　2001『宮之原遺跡Ⅱ』本文編　世田谷区教育委員会生涯学習課文化財係

寺田良喜　2003「多摩川中・下流域左岸の古墳　－田園調布・野毛古墳群と砧・狛江古墳群にみる集団関係－」『多摩川流域の古墳』　多摩地域史研究会第13回大会発表要旨

鶴間正昭　2012「日野台地の横穴墓　－谷ノ上横穴墓群の調査－」『研究論集』ＸＸＶＩ　東京都埋蔵文化財センター

戸田哲也（編）　1992『横浜市戸塚区上品濃遺跡群発掘調査報告書』　上品濃遺跡群発掘調査団

長谷川厚　1999「神奈川県における古墳時代中期の土器について　－変遷と画期の側面から－」『東国土器研究』第5号　東国土器研究会

林原利明　1991「横浜市保土ヶ谷区仏向遺跡検出の方形周溝墓群」『相武考古学研究所紀要』第2集　相武考古学研究所

比田井克仁　1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号　史館考古同人

平野卓治　2001『横浜の古墳と副葬品』　横浜市歴史博物館

三木文雄　1955「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳」『日本考古学年報』3　日本考古学協会

柳沼千枝　2013「埴輪の生産体制と地域社会の研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』第9号　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

横浜市教育委員会　1984『昭和58年度文化財年報（埋蔵文化財その2）』文化財シリーズ58－4

三浦半島東岸中部の
古代末～中世初期遺跡群について

―三浦氏本貫地とその周辺地域における遺跡群の様相―

中三川　昇

1．はじめに
2．三浦半島地域の古代末から中世初期の主要遺跡と立地環境
3．仮称「古久里浜湾西岸中世遺跡群」の主要遺跡と出土遺物
4．まとめ

1．はじめに

三浦半島は神奈川県東部に位置し、西側は相模湾、東側は東京湾に面する面積約200㎢の半島である。東京湾対岸の房総半島とは最短約8㎞と指呼の距離であり、宝亀2年（771年）以前の東海道駅路は相模国の三浦半島から上総国に至る経路であった。また東京湾の内湾部には旧利根川や荒川、多摩川等、西関東地域を代表する河川が流入しており、東京湾沿岸地域と内陸部を結ぶ経路ともなっていたと考えられる。

このような地理的、地政学的環境にある三浦半島の中でも、現横須賀市大矢部・衣笠地域は、治承4年（1180年）の源頼朝の挙兵時から宝治元年（1247年）の宝治合戦まで、鎌倉幕府の重臣・宿老として歴史を刻んだ三浦氏本宗家の本貫地とされている。しかしながら「衣笠城跡」を初めとする衣笠・大矢部地域における発掘調査は数少なく、考古学的にその様相を言及することは困難な状況である。一方、衣笠・大矢部地域より東京内湾に面した久里浜湾に陸路で繋がる

第1図　三浦半島の位置図

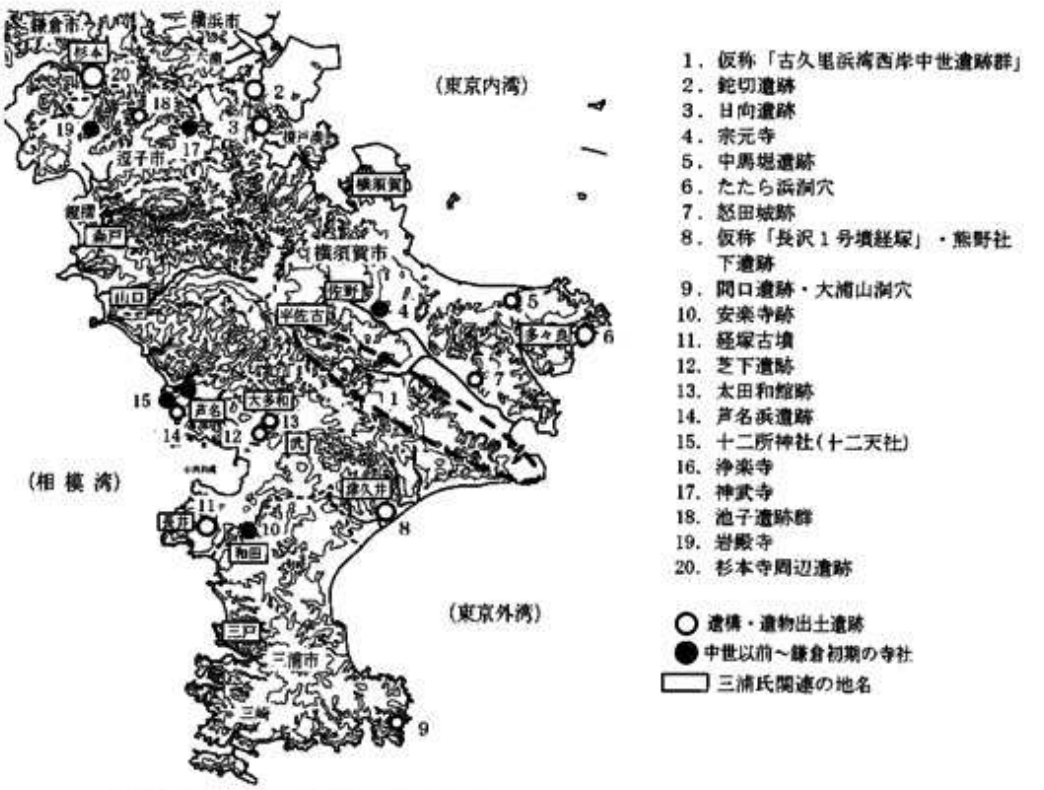
岩戸・久比里・久里浜地域については比較的発掘調査が進展している。

当地域は文献史学の立場からは史料の僅少さのためか言及されることが極めて少ないが、考古学的には平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての様相の一部を垣間見ることが可能な旧相模国内では数少ない地域の一つである。

本稿では、当時は現在より奥深く湾入していたと考えられている古久里浜湾(1)西岸に展開する遺跡群（仮称「古久里浜湾西岸中世遺跡群」）、中でも比較的発掘調査事例が多い岩戸～久里浜地域の様相を再考し、あわせて衣笠・大矢部地域を含めたその他の遺跡や寺社・仏像等の様相を概観し、三浦氏本貫の地とその周辺地域における中世遺跡群の現時点での実相と今後の課題について考察する(2)。

2．三浦半島地域の古代末から中世初期の主要遺跡分布と立地環境

第2図は横須賀市域を中心とした古代末から中世初期の主要遺跡と三浦氏関連の地名分布図である。本図からは多くの遺跡や寺社等が砂堆や沖積地、丘陵裾部等の低地に立地していることが窺われ、また、「佐原」を除き衣笠・大矢部地域を含めた古久里浜湾周辺地域と半島南端



第2図　三浦半島地域の中世遺跡と三浦氏関連地名分布図〔1:250,000〕

地域には三浦一族「名字の地」がない点も特徴的で、逆説的に三浦氏の本貫地や本宗家の実質的な直轄地の存在を示唆している。

第３図は衣笠から久里浜地域における中世期の想定環境復元図[3]と遺跡・寺社等の分布図である。古久里浜湾を取り巻く小字名には古久里浜湾の西岸部に「用崎」・「太郎崎」、東岸部には「台崎」といった入海の出岬を表現したと思われる地名があり、最奥部には船付・汐場などの地名がみられ、まさに中世期の古久里浜湾の汀線位置を示しているかの如くである。なお、佐原地域北方の陸域には大矢部地域に認められる水田を主とした地割が認められない。汐場の地名があることからも、明治期においても干潟のような環境であったことが窺われる。また、八幡久里浜と久比里の間及び久里浜湾口部の海域は、砂堆の発達により狭隘であったと想定される。このような環境の中、衣笠・大矢部地域から岩戸・久村を経て久里浜湾口へと至る旧道沿いの地域に寺院跡等を含めた多数の中世遺跡が連なっている。この状況は、「怒田城跡」（第３図Ｄ）はあるものの同時期の遺跡が希薄な古久里浜湾東岸地域とは極めて対照的な姿である。ちなみに「怒田城跡」では断面逆台形の堀跡と斜行する土橋が発見されているが、出土遺物はなく詳細な時期は不明であり（野内ほか 1999）、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての城郭遺構として積極的評価をすることは困難な状況である。なお、参考として昭和 29 年発行の地形図を第４図に示したが、この地形図でも大矢部から岩戸・久村を経て久里浜に至る旧道の存在が明瞭に確認される[4]。衣笠から岩戸・佐原地域及び久里浜地域については後述するが、まずは第３図から中世遺跡としてあまり語られることが少ない久村地域の寺社等を確認しておく。

第３図　古久里浜湾周辺地域の古代末期から中世前期の遺跡分図〔1:50,000〕

第4図　昭和29年の地形（昭和29年3月30日 地理調査所発行5万分の1地形図）

現在、久村の谷戸奥にある等覚寺の観音堂に平安時代後期の作とされる木造千手観音立像と木造金剛力士像が安置されている。前者は明治5年（1872年）に廃寺となった経塚山千手院（Ⅰ）の本尊で、後者は寛永年間に廃寺となった丸山不動堂（m）から千手院に移された仏像で、両者とも昭和5年（1930年）に等覚寺に移されている。千手院跡の隣接地には御滝神社（k）が現存する。近隣地から経書が入った甕が出土したと伝わり、経塚の可能性がある。なお、岩戸と久村の境界に位置する通称「矢切の台または峯」に等覚寺の前身寺院である念徳寺（j）があったと伝わる。また、正業寺（n）には鎌倉時代の木造阿弥陀如来坐像がある。以上のとおり久村地域には平安時代後期の仏像を安置した複数の寺院跡等が存在した。久村地域の寺社等と三浦氏との明確な関連は不明であるが、平安時代後期頃には古久里浜湾周辺地域における拠点的な場の一つであったと想定される地域である。ちなみに上杉孝良氏は三浦市和田の和田義盛創建と伝わる安楽寺（廃寺）にあったとされる木造薬師三尊像（平安仏）の存在等から、同地域にいた和田義盛以前の有力者の存在を指摘しているが（上杉2007ほか）、久村地域においても同様な可能性を考える必要があるかと思われる。

3．仮称「古久里浜湾西岸中世遺跡群」の主要遺跡と出土遺物

（1）古代末の遺跡と出土遺物

考古学的な古代と中世の境界は必ずしも明確ではないが、本稿では11世紀前後から、大小の皿形態の土師器セット＝「かわらけ」が成立または確認される時期以前を、とりあえず古代末＝中世以前として取扱うこととする。三浦半島地域における該期の遺構・遺物は全体的に少

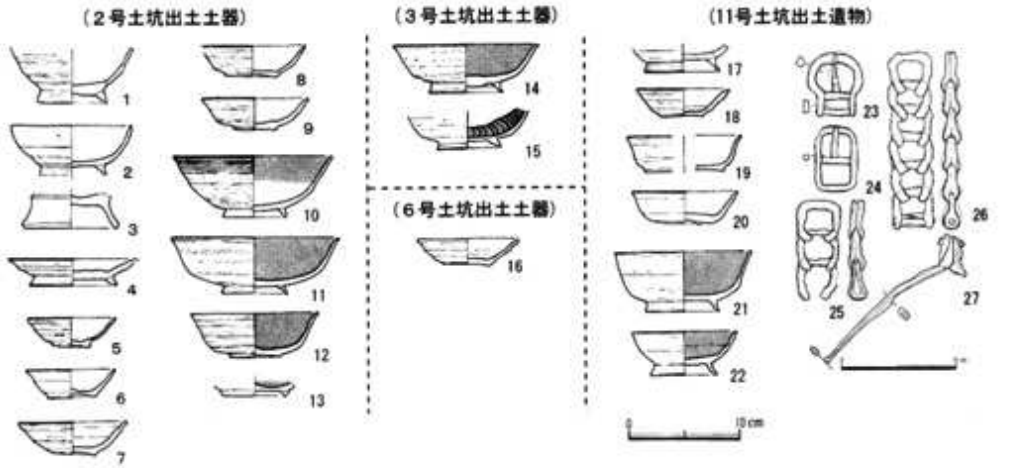
ないが、本稿で対象とする古久里浜湾西岸地域では、佐原地域の低平な舌状台地上に立地する泉遺跡（第３図１）と久里浜地域の砂堆上に立地する蓼原遺跡（第３図２）の２遺跡が確認されている。いずれも後に中世遺跡が展開する地域に所在している。

第５図　泉遺跡遺構配置図〔1:1,500〕

・泉遺跡

横須賀市佐原１丁目に所在し、岩戸川に面した標高17ｍ前後の台地上に立地する遺跡で、東側の岩戸川対岸には佐原十郎義連の居館跡とも伝わる佐原城跡遺跡がある（第３図１）。南側に丘陵を背負い、東西及び北側が沖積地に面した急斜面となる方形の平坦地で、10世紀末～11世紀前葉前後と考えられる土坑４基等が発掘され（第５図）、内黒土器を含むロクロ土師器の椀・坏・皿等や鉄製馬具が出土している（第６図）。

第６図（以下省略）１～３・17は高台付椀で、３は足高高台気味である。４は高台付皿、５～９・16・18～20は無台で口径10㎝前後以下の小型坏である。以上はいわゆるロクロ土師器で、皿を除き大小や高台の有無にかかわらず形態的には椀形のものが主体的である。10・11・13～15・21は内黒土器の高台付椀、22は高台付の小椀、12は無台の小椀である。有台椀は猿投H72窯式期の灰釉陶器碗に近似した形態である。23～27は11号土坑出土の鉄製品で締具（23・24）、兵庫鎖片（25・26）、鐙片（27）である。これらの出土遺物の年代観について報文では当時の灰釉陶器の年代観等を踏まえ11世紀後半としているが、近年の灰釉陶器の年代観等からは10世紀末～11世紀初頭前後を中心とした時期が想定される。該期の遺構は土坑

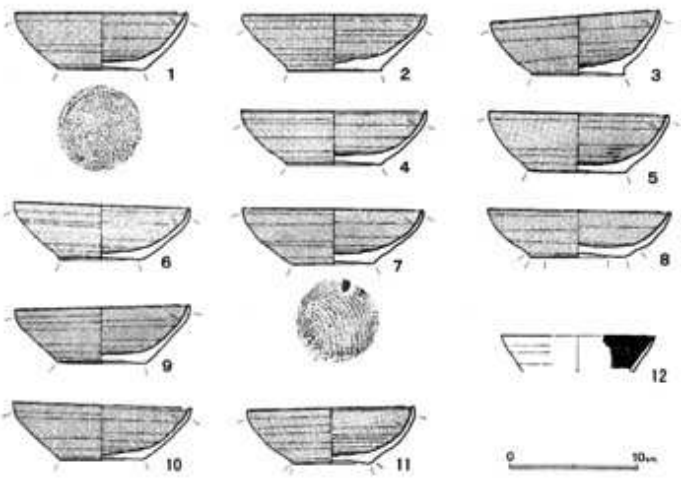


第６図　泉遺跡土坑出土遺物実測図〔1:8〕
（第５図・第６図は中村ほか1989より一部改変して掲載）

のみで、遺跡の性格は判然としないが、地形的特徴や鉄製馬具等の出土遺物から、馬の飼育等に係る遺跡と考えることも可能である。本遺跡は先述の久村地域に残る仏像等と同様、三浦氏入部以前の有力層の存在を示唆している。ちなみに長元元年（1028年）には東京湾対岸の上総国では平忠常の乱が勃発している。

・蓼原遺跡

横須賀市神明町に所在する標高2m前後の砂堆上に立地する遺跡である（第3図2）。多様な埴輪を出土した蓼原古墳で著名な遺跡であるが、JK13グリッドで小規模な土器溜まりが検出され、ロクロ成形の椀11点（第7図1～11）が出土した。8を除き口径14cm前後・底径6～7.2cm・器高4～4.7cmで、8は底径が広くやや浅身である。いずれもロクロ目が顕著で口縁部は内湾し、内面の断面形は半球状を呈し、体部下端部～底部外周の器壁が厚くなる点等が特徴的である。なお、報文では器面に灰色物質付着とあるが、無彩・無処理である。なお、12は同グリッド出土の内黒土器片であるが、出土状況は不明である。他に共伴遺物が無く時期を特定できないが、鎌倉出土の12世紀後半から末葉頃とされる土器類の中に近似した資料が散見されるが、小皿が確認されないことからも、年代的にはこれらと佐原泉遺跡出土土器との間に置かれる土器と想定される。



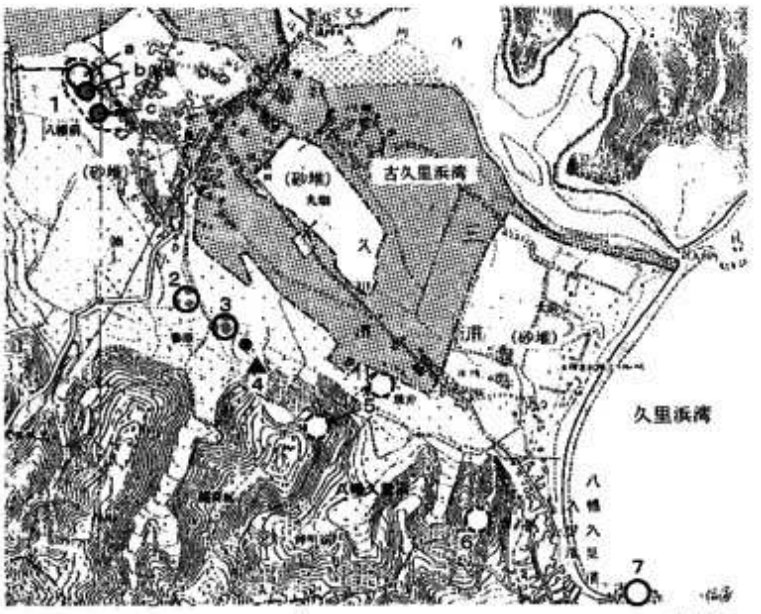
第7図　蓼原遺跡 JK13 グリッド土器集中箇所出土土器実測図〔1:6〕
（大塚他 1987 より一部改変して掲載）

（2）中世初期前後の遺跡と出土遺物

第3図に示したとおり衣笠・大矢部地域から久里浜地域に至る旧道沿いの地域には中世初期前後の遺跡や寺社等が多数分布している。その分布をやや詳細にみると北西端の衣笠城跡から久里浜湾口に向かって、衣笠城跡周辺地域→大矢部地域→岩戸地域→久村地域→久里浜（旧八幡久里浜）地域等の遺跡集中地帯が認められ、湾口部には住吉神社（旧栗濱大明神）がある。久村地域については先述したとおりであるが、以下、久里浜地域と衣笠から大矢部・岩戸・佐原地域とに分けて、各地域の様相を検討することとする。

①久里浜地域

第8図は久里浜地域の中世遺跡・寺社等の分布図である。地形図のベースは第3図同様、明治39年測量の一万分の一地形図で、江戸時代に新田開発が行われた内川新田部分を網点で示してある。この部分は少なくとも中世初期には水域であったと考えられる地域である。詳細にみると久里浜湾口部と八幡神社周辺の地域に標高3m前後の砂堆（それぞれ砂堆Ⅰと砂堆Ⅱとする）が発達しており、両砂堆間の入海にある丸畑地域が島状に離水していた可能性がある。該期の主な遺跡は砂堆Ⅱに立地する八幡神社遺跡（第8図1）と入海南岸の蓼原東遺跡（第8図3）であるが、想定される当時の環境では両地域とも入海に近接した場所であったと考えられる。また、当地域の寺社で中世初頭に存在した可能性があるのは八幡神社（第8図1）と住吉神社（第8図7）のみである。八幡神社は近世八幡村の鎮守で、養老4年（702年）勧請の社伝を持ち、境内や周辺部から中世初頭前後のかわらけが出土している。住吉神社は近世久里



1．八幡社遺跡
　a 社務所・町内会館地点・他
　b 八幡神社前地点
　c 久里浜中学校地点
2．蓼原遺跡
3．蓼原東遺跡
4．栗巌寺銘墓石群
5．栗巌寺跡推定地
6．伝「高山館跡」推定地
7．住吉神社（栗濱大明神）

（原図は陸地測量部、明治39年測量、一万分の一「久里浜」）

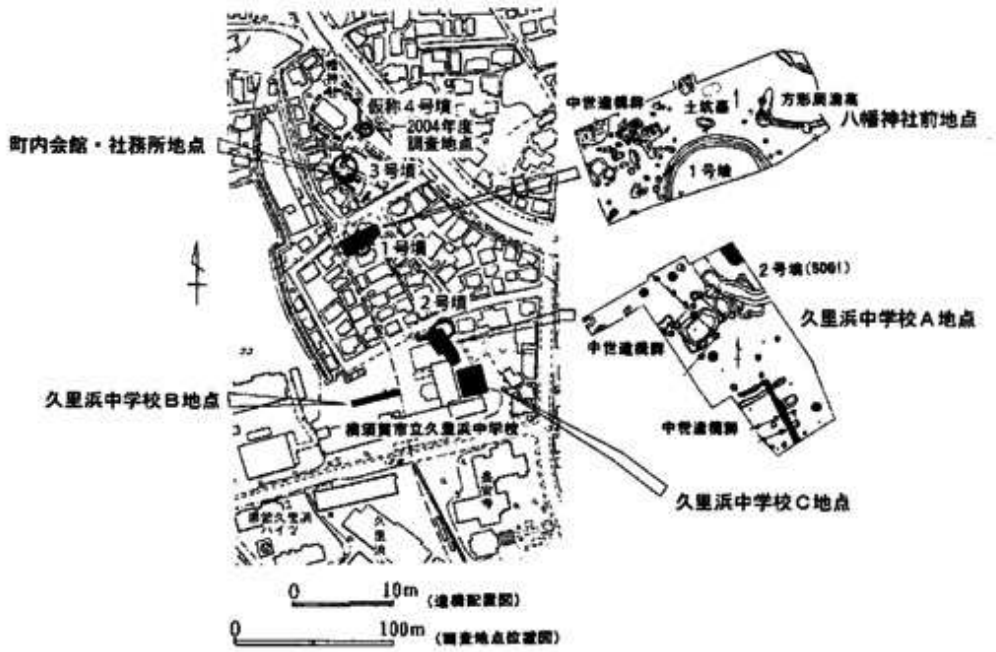
第8図　久里浜地域の中世遺跡分布図［1:20,000］

浜村の鎮守であるが、寿永元年（1182年）に源頼朝が妻正子の安産を祈願して神馬を奉納したと吾妻鏡に記された「栗濱大明神」である。当地域には確実に中世初頭まで遡る寺院は確認されていないが、北西側に隣接する久村地域では平安仏があったとされる寺院跡が複数所在しており、久里浜地域とは一体の地域であったかと思われる。ちなみに治承4年8月に衣笠合戦に敗れた三浦義澄以下の一党が船に乗り安房の国に逃れた場所は、延慶本『平家物語』では「栗濱の御崎」とされている。

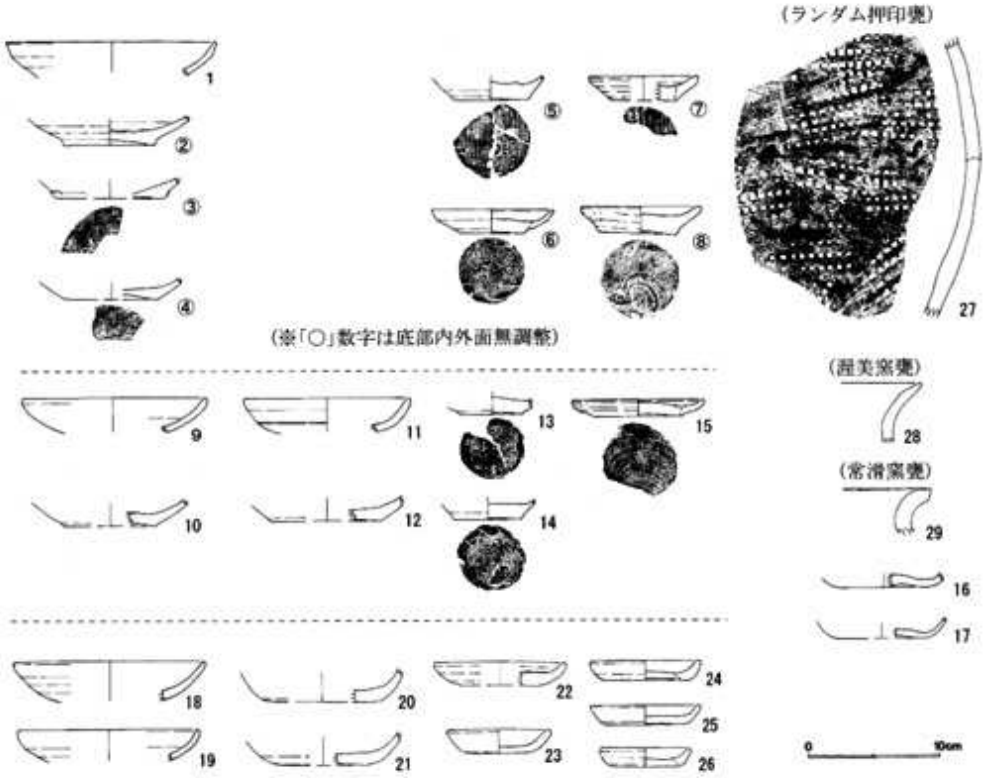
・八幡社遺跡

横須賀市久里浜2丁目の標高3m前後の砂堆上に立地する遺跡で、主に古墳時代後期の古墳群と中世の遺構群を中心とした遺跡である。昭和61年（1986年）に行われた八幡神社前地点の発掘調査を嚆矢として、複数地点で発掘調査が行われており、12世紀後半～16世紀頃までの掘立柱建物址、方形竪穴建物址、土坑・柱穴群などが発掘されている。

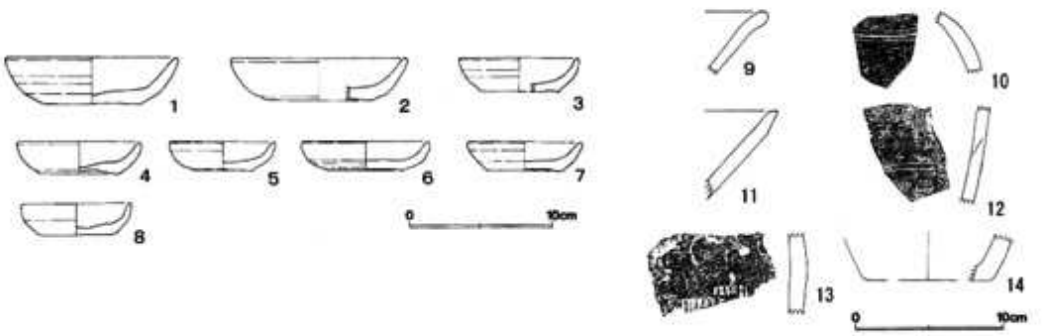
中世初頭前後の遺構・遺物が発見されているのは八幡神社境内の町内会館・社務所地点（中三川ほか1997）と八幡神社前地点（稲村1991）であるが、神社境内の町内会館・社務所地点では出土遺物の大半がかわらけで、陶磁器類は極めて少ない。八幡神社前地点では多数の柱穴群が発掘され、ロクロ成形で底部静止糸切り無調整のかわらけや、手づくねかわけ等とともに、ランダム押印の施された甕を含む常滑・渥美・古瀬戸などの陶器類や龍泉窯系青磁碗などが出土している（第10図）。これらの中で最も古相を呈する土器は1～⑧で、1～④が蓼原遺跡出土塊の器高を減じたような形態の一群で、⑤～⑧は小皿状の形態である。



第9図　八幡神社遺跡の調査地点と遺構配置図



第 10 図　八幡神社遺跡八幡神社前地点の主な出土遺物実測図〔1:6〕



第 11 図　八幡神社遺跡久里浜中学校Ａ地点の主な出土遺物〔1:6〕
（第 10 図・第 11 図は稲村 1991 より一部改変して掲載）

いずれも底部内外面無調整でロクロ目も顕著である。小皿形態のものは底部の器壁が極めて厚く、⑤・⑦は静止糸切りである。これらは鎌倉国宝館や千葉地東遺跡等から出土している極初期のかわらけとほぼ同時期と考えられる一群である。共伴する陶磁器類は明確ではないが、同一地域からランダム押印が施され、常滑編年Ⅰb期、生産年代で 1130 年～ 1150 年頃と考えられる常滑又は渥美の甕胴部片が複数出土している[5]。このほか本地点では第 10 図に示したとおり、概ね 14 世紀代頃までのかわらけや龍泉窯の鎬連弁文碗や渥美・常滑窯の甕等が出土し

ている。

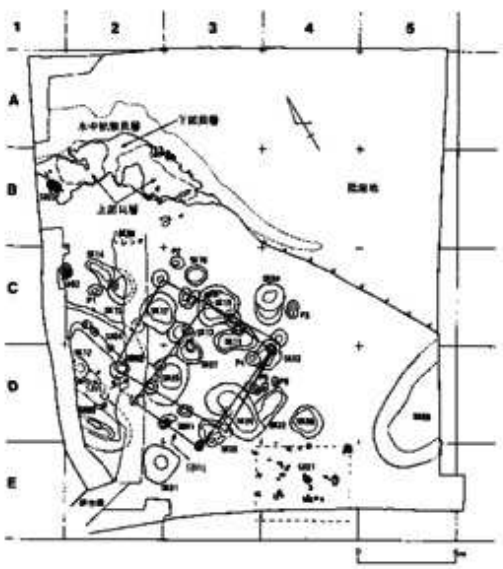
八幡神社前地点南方の久里浜中学校A地点（稲村 1991）では、小規模な掘立柱建物跡や柵列、方形竪穴建物跡などが検出され、常滑Ⅰ類の片口鉢片や三筋壺片等とともに、14世紀代を中心とするかわらけ等が出土している（第11図）。なお、平成23年（2011年）には隣接する久里浜中学校C地点が発掘調査され、方形竪穴建物址や土坑群・柱穴群等が検出され、16世紀代を中心とするかわらけや陶磁器類が出土している。また、古墳時代の人骨を伴う平面舟形の石棺墓も検出され、先端部に使用痕のある泥岩製の砥石が置かれていた。詳細は検討中であるが、本遺跡と海との関連を強く示唆する遺物である（中三川 2013）。

中世遺跡としての八幡神社遺跡は、その遺跡範囲のごく一部が発掘調査されただけであるが、時期的には遺跡北部の八幡神社周辺地域で、遅くとも12世紀後半には形成され、以後時期が下るに従いその中心をより南方に移動しているように見受けられ、遺跡南側に位置する久里浜中学校C地点の16世紀代の遺構・遺物は近世の八幡村に繋がる遺構・遺物と考えられる。この点は後述する蓼原東遺跡が八幡神社遺跡とほぼ同時期に始まるが15世紀後半に断絶している状況とは大きく異なっている。また、八幡神社遺跡の出土遺物は、後述する蓼原東遺跡で多量に出土した漁具類や調理具である鉢類の出土量が極めて少なく、出土遺物に占めるかわらけの比率が高いなど、生産や日常生活に関わる遺物が僅少な点が特徴的である。その傾向は八幡神社境内や八幡神社前地点で顕著である。

・蓼原東遺跡

横須賀市神明町に所在する低湿地帯に面した標高2ｍほどの砂堆に立地する遺跡である。平成4年（1992年）に発掘調査され、453㎡と狭い調査面積ながら12世紀末頃から15世紀代までの掘立柱建物址・土坑・柱穴等と、15世紀に形成されたイボキサゴ・アサリ・ハマグリなどの内湾砂泥底種の貝類やサザエなどを主体とする貝塚などが検出された。正に水際の遺跡である。調査地点に関する限り遺構の主体は15世紀であるが、より以前の土器・陶磁器類等も多数出土しており、その一部を第13～15図に示した。第13図（以下省略）①は静止糸切りで底部内外面無調整の小皿で、3は①同様の焼成であるが見込みに指ナデ痕がある。

これらの土器は八幡神社前地点の第10図1

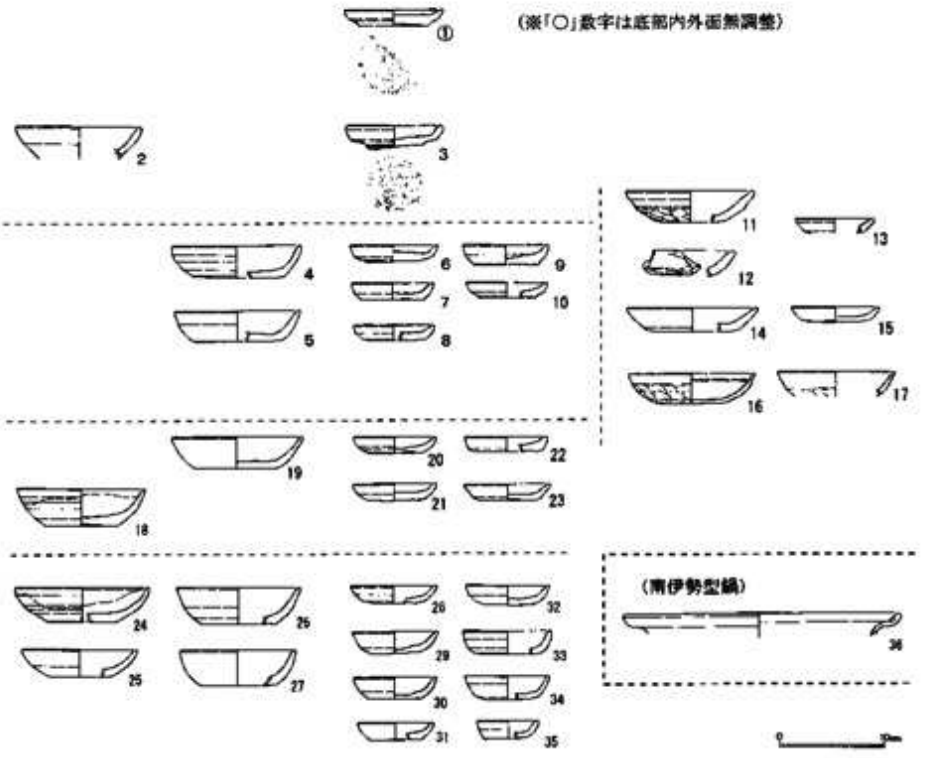


第12図　蓼原東遺跡遺構配置図〔1:300〕
（中三川ほか 1995より一部改変して掲載）

～14等とほぼ同時期である。

16・17を除く14～35は概ね13世紀～14世紀代のかわらけで、基本的には鎌倉同様の変遷課程を示している。また、11～15は手づくねかわらけ、36は南伊勢型鍋である。陶磁器類では37～45の白磁碗・皿類、青白磁の小皿（46）・梅瓶（47）、青磁盤（48・49）・碗（50～62）他の貿易陶磁器、渥美窯甕（63・64）、常滑窯甕（65～70）他、片口鉢では常滑Ⅰ類（71～79）・常滑Ⅱ類（81～87）・東播系（80）、古瀬戸の瓶類片他などが出土しており、八幡神社遺跡出土遺物と比べ極めて多様で、管状土錘や組合せ式釣針の軸、釣針・ヤス先他の漁労具類が多数出土しており、漁労遺跡の感があるが、単なる漁労遺跡とは即断しがたい遺跡である。

かつて、これらの土器・陶磁器類のうち中世前期の遺物に関し旧鎌倉市街地での出土様相との比較を試みたが、その結果、本遺跡出土遺物は土器・陶磁器類の構成比率では鎌倉海岸部の遺跡と近似し、かわらけを除く土器・陶磁器の構成比率では鎌倉武家屋敷地区の遺跡に近似する結果となったが、調査面積1㎡当りの遺物出土量では旧鎌倉市街地の遺跡の平均約59.3点に対し本遺跡は2.61点と、量的には隔絶した差異が存在することが明らかとなった。しかし鎌倉に隣接する中世の都市近郊村落と考えられる逗子市池子遺跡群では1㎡当りの出土点数は僅か0.01点に過ぎず、本遺跡が鎌倉周辺地域にあってはやや特異な性格を有する遺跡であったことが確認された（中三川1999）。このような傾向は漁労具や貝塚の存在から予想される漁

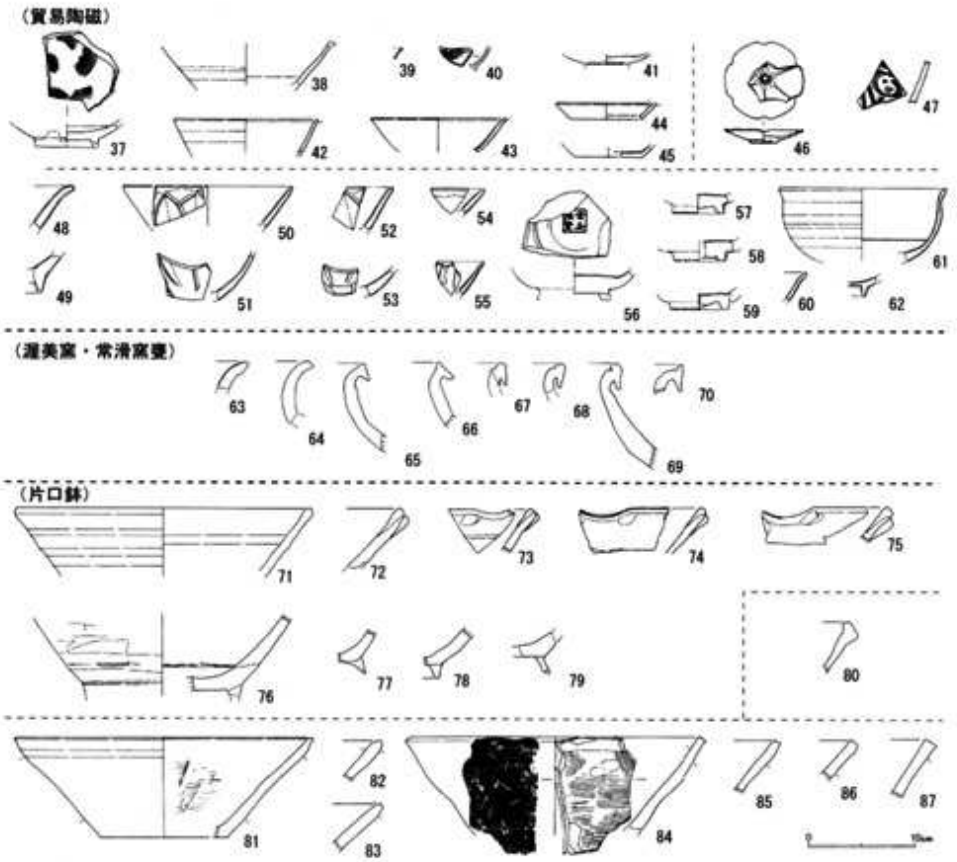


第13図　夢原東遺跡の主な出土遺物実測図①〔1:8〕（中三川ほか1995より一部抜粋）

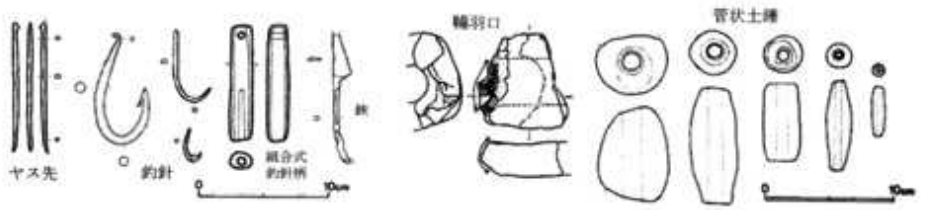
労遺跡としての印象とは必ずしも整合せず、本来は久里浜湾岸地域における拠点的遺跡の一部分が発見されている状況と考えられる。

以上、古久里浜湾岸の砂堆上に立地する八幡神社遺跡と蓼原東遺跡の状況と概観したが、これらの遺跡は平安仏を有した丸山不動堂や千手院があった久村地域や久里浜湾口部の住吉神社周辺地域を含め、古久里浜湾の存在を前提として場の機能を分担しつつも密接な関連をもった一連の遺跡群として機能していた可能性が考えられる。

また、その時期は現時点での出土遺物からは概ね12世紀後半頃からと考えられるが、蓼原遺跡から出土した土師器椀（第7図）の存在や、久村地域に残る平安時代後期の仏像群の存在



第14図　蓼原東遺跡の主な出土遺物一側図②〔1:8〕（中三川ほか1995より一部抜粋）



第15図　蓼原東遺跡の主な出土遺物実測図③〔1:8〕（中三川ほか1995より一部抜粋）

を考慮すると、その形成時期はより遡る可能性も考えられる。

②衣笠・大矢部・岩戸地域ほか

衣笠城跡とその関連遺跡と薬王寺やぐら群及び満願寺については後述するとして、まずは当地域の主な遺跡と寺社等について概観する（第16図）。

大矢部地域西北の丘陵地帯が衣笠城跡とされ、城跡の東南方、大矢部の沖積低地西端部には満昌寺、薬王寺跡と薬王寺やぐら群、清雲寺跡などがあり、大矢部の沖積低地中ほどの北方の谷戸奥に円通寺跡と深谷やぐら群がある。

円通寺は永保3年（1083年）頃までに三浦氏初代とされる為通[6]が創建したと伝わり、南宋時代の作で現在は清雲寺にある「木造観音菩薩坐像」が祀られていた。現在は廃寺で詳細な位置や規模等は不明である。円通寺背後の丘陵斜面には深谷やぐら群がある。これまでに約20基のやぐらが確認されている。最上部にあるやぐらは切妻造りの家形を呈する前室と後室の2室からなる複室構造で、現在は清雲寺にある三浦為継・義継墓とされる五輪塔が安置されていたとされる。前庭部には「左衛門尉平盛信」が「先考」の十三回忌供養のため「文永8年（1271年）」に建てたと銘文に刻まれた板碑があった。「平盛信」とは三浦大介七男の佐原義連の孫光盛の子佐原盛信に、「先考」は父の佐原光盛に比定されている。佐原盛信は翌文永9年（1272年）の「霜月騒動」に関わり自害している。盛信の居館が佐原にあったとも伝わるが、宝治合戦後に三浦氏宗家を継承した佐原系三浦氏一族の、本宗家継承の意思表示ともいえる板碑である。

青雲寺は天仁元年（1108年）頃までに三浦為継[7]が創建したとされ、本尊は鎌倉時代中期以前の作で矢取り不動とも称される「木造毘沙門天立像」である。江戸時代頃までは現在地北側の丘陵裾部にあった。現境内には三浦氏の初代為通・為継・義継三代の墓とされる3基の五輪塔や「文永八年（1271年）銘板碑」等がある。為継・義継墓とされる五輪塔と上記板碑は昭和14年（1939年）に深谷やぐら群から移設されたものである。

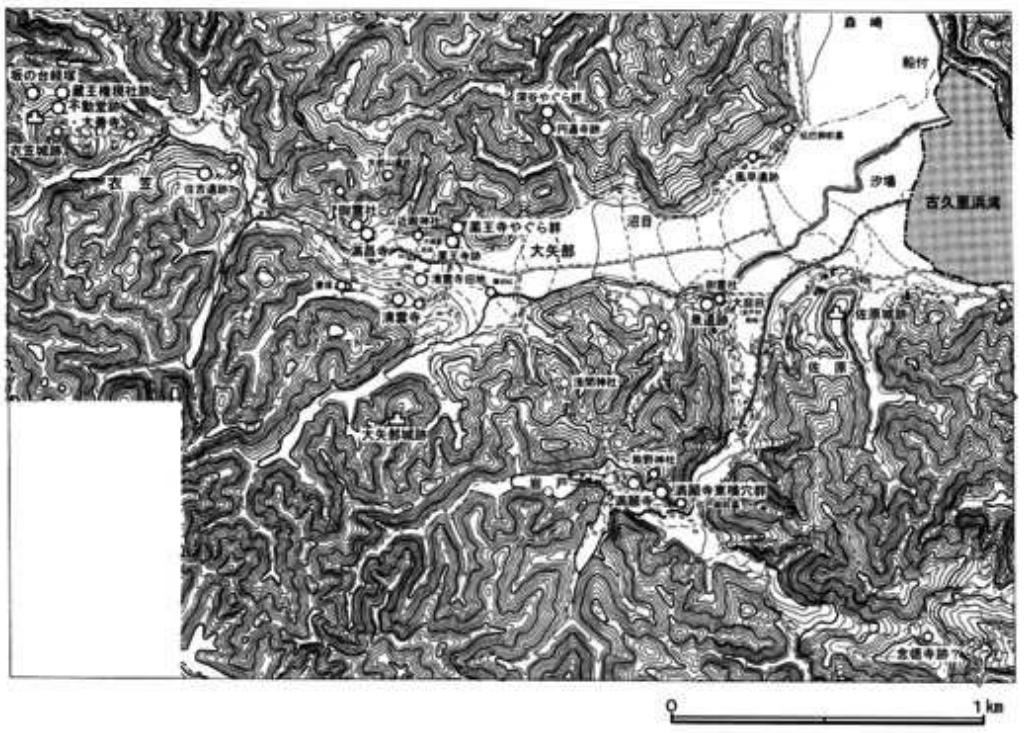
満昌寺は建久5年（1194年）に源頼朝が三浦義明追福のため大矢部に一堂建立を発願したとされる寺院で、建暦2年（1212年）には和田義盛が満昌寺本堂背後の丘陵斜面地に御霊社を建立し、後に鎌倉時代後期の作とされる「木造三浦義明坐像」が祀られた。御霊社の背後には「三浦義明墓」とされる宝篋印塔がある。なお、満昌寺背後の御霊社に隣接した丘陵斜面部からは凸面縄叩きの平瓦片が数点出土しているが、同様な瓦が後述する満願寺出土瓦のなかにも少量認められ、何らかの関連が窺われる。

薬王寺は建暦2年（1212年）に和田義盛が父杉本義宗、叔父三浦義澄等の菩提のため創建したと伝わり、明治9年（1876年）頃廃寺となった。現在「三浦義澄墓」とされる石塔が残されている。ちなみに、旧境内地からは1210～1220年頃と考えられる和泉・河内産の蓮華文軒丸瓦・巴文軒丸瓦を含む中世瓦片が採集されている（竹沢ほか1990・山崎2000）。

以上のとおり中世期には矢部郷と称されたと考えられている大矢部地域には、三浦為通以来の由縁を残す寺院や墓（廟所）が多数存在しており、正に初期三浦氏の本貫地というに相応し

い地域であり、為通以来の三浦氏宗家の居館が同地域に展開していた可能性は極めて高いと考えられる(8)。しかしながら昭和43年(1968年)に始まる大規模な区画整理事業や宅地化等のため、小規模な試掘・立会調査が若干行われているものの、現状では考古学的な実態は不明とせざるを得ない状況である。

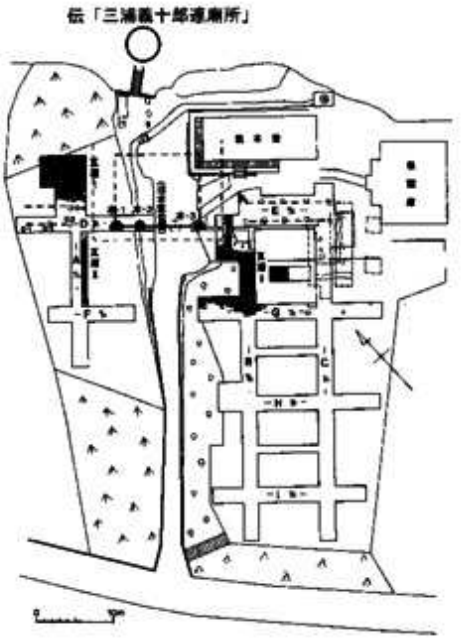
大矢部の沖積低地東端部南側が佐原地域で、佐原十郎義連の館跡とも言われる佐原城跡がある。佐原城跡では数次の発掘調査が行われているが、古代末～中世初頭とされる確実な遺構・遺物は出土していない(上田ほか2002・依田ほか2008等)。なお、岩戸川西岸に泉遺跡が所在する。この地域は古久里浜湾の最奥部に近接すると共に、大矢部沖積低地の入口を押さえる位置にもあるが、同時に南東方向に佐原から岩戸へ向かう谷戸の入口部でもある。この谷戸が衣笠断層系の活断層によりT字状に枝分かれした谷戸部分が岩戸地域で、大矢部から久比里に繋がる古道との交差地点に佐原十郎義連が創建したと伝わる満願寺が位置している。岩戸地域は佐原地域から繋がる谷戸の奥部ともみえるが、衣笠・大矢部地域と久里浜・久比里地域を繋ぐ古道の中間点で、久里浜側からみれば、大矢部方面と佐原方面分岐する経路の要衝を押さえる位置でもある。佐原義連の居館の位置は不明であるが、満願寺近辺にあった可能性も高い。また佐原城跡の西方、泉遺跡東側の谷戸部分に「大庭田」という旧岩戸村の飛び地が存在した。同じ旧岩戸村に所在する満願寺との関連を考えると、この場所もまた有力候補地となろう。



第16図　衣笠・大矢部・岩戸地域他の中世遺跡分布図〔1:25,000〕

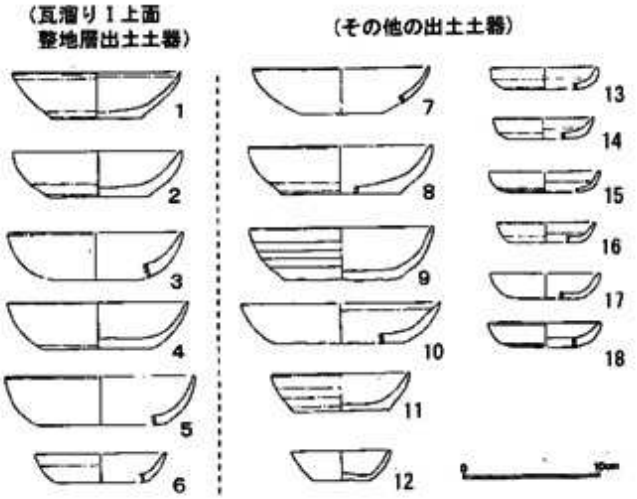
・満願寺跡

佐原十郎義連の創建（1185～1207年頃）とされる寺院で横須賀市岩戸1丁目に所在する。背後の斜面平場に佐原十郎義連墓と伝わる五輪塔があり、当所にある薬師堂に慶派の作とされる鎌倉時代初期の「木造菩薩立像と木造地蔵菩薩立像」と鎌倉時代末頃の「木造不動明王立像・毘沙門天立像」等が祀られていた。



第17図　満願寺跡遺構配置図〔1:1,250〕
（小出他1992より一部改変して掲載）

昭和63年（1988年）の試掘調査で礎石や瓦溜め等が発見された（小出ほか1992）。礎石の根石に創建期の瓦が混在しており、この建物自体は創建当初の遺構ではないが、名古屋市八事裏山窯産の瓦（第19図）を含む多数の軒先瓦や平瓦・丸瓦・鬼瓦片等が出土しており、瓦葺きの堂が存在したことは確実である（第17図）。第18図は出土したかわらけの一部である。これらは全体的に薄手で体部が内湾気味に開く形態で概ね14世紀を中心とした時期であるが、隣接する満願寺東横穴群からは13世紀前半代と考えられる手づくねかわらけや南伊勢型鍋片等が出土しており（稲村1998）、第19図の八事裏山窯産の軒先瓦や慶派諸仏を含め、満願寺の創建期を示唆している。

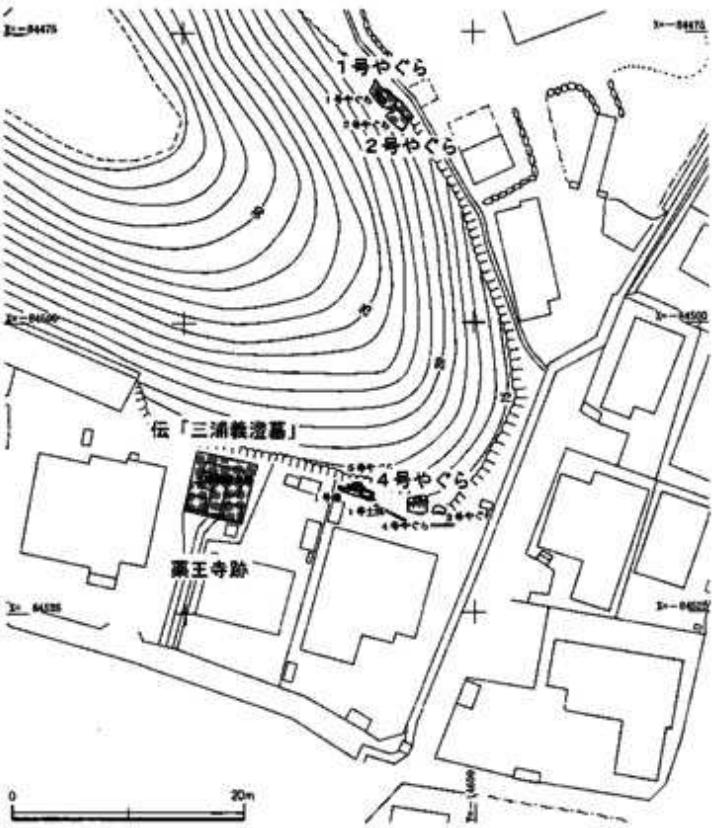


第18図　満願寺跡出土土器実測図〔1:6〕
（小出他1992より一部改変して掲載）

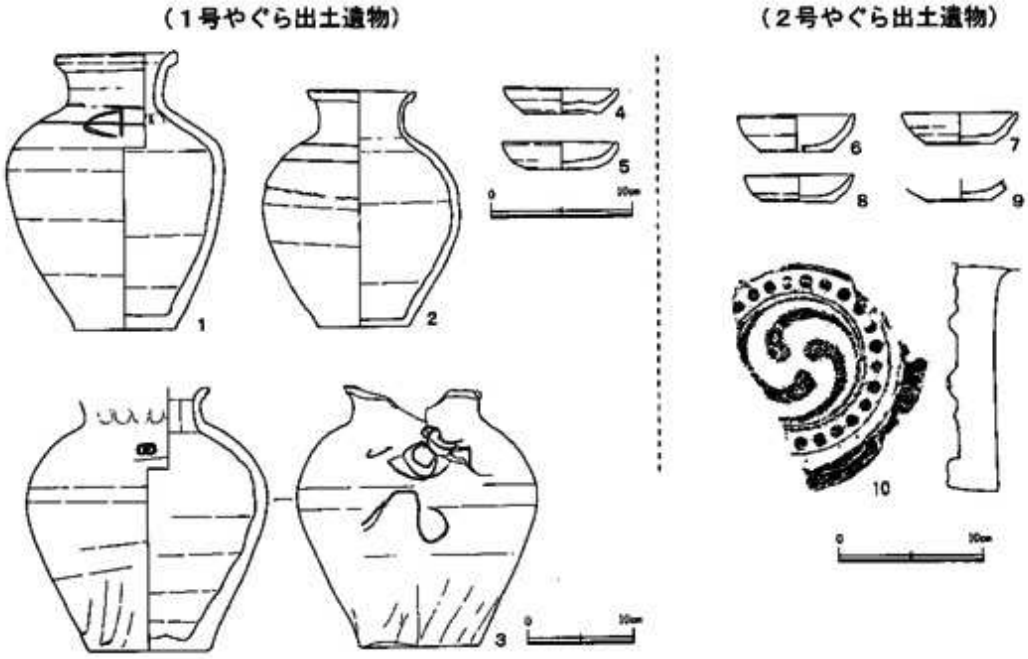
第19図　八事裏山窯産の軒平瓦

・薬王寺やぐら群

横須賀市大矢部1丁目に所在するやぐら群である。遺跡の立地する丘陵前面に和田義盛が建暦2年（1212年）に建立したと伝わる薬王寺跡と三浦義澄墓と伝わる石塔がある（第20図）。平成15年(2003年)に5基のやぐらが発掘調査され、1号やぐらと2号やぐらからややまとまった遺物が出土している（第21図）。第21図（以下略）1～5は1号やぐら出土で、1～3は常滑の玉縁口縁壺、4・5はかわらけである。6から10は2号やぐら出土で、6～9がかわらけ、10は三巴文軒丸瓦片である。調査者は1号やぐら出土遺物を14世紀初頭～前半に、2号やぐら出土遺物を14世紀前半～中葉頃と想定している。三巴文軒丸瓦片については同時に出土した軒平瓦片を含め、これまで薬王寺跡から採集されている瓦とは異なる特徴を持ち磨滅も少ない点等から、2号やぐら前面付近にも瓦葺き建物が存在した可能性が指摘されている。また、4号やぐらでは板碑を設置した痕跡が確認されており、かつて伝「三浦義澄墓」近くにあり、現在は満昌寺が所蔵する元應2年（1320年）の紀年銘のある武蔵型の双式板碑2基が本来は当所にあった可能性が指摘されている（宍戸ほか2004）。これらの遺構・遺物は直接創建期の薬王寺に係る資料ではないが、薬王寺が鎌倉時代末期前後にも寺勢を維持していたことを示す遺構・遺物である。



第20図　薬王寺やぐら群遺構配置図（1:800）



第21図　薬王寺やぐら群出土遺物実測図〔1:6・1:8〕
（第20図・第21図は宍戸他2000より一部改変して掲載）

・衣笠城跡

横須賀市衣笠町の丘陵に所在する。大矢部地域を貫流する矢部川の上流、深山川と大谷戸川とに挟まれた丘陵一帯が衣笠城跡とされており、新編相模国風土記稿（第22図）で大手口とされる現大善寺墓地と本丸跡とされる最上部の平場が横須賀市指定史跡となっている。城跡内にある大善寺の縁起によれば、前九年の役の際に源頼義に従軍して戦功のあった為通が三浦の地を与えられ、康平年間（1058～1065年）にこの地に城郭を築き三浦氏と称したと伝わる。治承4年（1180年）8月に源頼朝の挙兵に呼応した三浦一族が立て籠もり、畠山重忠ら平家方の大軍を迎えて攻防し三浦大介義明が死去したと『吾妻鏡』等に記された合戦は、いわゆる「衣笠合戦」として名高い。三浦半島地域の中世城郭研究の端緒を開いた赤星直忠は、平安時代末期の理想的な都城は三方を馬蹄状の連丘に囲まれた谷全体を城郭とし、その中心を最奥部に置くと考え、大矢部から衣笠の谷を取り巻く馬蹄状連丘の最奥部に位置する「衣笠城址」こそ平為通＝三浦為通から三浦大介義明までの三浦氏宗家居館所在地に相応しいと考えたが（赤星1955ほか）、近年では異論も多数提起されている(9)。

衣笠城跡では横浜横須賀道路建設に伴い昭和55年（1980年）に行われた発掘調査（赤星ほか1983）を嚆矢とし、その後も小規模ながら数次に及ぶ発掘調査や試掘調査が行われている。坂の台経塚を除き、いずれも城跡の中核部と一般的に考えられている大善寺が所在する平場

（第22図の二の丸）や最上部の平場（第22図の本丸）以外の場所であり、明確に平安時代末～鎌倉時代前葉と考えられる遺構・遺物は確認されていない。

衣笠城跡内で中世期の遺物が出土しているのは、現状では坂の台経塚と坂口やぐらのみである。

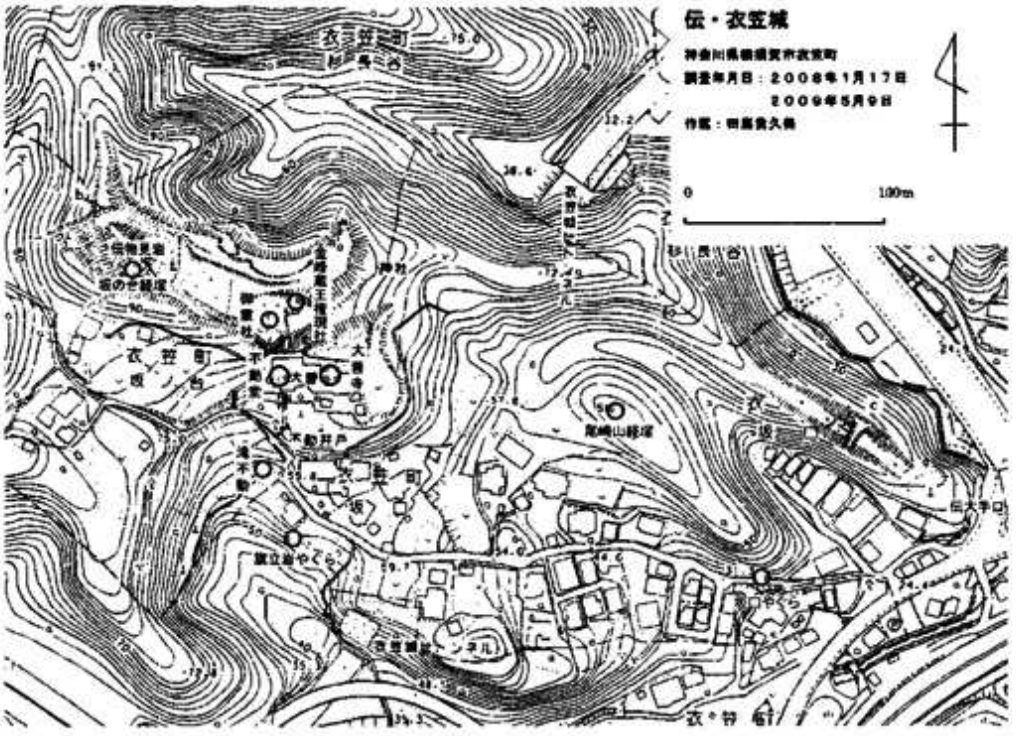
坂の台経塚は衣笠城跡最上段平場の頂部近くの「物見岩」といわれる露岩の南側裾部にある経塚で、大正7年（1918年）に経筒と陶器片が出土し、その翌年の三浦大介顕彰を目的とした公園造成の際にも6点ほどの遺物が出土した。各遺物の出土状況は不明だが、経塚の形態としては岩陰に埋置するような形態である。出土遺物は青銅製鋳造被蓋の経筒、景徳鎮窯産と考えられる唐子形の青白磁水滴、青白磁合子、草花文蝶鳥鏡、鉄製品の火打鎌、刀身などで、青白磁唐子人形水滴は全国的にみても経塚出土の遺物としては異色で、青白磁製品としても優品とされる（藏田1952・53・64）。1983（昭和58）年に物見岩南裾の再発掘調査が行われ、埋め土から青白磁碗の小片と刀子片等が出土した（赤星1980・87）。

坂口やぐらは昭和時代の道路拡幅工事により発見された遺跡で、かわらけを蓋に利用し焼骨砕片で満たされた古瀬戸四耳壺が採集されているが、やぐらの形状や遺物の出土状況は不明である。また尾崎山経塚からは写経石状の礫が出土したとされるが、経文はなく詳細は不明である。次に、衣笠城跡内に存在した寺社等を概観してみる。

江戸時代に本丸跡と認識された城跡最上段の平場には、その頂部付近の露岩の裾に既述の坂の台経塚があり、最上段平場の西側部分に金峯山蔵王権現社と御霊社等があった（第23図）。この平場は大正時代に行われた公園整備により桜樹を植えるために削平を受けている。現在見られる中央部の緩斜面地形や北側の土塁状の掘り残し地形はその際に形成された可能性が高い。しかし、現大善寺の背後に位置する東南側部分は方形の平坦地で、その北側部分に金峰山蔵王権現社の社殿跡かと思われる基壇上の高まりが現存している。なお、この平坦地からは10世紀前半前後と考えられるロクロ土師器坏片が採集されている[10]。

大善寺は寺伝によれば天平元年（728年）、僧行基の開創と云われ、上記の金峰山蔵王権現社の別当寺でもあった。明治時代初頭までの本尊は「木造阿弥陀三尊像」で、勢至菩薩像を除き12世紀頃の作とされ、横須賀市内では久村地域に残る2例と共に数少ない平安仏である。近年、同寺に保存されていた「木造毘沙門天立像」が関東地方では遺存例のない鎌倉時代初期に作られた中尊寺金堂様式の仏像であることが確認された。奥州合戦に加わり平泉の寺社を実見し、鎌倉市二階堂の永福寺建立の別当を務めた三浦義澄らの関連が指摘されている（上杉孝良2012）。また、大善寺のある平場は新編相模国風土記稿の挿図（第22図）にもあるとおり、江戸時代には衣笠城の二の丸と認識されていたが、大善寺の西側には不動明王像が祀られていた不動堂があった。これらの寺社は行基による天平元年の創建とは考え難いが、金峰山蔵王権現社や坂の台経塚等の存在や大善寺に残る平安仏の存在などから、山岳宗教の霊場あるいは聖地として、平安時代後期頃には存在していた可能性が高い。

第 22 図　新編相模風土記稿に描かれた衣笠城跡



第 23 図　衣笠城跡の地形と遺跡分布図（1:4, 500）（田嶌 2009 より一部改変して掲載）

12世紀とされる坂の台経塚出土遺物や大善寺に残る諸仏像等の存在は、時期的にみても三浦氏との関連を抜きに考えられないが、久村地域に存在した寺社等と同様、三浦氏入部以前から存在した寺社、霊地であった可能性も考えられよう。久村地域と同じく大矢部地域とは対照的に衣笠城内に明確に同氏の創建とされる寺社も一族の墓所も存在しない点は極めて示唆的である。

以上のとおり、現状では衣笠城跡とされる地域には中世城郭と明確に認識できる遺構は確認できず、江戸時代に衣笠城跡の本丸・二の丸跡と認識された平場には平安時代に遡る寺社が存在していた。同時に坂の台経塚や大善寺の「木造阿弥陀三尊像」・「木造毘沙門天立像」等の存在から、三浦氏が当地域を伝統的な霊場や聖地として重視し尊重していたと考えられる。このような「場」である「衣笠城跡」で治承4年（1180年）8月に行われたいわゆる「衣笠合戦」が、どのように展開したかは、残念ながら考古学的には確認できない。当時の三浦氏にとっても聖地であったであろうこの地に敢えて立て籠もり一戦を交えた可能性もあるが、斉藤慎一氏の指摘（斉藤2006）どおり、大矢部地域に存在したであろう居館や寺社等を中心に「城」を構え防戦した可能性も否定できないのが現状と言うべきであろう。

4．まとめ

中世前段ともいえる11世紀前葉頃から12世紀前半以前の遺跡は数少ないが、佐原地域の低舌状台地上には泉遺跡があり、古久里浜湾南岸の砂堆上に蓼原遺跡がある。平安時代後期の寺社・仏像等は久村地域と衣笠城跡内で確認されている。久村地域については平安仏等の存在から平安時代後期には既に地域の拠点的場であった可能性が高い。「衣笠城跡」内の金峰山蔵王権現社の存在からは、当地が早くから山岳修験の霊場として認識されていた可能性を指摘できる。11世紀後半以降、大矢部地域では円通寺や清雲寺などが創建され、三浦氏の「墓所」も残されており、同時期の三浦氏宗家の居館も大矢部地域に存在した可能性が高い。12世紀とされる坂の台経塚は、その出土遺物の内容からしても願主が三浦氏であった可能性が高く、同時期前後には三浦氏が「衣笠城跡」内の主要部を一族の聖地として認識し、関与を強めていったことが窺われ、大善寺に残る諸仏も三浦氏に係る仏像と考えられている。

12世紀後半以降から鎌倉時代にかけては、古久里浜湾南岸湾口近くの砂堆上に八幡神社遺跡や蓼原遺跡等の港湾的機能が窺われる遺跡が展開し、岩戸地域でも佐原十郎義連創建とされる満願寺に係る土器や瓦等が出土している。治承4年（1180年）の「衣笠合戦」の実情については、「衣笠城」の実態を含め詳細は不明であるが、大善寺には奥州合戦後に三浦義澄らが寄進したと考えられる鎌倉時代初期の中尊寺金堂様式の仏像である「木造毘沙門天立像」があり、三浦氏宗家が前代に引き続き当地域を重視していたことも確実である。「衣笠合戦」後、大矢部地域には薬王寺や満昌寺等が相次いで建立され、満願寺を含めた各寺に三浦氏の「墓所」とされる石塔が残されている。このような状況から、同時期もこれらの地域が三浦氏宗家や佐原

氏等の拠点、居館等の所在地であったと考えられる。

あらためて第３図に示した中世期の古久里浜湾周辺地域の遺跡・寺社等の分布状況を確認する。想定される当時の環境では、古久里浜湾岸沿いの陸上交通は困難で、湾口部を押さえられた場合、古久里浜湾内から東京湾への海上交通も容易に遮断されたと推測される。この場合、「怒田城」や「佐原城」も城郭としての積極的な意味を持たないであろう。

このような観点から再度第３図をみると、衣笠・大矢部から岩戸・久村を経て久里浜へと至る地域に仮称「古久里浜湾西岸中世遺跡群」が展開する姿は、久里浜地域を津や市の機能などをもった港湾拠点として理解した場合、極めて合理的な姿として理解できる。

遺跡の状況からみて八幡神社遺跡や蓼原東遺跡の周辺地域は津や市の機能も想定される場であり、「水軍」の根本的構成要素である船や水主となり得る人材が存在していたと考えられる遺跡群である。「衣笠合戦」の後、三浦党が「栗濱」の御崎から船出したと伝わるのは、おそらく単なる文飾はではない。久村地域から久里浜地域は、主に大矢部地域に展開した三浦氏宗家の根拠地と一体となった港湾的な場として機能していたと考えられよう。また、岩戸に所在する満願寺は、単に佐原から続く谷戸奥にあるのではなく、久里浜地域から大矢部・佐原方面に至る経路の分岐点を抑える重要地点と評価できよう。「衣笠城跡」内に所在する寺社や経塚等は、三浦氏宗家の拠点である大矢部地域の西方にある山上の聖地として認識されていた可能性が高い。平安時代末から概ね宝治合戦頃まで、「衣笠城跡」頂部にある坂の台経塚から久里浜湾口の住吉神社（旧栗濱大明神）に至るまでの仮称「古久里浜湾西岸遺跡群」は、大矢部地域を核として、それぞれ場の機能を分担した一帯の遺跡群であったと考えられるのである。しかし、このような姿は為通以来の三浦氏に全てが始まるのでなく、ある時期に大矢部地域を拠点と定めた三浦氏が、久村地域や「衣笠城跡」内の寺社、泉遺跡や蓼原遺跡等の存在から窺われる、より前代から続く地域内の重要地点を取り込む形で形成された、広義の三浦氏本貫地の姿であったと考えられよう。

なお、三浦氏が律令制期に存在した古東海道駅路の経路上にあり、相模国最古級の寺院でもある「宗元寺」が存在し、近隣に御浦郡家の存在した可能性の高い横須賀市公郷地域ではなく、大矢部地域に拠点を定めた事情は不明であるが、当地域は地勢的に古東海道駅路や東京湾や相模湾に陸路で繋がり、なにより当時の古久里浜湾とは至近の距離にある。遠く相模国西部や東京湾対岸の安房・上総国にまで勢力を持ったとされる同時期の三浦氏にとっては理想的な本拠地であったと思われる。広義の三浦氏本貫地＝仮称「古久里浜湾西岸中世遺跡群」の様相は、海の豪族とも言われる三浦氏の本貫地として正に相応しい姿であると考えたい。

とは言え、現在のところ三浦氏本貫地の正に中核地域である大矢部地域に展開したであろう居館等の様相は全く不明である。大矢部地域には、三浦一族の杉本氏・和田氏の館跡とも考えられる鎌倉市の杉本寺周辺遺跡で発見された遺構群（馬淵ほか 2002）や、伊豆の国市韮山で明らかとなった北条氏の館跡（池谷 2010）のような遺構群が埋もれていると予想される。課題は

多いが、今後とも調査事例を蓄積し、少しでもその実態に近づければと考えている。

なお、本稿で取り上げた八幡神社遺跡八幡神社前地点と満願寺の発掘調査は故小出善治先生が発掘調査を担当し、当地域における中世遺跡研究の実質的端緒を切り開いた遺跡である。その後、先生はこれらの遺跡について多く語ることはなかったが、拙稿が多少とも先生の学恩に報いるものとなれば幸いある。

註

(1)縄文海進期以来、三浦半島東岸中部の現平作川流域は奥深くまで海域が発達し、その範囲を狭めつつ中世期においても内海状の地域があっても残されていた。自然地理学や地質学的には「古平作湾」（澤真澄ほか1994）と称されるが、本稿では通称の「古久里浜湾」を使用する。

(2) 当地域の中世遺跡群については幾つかの拙稿（中三川1997・1998・1999・2002・2003・2010・2012）の中で述べているが、いずれも各論考の一部として取り上げたものであり、今回は本地域そのものを課題とするものである。

(3) 陸地測量部発行の明治41年版一万分の一地形図をトレースして作成。古久里浜湾域は明治時代の海域に近世の内川新田を加えた範囲であるが、基本的には概念的図である。

(4) この道は現在でも徒歩で通行可能であり、昭和時代初期頃までは大矢部地域から久里浜地域に連絡する主要経路であった。

(5) 本資料については常滑市歴史資料館の中野晴久氏にかつて実見していただきご教示をえている。

(6) 三浦氏の系図は多々あるが「為通」＝「タメミチ」の表記は様々で、「桓武平氏」と「三浦氏」を系図上で繋ぐ架空の人物とする見方も有力である（近藤2012）。

(7) 文献等でも確認される実質的な三浦氏の祖。

(8) 三浦半島内で条理地割の存在が指摘されている地域は3ケ所ある（藤沢市教育委員会1997）が、大矢部地域の沖積低地もその一か所に当たる。その他は大矢部地域北方の平作川沖積低地と三浦市和田に隣接した沖積低地である。いずれも他地域と比較すれば狭小な面積であるが、三浦半島内では早くから水田開発が進んだ地域であったと考えられる。ちなみに、三浦為義は「三浦荘司」として『天養記』に登場している。「三浦荘」の名称は他に確認されず、存在が確実な「三崎荘」との関連が問題であるが、これらの沖積低地は「三崎荘」や「三浦荘？」の重要地域であったと思われる。また、少なくとも三浦氏が大矢部地域の沖積低地を開発あるいは再開発して自らの拠点としたことも確実かと思われる。

(9) 斎藤真一は、坂ノ台経塚や金峯蔵王権現社と別当大善寺・不動堂等が所在した横須賀市指定史跡「衣笠城跡」周辺地域を三浦一族の聖地としてとらえ、大矢部地域に三浦氏本宗家の館が存在し、治承4年の合戦も大矢部地域を中心に展開した可能性を強く指摘している（斎藤2006）。また、城郭史研究の立場からは現況の「衣笠城跡」を小田原北条氏に係る城郭遺構とする意見もあるが（田中1980）、明確な城郭遺構の存在を否定する見解も出されている（田嶌2009）。

(10) 筆者採集、底部回転糸切り無調整の坏片である（未報告資料）。わずか1点のみではあるが、当地に

何らかの施設が存在した可能性が窺える資料である。

引用・参考文献

赤星直忠 1955『三浦半島城郭史（上）』横須賀市史No.8 横須賀市博物館

赤星直忠ほか 1983『後山遺跡・衣笠城址』横浜横須賀道路埋蔵文化財発掘調査団

赤星直忠ほか 1987『衣笠城跡』横須賀市文化財調査報告書第15集横須賀市教育委員会

赤星直忠 1980「横須賀市衣笠、坂の台経塚」『横須賀考古学会年報』No.20

池谷初恵 2010『鎌倉幕府草創の地伊豆韮山の中世遺跡群』新泉社

稲村　繁 1991『八幡社遺跡群』横須賀市文化財調査報告書第21集 横須賀市教育委員会

稲村　繁 1998「イイモリ塚・満願寺東横穴墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報集VI』横須賀市文化財調査報告書第32集 横須賀市教育委員会

上杉孝良 2077 『改定 三浦一族 …その興亡の歴史一』横須賀市

上杉孝良 2009「第4編 彫刻」『新横須賀市史 別編文化遺産』横須賀市

上杉孝良 2012「第四節三浦一族の信仰と寺社」『新横須賀市史 通史編（自然・原始・古代・中世）』

上田　薫・木村吉行 2002『佐原城跡遺跡』かながわ考古学財団調査報告130

大塚眞弘ほか 1987『蓼原』横須賀市文化財調査報告書第13集（第1分冊）横須賀市教育委員会

川上久雄ほか 1998『衣笠城跡尾崎南地区遺跡』衣笠城跡尾崎南地区遺跡発掘調査団

木下　良ほか 1990『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会

蔵田　蔵 1953 a「青白磁経筒・合子」『ミュージアム』No.20　東京国立博物館

蔵田　蔵 1953 b「経塚遺宝」『ミュージアム』No.32 東京国立博物館

蔵田　蔵 1964「衣笠坂の台経塚出土品 経塚論（4）」『ミュージアム』No.154 東京国立博物館

小出義治ほか 1992『岩戸満願寺跡』横須賀市文化財調査報告書第25集横須賀市教育委員会

近藤好和 2012「第一章 第三節 三浦氏の登場」『新横須賀市史 通史編 古代・中世』横須賀市

斎藤真一 2006『中世武士の城』吉川弘文館

佐藤明生ほか 1991『茅山貝塚』横須賀市文化財調査報告書第23集 横須賀市教育委員会

澤　真澄・澤　祥・松島義章 1994「三浦半島平作川の完新世の古地理変遷」『第四紀研究』Vo33, No.21

宍戸信吾ほか 2004『薬王寺寺やぐら群』かながわ考古学財団発掘調査報告書176

竹澤嘉範ほか 1990『神奈川の中世瓦集成図録』横須賀考古学会

竹澤嘉範 1996「横須賀市大矢部近殿神社の掛け瓦」『横須賀考古学会年報』31

田嶌　貴久美 2009「三浦半島の城」『中世城郭研究』第23号 中世城郭研究会

田中祥彦 1980「衣笠城跡」『日本城郭大系』第4巻 新人物往来社

中村　勉ほか 1989『佐原泉遺跡』泉遺跡発掘調査団

中三川　昇ほか 1995『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第5集 横須賀市教育委員会

中三川　昇ほか 1997「三浦半島地域における歴史時代土器の研究Ⅰ」『横須賀考古学会研究紀要Ⅰ』

中三川　昇ほか 1997『八幡神社遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第31集 横須賀市教育委員会

中三川　昇 1998「近年の発掘調査からみた中世の三浦半島」『三浦一族研究』第2号 横須賀市

中三川　昇 1999「三浦半島における中世前期の貿易陶磁について」『貿易陶磁研究集会　鎌倉大会資料集』貿易陶磁研究会・鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所

中三川　昇 2003「横須賀市平作川低地の環境変遷と中世の開発について」『国立歴史民俗博物館研究報告第118号』

中三川　昇 2010「横須賀市域の様相」『相模国の中世と鎌倉』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

中三川　昇 2012「三浦一族研究の現状と課題 古代」『三浦一族研究』第15号横須賀市

中三川　昇 2013「八幡神社遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報集ＸＸ』横須賀市文化財調査報告書第50集 横須賀市教育委員会

馬淵和雄ほか 2002『杉本寺周辺遺跡』鎌倉市教育委員会

野内秀明ほか 1999『吉井城山』横須賀市文化財調査報告書第34集 横須賀市教育委員会

山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊

依田亮一ほか 2008『佐原城跡（2）』かながわ考古学財団発掘調査報告書228

愛知県 2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』

愛知県 2012『愛知県史 別編窯業3 中世・近世 常滑系』

藤沢市教育委員会 1997『神奈川の古代道』

横須賀市史編纂室編 2004『新横須賀市史 資料編 古代・中世Ⅰ』横須賀市

横須賀市史編纂室編 2010『新横須賀市史 別編文化遺産』横須賀市

神奈川県の石戈

岡本孝之

1はじめに
2小田原市天神山石戈の発見
3天神山石戈の観察と出土地点
4東日本の石戈集成
5東日本石戈の検討
6神奈川県天神山石戈発見の意義

1．はじめに

神奈川県小田原市天神山で石戈が採集されていることを知ったのは2006年のことで（岡本2006）、神奈川県の考古学史にある横浜考古学研究会などの活躍（岡本2010ｂ）を調べるため、東京考古学会の『考古学』誌の動向・日記欄を読み直した時であった。『大磯町史』考古編の弥生時代に神奈川県内発見の磨製石剣など26点の集成図をまとめ、そこに提示した（岡本2007）[註1]。

2013年7月に、東日本の磨製石剣などを調べ直している際に、町田市立博物館の『石の系譜』展の図録コピーの埼玉県の有孔石剣の写真と同じページにある石戈が目に止まった。似ていると直感したが、マイクロフィルムからコピーした写真は不鮮明で確定できなかった。伝九州とあるので出土地は確認されていないことは、大きな期待感を抱かせるに十分であった。そこで改めて小田原市立図書館に赴き、新しい複写を得て検討することにした。マイクロリーダーは故障していたため、綴じられた新聞から直接コピーすることができた（第1図）。同時に東日本の石戈について点検し、天神山石戈の考古学的意義を明らかにしたく、改めて図を収集することを始めた。

なお、2013年8月10日の西相模考古学研究会で天神山石戈の存在と明治大学石戈との一致について発表した。明治大学で開催された9月29日のシンポジウム『熊谷市前中西遺跡を語る』の会場で石川日出志氏をはじめ、多くの研究者に示し教示を受けた。さらに、10月20日に長野市で開催された日本考古学協会のシンポジウム『信州における弥生社会の在り方』の会場でも吉田広氏ら、長野や九州の研究者などに教示を得た。以下、敬称は省略する。

2．小田原市天神山石戈の発見

1940年5月刊行の『考古学』第11巻第5号の会員短信欄には次のような記事があった。

「▽相模小田原町天神山宝田別荘地からクリス形石剣が発見せられた由、三月十三日の東朝紙が報じてゐる。注目すべき発見である。」

第1図　1940年3月13日付東京朝日新聞神奈川版記事

1940年3月13日の東京朝日新聞神奈川版には写真とともに、次のような記事が掲載されていた（第1図）。

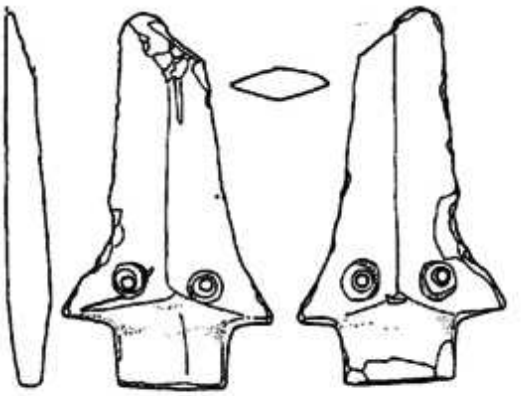
「小田原町天神山室田別荘丘地から石器時代に使用した緑泥片岩系石材を以て造られた長さ二十センチ幅五センチ位の石鉾が発見された。発見者は小田原署の吉田巡査で自宅裏に塵芥捨場を掘って居ると妙な石器が出て来たので十字町の画室で古代民族の研究に没頭て居る井上三綱画伯にこれを提供し井上氏は小田中の国史担当教諭中野慶次郎氏にも研究を求めたところ紀元前の民族が拵えた珍しい石鉾だといふ【写真はその石鉾で折損した尖端は一、二寸程度だろうといはれる】」（原文のママ）

写真は、屋外で、真上ではなく、横方向手前斜め上側から撮影されているため、やや細身に写っている。

町田市立博物館の『石の系譜展　原始古代の石器と石製品』（町田市 1974）には写真241が示され、資料目録に「目録番号664　図版番号241　資料名石戈　点数1　出土地伝九州　所蔵（保管）明治大学考古学陳列館」とあり、明治大学にあることを示していた。1956年に杉原荘介は、『図説日本文化史大系』にこの写真を示し、「戈型（ほこがた）石器、たぶん銅戈の模造品。」、「出土地不明」とした。また、1960年に刊行された『世界考古学大系』の日本Ⅱ、弥生時代に「武器、狩猟具、漁撈具」をまとめた乙益重隆は、「伝九州」として天神山石戈を掲載している。伝九州としたのは介在した骨董商らかもしれないが、杉原荘介、乙益重隆の思い込みの可能性がある。二人は東京考古学会の有力な同人であり、杉原は同じ号に投稿しており、会員短信欄を見ていたと確定できるが、杉原や乙益は神奈川版を見ていないようだ。記事の投稿者は記載がないが、神奈川版をみた人と推定される(註2)。

国会図書館の森本六爾1929の『日本青銅器時代地名表』は、内田某の旧蔵本で「相州小田原町天神山室田別荘　クリス剣式1」の書込みがあった(註3)。1973年の藤沢宗平の『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』には「新潟県・群馬県・神奈川県などにもその出土が知られている。」とあるので、小田原例の存在を知っていたことを示している。

写真1　天神山石戈



第2図　小田原市天神山出土石戈　縮尺3分の1

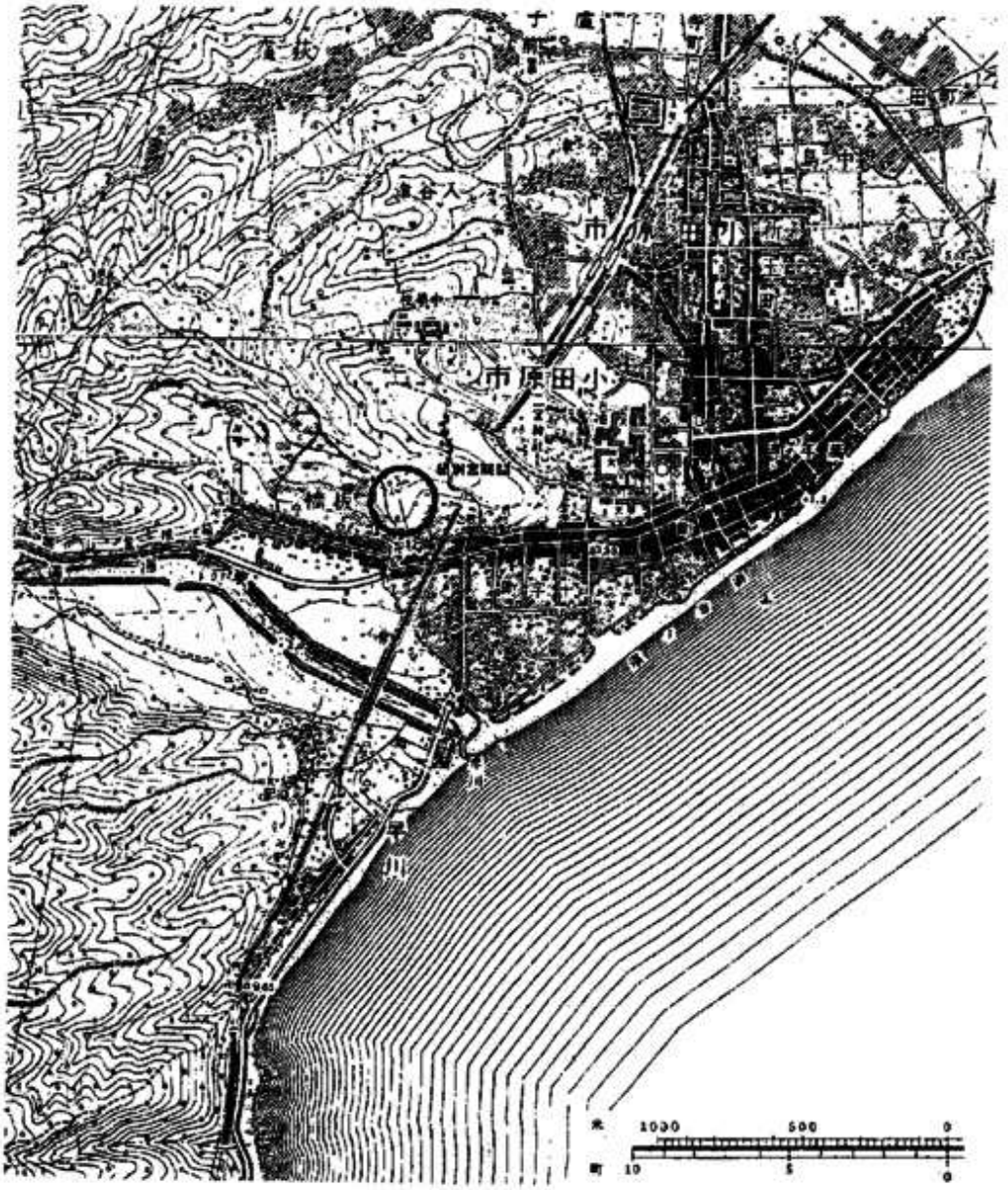
しかし、下條信行 1976・1982 や中村修身 1995 a・1996 にはない。中村 1995 b の「初期石戈一覧表」には明治大学考古学陳列館に出土地不明品があり、「形式Ⅱ、全長 16.5 + α、備考先端欠」とある。また、長野市博物館 1987『稲を伝えた人々―その生活と葬制―』に明治大学考古学博物館の石戈が展示され展示資料目録に掲載されたが、出土地は記載がない（註4）。さらに、このころの神奈川県の研究者で天神山に触れたものは確認できていない。石野瑛 1963 にはない。

3　天神山石戈の観察と出土地点

石戈の観察（第2図）

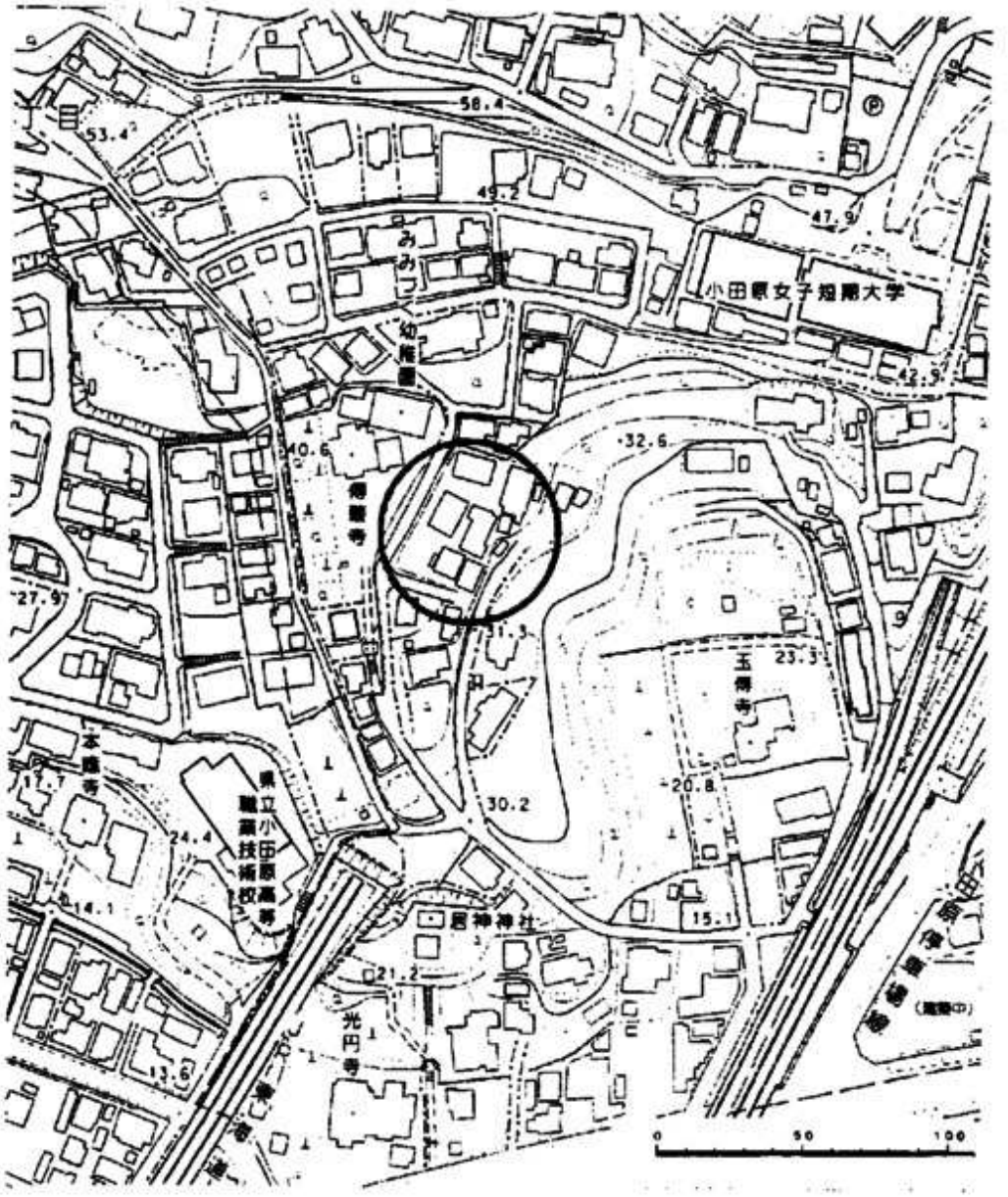
10月22日に明治大学博物館にて観察することができた。基部は幅広で長さがやや短い。茎部（内）へのつくりは、段差がなく、次第に薄くなる。身部（援）と茎部は全面に砥石痕を残すが、敲打痕もわずかに残る。関部の双孔にも敲打痕が残り、最初は敲打により始め、次いで回転技法により貫通させたことを示している。茎部には敲打痕が良く残るが、これは木柄の着脱のためかと思われる。

先端部が斜めに大きく欠損するほか、下刃の基部（胡）よりの刃部にやや大きな欠けがある。反対側の刃部にも小さな欠けが連続して認められる。先端部と基部付近の欠損面は風化度に差があり、基部の欠損面は黒色を呈しやや新しいようにも見えたが、欠けの稜線はどこも摩耗している。茎部も含めて摩耗しているが、とくに先端部や刃部に顕著に認められた。欠損や欠けは、実際に使用された痕跡と思われる傷であるが、破損後も摩耗される使い方があったようである。この摩耗の時期については確定できない、中村修身の教示によれば、発掘品には見られないといい、発掘後を想定している。また、身部のほぼ全面に茶褐色の樹脂状付着物が薄く認められた。



第3図　小田原市天神山の位置（2万5千分の1地図　小田原・国府津）

赤色顔料かもしれない。なお、裏面には黒色付着物が双孔付近に点々とある。これは表面にも小さな痕跡が認められるが、1956年の写真にある。なお、東京朝日新聞1940には、石材は緑泥片岩とあったが、粘板岩と判断された。現在長16.5cm、幅9.2cm、厚さ1.9cm、重さ179gである。復元される全長は20 cm弱ほどである。3cmほどで折損していることになる。下條1982の九州型石戈Ba型式、中村1997での無樋型石戈Ⅱ類に相当する。



第4図　小田原市天神山の位置（2500分の1地図）

明治大学博物館（考古学陳列館）への寄贈者は杉原荘介である。考古学研究室の創立は1950年、考古学陳列館の設置は1952年である（石川2013）。石川の教示によれば明治大学博物館の台帳では「伝福岡」となっているという。乙益1960や町田市立博物館1974は広く九州としたようだ。杉原の入手時期は確認できなかったが、1940年から1952年（あるいは1956年）までの間に杉原の手に入ったと推定できる。中村修身の観察のほかに、石川日出志、吉田広が

実測をしている。全体と欠損の形状から、東京朝日新聞1940の写真と一致するものと判断された。先端部の鏑の脇にある縦の浅い傷は写真にも認められる。

天神山について（第3・4図）

出土地は小田原城内になる。箱根山麓から小田原城に向けて東に延びる長い尾根がいくつも分岐した一番南側の尾根の先端付近で南に枝分かれした中段の標高34mの南向きの平坦面にあり、寺院（伝肇寺）と住宅地となっている。戦前は政治家らの別荘地として利用されたようだ。伝肇寺は中世の創建であるが、中世城郭として当該地の地形の改変はなく、攪乱の可能性は少ない。伝肇寺の西側斜面に小田原城総構え堀が走るが、寺の東側は改変は少ないと思われる。地名のもとになった山角天神社は東海道本線と箱根登山鉄道の走る谷を越えた東側丘陵にある。画家の井上三綱については、2006年に大島慎一から教示を受けた。考古学にも関心をもち、横穴墓や須恵器の絵画があるが、その遺品には石戈はないとのことだった。中野慶次郎は中野敬次郎が正しく、後に小田原市教育委員会社会教育課長となり、千代寺院跡調査の事務局長を務め、『小田原市史料』（中野1966）などの著作を多く残したが、『小田原市史料』に記事はなかった。天神山遺跡については触れているが、石戈の文字はない。

室田別荘は、貴族院議員である室田義文（頑翁）（1847～1938）の三樹荘のことで隣には野崎幻庵（1859～1941）の安閑草舎（伝肇寺裏）があった。大島の教示によれば小田原市城山4丁目20番地（旧320番地）にあたり、今も室田家が一角に残る。室田は伊藤博文がハルピンにて安重根に殺害されたときに一緒にいた人物として知られている。また、発見時は、室田はすでに没していたことになる。小田原警察署の吉田巡査宅は確認できないが室田別荘の隣接地として間違いないと思われる。今は新幹線が真下を通る。

周辺から弥生時代の遺物は発見されていないが、丘陵東側先端部の小田原城二の丸では中期後半の弥生土器の出土がある。さらに、背後の標高68mの小田原城八幡山遺構群は古墳時代前期の高地性遺跡であり（岡本1991）、古い前方後円墳の存在も予測されている。

4．東日本の石戈集成

東日本における石戈の発見は、大野雲外1922の群馬県富岡市の鏑川川底石戈（第6図1）の報告が最初で石剣の一つとされ、中谷治宇二郎1923による東大人類学教室蔵の出土地不明資料（第6図2）が紹介されているが、以後の研究では触れられず、新田栄治1980、石川日出志2005まで取り上げられない。中谷は有角石斧の関連石器として取上げており、以後の研究方向を暗示しているかのようである。その後、後藤守一1930の新潟県潟町石戈（第6図3）が続きクリス形石剣（高橋1923）とされた。鏑川川底は和田千吉（森本1930・1943）の所蔵となり、下條信行が別図を示している（下條1982）（註5）。潟町は、個人所有で（室岡1988、飯島1991）、巻出土とされる。東大例を除いてこれらについて森本六爾1930b、両角守一

	出土地			発掘	文献
1	群馬県	富岡市	鏑川川底		大野1922、森本1929・1930・1943、両角1933、下條1976・1982、大塚1995、中村1996、桐原2006、馬場2008、石川2005・2009
2	不明	東京大学			中谷1923・1993、新田1980、石川2005・2009
3	新潟県	上越市大潟区	潟町巻		後藤1930、饗元1929・1930、両角1933、下條1976、室岡1988、飯島1991、春成1992、中村1996、桐原2006、馬場2008
4	長野県	松本市	宮淵本村		原1942、八幡1948、信濃史料1956、桐原1963・2006、増田1968、藤沢1973、大場1976、長野県1988、関沢1994・2008、松本市1997、石川2009・2012、柳田2012
5	神奈川県	小田原市	天神山		東朝紙1940、東京考古学会1940、杉原1956、乙益1960、藤沢1973、町田市1974、中村1995、岡本2007・2008
6	長野県	松本市	城山沢村		信濃総覧1956、乙益1960、桐原1963・2006、藤沢1973、長野県1988、関沢1994・2008、中村1996、町出1996、松本市1997、馬場2008、石川2009・2012、柳田2012
7	長野県	豊田村	笠倉		信濃総覧1956、桐原1963・2006、長野県1988、町田1996、馬場2008、石川2009・2012
8	長野県	安曇野市三郷	黒沢川右岸		藤沢1968、三郷村1980、山田1988、長野県1988、中村1996、町田1996、関沢2008、馬場2008、石川2009・2012
9	長野県	長野市	平柴平	○	長野市1971・2003、笹沢1976・1982、長野県1988、町田1996、馬場2008
10	福井県	高浜町	小和田		森川1971、下条1976・1982、森川1986、福定1990、中村1996・1997・2013、春成1999
11	長野県	岡谷市	中島A	○	百瀬1967、飯島1991、町田1992・1996・1999・2008
12	長野県	中野市	栗林	○	檀原1988、中村1996、町田1996・2000、桐原2006、馬場2008
13	群馬県	妙義町	古立東山	○	群馬県1990、若狭1992、妙義町1993、大塚1995、中村1996、柳田2012
14	群馬県	妙義町	八木連西久保	○	山武考1991、大塚1995、中村1996、柳田2012
15	長野県	長野市	松原1	○	飯島1991、中村1996、町田1996、桐原2006、馬場2008、石川2009・2012、柳田2012
16	長野県	松本市	平畑	○	関沢1994・2008、中村1996、町田1996、松本市1997、桐原2006、馬場2008、柳田2012
17	群馬県	嬬恋村	中郷		中村1996
18	長野県	長野市	松原3	○	中村1996、町田1996・2000、桐原2006、馬場2008、石川2012、柳田2012
19	長野県	長野市	松原4	○	中村1996、町田1996・2000、桐原2006、馬場2008、柳田2012
20	長野県	長野市	松原5	○	中村1996、町田1996・2000、桐原2006、馬場2008、柳田2012
21	長野県	長野市	榎田	○	町田1999、桐原2006、石川2009・2012、寺前2010、柳田2012
22	埼玉県	熊谷市	前中西	○	熊谷市2003、岡本2004、石川2012・2013、松田2013
23	新潟県	上越市	吹上	○	上越市2006
24	愛知県	名古屋市	朝日	○	愛知県2007
25	長野県	佐久市	北裏	○	佐久市2008、馬場2008、石川2012・2013、柳田2012
関連石器					
1	長野県	松本市	県町	○	松本市1990・1997、関沢1994・2008
2	岐阜県	高山市	畑館址		吉朝1991・1992、馬場2008
3	長野県	長野市	松原2	○	久保1993、桐原2006、馬場2008
4	長野県	上田市	下町田	○	上田市2000・2000

第1表　東日本石戈一覧表（発見順）

1933a が検討している。資料は少ないが、森本の磨製石剣から変形鉄剣式石剣、有角石剣への変遷が発表されるのである。発見順の一覧表（第1表）、資料の集成の変遷表（第2・3表）を示す。表と図の番号は一致する。

長野県松本市宮淵本村石戈（第5図4）は、1935（昭和10）年10月の発見であるが、報告は原嘉藤 1942、八幡一郎 1948 となる。これをクリス形石剣・石戈とするのは原 1942、『信濃考古総覧』1956 の遺跡地名表、増田精一 1968、日本民俗資料館 1970、藤沢宗平 1973、大場磐雄 1976、飯島哲也 1991、石川日出志 1992・2009・2012、町田勝則 1999（註6）、柳田康雄 2012 であるが、八幡 1948、桐原健 1963・2006、関沢聡 1994・2008・2011、松本市 1997 は有孔石剣とする。馬場伸一郎 2008 は変形銅戈形石製品とし、銅戈形石製品（石戈）と区別している。大場は 1936 年10月26日に実見して、「クリス型を模せしもの、刃部の半ばを欠く。閃緑岩質、茎に一孔あり。発見地は市内本村宮淵なり。」と記述している（大場 1976）。石戈には一孔式（中村 1996）、目釘式（寺前 2010）がある。増田精一 1968 は、有孔石剣も含めて有

	森本 1929 表	森本 1930 散表	桐原 1963	藤沢 1973 文	下條 1976 表	長野 1988	飯島 1991	石川 1992 分布	中村 1996	岡本 1997 表	町田 1999 分布	桐原 2006	馬場 2008	吉田 2012 文	岡本 2013	文献・備考
茨城県																
群馬県	1	1		1	1		1	2	4	4	3	1	1	3	4	大塚 1995、中村 1996
埼玉県															1	熊谷市 2003、岡本 2004
千葉県																
神奈川県				1											1	岡本 2007
新潟県		1		1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	2	後藤 1930、土戈あり
富山県																
石川県														1		註6、木戈あり
福井県					1				1						1	森川 1971、下條 1982
長野県			2	3	2	5	11	5	8	13	10	10	12	9	14	
静岡県																
愛知県															1	愛知県 2007
岐阜県													1			古朝 1991
不明															1	中谷 1923、石川 2009
合計	1	2 註1		6	5 註2		13 註3	8 註4	14	18	13 註5	12	15	14	25	

表は地名表、散表は散布表、文は本文、分布は分布図を示す。他は図示

註1　森本1943に図　　註2　長野1点減で実質4点　　註3　飯島1991報告書

註4　遺跡数を示す　　註5　群馬県に無磨型1を含む　　註6　吉田ほか2012は八日市地方遺跡例をあげる

第2表　東日本石戈集成県別変遷表

		森本 1929	森本 1930	桐原 1963	藤沢 1973	下條 1976	長野 1988	飯島 1991	石川 1992	中村 1996	岡本 1997	町田 1999	桐原 2006	馬場 2008	柳田 2012	岡本 2013	初出・備考
1	綱川	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	大野 1922
2	東京大学															○	中谷 1923、石川 2005
3	駒町巻		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	後藤 1930
4	宮廻本村			△	○		△	○	○		○△	△○	△	△	○	○	原 1942
5	天神山				○											○	東京考古学会 1940
6	城山沢村			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	信濃考古総覧 1956
7	笠倉			○			○	○	○		○	○	○	○		○	桐原 1963
8	黒沢川				○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	藤沢 1968
9	平柳平						○	○	○		○	○	○	○		○	笠沢 1976
10	小和田					○				○						○	森川 1971
11	中島A							○			○	○				○	古朝 1978
12	栗林							○		○	○	○		○	○	○	中野市 1988
13	古立東山								○	○	○	○			○	○	群馬県 1990
14	八木迫									○	○				○	○	山武考 1991
15	松原1							○	○	○	○	○	○	○	○	○	飯島 1991
16	平畑							○		○	○	○	○	○	○	○	関沢 1994
17	中郷									○	○					○	中村 1996
18	松原3							○		○	○	○	○	○	○	○	町田 2000
19	松原4							○		○	○	○	○	○	○	○	町田 2000
20	松原5									○	○		○	○	○	○	町田 2000
21	権田No.30											○△	△○	△	○	○	町山 1999
22	前中西															○	熊谷市 2003
23	吹上															○	上越市 2006
24	朝日															○	愛知県 2007
25	北裏															○	佐久市 2008・馬場 2008

1	昌町										○		□	□		□	関沢 1994
2	畑端址													○?		□	古朝 1991
3	松原2											□	○	○?		□	桐原 2006
4	下町田															□	上田市 2000・2009

○石戈、△有孔石剣、□磨製石剣　　馬場2008の○は銅戈形石製品、△は変形銅戈形石製品とする

長野1988は長野県史のこと

第3表　東日本石戈資料増加表

孔石戈とした中に宮淵本村を含めている。最近は石戈とする人が多い。　この4例の後に小田原市天神山石戈（第2図）が速報されることになる（東京朝日新聞1940）。

戦後になって、長野県での発見が続く。1948年に松本市城山沢村（第6図6、『信濃考古総覧』1956、桐原1963）（註7）が発見され、豊田村笠倉（第7図7、桐原1963）、三郷村黒沢川右岸（第

5図8、藤沢1968）（註8）が続き、桐原健1963が石戈形石剣として2点（沢村、笠倉）集成し、石戈から変形鉄剣形石剣への変遷案をしめす。

1971年には発掘出土品が報告される。長野市平柴平（第7図9、長野市1971、笹沢1976）であり、さらに岡谷市中島A（第7図11、百瀬1987）、中野市栗林（第7図12、檀原1988）があり、松本市県町（第8図1、関沢1994）、平畑（第7図16、関沢1994）が続く。以後長野県だけでなく、群馬県（第5図13・第6図14）、埼玉県（第7図22）でも発掘出土品が報告される（群馬県1990、山武考1991、熊谷市2003）。長野市松原遺跡では5点の石戈片が出土した（第6図15・第7図18～20・第8図3、飯島1991、久保1993、中村1996、町田1996・2000、桐原2006）。飯島1991は長野県内で11点集成し、破損品、再生品、集落遺跡出土品が多いことを指摘した。さらに、長野市榎田遺跡（第5図21）では石戈の未成品とみなされるものが出土した（町田1999）。これについては次節で検討する。ほかに、福井県小和田例がある（第5図10、森川1971、下條1976）。さらに、愛知県朝日遺跡（第5図24、愛知県2007）、長野県佐久市北裏遺跡（第6図29、佐久市2008）で発見されている（註9）。発掘出土品が多いことは石戈の特性の一つであるが、極めて小さな破片が多いことにも注意したい。岐阜県高山市畑館址（第8図2）の採集品が磨製石剣として報告されている（吉朝1991a・1992）。石川日出志により石戈の可能性が指摘されたが（吉朝1991ｂ・1992、馬場2008）、磨製石剣であろう。

最初に石戈論をまとめた下條1976・1982では東日本の石戈は福井県も含めて4～5点だけであったが、九州の石戈研究者である中村修身は、東日本の石戈検出に努め、基部のあるものを中心に福井県、新潟県、長野県、群馬県で14例を集めた（中村1996）が、この中には先端部破片や宮淵本村を取上げていない。群馬では大塚昌彦1995の集成（註10）、長野では桐原2006、関沢1994・2008・2011、馬場伸一郎2008、石川2009・2012の検討がある。馬場の検討は関東の知見に乏しいが長野県においては丁寧で本稿作成において有益であった。さらに新潟県上越市吹上遺跡で磨製石剣、石戈（第7図23）、土製戈（第8図）が出土している（笹沢浩2003、桐原2006、上越市2006）。石戈は小孔3ヶをもつ基部付近の小破片である（註11）。さらに石川県小松市八日市地方遺跡で木戈が出土している（小松市教育委員会2003）。

また、柳田康雄らは東日本の青銅器とその模倣品を検討し、石戈については新たに松本市蟻ケ崎遺跡（関沢1994）の2点を無胡石戈として取上げた（柳田2012）が、これらはこれまで磨製石剣として取上げられており、同書の写真掲載一覧、実測図一覧にも磨製石剣としてあり、柳田・久保田・大久保2012では磨製石剣としており統一されていない。また、八日市地方遺跡に石戈があるとしており（深沢・尾方2012、吉田・尾方2012）、さらに有孔石剣に分類されてきた西一本柳、栗林や、宮淵本村の新例（関沢1994）などを石戈として位置づけようとしている（柳田2012）。これらについては磨製石剣を検討する際に考えたい。

石戈として認識報告されたものは、長野県では判断が異なるものを含んで17点あり、群馬県に4点、新潟県に2点、愛知県、岐阜県、福井県、埼玉県、神奈川県、出土地不明各1点と

なる。検討すべき資料は東日本では合計29点である（第1～3表、第5～8図）（註12）。

長野県では中期後半の栗林式土器文化との関係が指摘されている（桐原1963、町田1996・1999）。時期的には首肯されるが、分布的には栗林文化圏をこえて発見されており、検討が必要である。

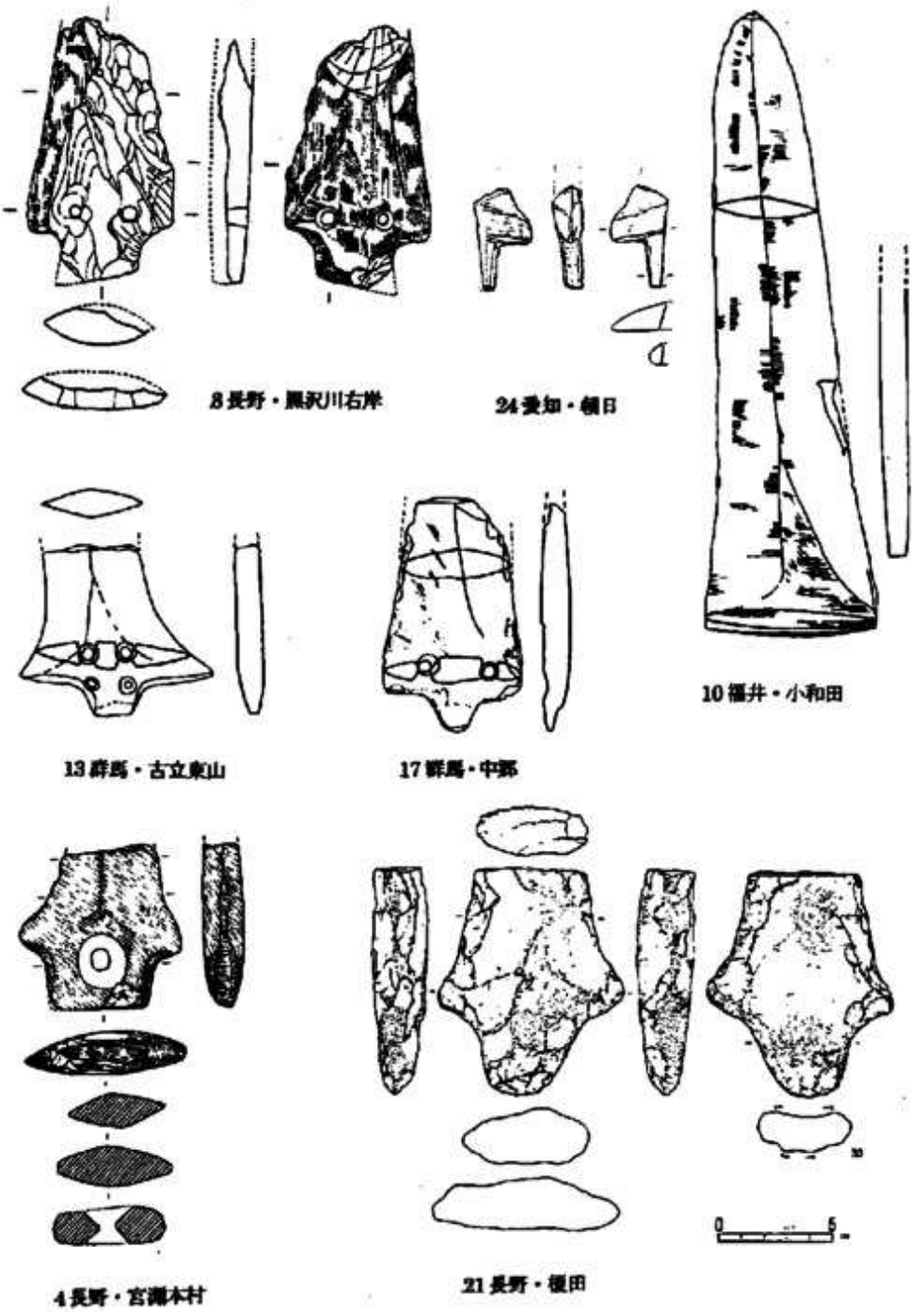
5　東日本石戈の検討

東日本では長野県において多く発見されているが、形態は多様であり、再生品を除いて完形品が1点もないという特色がある。これらを集成図（第5～8図）、分布図（第9図）と、計測値一覧表（第4表）で示し、属性対比表（第5表）を示す。図は、中村修身や寺前直人2010、石川日出志2009・2012のように使用の形態から横向きに図示すべきであるが、ここでは便宜的に従来の縦向きで示す。部分名称については、戈独自のものがあるが、他の関連石器と同じにしたく、基部（内・胡）、茎部（内）、先端部（鋒）などの名称を使用する。また、石戈の検討において、有孔石剣の検討は不可欠である。変形鉄剣形石剣、吉石型石剣（岡本1997）、変形銅戈形石製品（馬場2008）、無樋石戈（石川2012）などの別称があり、石戈に含ませようとする意見も提起されているが、資料の検討は別稿（岡本2014b）に譲り（註13）、ここでは石戈との関係を検討するにとどめる。

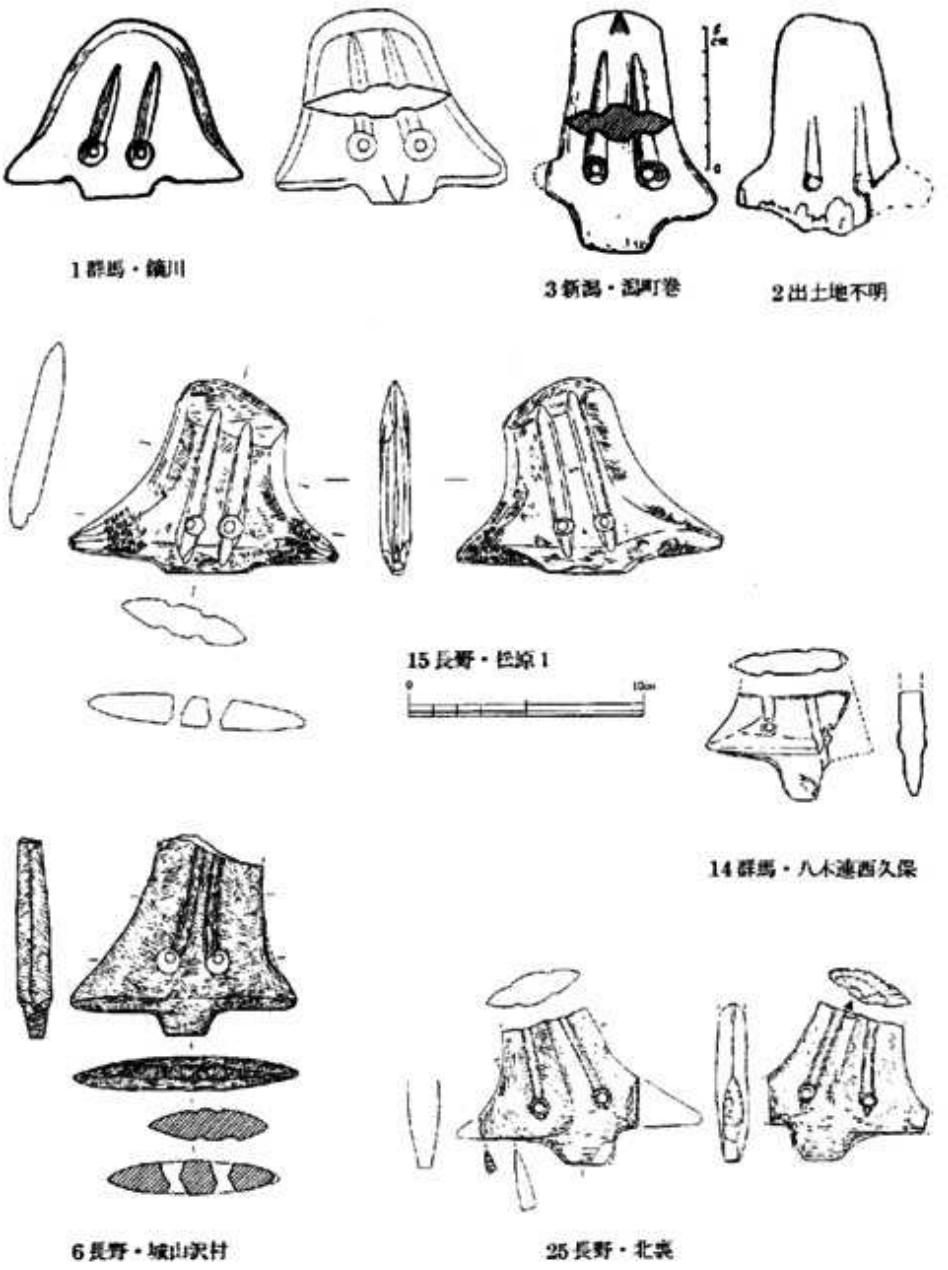
さて、宮淵本村（第5図4）以外にも、石戈と認定する判断に議論があるものがある。榎田遺跡例（第5図21）は未成品であり、判断が分かれる。町田1999では石戈未成品とするが、有孔磨製石剣の可能性も示す。本文では「石戈」未成品とし、「石戈」と「有孔石剣」双方の特質を合わせ持つ例とするが、町田2013では有孔石剣の未成品としている。桐原2006は変形鉄剣式石剣とし、関沢2008も有孔石剣とする。ただし、桐原は石戈の項で榎田例について触れている（註14）。馬場2008は変形銅戈形石製品（従来の有孔石剣）とするが、石川2009・2012は無樋石戈Ⅱa類としている。

先端部破片である松本市県町例（第8図1）（松本市教育委員会1990）は石剣とされ石戈の可能性もあるとされた（関沢1994）が、松本市1997、関沢2008では石剣とする。桐原2006には鉄剣形石剣としている。馬場2008も磨製石剣に含ませるが器種判定は困難とする。松原No.2（第8図3）は久保1993（註15）では磨製石剣と報告していたが、桐原2006は石戈とした。馬場2008も銅戈形石製品として取上げたが保留している。上田市下町田遺跡の石戈（第8図4）（上田市教育委員会2000）も、先端部付近の破片で判断に迷うものである。樋は見られない部分の破片であり、磨製石剣としておく。

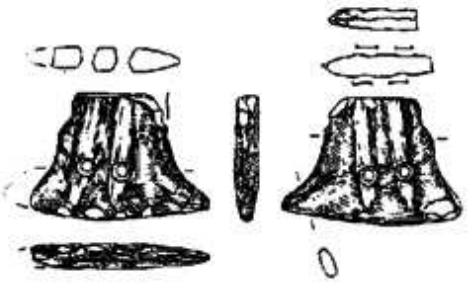
平柴平例（第7図9）は、細身の小形品で身の長さも短い。長さ7.4㎝を残すが基部の双口から全体の長さは10㎝を少し超える程度であろう。幅は図上で2.9㎝と計測される。有孔石剣でも栗岩英治（酔古生1933）が紹介した新潟県新井例のように10㎝未満のものがある。



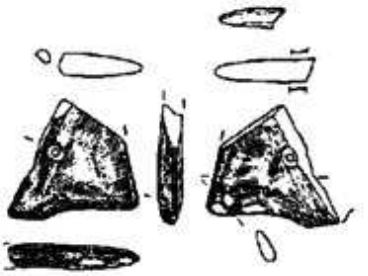
第5図　東日本の石戈集成図1無穿型・宮淵型　縮尺3分の1



第6図　東日本の石戈集成図2有樋型1　縮尺3分の1

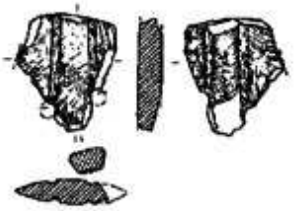


18 長野・松原3

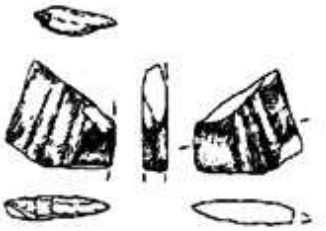


19 長野・松原4

12 長野・栗林



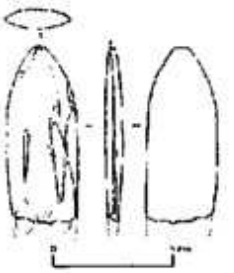
16 長野・平畑



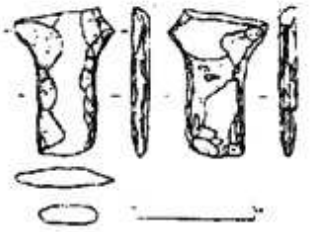
20 長野・松原5

22 埼玉・前中西

7 長野・笠倉



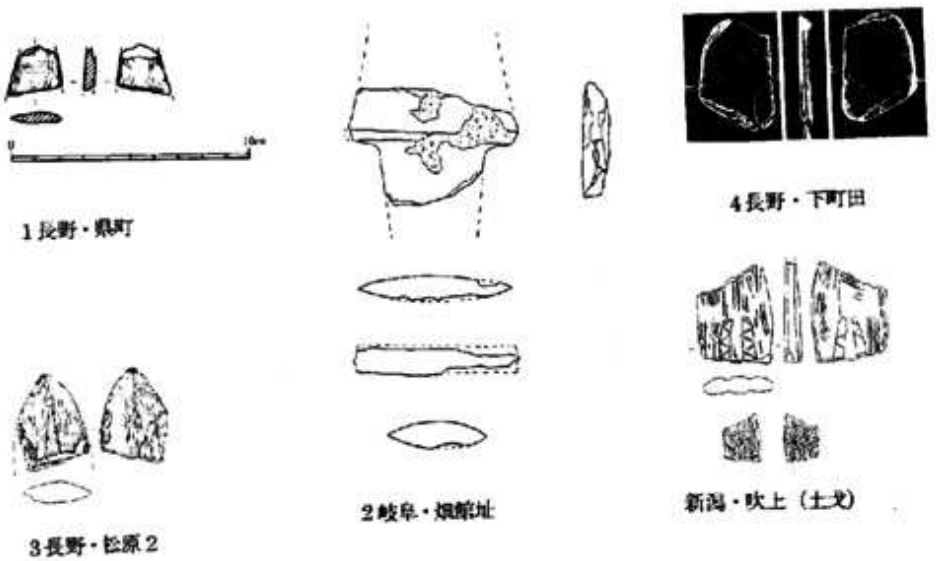
9 長野・平柴平



11 長野・中島A

23 新潟・吹上

第7図　東日本の石戈集成図3有樋型2・その他　縮尺3分の1



第8図　東日本の石戈関連石器・土戈　縮尺3分の1

	出土地			長さ	幅	厚さ	重さ	石材	分類	部位	文献	図
1	群馬県	富岡市	鏑川川底	8.2					有樋Ⅲ類	完形	下條 1982	第6図
2	不明	東京大学		△ 9.4	6.8				有樋Ⅲ類	完形	中谷 1923	第6図
3	新潟県	上越市	大潟区潟町巻	10.2				粘板岩	有樋Ⅲ類	完形	後藤 1930	第6図
4	長野県	松本市	宮淵本村▲	7.2	7.1	1.9	127.9	閃緑岩☆	宮淵型石戈	基部	関沢 1994	第5図
5	神奈川県	小田原市	天神山	◎ 16.5	9.2	1.9	179	粘板岩	無樋Ⅱ類	先端欠		第2図
6	長野県	松本市	城山沢村	8.6	9.7	1.4	124.9	粘板岩	有樋Ⅲ類	基部	関沢 1994	第6図
7	長野県	豊田村	笠倉○	△ 8.8	4.3	0.8		閃緑岩☆	有樋	先端部	桐原 1963	第7図
8	長野県	三郷村	黒沢川右岸	11.7				粘板岩	無樋Ⅲ類	先端欠	三郷村 1980	第5図
9	長野県	長野市	平柴平○	△ 7.4	2.9	0.8			有樋	先端部	笹沢 1976	第7図
10	福井県	高浜町	小和田	26.8				灰色粘板岩	無樋Ⅳ類	定形	下條 1976	第5図
11	長野県	岡谷市	中島A	6.2	4.2	0.7	22.9	頁岩	扁釘式	基部	百瀬 1980	第7図
12	長野県	中野市	栗林	△ 4.6	4.2	1.6		閃緑岩★	有樋Ⅳ類	基部片	中野市 1988	第7図
13	群馬県	妙義町	古立東山	7.3	8.5			斑糲岩	無樋Ⅲ類	先端欠	中村 1996	第5図
14	群馬県	妙義町	八木連西久保	4.2	5.2			斑糲岩	有樋Ⅲ類	基部片	中村 1996	第6図
15	長野県	長野市	松原1	8.2	11.5	1.3		珪質凝灰岩	有樋Ⅲ類	完形	飯島 1991	第6図
16	長野県	松本市	平畑	4.8	4.1	1	23.7	粘板岩	有樋	基部片	関沢 1994	第7図
17	群馬県	嬬恋村	中郷	10.1	6			濃緑色の石	無樋Ⅲ類	先端欠	中村 1996	第5図
18	長野県	長野市	松原3	5.1	7.3	0.9	48.4	黒色頁岩	有樋Ⅳ類	基部	町田 2000	第7図
19	長野県	長野市	松原4	4.7	5.5	1	27.8	黒色頁岩	有樋Ⅲ類	基部片	町田 2000	第7図
20	長野県	長野市	松原5	4	4.7	1	24.3	黒色頁岩	有樋	基部片	町田 2000	第7図
21	長野県	長野市	槐田▲	9.8	8	2.4	242.1	変輝緑岩	宮淵型石戈	先端欠	町田 1999	第6図
22	埼玉県	熊谷市	前中西	◎ 4.1	4.9	1.3	24.7	粘板岩	有樋	先端付近	岡本 2004	第7図
23	新潟県	上越市	吹上	△ 3.5	3.8	0.7				基部付近	上越市 2006	第7図
24	愛知県	名古屋市	朝日	4			11.5	泥岩	無樋？	基部	愛知県 2007	第5図
25	長野県	佐久市	北裏	6.8				輝緑岩	有樋Ⅲ類	基部	馬場 2008	第6図
関連石器												
1	長野県	松本市	県町	1.9	2.3	0.4	2.5	粘板岩	磨製石剣	先端部	関沢 1994	第8図
2	岐阜県	高山市	畑館址	△ 5	7.2	1.1		粘板岩	磨製石剣	基部	吉朝 1991	第8図
3	長野県	長野市	松原2	△ 3.9	3.3	0.9		珪質～珪結	磨製石剣	先端部	久保 1993	第8図
4	長野県	上田市	下町田	4.7	3.2	0.5	13.4	頁岩	磨製石剣	先端付近	上田市 2000	第8図

▲有孔石剣説あるも石戈とする
○磨製石剣説あり
△図上値
◎岡本実測値
他は報告値
☆馬場 2008 で変質輝緑岩とする
★馬場 2008 で緑色の堆積岩とする

第4表　東日本石戈計測表

第9図　東日本石戈分布図

笠倉（第7図7）も破損部の幅4.2cmで細い。町田2008はこれらを銅剣形石剣と改め、石川2012は笠倉を大阪湾型銅戈形石戈とする。愛知県朝日例（第5図24）も大阪湾型戈形銅製品を真似たものとしている（愛知県2007）。朝日例に樋は認められず、無樋型のようである。茎部への段差は弱いが認められ、比較的古いものであろう。

岡谷市中島A遺跡例（第7図11、百瀬1987）は、飯島1991の集成表以外あまり取り上げられない。町田1999の分布図に8遺跡（13点）の◆印・石戈（有樋式）が示されており、岡谷市に石戈の◆印がある。無樋型、有樋型にも含まれない形態のためであるが、近年は鉄剣形石剣のうちに、左右非対称となるものを石戈としてとらえ直そうという動きがある。中島Aもそのような類品であり、寺前直人2010のいう目釘式石戈に含まれるものであろう。

宮淵本村と榎田例の位置づけが問題である。これらを石戈から有孔石剣への過渡期のものとして中間におくのが桐原1963、石川1992・2009・2012、関沢1994・2008・2011、馬場2008、吉田2013であるが、石戈とするものと、有孔石剣とするものに分れる。町田1999は前述したように両者双方の特質をもつとする。石川2009は九州型石戈の影響とし、難波洋三2011・2012は、無樋単孔の石戈の系譜を想定する。

鉄剣形石剣にも茎部に1孔を有する宮淵本村B例やヤスンバ例があるように、石戈にも1孔をもつ宮淵本村例（第5図4）があるのである。桐原2006も宮淵本村B例とヤスンバを鉄剣形石剣としている。馬場2008は中条下町、ヤスンバの分類を保留し、宮淵本村B例も判断していない。形態上の少数例を過渡期に置くのではなく、まとまった数量をもつ二つの形態の混合した姿ととらえたい。磨製石剣基部に孔を設けたものが、宮淵本村B，ヤスンバであり、石戈の有孔化したものが宮淵本村（第5図4）であるとしたい。

榎田（第5図21）は、変輝緑岩製で石材が違う（註16）。宮淵本村も馬場2008は変質輝緑岩とする。このことから粘板岩や頁岩製の搬入された石戈ではなく、在地の石戈、有孔石剣の製作途上の破損品とみなされる。東日本では福井県例を除いて石戈の完形品がなく、小破片となった破損品やその再生品ばかりであり、製作地は確認されていない。松原遺跡では再生品、破片が多数出土しているが、未成品はない。型式や石材などの相違から榎田型磨製石斧のような榎田・松原遺跡間の補完関係はないものとみなされる。

これに対して、有孔石剣は、北信に集中して（東信と南信に1例ずつある）、集落での出土が少なく、採集による完形品、大形破片が多い。これは関東東部の茨城県以北の足洗型石斧の出土状況（岡本1999・2003）とやや近似する（第5表）。榎出例は、在地の石戈の未成品の可能性が強い。在地の石戈は、石川2009のいう無樋石戈Ⅱa類と一致するが、吉石型石剣（有孔石剣）との関係性において認識は異なる。宮淵型石戈と仮称したい（第6表）。

有樋型石戈は、近畿型石戈ともいわれるように近畿から中部に分布する。日本海側の新潟県だけでなく、太平洋側でも埼玉県熊谷市前中西遺跡で小破片（第7図22）が発見された。近畿系弥生文化の波及を認めることができる。しかし、石戈の文化は再生のため短小化するとは

	採集状況	残存状況	遺跡	分布		中心	遠隔地出土
石戈	発掘	破片	集落	西日本	近畿・中部・関東	福岡	
磨製石剣	発掘	完形・破片	集落	西日本	近畿・中部・関東		宮城、福島
磨製石鏃	採集・発掘	完形・破片	集落・単独	西日本	近畿・中部・関東		山形？
吉石型石剣（有孔石剣）	採集・発掘	完形・大形破片	単独・集落	東日本	中部・関東	長野北部	大阪？
無倉型石剣（註） 岡本 2010・2011	発掘・採集	完形	集落・単独	東日本	中部・関東・東北		鹿児島
多頭形横場型石斧　岡本 2009	採集	完形	単独	東日本	中部・関東・東北	岐阜、長野	
Ⅳ～Ⅵ形円形横場型石斧	採集	完形	単独	東日本	中部・関東・東北		
足洗型石斧（茨城県以北） 岡本 1999	採集	完形	単独	東日本	関東・東北	茨城	群馬、長野？
足洗型石斧（千葉県以南） 岡本 1999	発掘	完形・破片	集落	東日本	関東・東北		

（註）　無倉型石斧（磨製有孔石鏃）を改める

第５表　東日本石戈などの属性対比表

		宮瀬型石戈 （宮瀬本村、堰田）		吉石型石剣		足洗型石斧		
鉄剣形石剣	→			変形鉄剣式石剣	→ 有角式石剣			森本 1930
石戈	→			分厚い石剣	→ 角の生えた石斧			坪井 1960
石戈形石剣 石戈	→ →	変形鉄剣形石剣 変形鉄剣式石剣	→ →	変形鉄剣形石剣 変形鉄剣式石剣	なし			樋原 1963 樋原 2006
有孔石戈	→	有孔石戈	→	有孔石戈（有孔石剣）	なし			増田 1968
有樋石戈（石斧化） 無樋単孔石戈	→ →	無樋単孔石戈			← 有角石斧			難波 1986 難波 2011
石戈（有樋） 近畿有孔石戈 有樋石戈	→ → →	変形石戈	→	有孔石剣	有角石器 有角石器			春成 1992 春成 1997 ・1999
石戈 無樋石戈Ⅰ類	→ →	石戈 無樋石戈Ⅱａ類	→ →	有孔石剣（石戈脱） 無樋石戈Ⅱｂ類	→ 有角石器 ・ 有角石器			石川 1992 石川 2009
石戈 石戈	→ →	有孔石剣 有孔石剣	→ →	有孔石剣 有孔石剣	なし			蘭沢 1994 蘭沢 2008
中部高地型石戈 乗林型石戈	→	中部高地型石戈	→	中部高地型有孔石剣 有孔磨製石剣	有角石器	← 両刃磨製石斧		町田 1999 町田 2008
銅戈形石製品	→	変形銅戈形石製品	→	変形銅戈形石製品	なし			馬場 2008
石戈 九州型単孔式石戈	→ →	石戈		有孔石戈・有孔石製品	有角石器			樽田 2012
戈形石製品 有樋系列	→ →	無樋系列A		無樋系列B	→ 有角石器A → 有角石器B	← 独鈷石		小林 2013
銅戈形石製品	→	有孔銅戈形石製品	→	有孔石剣	→ 有角石器	← 独鈷石		吉田 2013
石戈	→	宮瀬型石戈	←	吉石型石剣		←	西馬音内型石斧 横場型石斧 白川型石斧	岡本 1997 岡本 2014
					足洗型石斧	←	白川型石斧	岡本 1999

第６表　宮瀬型石戈の位置・名称と吉石型石剣の系譜の諸案

いえ、あるいは小さな破片とはいえ、明確な形で流入しているのだから、有孔石剣のように在地化したとする石剣文化、あるいは石戈文化を生む必要性はないと考える（註17）。在地の有孔石剣・有孔石戈（宮淵型石戈）と外来の石戈・磨製石剣を対比すべきと考える。発見状況、遺存状況、分布領域などには大きな違いがある（第5表）（註18）。長野県を中心とした栗林文化に吉石型石剣（有孔石剣）が生まれるのは、近畿系弥生文化とは違う主体性があることの結果である。石戈からの変化を想定することに反対する。有孔石剣を石川2009・2012は石戈としてまとめ（註19）、馬場2008は銅戈形石製品と変形銅戈形石製品として関連付けるが、石戈として同一視することはできないのである。私は有孔石剣を中部高地の栗林文化特有のものとし、在地の大森文化（縄文土器文化）の西馬音内型石斧からの変化を考えた（岡本1997）。大きな孔をあけることから橋場型石斧（環状石斧・多頭石斧）（岡本2009）や熊倉型石剣（磨製有孔石鏃）（岡本2010 a・2011 a）（註20）との関連も想定される。

完形品は、福井県小和田例（第5図9）のほかには有樋短小形とされる4点（第6図1･2･3･15）のみで、他は破片である。この4点は先端部が欠損して再生されたものとみられており（後藤1930、飯島1991、中村1997、桐原2006、石川2012、柳田2012、吉田2013）、東日本では本来的な完成品が発見されていないことを注意すべきである。中部・関東では福井県例を除いて完形品はない。比較的大きな破片は小田原市天神山例である。東日本では最大の破片値である。再生品を有樋短小型、あるいは中部高地型石戈（町田1996･1999･2008）、栗林式石戈（町田2008）と呼称することを躊躇する。さらに、栗林文化の石戈という命名は逆転していて不適当である（註21）。なお、再生化にあたり、先端の刃部を石斧状に仕上げているが、これは石斧としてではなく、武器としての形態をまだ維持していると考えたい。大森呪術石器の弥生化、石斧化（岡本1996）とは異なるものであろう。西一本柳の有孔石剣は欠損して石斧状に改変されたものとされているが観察して判断したい。馬場2008、石川2012、小林2013などの評価とは異なるものと考える。石斧としては完成されておらず石剣としての機能を維持しているのではないだろうか。なお、中村1996・1997 bは群馬県中郷も修理・再生品としている。

以上のことは関東、東北の足洗型石斧（有角石斧、有角石器）の問題にも関連する。弥生文化の武器を歪んで受け入れた結果とする森本六爾1930 aや、実物を知らずイメージだけの受入とする坪井清足1958の理解に反対している（岡本1999）（註22）。長野県の有孔石剣はその過渡期に位置づけられており、認めることはできない。町田1999の理解にも反対である。長野県に有角石器はないとするが、大場磐雄1976は日記に記録（註23）を残しているのであり、その再確認から始めねばならない。両角守一は関東の有角石器に関心を示していたし（両角1933 b）、同じ栗林文化圏の群馬県で足洗型石斧は発見されている。また、藤森栄一1962「磨製石斧」『日本考古学辞典』の両頭石斧（独鈷石）理解は面白い（岡本2011 b）。藤森は弥生時代の白川型石斧（両頭石斧）の存在を戦前から指摘していたのであり、松原遺跡で証明されたのである（岡本1996 b）。足洗型石斧は、白川型石斧の型式変化と位置づけられる（岡本

1999）。

実用性については、祭器であるとする意見（下條 1976・1982、関沢 1994、町田 1999、大阪府立弥生文化博物館 2001）と、実際に使用された武具であるという説（中村 1995、町田 2000、関沢 2008、寺前 2010、柳田 2012）があり、実用具から祭器へと転回したと考えることが一般化し、武器として使用されたと考える人が増えているが、馬場 2008 は銅戈形石製品とし、非実用品ないしは用途不明品と考えている。しかし、刃部の欠けや先端部の折損は、実際に使用されたことを物語る。そして、西日本の展開が、武器から祭器へと展開することは判るとしても、東日本で武器が発達しないとする通説の一方で、祭器が登場する理由は一体何だろうか。論理矛盾ではないか。大森文化（縄文土器文化）の呪術具を弥生祭器に結びつけることはできない。

再生品 3 点の出土状態に興味深い特性がある。松原遺跡では環壕の外側であることを、馬場 2008 は指摘した。鏑川川底は、詳細な位置は不明だが、川底という低地の採集であり、集落外の可能性は強い。潟町巻は採集地点が明記されていて、鵜ノ池の畔であり、近似している。集落内の破損品と集落外の再生品が対比できる。

石戈の分類は、下條信行 1976・1982 と中村修身 1997・2013 のほかに、石川日出志 2009・2012 があり、寺前直人 2010 の追加があり、柳田康雄 2012 もある。石川の分類は中部・関東のみの分類であり、ここでは、中村案をとり、寺前説を加える。寺前 2010 の指摘する目釘式石戈は、今後の点検で東日本でも増加することは必至である。柳田 2012 の指摘した無胡石戈も含まれるのであろう。有樋型石戈の不明としたもののうち、平畑、松原No. 5 はⅢ類かⅣ類に含まれるものであるが、平柴平は小形品である。笠倉を、石川 2012 は大阪湾型銅戈形石戈としているが、大阪湾型銅戈の評価については柳田 2012 の批判がある。下町田と前中西は先端部付近であり、下町田は検討が必要である。長さの点では 20 cm前後のものと、10 cmほどのものがあり、銅戈よりずっと小形となる。

中村修身 2013 の分類では、東日本の石戈は次のようにまとめられる。ただし、群馬県の古立東山（第 5 図 13）、中郷（第 5 図 17）は無樋型とした。吉田 2013 も古立東山を無樋式としている。

無樋型石戈

Ⅱ類　天神山

Ⅲ類　黒沢川右岸、古立東山、中郷

Ⅳ類　小和田

不明　朝日

有樋型石戈

Ⅲ類　鏑川川底、八木連、沢村、松原No. 1、北裏、潟町巻、出土地不明

Ⅳ類　松原No. 3・4、栗林

不明　平畑、松原No.5、笠倉、平柴平、前中西

その他

目釘式石戈　　中島A、吹上

宮瀬型石戈　　宮瀬本村、榎田

除外　　松原No.2、県町、畑館址、下町田

東日本・関東の石戈は小田原市天神山石戈（第2図）を起源としているのである。群馬県に無樋型石戈2点がある（第5図13・17）。長野県黒沢川右岸（同図8）も無樋型である。樋のないものを有樋型の退化したものと見る見解もあるが、石川2009の推定したように最初期の無樋型石戈の役割を考えてみたい。宮瀬本村（同図4）も一孔式の無樋型とみなすことができ、宮瀬型石戈とした。ちなみに無樋型石戈は福井県高浜町小和田（同図10）以西の近畿では兵庫県神戸市西区青谷、滋賀県長浜市鴨田で発見されている（中村1996）（註24）。いずれもⅢ類、Ⅳ類に分類され、天神山より後出のものである。中村1995での無樋型Ⅱ類の分布は、九州と本州山口県に限られている。

まだ検討すべき資料も残るが、ここでは検討資料から長野県の松原No.2（第8図3）、県町（1）、下町田（4）と岐阜県畑館址（2）の4点を除く25点を東日本の石戈とする。東日本での数量や割合は、森本1930では、総量9点のうち2点で2割以上を占めていたが、下條1976・1982では総量79・130点のうち3点にとどまり、4～2%に落ち込んだ。現在は300点（中村2013）あるので、8%ほどに回復したことになる。

6　神奈川県天神山石戈発見の意義

石戈は、最初は石剣の一つとして紹介されたが（大野1922）、クリス形石剣（高橋1923、後藤1930、森本1930・1943）と命名され、石戈（小林1951、乙益1960、藤沢1968）、戈形石器（杉原1956）、石戈形石剣（桐原1963）へと変化し、石戈（下條1976、中村1997）が一般化する。近年の議論では銅戈形石製品（吉田2004・2013、馬場2008）も登場したが、ここでは青銅器の動向については触れないので石戈とした。

小田原市天神山石戈は伝九州とされ（乙益1960、町田市1974）、九州型石戈（下條1976・1982）であり、無樋型石戈（中村1995）であることが重要である。石材の鑑定が前提であるが、これまで本例を九州産ではないと指摘した研究者はいない。関東で発見された九州系弥生遺物の最初であろう（註25）。関東での模倣ではなく、搬入品であろう。これは東日本での最初の発見でもあった。次いで長野県黒沢川右岸例が登場するのである。中村1997では天神山石戈を弥生時代中期前半と想定している。弥生文化は武器をもって関東・中部に登場するのである。これまで東日本の弥生文化成立に際して近畿の影響は強調されても、九州の影響は指摘されなかった。これからは九州から近畿までの西日本弥生文化の影響を想定しなければならなくなっ

た。柳田 2004 によれば、石戈は九州の中心勢力ではなく、その外縁勢力の文化であるというが、そのような勢力こそが文化東進の活力となったのであろう。

東日本の石戈として 5 番目の発見である。しかし、新聞報道があっただけにとどまったため、関心は藤沢 1973 まではその存在に注意が払われていたが、杉原 1956、乙益 1960、町田市 1974 ではその出土地が忘却されていたのである。70 余年の空白こそが指摘されなければならない（註 26）。杉原荘介が今一歩、東京朝日新聞神奈川版を見ようとする気をもてば、関東の弥生文化像は大きく変わっていたのではないだろうか。森本六爾の没後の発見とはいえ、森本の東日本弥生文化観を覆すに十分な資料である。

石戈の型式は、日本海側と太平洋側では異なり、中部高地では錯綜している。仮に東海・南関東を無樋型石戈、近畿・北陸を有樋型石戈の文化圏とする。長野県で多い有樋型は今のところ北信と中信と東信に限られ、近畿・北陸との関係で搬入されたものと推定できる。その契機は戦争の可能性も高いであろう。戈の中央部での折損状態と再生化、刃部の欠けの状態などから実用の武器であろうと認定する。大規模遺跡の発掘調査で出土するものが多く、小破片が多いことは、有孔石剣の発見状況と正反対である。存在意義や系譜を同列、あるいは一系列に論じることはできないであろう。別稿にて吉石型石剣（有孔石剣）を検討した（岡本 2014b）。

さらに、東日本での無樋型石戈を積極的に評価したい。近畿や福井県西部止まりではなく、中部・長野県、愛知県や、関東・神奈川県、群馬県にも展開し、宮瀬本村のような大きな孔をもつものも生まれるのである。宮瀬本村例を中間的存在ではなく、宮瀬型石戈として石戈の派生的展開と位置づけたい。石川 2009 では長野県での石戈出現に九州の無樋型石戈の役割を想定したが、時期的にさかのぼり、分布的に広がるのである（註 27）。

そして、小田原市中里遺跡に近い下府中小学校で所在が確認された 3 本の有柄式石剣（野口 2004）の再評価に繋がるであろう。小学校に入るまでの経過が不明のため近年の搬入であることを否定できないでいたが（註 28）、今回の石戈の確認により小田原市出土の可能性は増した。類例は茨城県や青森県にもある（岡本 2003）。検討資料として取上げた岐阜県高山市畑館址も含まれる可能性がある。このような磨製石剣や石戈が発見されることは、関東における小田原の特性と理解したい。小田原城内での最古の武器でもあった。

謝辞

本稿作成に際しては多くの方々のご教示を得た。特に石川日出志氏には特段の配慮を得た。下條信行氏、中村修身氏から懇切な教示をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略）。実見した資料は少なく、それも十年以上も以前のものが多いが、とりあえずまとめておいて次の議論に備えたい。

本稿を故小出義治先生にささげる。先生とは神奈川県考古学会の考古学講座『かながわの古代寺院』、『学史に学ぶ』で楽しく議論したほか、慶応藤沢の発掘調査で大変お世話になった。

篤くお礼を申し上げる。

青木一男、青木和明、青木豊、石川日出志、伊丹徹、大島慎一、金子浩之、木村幾太郎、児島正巳、忽那敬三、熊野正也、工楽善通、笹沢浩、宍戸信吾、下條信行、杉山浩平、鈴木敏弘、田尻義了、寺前直人、時枝務、中村修身、松田哲、百瀬新司、山田光洋、吉田広、渡辺誠、伊東市教育委員会、小田原市教育委員会、小田原市立図書館、神奈川県埋蔵文化財センター、熊谷市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、長野市博物館、西相模考古学研究会、明治大学博物館

註

(1) 岡本2008にも神奈川県の磨製石剣の集成図を引用して示した。

(2) 池田健夫（岡本2010ｂ）の可能性がある。1940年2月に何人となっており、斎藤房太郎の戦争からの帰還歓迎会に出席している。池田の活動期は戦前の10年ほどで、戦後は埼玉県狭山市に移住し歯科医に専念したことも、この石器の認識が途絶えたことと関係あるのではないかと思われる。

(3) 内田の名前は不明。内田の判と内田文庫の印があり、最末尾の見返しに「故森本六爾兄を偲んで　内田生　昭和拾壱年於神田求之」の記載がある。買い求めて4年後に小田原町の件を書込んだものとみられる。

(4) 藤沢宗平（1914～1974）（百瀬1996）はすでに亡くなっていて指摘できなかった。おそらく新聞を見ていないだろうから生きていても確認はできなかったであろう。

(5) 鏑川川底の実測図は大野1922と森本1943と下條1982にあり、下條図が飯島1991、大塚1995、中村1996、石川2005・2009、桐原2006に引用される。大野・森本図と下條図は向きが反対で表裏面を知ることができる。下條図には断面図が加えられる。森本は和田千吉蔵としているので東京国立博物館蔵かと思われるが、東博1956にはなかった。下條の教示によれば、原図は岡崎敬の作図であった。

(6) 町田1999は、第78図では石戈の一群にまとめているが、第77図では有孔石剣として▲印で示している。第78図では有樋式石戈◆のほかに◇石戈を群馬県で1点示している。無樋型を認識していることを示しているが、黒沢川右岸は◆で示す。また、岡本1997では有孔石剣として図示し、同時に石戈として表示して混乱している。関沢1994を引用しているが、諸説があったことを整理しきれなかったものである。さらに石川1992の分布図には■有孔石剣と▲石戈が示されていて、石戈として理解していたようだ。■は関沢1994で示された1989年の発掘出土品をさすものと思われる。

(7) 沢村について岡本1997で中谷1923を最初の報告としたがこれは誤記であり、削除する。また、沢村は2点とされたこともあった（下條1976・1982）。下條は『信濃考古総覧』1956を引用しているが、根拠は未確認である。宮淵本村をさすのかもしれない。藤沢1968には城山及び沢村の記載があった。

(8) 黒沢川右岸遺跡は発掘調査され、中期中葉から後半の栗林式期の集落跡であることが明らかにされている（山田1988）。石戈に触れているが図などはない。現在、資料の所在は不明となっている。中村は裏面が大きく破損していることから、片面のみの有樋型の可能性もあるのではないかと考えたと教示を

受けた。

(9) 近畿でも無樋型石戈の新資料が発見されていると寺前直人より教示を受けた。中村修身より、京都府八幡市備前、京都市南区京都桂川ＰＡ、島根県松江市西川津、下條信行より愛媛県松山市六丁場の事例を教示された。また、難波洋三2011・2012は大阪府枚方市田ノ口山、兵庫県神戸市青谷、大阪府高槻市安満、京都府木津川市大畠、滋賀県大津市錦織、京都市中久世で無樋単孔石戈が出土していることを示している。

(10) 群馬県では大塚1995は3点を集成したが、群馬県1990、平田1991はそれぞれ、群馬県の3例目、4例目としていて一致しない。あるいは後に中村1966の紹介した嬬恋村中郷かもしれないが未確認である。中郷は、中村の教示によれば群馬県立歴史博物館の教示によるという。

(11) 吉田広の摘出であるとされるが、教示によれば可能性を指摘したにとどまるようだ。

(12) 埼玉県行田市小敷田遺跡（埼玉県1991）で石戈が報告されているが、白川型石斧と判断した（岡本2004ｂ）。また、柳田康雄2012では、国学院大学所蔵石器を出土地不明の石戈として報告しているが、これは青木豊の教示により足洗型石器として取上げたものであり（岡本1999）、茨城県猿島郡の採集品である（岡本2003）ので取上げない。足洗型石斧を石剣に改変したものとした。これは出土地不明資料の出土地を知った最初例である。因みに、樋？のある千葉県草刈の足洗型石斧を古くみる考え方が蔓延しているが、これは足洗型石斧が弥生石剣の影響を受けて改変されたと理解する。

(13) 茨城県3点、新潟県5点があり、長野県でも2点増加することを確認している。いずれも戦前の文献から再発見したものである。

(14) 寺前直人2010も石戈の未成品としている。東日本は概観しているのみで検討されていない。

(15) 馬場2008は、久保1993は「石戈の「鋒」」と報告したとするが、報告書にはない。桐原2006の誤りか。

(16) 石材については後考する。沢村については、閃緑岩（桐原1963）、粘板岩（関沢1994）、緑泥片岩（中村1996）、頁岩あるいは粘板岩（馬場2008）と異なる判断が示されている。松原についても黒色頁岩（町田2000）と別意見がある。ただ、粘板岩や頁岩が多いと思われる。榎田を外す所以である。しかし、馬場2008によれば長野県では笠倉が変質輝緑岩、佐久市西一本柳が輝緑岩で変質輝緑岩とは別物とされている。栗林は緑色の堆積岩とする。さらに群馬県例の2点は斑糲岩とされている（大塚1995）。変質輝緑岩は石戈の石材としては少数であり、榎田は在地の宮瀬型石戈として位置づけておきたい。

(17) この点は柳田康雄2004・2012の考え方と同じである。青銅器製武器があるなら石製武器は必要ないという指摘を、搬入武器があるならば在地武器は必要ないと読み替えることができる。しかし、柳田2012においては東日本では徹底していない。

(18) 近年は有孔石剣も集落遺跡で出土している。佐久市西一本柳遺跡や中野市栗林遺跡では、石斧形のものや石斧に再生されたものが出土していて、これまでと違う出土状況が知られて来た。

(19) 石川の石戈説は、1992年の論文で示唆した後では、2005年の法政考古学会での講演が最初のようだ。

(20) 熊倉型石斧を大森文化の石剣の系統ととらえ石剣に分類する。

(21) 弥生文化の土器としての弥生土器という命名法（佐原真）も不適当となる。弥生町遺跡出土である

からこその弥生土器である。

(22) 森本1930・1943、坪井1960の考えは、桐原1963、石川1992・2009・2012、関沢1994・2008・2011、馬場2008、小林2013、吉田2013などに受け継がれている。弥生文化を西からしか見ていない認識の構造が問題である。森本は、関東は歪んで弥生化したと述べているのであり、そのような見方こそ歪んだ考えであると批判したい。吉田2013の樋のある有角石斧をその古いものとして石戈の系譜とするのは成立しないし、そうならばそこに白川型石斧の系譜を想定する余地はない。中間的立場は議論を混乱させるだけである。近年多出している石戈・有孔石剣・有角石斧一系論については、まとめて検討批判したい。

(23) 大場磐雄1976は長野県にも両角守一資料に松代付近発見の有角石斧があると日記に書き留めている(1935年11月18日)。「やや棒状を呈し断面偏楕円形、角は低し。」とある。国学院大学2005『大場磐雄博士写真資料目録』1にある写真0893の「両角氏所蔵品：石器「両角氏石器」昭和10年　両角氏蔵」の右側にあるものの可能性があるが、類例に加えるにはやや躊躇する。角ではなく隆帯が一つだけ巡るB型であることによる。このタイプの確認は清水潤三1954が初出であり、大場が含めていたかどうかは不明である。違う資料があるのかもしれない。また、写真からはやや硬い印象を受ける。柄部が太く、無孔の有孔石剣のようにもみえる。同じような形態は新潟県の江戸時代の『上古石器図巻』にもある(小熊1996の図1の2)。

(24) 註9参照。

(25) 新潟県柏崎市開運橋遺跡で九州系土器（下大隈式土器）の壺が採集されていることを「弥生時代のにいがた」展（新潟県立歴史博物館2013）で知った。石川日出志の教示によれば『柏崎市史』1990で紹介されて九州系土器と判定されたとのことである。しかし、石戈は展示されなかった。そして、青銅器と有角石器を並べる誤を繰り返している。

(26) 神奈川県考古学においても空白が問題である。

(27) 石川説に対しては難波2011・2012の批判があり、近畿北部からの影響としている。難波説も再検討されるべきである。柳田2012は石川説を肯定する。

(28) 下府中小学校には、磨製石剣3点のほかに韓式土器があるとのこと。伊丹徹教示。このこともあって、小田原市出土を危ぶむという。しかし、直接資料を見た人がいないようである。また、韓式土器の鑑定が必要である。あるいはという期待もある。

出典

第5～7図

No.1森本1930・下条1982、No.2中谷1923、No.3森本1943、No.4関沢1994、No.5岡本（本稿）、No.6関沢1994、No.7長野県1988、No.8三郷村1980、No.9長野市2003、No.10中村1996、No.11百瀬1987、No.12中村1996、No.13群馬県1990、No.14山武考1991、No.15飯島1991a、No.16関沢1994、No.17中村1996、No.18町田2000、No.19町田2000、No.20町田2000、No.21町田1999、No.22岡本2004、No.23上越市2006、No.24愛知県2007、No.25馬場2008

第8図

No.1 関沢 1994、No.2 吉朝 1991、No.3 久保 1993、No.4 上田市 2000、土戈・上越市 2006

文献

飯島哲也 1991 a『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財 40

飯島哲也 1991 b「長野市松原遺跡出土の石戈について」『長野県考古学会誌』63

石川日出志 1992「N．G．マンロー資料中の「有孔石剣」と「石庖丁」」『考古学雑誌』78 － 1

石川日出志 2005「東日本弥生文化研究の諸問題」法政考古学会講演資料

石川日出志 2009a「中野市柳沢遺跡・青銅器埋納坑調査の意義」『信濃』61 － 4

石川日出志 2009b「弥生文化と信濃」『山を越え川に沿う―信州弥生文化の確立―』長野県立歴史館

石川日出志 2012「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100

石川日出志 2013 a「杉原荘介の弥生時代研究」『考古学集刊』9

石川日出志 2013 b「弥生時代研究と前中西遺跡」『シンポジウム熊谷市前中西遺跡を語る』発表要旨

石野　瑛 1963『神奈川県史概説　始原より平安時代』

大塚昌彦 1995「弥生時代のおとしもの」『群馬考古学手帳』5

大野雲外 1922「或る石剣に就て」『民族と歴史』7 － 6

大場磐雄 1976「楽石雑筆（中）」『大場磐雄著作集』7

岡本孝之 1991『相模湾岸の高地性遺跡』『湘南考古学同好会々報』42

岡本孝之 1993「攻める弥生・退く縄文」『新版古代の日本』7 中部

岡本孝之 1996 a「弥生化を強制された石器たち」『神奈川考古』32

岡本孝之 1996 b「最後の白河型石器」『異貌』15

岡本孝之 1997「西馬音内型石器論」『西相模考古』6

岡本孝之 1999「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』84 － 3

岡本孝之 2003「茨城県における弥生文化観の再検討―大森系呪術石斧と弥生系石製武器―」『茨城県史研究』87

岡本孝之 2004 a［埼玉県の弥生系石剣」『時空をこえた対話―三田の考古学―』

岡本孝之 2004 b「埼玉県白川型石器の再検討」『異貌』22

岡本孝之 2006「小田原考古学のはじまり―小田原遺跡と榊原政職―」『小田原市郷土文化館研究報告』42

岡本孝之 2007「弥生時代」『大磯町史』10　考古

岡本孝之 2008「新神奈川・新弥生論」『新神奈川・新弥生論』神奈川県考古学会

岡本孝之 2009「多頭形模場型石斧論」『西相模考古』18

岡本孝之 2010 a「熊倉型石斧考 ―磨製有孔石鏃の再検討―」『西相模考古』19

岡本孝之 2010 b「横浜考古学研究会とその会員」『考古論叢神奈河』18

岡本孝之 2011 a「熊倉型石斧考補遺」『西相模考古』20

岡本孝之 2011 b「白川型石斧の考古学史ーとくに名称の変遷についてー」『旗櫃林の考古学』

岡本孝之 2013「江戸時代の橋場型石斧」『西相模考古』22

乙益重隆 1960「武器、狩猟具、漁撈具」『世界考古学大系』2　日本Ⅱ弥生時代

桐原　健 1963「信濃出土の磨製石剣について」『信濃』15 － 4

桐原　健 2006「海の口銅戈の将来経路」『長野県考古学会誌』118

久保勝正・久保邦江 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財 58

小熊博史 1996「北越頸城河倉亭画『上古石器図巻』考」『考古学と遺跡の保護』

後藤守一 1930「上古時代に於ける上越地方」『考古学雑誌』20 － 9

小林青樹 2006「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』20

小林青樹 2013「戈形の象徴性」『栃木史学』27

小林行雄 1951『日本考古学概説』

笹沢　浩 1976『長野県上水内郡誌』歴史編

笹沢　浩 2003「吹上遺跡」『上越市史』資料編2考古

清水潤三 1954「有角石器の諸問題ー新資料によせてー」『考古学雑誌』40 － 2

下條信行 1976「石戈論」『史淵』113（2008 所収）

下條信行 1982「武器形石製品の性格　ー石戈再論ー」『平安博物館研究紀要』7（2008 所収）

下條信行 2008『大陸系磨製石器論ー下條信行先生石器論攷集ー』

酔古生（栗岩英治）1933「古い図録で見た信濃出土？銅鐸其他」『信濃』2 － 6

関沢　聡 1994「松本平東部における弥生時代の石製武器について」『中部高地の考古学』Ⅳ

関沢　聡 2008「弥生時代の争いと祈り」『平出博物館ノート』22

関沢　聡 2011「石戈と有孔石剣の地域性・時期差に関するメモ」『長野県考古学会誌』138・139

高橋健自 1923「銅鉾銅剣考 11」『考古学雑誌』13 － 6

高橋健自 1925『銅鉾銅剣の研究』

種定淳介 1990「北陸の磨製石剣」『福井考古学会誌』8

檀原長則 1988『栗林Ⅷ・浜津ヶ池』中野市教育委員会

坪井清足 1958「開けゆくクニ」『風土記日本』7

坪井清足 1960 写真解説「宝器的な石剣」ほか『世界文化史大系』20 日本Ⅰ

寺前直人 1998「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』45 － 2

寺前直人 2010 a『武器と弥生社会』

寺前直人 2010 b「もう一つの石戈」『待兼山考古学論集』Ⅱ

中野敬次郎 1966『小田原市史料』上

中村修身 1995 a「石戈の分類と編年について」『地域相研究』23

中村修身 1995 b「石戈誕生の意義」『地域相研究』23

中村修身 1996「本州四国地方出土の石戈―石戈の基礎調査その５―」『地域相研究』24

中村修身 1997 a「石戈の形態分類と編年（再考）」『地域相研究』25

中村修身 1997 b「再生された石戈」『古代学評論』5

中村修身 2013「石戈祭祀の性格」『弥生時代政治社会構造論　柳田康雄古稀記念論文集』

中谷治宇二郎 1923「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器に就いて」『人類学雑誌』39－7・8・9

中谷治宇二郎 1993「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器に就いて」『考古学研究の道』

難波洋三 1986「戈形祭器」『弥生文化の研究』6

難波洋三 2011「弥生の祭器―銅鐸の謎にせまる―」『平出博物館紀要』28

難波洋三 2012「柳沢遺跡出土銅鐸の位置づけ」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100

新田栄治 1980「東日本の武器形石製品」『鹿児島大学史学科報告』29

野口　舞 2004「小田原市立下府中小学校蔵の有柄式磨製石剣」『古文化論叢』50

馬場伸一郎 2008「武器形石製品と弥生中期栗林式文化」『「赤い土器」のクニの考古学』

原　嘉藤 1942「田清池出土の銅鐸」『信濃』1－7

春成秀爾 1992「弥生時代　祭祀」『図解・日本の人類遺跡』

春成秀爾 1996「人も戦い神も闘う」『倭国乱る』国立歴史民俗博物館

春成秀爾 1997「祭りからみた弥生時代の東西」『歴史街道』10 月号

春成秀爾 1999「武器から祭器へ」『人類にとって戦いとは』1

深沢太郎・尾方聖多 2012「研究史」『東日本青銅器祭祀の研究』

藤沢宗平 1968『南安曇郡誌』第２巻上　南安曇郡誌改訂編纂会

藤沢宗平 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第２巻上　東筑摩郡ほか郷土資料編纂会

藤沢宗平 1989『信濃先史文化の研究』

藤森栄一 1937「千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器―弥生式聚成図稿解説―」『考古学』8－8

藤森栄一 1962「磨製石斧」『日本考古学辞典』

増田精一 1968・1978「分布と文化系統」『新版考古学講座』1

町田勝則 1996「弥生中期の石器からみた社会　続・希少なる品々―栗林文化―」『長野県考古学会誌』80

町田勝則 1997「稀少なる品々―信州弥生文化にみる特殊遺物の変遷―」『人間・遺跡・遺物』3

町田勝則 1999『榎田遺跡　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37

町田勝則 2000『松原遺跡　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36

町田勝則 2008「石器に弥生の社会を読む」『「赤い土器」のクニの考古学』

町田勝則 2013「信州における弥生社会の在り方　石器の流通と生産」『文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集

町田勝則 2013「信州の弥生遺跡　榎田遺跡」『文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集

松田　哲 2013「熊谷市前中西遺跡の調査」『シンポジウム熊谷市前中西遺跡を語る』

室岡　博 1988「丸山遺跡の予備調査」『丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会

百瀬長秀 1987「岡谷市内　中島Aほか」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 1

百瀬長秀 1996「藤沢宗平先生」『画龍点睛』

森川昌和・大森宏 1971「若狭高浜町出土の石剣、石戈」『若狭考古学研究会報告』2（未見）

森本六爾 1929『青銅器時代遺跡地名表』

森本六爾 1930 a「関東有角石器の考古学的位置」『考古学』1－1（1943『日本考古学研究』所収）

森本六爾 1930 b「関東発見のクリス形石剣」『武蔵野』16－2（1943『日本考古学研究』所収）

森本六爾 1930 c「北九州のクリス形石剣と東国のクリス形石剣」『福岡』45（未見）（1943『日本考古学研究』所収）

森本六爾 1943「東国発見のクリス形石剣」『日本考古学研究』（森本 1930 b c を合成）

両角守一 1933a「北安曇郡平村諏訪社の銅剣」『信濃』2－1

両角守一 1933b「滞京漫筆」『信濃』2－8

柳田康雄 2004「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29

柳田康雄 2012「青銅武器・武器形青銅器模倣品」『東日本青銅器祭祀の研究』

柳田康雄ほか 2012『東日本青銅器祭祀の研究』

柳田康雄・久保田健太郎・大久保聡 2012「青銅器模造石器の検証」『東日本青銅器祭祀の研究』

八幡一郎 1948「有孔石剣新例」『日本考古学』2（1979『八幡一郎著作集』3 弥生文化研究所収）

山田瑞穂 1988『黒沢川右岸遺跡』三郷村の埋蔵文化財 1

吉朝則富 1991a「飛騨の弥生時代石器 (6)」『どっこいし』36

吉朝則富 1991b「飛騨の弥生時代石器 (7)」『どっこいし』37

吉朝則富 1992「飛騨の弥生時代石器」『飛騨春秋』376

吉田恵二・尾方聖多 2012「青銅器出土遺跡の現状」『東日本青銅器祭祀の研究』

吉田　広 2004「武器形青銅器の祭祀」『季刊考古学』86

吉田　広 2013「信州における弥生社会の在り方　信州における青銅器の受容と祭祀」『文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集

愛知県 2007『朝日遺跡Ⅶ第 2 分冊出土遺物』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 138

上田市教育委員会 2000『常入遺跡群　下町田遺跡Ⅱ』上田市文化財調査報告書 82

上田市　2000「上田の弥生・古墳時代」『上田市誌』歴史編 2

群馬県教育委員会・平岡和夫 1990「古立東山遺跡」『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『神保富士塚遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 18　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 154

国学院大学 2005『大場磐雄博士写真資料目録』 I

山武考古学研究所 1991『妙義町の遺跡（1）』学術調査研究 2

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 95

佐久市教育委員会 2008『北畑遺跡 1・2、北裏遺跡 1』佐久市埋蔵文化財調査報告書 155

信濃史料刊行会 1956『信濃考古総覧』

上越市教育委員会 2006『新潟県上越市吹上遺跡』主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書 1

東京国立博物館 1956『東京国立博物館収蔵品目録』第 3　考古編

長野県　1988『長野県史』考古資料編　遺構・遺物

長野市教育委員会 1971『平柴平遺跡緊急発掘調査概報』（未見）

長野市　2003『長野市誌』12　資料編　原始・古代・中世

長野市博物館 1987『稲を伝えた人々―その生活と葬制―』

新潟県立歴史博物館 2013『弥生時代のにいがた』

日本民俗資料館 1970『資料目録』考古編 1969 年度

町田市立博物館 1974『石の系譜展　原始古代の石器と石製品』

松本市教育委員会 1990『松本市県町遺跡』松本市文化財調査報告書 82

松本市　1997『松本市史』2 歴史編（1）原始・古代・中世

三郷村　1980『三郷村誌』 I

三郷村教育委員会 1988『黒沢川右岸遺跡』三郷村の埋蔵文化財 1

追記

天神山石戈については、岡本 2014a で紹介し、小田原市教育委員会 2014 でも紹介された。脱稿後に吉石型石剣を検討し、長野県堀之内№ 2 の基部片を宮淵型石戈としたので追加する。詳細は別稿（岡本 2014b）を参照のこと。愛知県一宮市猫島遺跡の石器に「磨製石剣・石戈」2 点、「その転用品」とされるものが 4 点報告されている（愛知県 2003）。すべて破片である。石黒立人 2002 は、同じものを「打製短剣（戈）」と表現している。新潟県の小島正巳 2011 は『始境雑記』にある妙光山の磨製石斧剣の絵を紹介した。石戈の可能性がある。有樋型石戈とした長野県笠倉は両面に樋がある（石川 2012）。平柴平に類似したものに茨城県男神石剣がある。豊崎 1953・1973 が最初に報告し、新田栄治 1980、岡本 2003 が再報告した。これも片面だけに樋がある。また、本稿で取上げた以外に石戈とされる石器がある。千葉県の蜂屋孝之 2004 は横芝町例（清水潤三 1967）を石戈とし、神奈川県の伊丹徹 1995 は厚木市宮の里遺跡例を石戈とし、静岡県伊東市日暮遺跡出土例（伊東市 2009『図説伊東の歴史』）を石戈と教示されたことがある。鈴木隆夫 1992 は、浜松市山の神例を石戈としたが石鏃と表や図に示され石鏃であろう。寺前直人 2002 は長野県松原 2 を磨製尖頭器、神奈川県宮の里例を極大形磨製尖頭器としている。なお、第 9 図の★印 1 点が剥落し

ている。石川県小松市八日市場地方遺跡である。岡本2014abで石戈と吉石型石剣との関係に触れたので併読されたい。

石川日出志2012「熊谷の弥生時代」『熊谷の発掘出土品―地中からの息吹―』

石黒立人2002「生産と流通からみた伊勢湾地方の弥生集落」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表会資料』

岡本孝之2014 a「大森と弥生―文化関係論の展望―」『久ヶ原・弥生町期問題の現在』西相模考古学研究会シンポジウム

岡本孝之2014 b「吉石型石剣試論」『神奈川考古』50

小田原市教育委員会2014『天神山周辺の原始・古代の遺跡』小田原の遺跡探訪シリーズ9

小島正巳2011『妙高火山の考古学』

杉原荘介1956「弥生式文化」『図説日本文化史大系』Ⅰ縄文・弥生・古墳時代

鈴木隆夫1992「弥生時代の重要遺物　石器」『静岡県史』資料編考古3

寺前直人2002「武器」『考古資料大観』9弥生・古墳時代石器・石製品・骨角器

豊崎　卓1953「原始時代」『茨城県郷土研究』茨城大学

豊崎　卓1973『茨城県の歴史』

蜂屋孝之2004「弥生時代　特殊遺物」『千葉県の歴史』資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）

馬場伸一郎2011「栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」『長野県考古学会誌』138・139

町田勝則1992「長野県」『弥生時代の石器』第1部第3分冊

森川昌和1986「小和田遺跡」『福井県史』資料編13考古

若狭　徹1992「群馬県　古立東山遺跡」『弥生時代の遺跡』第1部第3分冊

愛知県　2003『猿島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書107

神奈川県立埋蔵文化財センター（伊丹徹）1995『かながわの弥生時代』

小松市教育委員会2003『八日市場地方遺跡』Ⅰ

「貞観」紀年銘木簡と伴出土器の様相

—茅ヶ崎市本村居村B遺跡出土の古代土器—

押木　弘己

はじめに
1. 遺跡の概要
2. 平安時代の水田
3. 4号「貞観」紀年銘木簡と伴出土器
4. 草山編年の年代観について—IX期の暦年代定点を中心に—
おわりに

はじめに

茅ヶ崎市本村に所在する居村B遺跡では、2011年度から2012年度にかけて第4次発掘調査が行われた。ここでは畦畔で区画された平安時代～近世の水田跡が検出され、近代においても暗渠排水管を配し乾田化を志向した水田耕作の跡を確認することができた。また、検出遺構に加えてプラント・オパールや花粉・種子など植物遺存体からも稲作の存在が裏付けられ、神奈川県下では希少な水田遺跡の調査例として、意義ある成果となった（押木・長澤ほか2013、長澤2014）。

こうした中、平安時代の水田畦畔を構成する砂中からは墨書資料を含む多くの土器片とともに「貞観□年八月十□(一点ヵ)日…」と書かれた木簡が出土した。本遺跡では過去に3点、今回も3点の計6点に上る古代木簡が出土しており、上記の木簡は発見順により居村B遺跡4号木簡と呼ぶこととなった。「貞観」は平安時代前半の西暦859年～877年にかけて使用された年号であり(註1)、同一の畦畔から出土した土器類とともに、当期の水田が9世紀中葉～後半に耕作されていたことを示す貴重な発見となった。

これまで、筆者は調査の成果に関して何度か報告の機会をいただき、その度に4号木簡と伴出土器の様相とに年代的矛盾がないこと、つまり従来の土器編年研究の成果を「貞観」の記述が追認し補強する、という所見を述べてきた(註2)。現在もその考えは変わらないが、各報告では木簡の記載内容に見える饗宴や祭りの実態に関すること、さらには、そこから窺える居村遺跡の性格や地域社会における支配秩序の動向を中心に論じており、土器に関する具体的な説明は省いてきた。そこで、本稿では改めて「貞観」紀年銘木簡と伴出した土器の様相について分析を加え、編年上の位置付けを行うこととしたい。

なお、前稿でも数量データを用いた土器年代の把握を試みているが（押木2014b）、今回検討を進める中で対象となる資料数や型式認定に誤りがあったことに気付いた。土師器坏B6b類でⅠ類とⅡ類の構成比が逆転したことが最大の変更点で、本稿では第6図a②に修正したグラフを示している。不注意をお詫びしたい。

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の立地と性格

居村B遺跡は茅ヶ崎市南部の本村地区に所在している。相模湾沿いに形成された東西砂丘列のうち、現在国道1号が走る高位砂丘と一列北の低位砂丘とに挟まれた砂丘間低地に立地する。現地表面の標高は5.6mで国道の「本村交差点」より9mばかり低いが、北側低位砂丘との比高差は20cm程度しかない。高位砂丘には前ノ田遺跡が所在し、過去の発掘調査により10世紀後半以降、2～6mも砂の堆積が進んだ状況が把握されている。低位砂丘上には居村A遺跡が所在しており、平安時代では竪穴住居や井戸など居住・生活関連の遺構が発見されている。

居村B遺跡では当調査地の東隣で第1次調査が1987～88年に実施され、灰黒色粘質土層上で古代の南北畦状遺構や東西溝の発見に及び、水田関連の遺跡である可能性が示された。遺構内および周辺では墨書資料を含む土器類や木製品など多くの古代遺物が出土しており、これらに混じって2点の木簡も発見されている。このうち2号木簡としたものは「放生布施」の記述から仏教行事である放生（会）の斎行に関する命令文書との見方がなされている。また、1992年の調査では曲物底を利用した3号木簡が出土し、「蓄槽」の記述をもとに『延喜式』で相模国の中男作物に規定されている茜（染料）の保管・生産施設が近在したとする見解が示されている。こうした仏教行事の執行や貢納物の生産には郡家など公的機関の関与も想定されているが、これまでの周辺における発掘調査では古代官衙の存在を明確に示す発見には及んでいない(註3)。

古代の行政区分上、当地区は相模国高座（たかくら）郡に属しており、河会（かわい）郷または大庭（おおば）郷に比定する説がある(註4)。一方、近年では北西約3kmの下寺尾地区において高座郡家と郡家隣接寺院が確認され（下寺尾官衙遺跡群）、「郡名郷＝郡家所在郷」という見方から同地区一帯を高座郷に比定し得るか、といった問題提起もなされている(註5)。

(2) 調査成果の概要

今回の調査は道路建設に伴うもので、居村A遺跡で23.4㎡（第6次）、B遺跡では910.7㎡（第4次）を対象とした。低位砂丘上のA遺跡については小規模の調査にとどまったが、堆積土の様相がB遺跡と異なり、土坑や溝を主体とする古代遺構の分布からも水田と思しき状況は窺えなかった。

一方のB遺跡では遅くとも平安時代には水田の整備がなされ、以後、中世・近世・近現代へと水田として受け継がれたことが畦畔や水路などの遺構展開、および土壌中のプラント・オパールの検出量から明らかとなった。下層から順に、第3b面下～第3a面が平安時代、第2面が中世、第1面が近世に相当し、近現代の水田については土層断面の観察および第1面水田を切って埋設された暗渠排水管の検出によって把握できた。暗渠管は常滑焼と見られる施釉管と素焼

き管が用いられ、地元在住者のご教示により昭和16年頃、乾田化による食糧増産を企図して埋設されたという。

2. 平安時代の水田

(1) 水田整備の画期と変遷

第3b面において東西水路（溝2）と、これに直交または平行する畦畔を確認し、この段階になって本格的に水田の整備が進んだ状況を見て取ることができた。続く第3a面でも東西水路（溝1）と畦畔が検出され、それぞれ第3b面遺構の位置を概ね踏襲するものであった。出土遺物の様相面でも第3b面から第3a面への連続性が見て取れ、大よそ9世紀後半～10世紀代を中心に耕作が続いたことを推察している。なお、遺物面に限って述べれば、続く第2面の中世水田へと直接的に連続する状況は認められない。第3a面・第3b面の両段階とも水田1枚の規模を知り得た事例はなかったが、調査区北外の現市道下に水田域の北限があることは確実視できるので、東西および南の限界を確認できた水田については、1枚180～330㎡前後であったことが推測できる。水田面の標高は東から西に向けて少しずつ低くなり、調査に及んだ限りでは水口（みなくち）と見做せる痕跡がなかったことから、各水田への給水は田越（オーバーフロー）を基本としていたと考えている。東西水路については、地下水が潤沢な土地柄でもあることから、取水以上に湿田改良を意図した排水機能を重視して開削された可能性も考えている。

第3b面下については水路の確認には及ばなかったものの、粘質土層の上面で東西に延びる砂の帯が発見されている。上下に堆積する土壌のサンプルから稲作の指標とされる5000個/gを大幅に上回る量のイネのプラント・オパールとともにイネの籾殻片や多様な水田草本が検出されていることも考慮すれば、この砂帯が水田の畦畔であった可能性は十分に考えられる。ただ、ここでも9世紀中葉～後半の土器が出土しているので、第3b面の水田とは殆ど時期差がなかったことになる。

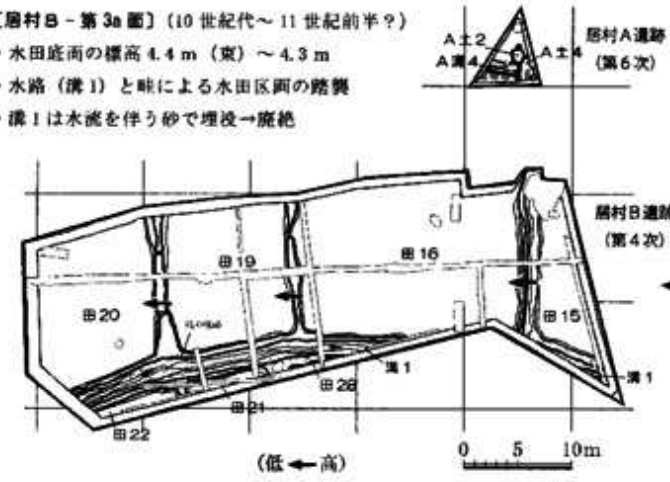
いずれにせよ、水路の開削や畦畔の構築など諸施設の出現を見る限り、第3b面段階を当遺跡における水田整備の一大画期と評価して大過ないだろう。

以下、木簡が出土した第3b面の調査成果に絞って、説明を進める。

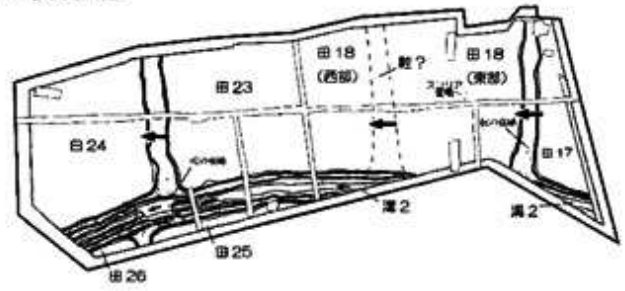
(2) 第3b面の水田遺構

東西水路（溝2）と畦畔で区切られた6枚の水田面を確認した。溝2は両岸に粘質土を貼った土手を伴い、上幅が1.5～2m、深さは土手の上端から20～25cmと浅い。底面の標高は4.1～4.2mで、西に向けた緩やかな流れとなっている。溝2の土手を除く畦畔は全て南北方向に延び、中心間14～21mの間隔で配されていた。基底部の幅が1.5～2m、断面観察により10～20cmの高さを確認しているが、後世の削平や土圧による削平を考慮すれば、本来はもう少し高かったことも考えられる。粘質土と砂の混合土で構築されるが、砂が主体となる箇所や粘

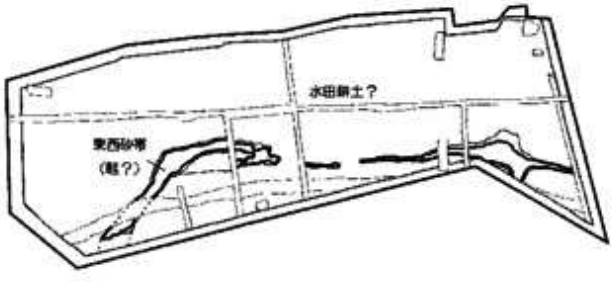
【居村B－第3a面】（10世紀代～11世紀前半？）
・水田底面の標高4.4m（東）～4.3m
・水路（溝1）と畦による水田区画の踏襲
・溝1は水流を伴う砂で埋没→廃絶



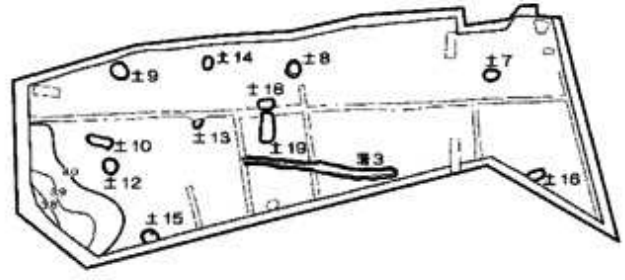
【居村B－第3b面】（9世紀後半～10世紀前半）
・水田底面の標高4.3m（東）～4.2m
・水路（溝2）開削と畦構築による水田整備
・水田17-18間畦と下層東西砂帯との交差部より
4・5号木簡出土



【居村B－第3b面下】（9世紀中葉～後半）
・標高4.3m（東）～4.2m
・水路の開削前
・土壌分析から、この段階にもイネ栽培の可能性
→東西砂帯も水田畦か？
・東西砂帯より6号木簡出土

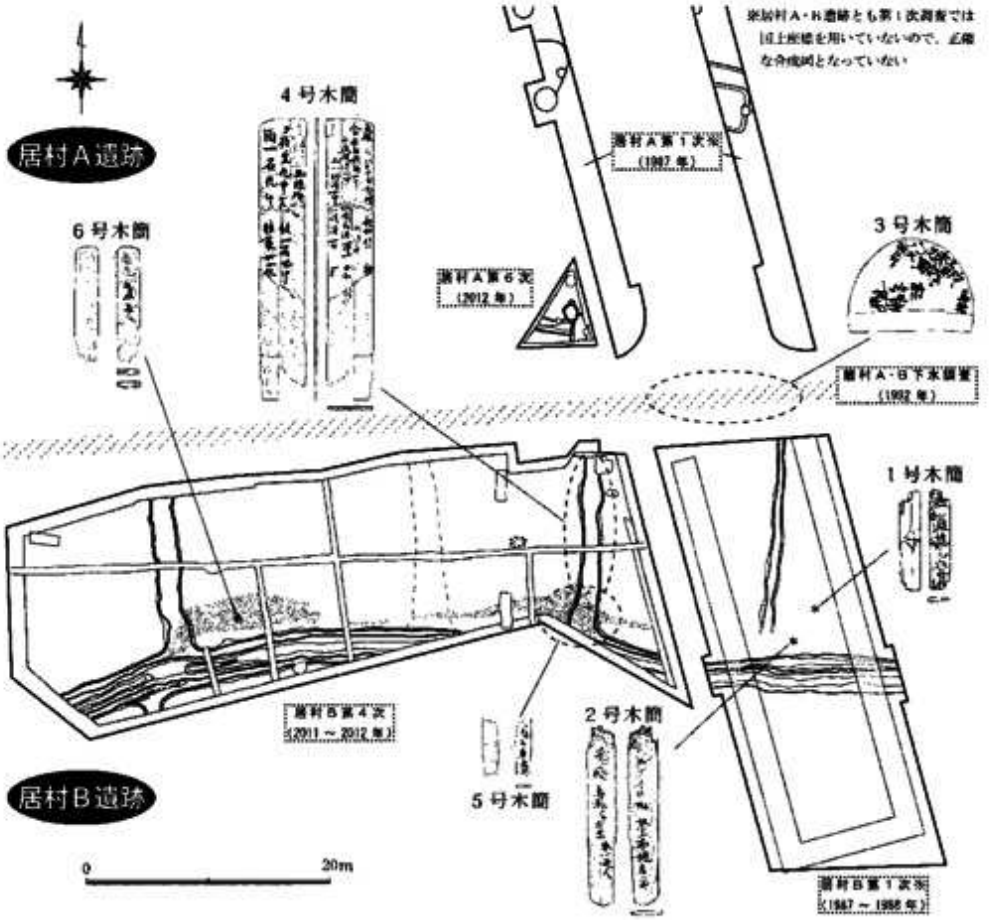


【居村B－第4面】（8世紀代が中心？）
・標高4.25m（東）～4.2m
・水田整備以前（土坑・溝状遺構が散漫に分布）



第1図 古代遺構の変遷

質土のみで構成される部分など一様には捉えられず、後者の場合、水田耕作土との識別には苦労した。畦畔の構成土には土器片や木製遺物が少なからず混入していたが、特に調査区東側で検出された水田 17 － 18 間の南北畦では集中的出土状況が認められた。この部分では灰色砂を主体に畦畔が形成されていたことから、報告書では砂丘上から砂を運搬する際、集落での使用を終えた土器片も一緒にもたらされた、とする所見を述べた。ただ、ここから出土した土器が全て破片であったにも関わらず完形近くにまで接合・復元できた個体も一定の量があり、また、多くの墨書土器や儀礼・饗宴の斎行を想起させる 4 号木簡が出土した事実も考え合わせれば、この畦畔自体が何らかの宗教行事の斎行場所であった可能性は十分に考え得る。水の遮断という畦畔本来の役割には不適な砂を主体に構築されていた点について、歩行や耕作の妨げでしかない土器片―硬質で創傷の危険性さえ伴う灰釉陶器までも―を選別もせず畦畔に埋め込むことの非合理性を勘案し、最近では「祭場の整備＝清浄な空間の創出」という点に意義を見出している。これらの諸状況から、一時的であるにしても当畦畔が何らかの儀礼を行う場となった可能性は考えても良いかと思う。



第 2 図　居村 B 遺跡 1 ～ 6 号木簡の出土位置

3．4号「貞観」紀年銘木簡と伴出土器

(1) 4号木簡の状態と内容

前節で触れたように、4号木簡は第3b面の水田17－18間南北畦において、構築砂中から多くの土器片や木製品とともに出土した。大小9片に破損していたが、洗浄後の接合作業によって大よそ本来の形状にまで復元することができた。長さ458㎜、幅78㎜というサイズは県内で出土した古代木簡としては最大であり、表裏両面に書き記された70字を超える文字数も最多で、その分だけ多くの情報が期待できる発見となった。幅広の短冊形を呈し、表面の右上端部が隅切りされていることから折敷の転用品である可能性も提示されている(註6)。厚さ5㎜の板目材を用いており、木目に逆らって破断している状況から、使用の後は故意に折断されたものと考えている。表裏両面とも下部は刃物によって文字が削り取られたようで、表面下部には微かに墨痕が認められるものの、釈読には至らなかった。それでも表面に4行、裏面に3行の文字列が読み取れ、後述するように貞観年間の東国社会における地域支配の在り方に加え、当時の行事や饗宴の具体像を考える上でも多くの情報が提供されることとなった。

4号木簡の釈文は、第3図に掲げた通りとなる。今後、保存処理を経て墨痕が鮮明に表出し、それにより新たな釈読が進むことにも期待したい。

表面は「貞観□年八月十□(二カ)日」で始まり、「勾(まがり)村」や「秋村」から参集した「市田殿」「吉成殿」ら地域の有力者（18人か）に、酒各一斗ほどを支給した際の記録と推測された。裏面には支給の総対象者数であろう「九□(十カ)□人」に続き、支給物の総量として「飯一石七斗」「酒一石九斗」「雑菜卅一根」と列記されている。当時の度量衡では現行制度の4割ほどの量になるというから、飯（蒸し米）は約122ℓに、酒は約137ℓに換算される。これが90人に均等配分されたと仮定すると、一人あたり飯が一升九合（1.36ℓ）に、酒が二升一合（1.52ℓ）に上り、さらなる再分配も想定させる量といえる。有力者クラスを含む多数の人々に多量の酒食が支給されている点、また「八月十□(一カ)日」の日付から2号木簡に見られる「放生」との関連も考え、郡家など公的機関が関与した宗教行事に伴う饗宴の際、支給物を記録した帳簿とする見方が有力となっている(註7)。

(2) 出土土器の傾向―破片数分析から―

2013年に刊行された調査報告書では、基礎データとして全出土遺物の器種分類を行い、その上で各器種の破片点数と重量を面・遺構ごとに一覧表にして掲げた（押木・長澤ほか2013－第7表）。小片資料が大半であったため全点について正確な器種認定をし得たか不安も残るが、本稿では同表から主に平安時代～中世に該当する第3b面下～第2面の出土土器を抽出し、検討する。なお、重量については個体数の算出に資すべく報告書にデータを掲げたが、計算の基準となる完形品は土師器の相模型坏で2点（(141 + 153) ÷ 2 = 147g)、灰釉陶器の碗で1

第3図 屋村 B 遺跡 4～6号木簡

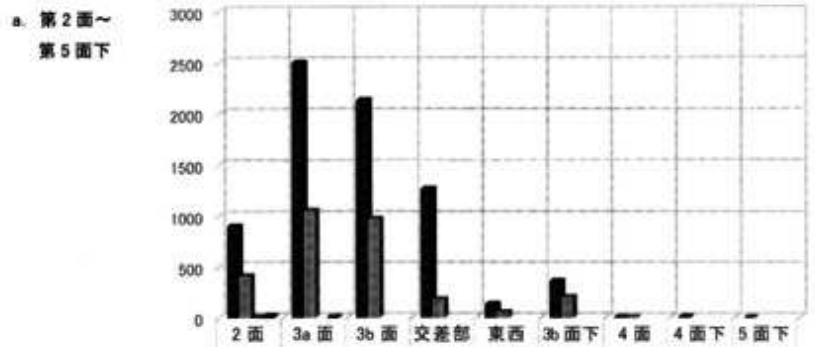
点（229g）、同皿で1点（177g）に限られている。当地点の成果のみでは他の器種について個体数を把握できないため、本稿では破片点数を分析の基礎データとして用いる。破片点数は、器種分類後の接合作業を経た後の数値となっている。

第4図cには、第3b面における遺物の破片点数を遺構別に示した。水田17－18間の南北畦ほか2ヶ所で突出した出土数を見て取れるが、「交差部」は調査の手続き上、同畦畔の直下にある東西砂帯から遺物が混入することを考慮しての名称であるため、実際にはここから出土した資料の殆どが水田17－18間の畦に帰属するものと考えている。このことも加味すれば、同畦畔の遺物量が如何に卓越しているかが見て取れよう。本稿では多くは触れないが、ここからは「□福人妻之□」と書かれた5号木簡や43点に上る墨書土器も出土している。グラフが示すように、供膳具（坏・碗・皿など）の煮炊・貯蔵具（甕・壺など）に対する構成比も他の遺構より高く、あくまで破片数であり個体実数を示すデータとはならないが、供膳具に大きく偏った出土傾向と考えて問題ないだろう。

その他のグラフについても、少し説明しておきたい。

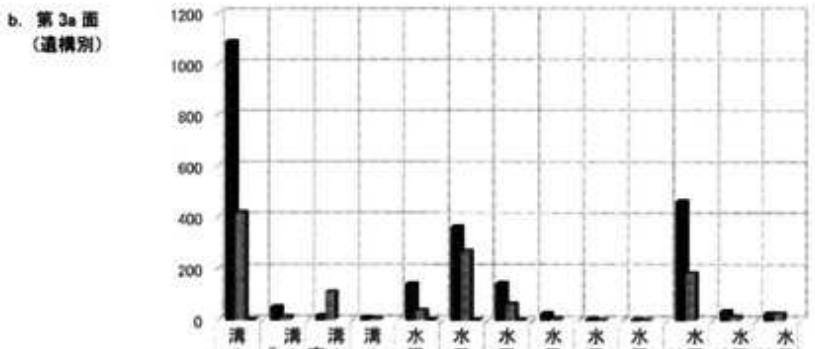
第4図aは第2面～第3b面下の出土遺物のうち、中世と古代の土器類をそれぞれ供膳具と煮炊・貯蔵具とに分けて点数グラフ化したものである。第4面～第5面でも古代遺物が僅かに出土しているので掲げたが、これらは上層堆積土の掘り残しなどに伴う混入資料と考えている。

a. 第2面～第5面下



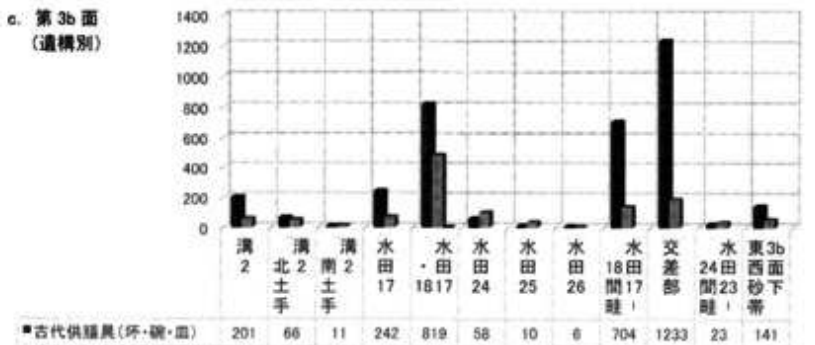
	2面	3a面	3b面	交差部	東西砂帯	3b面下	4面	4面下	5面下
■古代供膳具(坏・碗・皿)	903	2502	2132	1268	141	366	6	11	2
■古代煮炊・貯蔵具(甕・壺)	413	1056	975	186	56	208	4		
■中世供膳具(皿)	8								
■中世貯蔵具(壺・甕)	19	6							

b. 第3a面（遺構別）



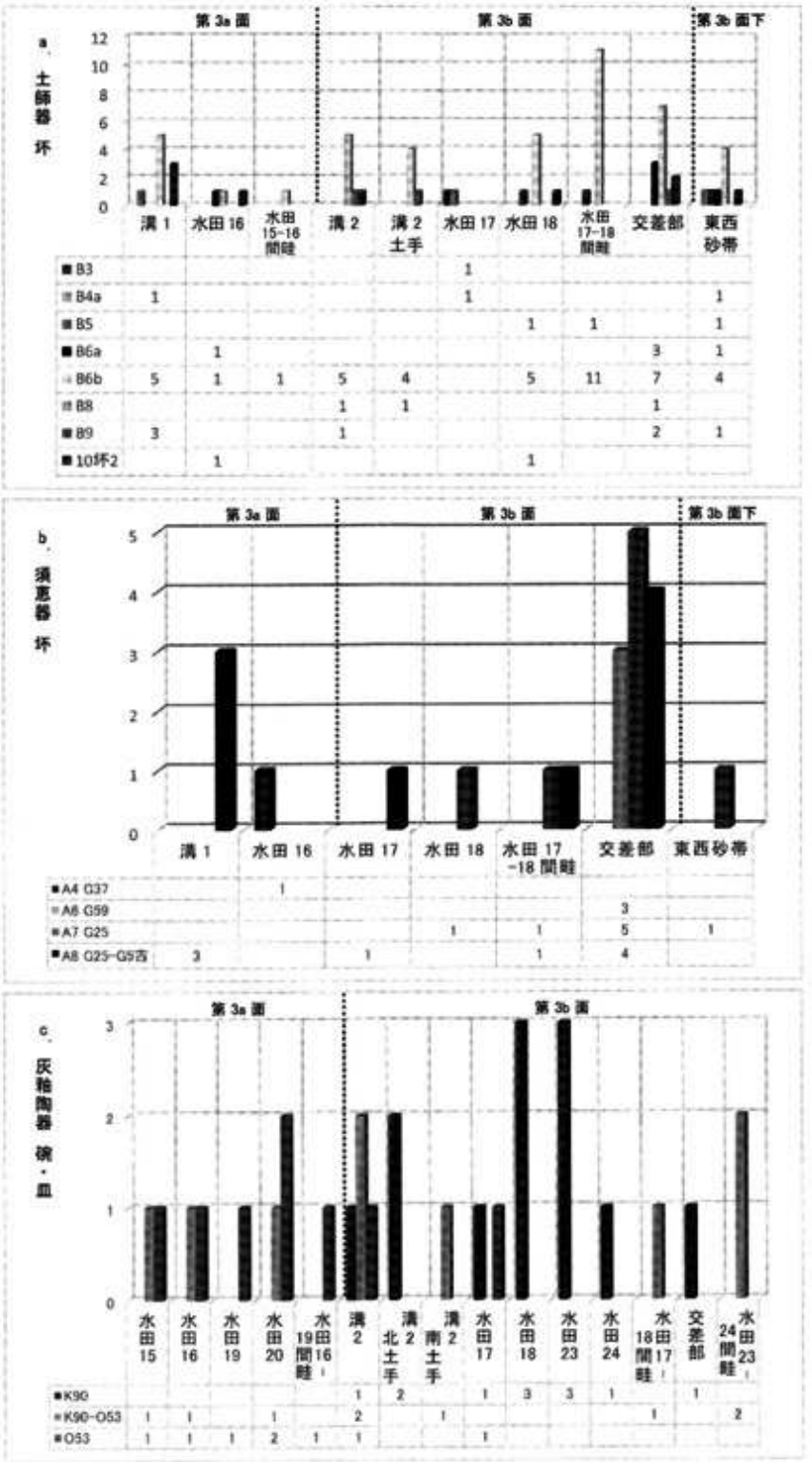
	溝1	溝1北土手	溝1南土手	溝1周辺	水田15	水田16	水田19	水田20	水田21	水田22	水田16間畦	水田19間畦	水田20間畦
■古代供膳具(坏・碗・皿)	1087	51	17	10	140	362	143	27	5	2	461	36	27
■古代煮炊・貯蔵具(甕・壺)	418	13	109	7	38	268	64	8	1	1	182	16	27
■中世土器	2				2	1	1						

c. 第3b面（遺構別）



	溝2	溝2北土手	溝2南土手	水田17	水田・18・17	水田24	水田25	水田26	水田18間畦17	交差部	水田24間畦23	東3b面西砂帯下
■古代供膳具(坏・碗・皿)	201	66	11	242	819	58	10	6	704	1233	23	141
■古代煮炊・貯蔵具(甕・壺)	58	50	12	69	479	98	35	5	136	185	33	53
■中世陶器					1							

第4図　出土遺物の破片点数



第5図 古代の土器供膳具 遺構・型式別体個数

同図からは、平安時代に当たる第3a面～「交差部」に集中する傾向が読み取れる。第3b面下の東西砂帯が「交差部」に比べ極端に少ない点は、後者が第3b面の畦畔を構成していたとする、上述の所見を補強してくれる。よって「交差部」を第3b面に組み入れた場合、第3a面の1.3倍ほどの出土点数に上る。いずれにせよ、第3a・3b面が前後の時代と比べ突出して多くの遺物を包含していたことが分かる。中世の第2面において中世遺物を古代遺物が大きく上回る点は、第3面の包含遺物が水田耕作によって巻き上げられた結果と考えている。グラフには表れていないが、供膳具のうち、土師器の相模型坏に対するロクロ土師器[注8]の点数比率を見ると、第3b面で2.5%であったものが第3a面で13%に、第2面では35%と相対的に増加する傾向が見て取れた。これを中世かわらけに直結させることはできないが、古代土器から中世土器への過渡期的現象として評価することは可能だろう。

第4図bでは、第3a面における遺構ごとの遺物点数を示した。東西水路である溝1からの出土数が突出して多いが、耕作すべき水田内に土器片があれば除去されるであろうし、開渠である溝1に入り込んだ土器については、そのまま覆土に埋没したことも要因にあるだろう。ただ、溝1では墨書土器が10点と多く出土しているが、これは重複する第3b面の溝2からの混入とも考えられる一方、溝内への墨書土器の廃棄行為があったことも想起させ、注意が必要である。第4図cで溝2の出土遺物が極端に少ないのは、この位置の大部分を溝1が踏襲して開削されていることによる。水田15－16間の畦畔は第3b面の水田17－18間畦の上部に構築されていることから、畦畔の塗り替えや使用に伴い下層から混入した遺物も多くあるだろう。

(3) 土器様相の検討①—土器型式の変遷について—

本項では、平安時代における土器型式の在り方を中心に、本遺跡出土資料を見て行きたい。

ここでは遺存度の高い資料が一定量あり、法量や調整技法から型式変化を捉えやすい供膳具に的を絞り、第3a面～第3b面下における遺構ごとの型式別出土傾向を見る。対象とした資料は、報告書に実測図を掲載したものに限っている。型式分類の基準として、土師器と須恵器の坏類は宮久保遺跡（國平・長谷川1990）および草山遺跡の編年（大上・長谷川1990）を、灰釉陶器については山下峰司氏の整理（山下1995）を参考とした。ここでは各型式の判別要素について細かく説明しないので、上掲の文献を参照されたい。

第5図aは土師器の坏、bは須恵器の坏、cは灰釉陶器の碗・皿について各型式の出土点数を示したグラフである。

aの土師器坏のうち、B3類～B9類としたものは所謂「相模型坏」に相当し、前者から後者に向けて、成形や調整技法の粗雑化を伴いながら変遷して行く。最下段の10坏2類は平塚市四之宮下郷編年で提唱された型式で、相模国では10世紀後半から11世紀前半の大住郡域に主たる分布域を持つ（田尾2003）。手づくね成形の体部外面に指頭痕が、底部外面に木葉痕が残る。全体として第3b面下～第3a面の各遺構ともB6b類が主体となる点で明確な差は見出せず、第3a面遺構にB9類や10坏2類が単発的に入ることを新しい要素として辛うじて認め得る程

度である。この点、本地点での土器供膳具の使用頻度がB6b類の段階で最も活発であったことを示すとともに、第3b面から第3a面への時間経過が漸移的であったことを物語っていよう。bの須恵器坏では、A4類～A8類とした南多摩窯跡群における御殿山37号窯式（G37）～御殿山5号窯式（G5）古段階の資料が見られた。「交差部」の資料が突出して多く、ここではA6類～A8類という新旧の資料が混在する状況を見て取れる。第3a面の資料が相対的に新しいとは見做せないことから、土師器坏と同様にA6～A8類＝G59～G5古段階に供膳具を多用する局面があったと考えるべきだろうか。

cの灰釉陶器碗・皿については、第3b面で黒笹90号窯式（K90）が卓越する状況から第3a面で折戸53号窯式（053）が中心となる様相へと推移する傾向が読み取れる。

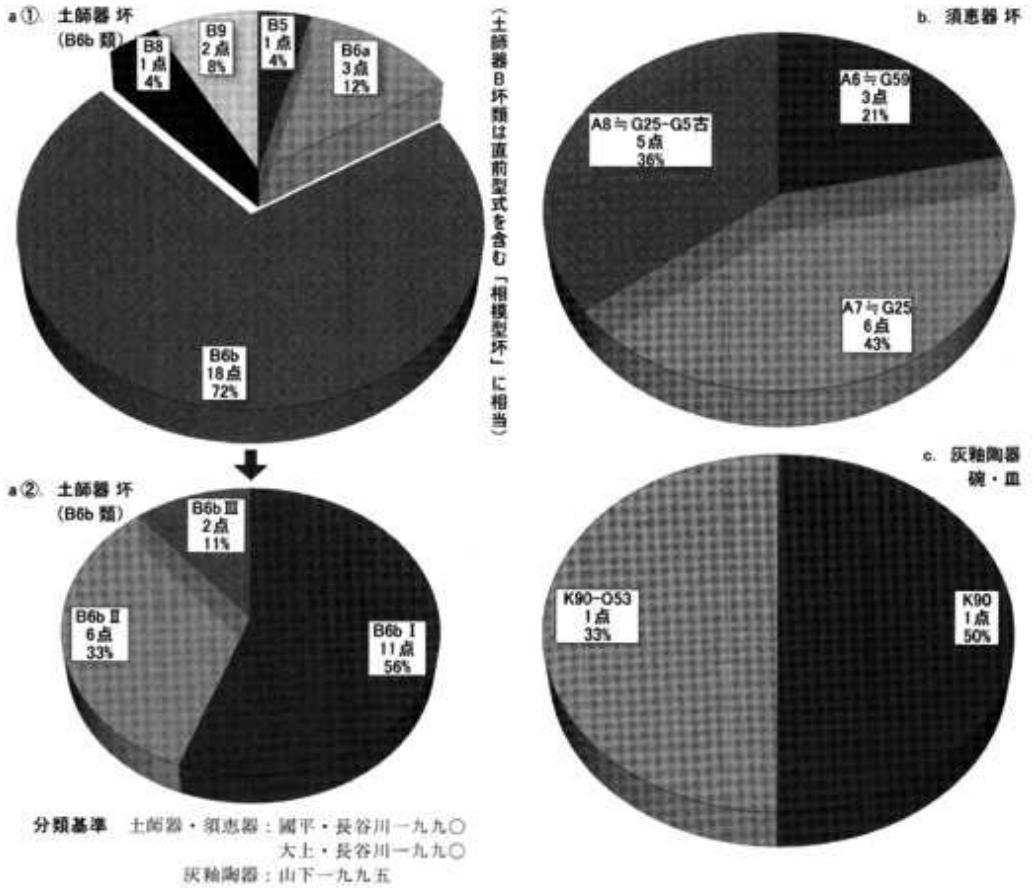
以上の状況を年代的に整理すると、土師器坏はB6b類が組成の主体となる草山Ⅷ・Ⅸ期（830～890年頃）をピークに持つ遺構が第3b面に多く、第3a面にかけてはグラフには反映されていないロクロ土師器が漸増する前述の傾向も含め、僅かに新しい要素を伴いながら10世紀後半ないし11世紀前半頃まで続いた可能性を指摘できる。須恵器坏は「交差部」でA6～A8類の資料数が拮抗しており、G59～G5古段階に当たる宮久保Ⅶ～Ⅸ期＝草山Ⅷ～Ⅹ期（830～920年頃）の傾向が当てはまる。A8類が一定量を占めていることで、土師器の坏より一段階後続する年代幅を持たせる必要がある。このピークの後、新しくなる要素は見て取れない。灰釉陶器の碗・皿は第3b面から第3a面にかけてK90から053窯式へと移行する様子が見られ、大まかには9世紀後半～10世紀前半の年代幅での推移として捉えられる。各窯式内での細分に基づく分類を行えば年代を絞り込めるのだろうが、筆者の見識が足りず報告書に反映させることはできなかった。また、三日月高台・刷毛塗り施釉・体部下端～底部外面回転ケズリ調整といった要素をK90窯式の指標に、高台の幅広化・漬け掛け施釉・体部下端～底部外面無調整などの要素を053窯式の指標としたが(注9)、各要素が混在する資料も少なからず見受けられた。遺物の観察眼を今少し養った後、改めて分類することを自らの課題としたい。

(4) 土器様相の検討②—水田17－18間畦の出土土器について—

前置きが長くなったが、本題である4号木簡の伴出土器について見て行く。「伴出」とはいえ、出土遺構が水田の畦畔であり、土器の使用・廃棄後も埋没せずに利用され続けた状況が想定されることから厳密な意味での一括性や共伴性を本資料群に認めることはできない。よって、以下に述べる土器群には「貞観□年」を中心とした一定の年代幅を当てる必要があることを明記しておく。

第6図には、水田17－18間畦と「交差部」出土土器について、a①．土師器坏B類、a②．土師器坏B6類、b．須恵器坏、c．灰釉陶器碗・皿に分けてグラフ化し、それぞれの中での細別型式の構成比率を示した。

a①のグラフ中、B6b類が72%と他の型式を大きく上回っている。B6b類は草山Ⅷ・Ⅸ期（830～890年頃）に主体となる型式であり、Ⅸ期（860～890年頃）により高い比率となるデータ

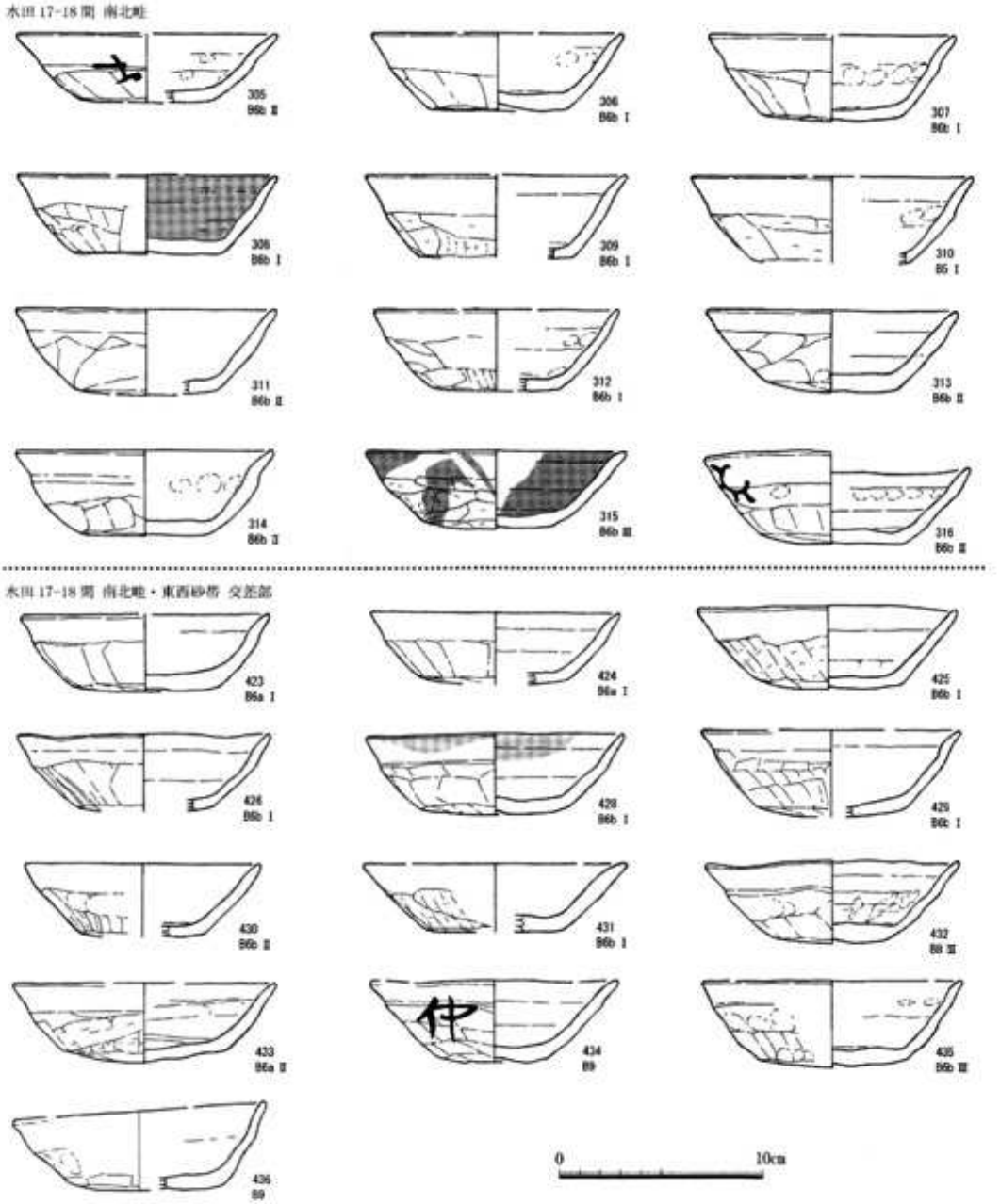


第6図　第3b面 水田17－18間畦および下層「交差部」出土 土器供膳具 型式別構成比率

が提示されている。B8・B9類など後出型式が1割強も含まれる点については、先述した資料の非一括性に起因する可能性もあるだろう。

a②ではB6b類を体部外面の調整具合によって細別し、構成比率を示した。無調整部分を残さないⅠ類が56%と最も多く、一部ケズリ残しがあるⅡ類が33%で続く。草山遺跡ではⅧ・Ⅸ期ともⅠ類がⅡ類を上回っており、当資料群と傾向が一致している。実測図に基づく型式判別であることから資料の残存度や実測箇所に起因する外見差が生じている可能性もあるが、広く草山Ⅷ・Ⅸ期（830～890年頃）の範囲で捉えて大過ないと考えている。

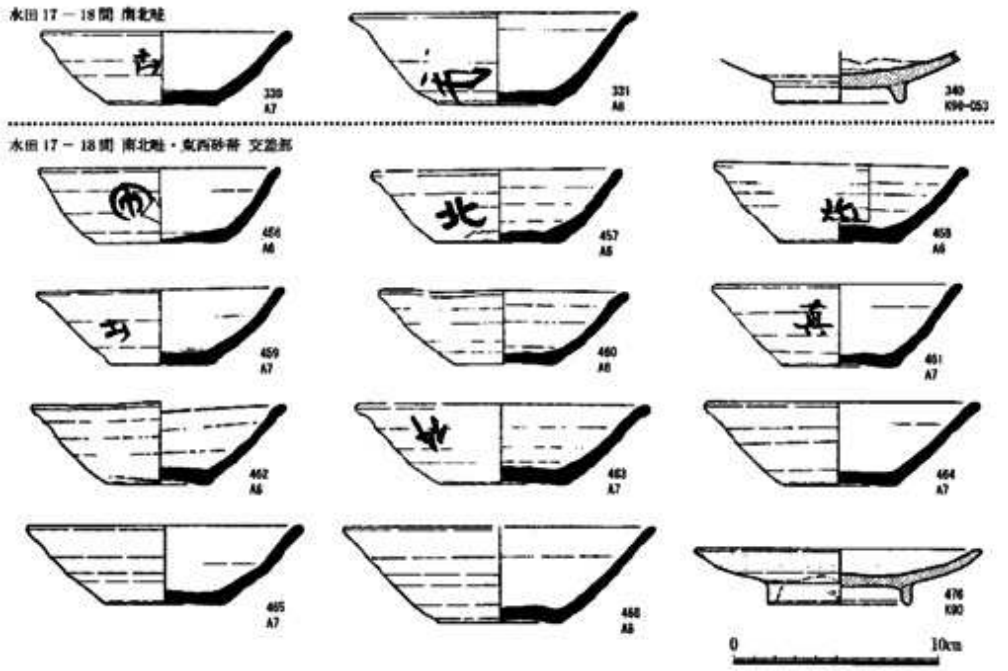
これら土師器坏B類（相模型坏）の型式区分については、その後も田尾誠敏氏が平塚市の相模国府域周辺で出土した良好な一括資料を対象に整理しており、口径/底径比の変化や成形・整形の粗雑化という視点から各段階の特徴や年代観を示している。このうち草山坏B6b類は相模型坏のd段階に該当し、口径12cm台で口径/底径比は50%台が中心となり、粗雑化の様相が顕在化する段階として9世紀中葉～後半に置いている（田尾2003）。さらに粗雑化が目立ってくるd段階新相の資料については、次節で述べる『日本三代実録』に見える相模国分尼寺の



第 7 図　第 3b 面 水田 17 － 18 間畦および下層「交差部」出土土器①－土師器坏

移転記事との関連から 9 世紀第 4 四半期頃に位置付けている（田尾 2007）。

b の須恵器坏では A7 類が 43%、A8 類が 36% と拮抗した数値を示しており、G25 ～ G5 古段階の資料が全体の 8 割近くを占めている。宮久保編年ではⅧ～Ⅸ期（860 ～ 920 年頃）の間に A7 類から A8 類へ構成主体が逆転して行く傾向が指摘されているので、概ねこの過渡期に当たる



第8図　第3b面 水田17－18間畦および下層「交差部」出土土器②－須恵器坏・灰釉陶器碗 皿

状況と考えて良いだろう。

cの灰釉陶器碗・皿については検討対象が2点だけで明確な傾向は見出せず、K90～053窯式(9世紀後半～10世紀前半）の年代幅に収まることしか指摘できない。

ここまで、4号「貞観」木簡の伴出土器について検討してきた。現状の編年研究に照らすと、9世紀中葉～10世紀前半という100年近い年代幅を当てざるを得ないことが明らかとなった訳だが、先述した①一括性の問題に加え、②型式認定の正確さ、③編年研究における年代観の当否といった問題が残るため、現時点での限界として認めつつ、今後の課題としたい。「貞観」に最も近い結果となったのは土師器坏で、草山Ⅷ・Ⅸ期に当たる830～890年頃に収まるデータが得られた。そこで、次節では草山編年における当該期の年代的根拠について、改めて確認することにしたい。

4．草山編年の年代観について―Ⅸ期の暦年代定点を中心に―

草山遺跡における古代の土器編年では、実年代の定点資料として、①Ⅳ期に宮久保遺跡の井戸石敷き直上出土土器（石敷き下層から天平五年＝733年の紀年銘木簡が出土）を、②Ⅷ期に武蔵国分寺七層塔再建瓦の焼成（承和十二年＝845年が上限。東金子窯跡群の八坂前窯第Ⅱ段階に再建瓦とA6類と同法量の須恵器坏を併焼か）[註10]、③Ⅸ期には相模国分尼寺跡の金堂基壇面直上焼土層（貞観十五年＝873年の国分尼寺移転を示す記録と関連か）の3点を提示して

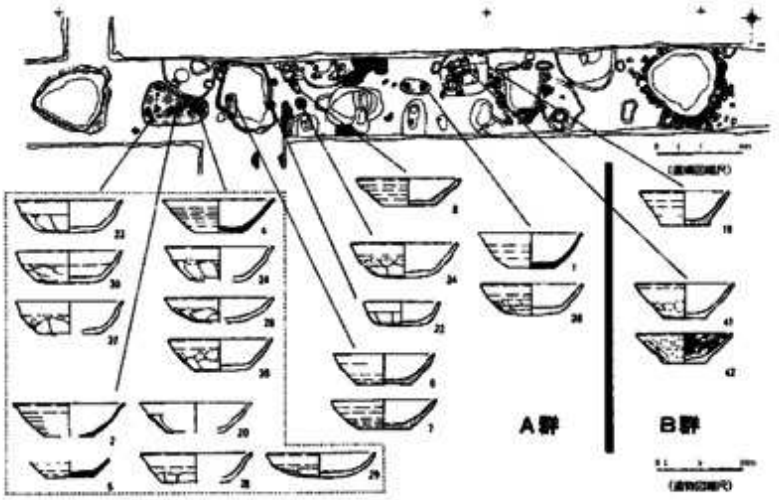
いる[註11]。このうち、本論の年代に関連する③の事象について、詳しく見て行きたい。

六国史の一つ、『日本三代実録』元慶五年（881）十月三日戊寅条には、以下の記述がある。

『日本三代実録』元慶五年（八八一）十月三日戊寅条

三日戊寅。相模国言。国分寺金色薬師丈六像一体。挟侍菩薩像二体。元慶三年九月廿九日遭二地震一皆悉摧破。其後失火焼損。望請改造。以修二御願一。又依二太政官去貞観十五年七月廿八日符一。以二漢河寺一為二国分尼寺一。而同日地震。堂舎頽壊。請仍レ旧以二本尼寺一。為二国分尼寺一。詔並許レ之。（海老名市 1998 より引用、傍点筆者）

記事のうち、「元慶三年九月廿九日」に地震があったとするのは同じ『日本三代実録』の元慶二年（878）九月廿九日辛酉条における相模・武蔵両国に甚大な被害を与えた地震のことで「三年」は誤記とされるが、ここで問題となるのは後半の傍点部分である。貞観十五年（873）七月二十八日の太政官符により「漢河寺」が国分尼寺となったが、この堂舎も元慶二年の地震によって損壊を受けたため、国分尼寺を元に戻すことが許されたことを記している。ここからは国分尼寺が漢河寺に移った理由までは窺えないが[註12]、滝澤 亮氏は本来の国分尼寺金堂跡で確認された基壇面上の焼土および礎石建物 SB－1 の廃絶に関連するとしている。直接的な表現は取っていないが、礎石建物跡 SB－1 を金堂とし、この焼失が契機となって漢河寺への移転に至ったとする理解であろう。確認基壇面の直上～ 20cm ほど浮いたところでは多くの完形・準完形資料を含む土器供膳具が出土しているが、大半が灯明皿として使用され、二次的焼成を受け、伏せた状態での出土例も目立ったという。これらは SB－1 が機能していた最終段階に放置され、建物の下限年代を示す可能性が高いとしている。年代観について、その時点での編年研究では 10 世紀前半頃に位置付けられていた一群であり（國平 1986）、史料との対比によっ



第 9 図　相模国分尼寺跡 金堂基壇面上出土土器（滝澤・林原ほか 1990 より転載、一部改変）

て大幅に引き上げる見解が示されたことになる（滝澤・林原ほか1990）。

これらの土器群について、滝澤氏の見方を支持する立場で分析した結果が、草山IX期の暦年代定点として評価されている。基壇面上で出土した土師器坏の主体がB6b類とB6c類にあることを指摘し、特にB6b類の割合が高い状況を述べている。須恵器の坏については出土点数が少ないものの、A7類に該当することを指摘する。ロクロ土師器の坏は口径／底径が0.5以上で、口径に対し器高が低い点を器形的特徴としており、草山遺跡では比較対象となる資料が少ないことを述べている。以上を踏まえ、土師器坏と須恵器坏の型式構成が草山IX期のそれと類似することを指摘し、貞観十五年（873）がIX期（860～890年頃）の実年代定点となり得る可能性が示されている。ただ、紀年銘資料の共伴といった直接的な年代定点ではなく他遺跡の調査成果に対する史料解釈に基づいた見解であることから、調査の進展に伴い確度を高めていく必要があることにも言及して結んでいる（國平・長谷川1990）。

『海老名市史』では、同じ土器群の多くがSB－1の廃絶後に建てられた掘立柱建物跡SB－2の火災による廃絶時まで使用されていたとする（國平1999）。SB－1の礎石上やSB－2の柱穴範囲の上面で出土していることが理由だが、後者ではロクロ土師器を主体に「10坏2類」も見られることから、草山B6b類の土師器坏やA7類（≒G25）の須恵器坏を中心とする一群とは時期的な隔たりを認めざるを得ない。報告書で一括性が高いとしている東側脇間部分（第9図の破線囲み部分）ではB6b類の土師器坏を主体にA7類の須恵器坏も伴っているので、一括資料としての厳密化を図るのであれば、同一群のみを弁別する方が妥当ではないかと思われる[註13]。このように一括資料ひとつを取り上げても研究者によって異なる捉え方があるため、新たな資料の発見に伴い逐次議論と検証を積み重ねて行くことで見解の溝を埋め、より実証性の高い編年案に向上させて行く必要があると感じている。本論の主旨も、そこにある。

整理すると、貞観十五年（873）を実年代定点に置く草山IX期に、居村B遺跡における「貞観」紀年銘木簡との伴出土器群が含まれることを確認した。土師器坏B6b類が最多となり、須恵器坏A7類が主体の一角を構成している点でも共通した傾向が窺われ、ともに一括資料としての厳密性に問題を含みながらも「貞観」という年代に収まる可能性を相互に補うことができたのではないかと思う。

おわりに

筆者はこれまで「貞観」紀年銘木簡の発見により古代相模国における土器の編年研究が年代定点の付与といったプロセスも含めて補強・実証されたと評価してきた（押木2014a・b）。そのことを客観的に示すべく今回は木簡と伴出した土器群について分析を試みた訳だが、繰り返し述べているように畦畔という出土遺構の性格に起因する一括性の問題に加え、筆者自身の土器観察眼や先行研究への理解が不足していたため細部まで詰めたデータを提示することができ

なかった。この点は自身が勉強を進めて行く過程で、必要に応じて再検討を加え、修正を図ることにしたい。

土師器ほかの供膳具は草山Ⅷ～Ⅹ期（830～920年頃）の範囲に収まり、その中でもⅨ期（860～890年頃）に近似する様相であることを確認した。貞観十五年（873）の国分尼寺移転記事に加え、「貞観」紀年銘木簡という、考古資料としてより直接的な実年代定点が当該期の土器研究に寄与する役割は非常に大きい。今後も良好な一括土器群や新たな紀年銘資料の発見に伴い追検証が加えられることで編年研究の精度が上がり、それにより相模国における古代社会の実態解明が一歩でも前進することを期待している。

（2015年1月15日脱稿）

〔付記〕

本稿は、2014年7月に茅ヶ崎市で開催されたシンポジウム『居村木簡が語る古代の茅ヶ崎』での報告内容（押木2014b）をベースに、土器の分析方法・結果を中心に説明を追加して再構成したものである。このため、文章表現のほか、挿図・グラフなど前稿と重複する部分も多くある。ご容赦いただきたい。

また、第7・8図では草山編年における型式名を各遺物番号の下に付したが、型式区分の基準となる各属性や検討過程について説明せず、結果のみの表示となった。番号は報告書に順じているので、実測図や遺物観察表での法量値を参考に追検証することは可能かと思う。

〔謝辞〕

本稿の作成に当たり茅ヶ崎市教育委員会の大村浩司氏にはご高配を賜りました。日頃の学恩への感謝も込め、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

註

(1)「貞観」は中国・唐代の元号（西暦627～650年）としても知られる。述べるまでもないが、本木簡に和暦の年号が記されていることは、出土遺構の状況および木簡全体の記載内容からも明白である。

(2) 調査報告書（押木・長澤ほか2013）のほか、押木2014a～cなど。押木2014bでは出土土器の点数をもとに供膳具の型式別構成比を示したが、紙数等の制約もあり分析の方法や経過について説明を行わなかった。本稿でも基本的に同じデータを掲げるが、論旨から外れる墨書土器などは割愛したうえで、その意味するところについて説明した。

(3) 南側の高位砂丘に立地する前ノ田遺跡において掘立柱建物や木枠を有する井戸が発見されていることから公的施設が存在した可能性が示唆されているが（大村2003－註7）、現時点では規模や使用年代など具体的な情報が報告されていないため、評価は留保しておく。

(4) 本村地区周辺には『和名類聚抄』郡郷部の記載に合致する遺存地名がないことから、郷名の確定には至っていない。荒井秀規氏は、地形上いくつかの小河川が相模川に合流する様子をもとに河会郷に当てる見方を示す一方、藤沢市大庭を遺称地とする大庭郷が本村付近まで広がっていたことも可能性のひとつとして掲げている（荒井1989）。『神奈川の古代道』では下寺尾地区も含め茅ヶ崎市域の多くを河会郷と推定しており（藤沢市教育委員会1997）、その後の研究においても河会郷に当てる見方が優勢かと思

われる（荒井2003・宮瀧2012など）。

(5) 下寺尾西方A遺跡で確認された高座郡家について、荒井秀規氏は郡家遺構が7世紀の「評」段階まで遡及するのであれば、高座郷の前身である高倉里が下寺尾を含む一帯に比定できる可能性を示唆している。一方、海老名市大谷向原遺跡で「高坐官」の墨書土器が出土している事例をもとに、高座郷の所在地が海老名市本郷～綾瀬市域、藤沢市高倉に及ぶことも述べており（荒井2003）、大上周三氏や宮瀧交二氏も同様の視点から、海老名市を中心とした比定説を提示している（大上2011・宮瀧2012）。荒井氏説の前提に従えば、郡家造営期を報告書の所見よりも遡らせて7世紀後半に位置付ける昨今の研究状況（大上2009・田尾2013）を踏まえ、改めて高倉里＝高座郷の所在地について考証する必要が出てきたことになるだろう。

(6) 平川・武井2013や三上2014など。筆者は古代の折敷について県下での類例を知らず、また中世鎌倉出土の折敷と比較してサイズや木取り方法が全く異なることから、現時点では否定的な立場でいる。ただ、三上氏が指摘するように木簡を「モノ」として扱い、書写材料や使用された場も含めて考察を行うことの必要性には賛同している。

(7) 貞観年間の「八月十□[注5]日」は現行暦で9月上旬～10月初旬に当たる点と、水田で催された行事であるという2点を根拠に、筆者は稲の収穫を祝う饗宴が行われた可能性も考えている。ただ、支給の対象人数や支給物が膨大であることから郡レベルの関与を想定させ、日付の上でも「放生」がより相応しい行事であることは否定できない。笹生 衛氏は放生の思想的根拠を『薬師経』に求め、当時頻発していた自然災害など国難への対処を目的に、国衙官人の監視の下、郡司層が中心となって実施したと考え、鈴木靖民氏もこれを支持する（笹生2014・鈴木2014）。「貞観」という時代の背景を踏まえた見解であり、如上の理由から「放生」に付随する饗宴と考えるのが最も理解しやすいことは是認できる。ただ、国家側の論理が除災や国家安寧にあったとしても、この時季、饗宴を享受する在地の人々に収穫を祝い、翌年の豊穣を願う心理があったと慮ること自体は、古代の地域社会を探求して行く上で決して無意味ではないと考える。

(8)「ロクロ土師器」の名称については成形の道具として「ロクロ」を使用していないといった批判もあり、概念規定や名称は研究者によって様々である。10世紀後半以降＝古代末期の土器を「土師質土器」として東日本で概ね共通の変遷を辿るという指摘もあり（羽柴2011）、本遺跡の「ロクロ土師器」も含めて良いかと思う。ただ、筆者がこれらの研究史を十分に踏まえていないこともあり、本稿では報告書での記述に従い「ロクロ土師器」を使用する。

(9) こうした通説的な窯式認定の指標が、提唱者の手を離れ独り歩きしている現状を尾野善裕氏は「正常ならざる事態」と批判している（尾野2014）。また、東海地方の諸窯業地において、技術伝播が関係するのか窯式を構成する各要素が完備されない事例も多々あるように感じている（各地の資料実見による）。これが的を射た認識であるのか不安もあるが、今後、こうした点にも留意しながら学んで行きたい。

(10) 近年、草山A6類に含まれる南多摩G59窯式を、承和十二年（845）を上限年代とする塔再建瓦の併焼須恵器よりも一段階後ろの9世紀第3四半期後半～第4四半期前半に置く見解が示されている（服部ほか2011）。この場合、A6類が主体となる草山Ⅷ期（宮久保Ⅶ期＝830～860年頃）の年代定点に845年を置く従来の見方についても再考が迫られることになる。後続するA7・A8類が主体となる本稿での検討資料の評価にも影響する問題であるが、筆者には具に検証するだけの知識がないので、ここでは新しい研究成果を紹介するにとどめ、草山・宮久保編年の年代観をそのまま用いる。

(11) 実年代の定点資料としては、厚木市宮の里遺跡50号住居趾内出土の「甲午」銘墨書須恵器が新たに加えられる。南多摩G5窯式の坏体部外面に書かれたもので、「甲午」を干支年と考えて承平四年（934）

に当てている。共伴遺物のうち、土師器の相模型坏は宮久保・草山編年における B6b 類と B6c 類が、灰釉陶器の碗・皿は K90 と 053 窯式があり、大よそ 9 世紀後半～ 10 世紀前半の年代幅を当てている中、「甲午」銘の坏は後者の年代定点となることを指摘している（河合 2011）。

(12) 筆者は報告書のまとめで国分尼寺の金堂焼失が『日本三代実録』に記載されているかのように述べているが、実際には漢河寺への移転が読み取れるのみで、火災があったとの表現はされていない。ひとえに原典に当たらなかった筆者の不勉強・怠慢による事実誤認である。ご容赦いただきたい。

(13) 第 9 図で示した土器のうち、報告書では A 群が礎石建物 SB － 1 の廃絶に伴う資料で 9 世紀第 4 四半期を中心とした年代に、B 群がその後に建てられた掘立柱建物 SB － 2 の廃絶時に混入した土器で 10 世紀末～ 11 世紀頃の年代を与えている。この点は現在の土器編年に照らせば誰もが納得するところかと思う。一方、報告書では東側脇間部分で出土した一群（第 9 図の破線で囲った部分）については非常に一括性が高いと述べつつも、中央間などから出土した土器と同じ一群として提示している。前者の方が平底で体部成形の省力化も進んでいないので、出土状況も加味して A 群の中でも古手の一群として認識しても良いかと思われる。

引用・参考文献

荒井秀規　1989「高座郡内の郷名と官衙遺跡」『居村「放生木簡」シンポジウムの記録』神奈川地域史研究会編　2 頁－ 8 頁

荒井秀規　2003「古代の高座郡―郡家の所在をめぐって―」『公開セミナー　高座郡衙（郡家）の世界　発表要旨』（財）かながわ考古学財団・茅ヶ崎市教育委員会　41 頁－ 46 頁

海老名市　1999『海老名市史』1　資料編　原始・古代

大上周三・長谷川 厚　1990『草山遺跡Ⅲ　本文編』神奈川県立埋蔵文化財センター

大上周三　2000「古代高座郡の支配機構の動向」『神奈川考古』第 36 号　神奈川考古同人会　123 頁－ 138 頁

大上周三　2009「高座郡衙（西方 A 遺跡）の成立とその社会」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第 13 集　（財）帝京大学山梨文化財研究所　39 頁－ 53 頁

大上周三　2011「古代高座郡所在の宮久保遺跡の一考察」『青山考古』第 27 号　青山考古学会　67 頁－ 82 頁

大村浩司　2003「下寺尾七堂伽藍跡と高座郡衙周辺」『公開セミナー　高座郡衙（郡家）の世界　発表要旨』（財）かながわ考古学財団・茅ヶ崎市教育委員会　27 頁－ 33 頁

押木弘己　2014a「茅ヶ崎市本村居村 A・B 遺跡の調査―平安時代の水田跡と出土木簡を中心に―」『東国における古代遺跡の諸問題』東国古代遺跡研究会

押木弘己　2014b「居村 A・B 遺跡 2011 年度の調査成果―平安時代の水田と出土遺物を中心に―」『シンポジウム「居村木簡が語る古代の茅ヶ崎」資料集』茅ヶ崎市教育委員会　23 頁－ 34 頁

押木弘己　2014c「居村 4 号木簡が語る諸相―祭り・饗宴と村の実像―」『シンポジウム「居村木簡が語る古代の茅ヶ崎」資料集』茅ヶ崎市教育委員会　43 頁－ 48 頁

尾野善裕　2014「猿投窯の灰釉陶器編年をめぐる覚書」『東海土器研究会プレシンポジウム 灰釉陶器を考える―編年の現状と課題―』東海土器研究会　55 頁－ 58 頁

河合英夫　2011「4 御殿山 5 号窯式の須恵器坏に記された『甲午』銘墨書土器の検討」（後掲 服部ほか 2011 に所載、75 頁－ 78 頁）

國平健三　1986「(4) 1. 相模国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第 21 号　67 頁～ 81 頁

國平健三・長谷川 厚　1990『宮久保遺跡Ⅲ　本文編』神奈川県立埋蔵文化財センター

國平健三　1999「第 6 章 第 3 節 相模国分尼寺跡」『海老名市史』1　資料編　原始・古代　海老名市

665頁－690頁
笹生　衛　2014「放生の信仰と郡衙・寺院・祭祀の景観―薬師経から見た放生・大赦・大祓と高座郡衙の景観―」『シンポジウム「居村木簡が語る古代の茅ヶ崎」資料集』茅ヶ崎市教育委員会 61頁－70頁
鈴木靖民　2014「1－補論　居村木簡と古代の放生会・饗宴」『相模の古代史』高志書院　37頁－44頁
田尾誠敏　2003「第1章 第2節 3. 土器の変遷とその背景」『平塚市史』11下 別編考古 (2)　平塚市　99頁－126頁
田尾誠敏　2007「3 律令制下の土師器」『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①　学生社　80頁－131頁
田尾誠敏　2013「第3章　郡衙域の調査と研究」『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40　茅ヶ崎市教育委員会　261頁－283頁
滝澤　亮・林原利明ほか　1990『相模国分寺関連遺跡群細分布調査報告書 I』海老名市教育委員会・相模国分寺遺跡調査会
長澤保崇　2014「神奈川県の水田址 (1)」『神奈川考古』第50号　神奈川考古同人会　165頁－180頁
羽柴直人　2011「第1章 第2節 第2項　関東地方の土器研究史」『東日本初期武家政権の考古学的研究―平泉勢力圏の位置付けを中心に―』総合研究大学院大学 博士（文学）論文（Web公開版 http://id.nii.ac.jp/1013/00002371/）17頁－21頁
服部敬史ほか　2011「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史研究』創刊号　八王子市　62頁－84頁
平川　南・武井紀子　2013「付編3　神奈川県茅ヶ崎市 居村B遺跡出土木簡」『本村居村A遺跡（第6次）本村居村B遺跡（第4次）―新国道建設に伴う発掘調査報告書―』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告36 （財）茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団　202頁－203頁
藤沢市教育委員会　1997『神奈川の古代道』
三上喜孝　2014「古代地方社会における儀礼・饗宴と記録簡～折敷を転用した木簡をめぐって～」『平成26年度 国史学会大会　発表要旨』
宮瀧交二　2012「古代相模国高座郡について」『シンポジウム 下寺尾官衙遺跡を考える～相模国高座郡衙および下寺尾七堂伽藍跡の調査成果と保存活用～発表要旨集』茅ヶ崎市教育委員会　43頁－46頁
山下峰司　1995「Ⅲ 4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社　279頁－297頁

（お詫び）

本稿は、A4版仕様で作成したものをB5版に縮小して掲載しているため、挿図がキリの良くない縮尺となってしまっています。

読者の皆様にはご不便をお掛けしますこと、お詫びいたします。

（押木弘己）

執筆者紹介

寺田　兼方　（神奈川県考古学会顧問・湘南考古学研究所）
駒宮　史朗　（國學院高等学校日本文化史資料館）
滝沢　亮　（株式会社　盤古堂）
浅賀　貴広　（株式会社　盤古堂）
中三川　昇　（横須賀市教育委員会）
岡本　孝之　（神奈川県考古学会会長）
押木　弘己　（鎌倉市教育委員会）

会誌担当委員　永田史子・渡邉千尋・砂田佳弘
追悼記念号特別編集委員　滝澤　亮・小池　聡・浅賀貴広

考古論叢神奈川第21集

平成27年5月1日　印刷
平成27年5月7日　発行
編集・発行　神奈川県考古学会
e-mail　info@koukokanagawa.com
URL　koukokanagawa.com
郵便振替　00240-9-71208
印　刷　テクノヤマモト

KOKO-RONSO KANAGAWA

vol.21

Memorial Number of Yoshiharu KOIDE

CONTENTS

Kanemichi TERADA — Memorial for Yoshiharu KOIDE

【Memories Yoshiharu KOIDE】
Life history
Bibliography

【Selected Articles of Yoshiharu KOIDE】
Sinto and Yamato influence
Considerations of Haji potteries
Conclusion(about Chiyo-minamibara site area Ⅶ)

Shirou KOMAMIYA — Yoshiharu KOIDE and the study of Haji potteries

【Articles】

Makoto TAKIZAWA, Takahiro ASAGA — The Kofun (ancient burial mound) in central part of Yokohama City
－Centering on the Kofun in Katabira River basin－

Noboru NAKAMIKAWA — The remains from the late medieval period to early modern period in Mid-east Coast of the Miura Peninsula

Takayuki OKAMOTO — The Stone halberd (石戈) in East Japan

Hiromi OSHIKI — The aspects of pottery in association with a mokkan (a wooden writing tablet) which has dated inscription of the era name 'Jogan' (「貞観」)
－The ancient pottery recovered from Honson-Imura-B Site, Chigasaki City－

2015.5